

左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ三十日未滿ノ拘留又ハ二十日未滿ノ科料ニ處ス

- 一 法令ノ規定ニ依リ官公署ニ届出又ハ帳簿ニ記載スヘキ義務アル者ニ對シ住所身分職業氏名年齢ヲ詐稱シタル者

- 二 安眠ヲ妨クヘキ行爲ヲ爲シ制止ヲ肯セサル者
- 三 承認ナクシテ濫リニ他人ノ名義ヲ用キタル者
- 四 架空電線ノ附近ニ於テ紙鳶ヲ揚ケ其ノ他障害ノ虞アル行爲ヲ爲シタル者
- 五 賭博ノ現場ニ參集シタル者
- 六 物品ヲ販賣スル目的ヲ以テ客ニ假裝シ購買品ヲ唆ルヘキ行爲ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サシメタル者
- 七 蓄音機、樂器、「ラヂオ」等ノ使用ニ際シ濫ニ高音ヲ發セシメタル者
- 八 電氣機器使用者ニシテ他人ノ「ラヂオ」聽取ヲ妨クヘキ雜音ヲ生セシメ警察官吏又ハ當該係員ヨリ雜

音防止ニ關スル措置ヲ命セラルルモ之ニ應セサル者

### 犯罪豫防組合規則

大正十年二月二十八日  
新潟縣令第十三號

犯罪豫防組合規則左ノ通定ム

#### 犯罪豫防組合規則

- 第一條 犯罪豫防組合ヲ設置セムトスルトキハ本則ニ依ルヘシ
- 第二條 犯罪豫防組合ハ隣保相團結シテ自衛的ニ犯罪豫防ノ實行並犯人檢舉ノ容易ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第三條 組合ハ市町村内ノ大字若ハ小字ヲ以テ其ノ區域トス
- 第四條 組合ノ名稱ニハ其ノ地區ノ字名ヲ冠スヘシ
- 第五條 組合ヲ設置セムトスルトキハ左ノ事項ニ付規約ヲ設ケ所轄警察官署ノ認可ヲ受クヘシ
- 一 組合ノ名稱區域並事務所ニ關スル

#### 事項

- 二 犯罪豫防ニ關スル事項
- 三 被害事件届出ニ關スル事項
- 四 犯罪現場保存ニ關スル事項
- 五 捜査官援助ニ關スル事項
- 六 經費ニ關スル事項
- 七 組長副組長其ノ他役員ノ選舉及任期ニ關スル事項
- 八 前各號ノ外必要ト認ムヘキ事項
- 第六條 組合ニ於テハ組長副組長ヲ選舉シ所轄警察官署ニ届出ツヘシ
- 第七條 所轄警察官署ニ於テ不擔任ト認ムルトキハ改選ヲ命スルコトアルヘシ
- 第七條 組長ハ組合ノ事務ヲ擔任シ副組長ハ組長ヲ輔佐シ組長事故アルトキハ之ヲ代理ス
- 第八條 組長ハ隨時組合員ヲ召集シ本則第五條二號乃至五號ニ關スル事項ヲ指示スヘシ
- 第九條 組合員ハ組長ヨリ前條ノ指示ヲ受ケタルトキハ速ニ實行スヘシ

第十條 組長ハ時々組合内ヲ巡視シ本則第五條二號乃至五號ノ實行ヲ督勵スヘシ

第十一條 組合員ハ毎夜輪番ニ若ハ常備夫ヲシテ組合區域ヲ巡邏シ犯罪豫防警戒ヲ爲スヘシ

第十二條 前條ノ規定ニ關シテハ土地ノ狀況ニ依リ組合規約ニ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第十三條 組合内ニハ事務所及夜警番所又ハ夜警詰所ヲ設ケ事務所ニハ標札ヲ掲クヘシ

第十四條 組長ハ組合員規約又ハ指示事項ヲ遵守セサルモノアルトキハ所轄警察官署ニ申告スルコトヲ得

第十五條 警察官署長ハ所轄内ノ組合ヲ監督スヘシ



# 市町村誌

## 新潟市

新潟市

**柳の都** 當新潟市は新潟縣廳の所在地である。信濃川の河口兩岸に跨り、古くからぐんぐん伸びに伸びて来た大港市河は甲、信國境の金華山に源を發し、信越兩國の幾つもの水流をあつめ、名だゝる大河となつて東西を貫流し、やがて日本海に注入する。

街を割る堀、堀に架する橋よ、橋から橋をつなぐ柳の並木、芽生えてあをみ、のびてすつばり春雨に濡るゝその優婉なる風情こそは、數百年來かもされて来た「港情緒」にふさはしく、びつたり合致した特色ある都市美は、まこと柳の都の雅名を謳はれ、北越情趣の中心地を描いてゐる。



**沿革** 本市は遠く永祿年間、すでに港として相當榮えたもの、天正年中には上杉景勝が新潟城攻めのことあり、その頃は濱村、島村の二部に分れて商賈群

り立ち、越後第一の港町としてその名を馳せてゐた。元和二年堀直寄が長岡藩主となつて本市を支配するに及んで、各種の繁昌策を講じ、次で同四年牧野忠成が代つて長岡城主となり、よく直寄の遺制を襲いで市街整理の土工を起すなど、港市の發展基礎を確立する所があつた。  
寛文年間に、河村瑞軒によつて江戸廻來の寄港の要所と定められてからは、急激な發展を遂げるに至つた。元祿年間はその發展の絶頂點に達し、入津船舶三、五〇〇艘、入貨四六萬兩、出貨五八萬兩と傳へられた。降つて享保五年に至つて、今まで連結してゐた阿賀川が分割して、水深が激減し、港は終に衰頽に歸した。  
天保十四年には幕府の直轄港となり、新潟奉行を駐在させ、これによつて得る港稅收益は決して尠くはなかつた。  
安政五年の五ヶ國條約によつて五港の一に算へられ、日本海岸唯一の開港となつたのは明治元年のことであつた。併し港は良好なるものでなく、佐渡を補助港

としてゐたほどであつた。そして築港は

同二十九年に起工し、同三十七年に竣工したのを第一期として、同四十年には信濃川に修築工事を政府直營の下に起工し大正四年には縣營事業として埠頭繫船岸壁築造工事を起し、何れも同十五年に竣工し、良港としての性能を具備し、今日の活躍を見るに至つたのである。

**面積・人口** 本市の北は砂丘を越えて日本海に面し、佐渡を望み、面積二〇・二三五平方軒、戸數約二萬七千戸、人口十五萬餘人を有する。市街は信濃川によつて二分され、その左岸は舊新潟市、その右岸を沼垂町と稱する。

**鐵道** 本市の鐵道は明治三十一年に信越鐵道開通し、後ち相次で北陸線、磐越西線、越後鐵道會社線(今の越後線)羽越線と共に腹背の地との聯絡が極めて

至便となつた。

**主要生産物** 本市の主なる生産物は漆器(年産額五十六萬餘圓)、佛壇六十萬圓、履物三十六萬圓、味噌、醬油、石油類、鐵器、肥料、雨傘、絹織物、襪表、硫酸などであつて、梨も本市名産として謳はれてゐる。そして本市の主なる移出品は米穀、石油、蠶などで、石炭、木材セメント、肥料、食鹽、海産物等は移入品中の最なるもの、移入年に二、六一七圓、移出は一三八萬餘圓である。なほ水産では鱒、蝶、鮭、鱒類を多く産する。

**官公署** 縣廳、地方裁判所、醫科大學、高等學校、測候所、内務省新潟土木出張所、大藏省預金部新潟出張所、高崎地方專賣局出張所、横濱稅關新潟稅關支所、新潟稅務署、新潟米穀事務所、新潟郵便局その他がある。

## 長岡市

兵を以て、二萬五千の西軍に抗し、三ヶ

月の長きに互つて、往年の山縣狂介をして一步も進むを得せしめなかつた長岡住民の傳統的氣概は、やがて「食へぬが故に學校を立てる」といふ先覺者の一言に明治五年、疾くも中學校と小學校とを建て、また長岡病院をさへ設けたほどで、更に住民一體となり、その全力を産業に注ぎ、今や南蒲原、古志、三島、刈羽、北魚沼、中魚沼、南魚沼等の各郡、謂ゆる中越地方の首府としての、誇りある今日をなさしめた。

**地勢** 本市は縣の中央、信濃川の右岸を占めてゐる。川を隔て、三島郡の深才村に對する外は、悉く古志郡に圍繞され、南は上組、山通の二村、東は栖吉村、東北は富曾龜村、北は黒條村、西北は信濃川を越えて上川西村と境を接する。東方は低地を隔て、東山連峰が峻起してゐるが、南方は坦々たる國道十號線によつて魚沼方面に連つてゐるから、本市の地勢は南方が高く、北方が低くなつてゐる。面積は約一方里、そして長岡の文



字が示してある通り東西に狭く、南北に長く、殊に南部が裾ひろがりに横がつてゐる。

**沿革** 本市の起源は、はつきりしてゐないが、その西端を劃する大江信濃川によつて形成された岡であつて、長岡の前身は、現長岡蔵王町とされてゐる。この地はもと股倉大川端と稱し、中古以來蔵王堂城を中心とした聚落であり、南北朝時代にはしばしば、兩軍の争點となつたところである。

長尾氏の初期以來蔵王堂城が設けられ相當な市街をなしてゐたことは、今に遺る古町の地名によつて明かに知られる。後の南北朝の古戰場平方原は、今の平沼神社附近であると推定される。そして現存文獻に「長岡」の名の初めて見えるのは、慶長十年草生津渡船に關する文書であつて、その十三年前であるから、村落としては、もつと前から長岡の名で存在してゐたらしい。

元和の四年、堀氏の村上に移封せらる。

るや、牧野忠成が頸城長峯より來つて封ぜられ、爾來三百年間、七萬四千石の城下町が形づくられてゐた。明治維新に長岡藩總督河井繼之助が錦旗を迎へて奥羽六藩と薩長の平和を策して成らず、決然起つてこれに抗したので、遂に町は焼かれ、城は毀たれてしまつた。



本町通り

年十月柿崎縣管轄となり、その十一月に出張所を置かれた。同六年六月新潟縣と

なり、戸長役場を置き、同二十二年町村制の實施さるゝに及んで長岡本町、長岡町、千手、草生津、王内、新町の六町村役場が置かれた。後同三十四年十一月六ヶ町村が合併して長岡町と稱し、同三十九年四月一日市制を施行し、大正十年十二月四郎丸村を合併編入して、今日の長岡市を生み出した。

**戸口** 本市の戸數も人口も、年々ただ殖えゆく一方であるが、最近に於ける戸數は一萬二千餘で、その人口は六萬三千二百餘人を算へてゐる。

**交通** 東西五軒一二、南北六軒五八にわたつてをり、面積は一五七七・五ヘクタールで、鐵路は東に、信濃川はその西に、水陸交通の要衝を兼ね備へてゐる。殊に上越線が全通してからの本市は表日本と裏日本との連繫地として、運輸系統の轉換に具ふるため、一日千輛餘の貨車を操車する能力のある一大操車場を設置し、裏日本に於ける貨物集散の地としての勢力を反映してゐる。

**商工の長岡**

曾ては石油工業の發祥地として知られた本市は、一般行商によつて成功を見るや、商工業者は常に縣下より縣外にまで着々、長岡の商線を擴張し縣下に於ける商工業の覇權を掌握するに至つた。

本市現在の商工業を見るに、板紙と機械石油とは特色ある優良産物として誇り得るものであり、また織物、製綿、炭化石灰、桐材などの物産も特筆に値するもので、その他、酒、醬油、菓子、麵類家具、漆器、佛壇等がある。なほ商業では呉服、米穀、四十物、小間物、藥種業などをはじめ、各種營業の發展が著しく、従つて金融關係の活潑な運轉を促進してゐる。

**官公衙と學校**

官公衙の重なるものには長岡市役所、長岡稅務署、新潟地方裁判所長岡支部、長岡區裁判所、長岡警察署、長岡郵便局、長岡商工會議所、高崎專賣局長岡出張所、新潟縣農事試驗場同黨業取締所、同米穀検査所各支所、長

岡驛その他がある。

學校には長岡高等工業學校をはじめ、縣立長岡中學校、同長岡女子師範學校、同長岡工業學校、同長岡高等女學校、同長岡聖嘔學校、同長岡盲學校、實業高等女學校、高等家政女學校その他がある。

**名勝舊蹟**

遠い昔からの城下町であ

**高田市**

**地勢** 高田市は、上越後の中央に位置する。起つて東を望めば荒川の碧水流れ、手をあげて西南を指せば妙高、燒山、莞爾と笑ひ、轉じて東北に指せば米山、尾神の諸山が應ずる。更に北に耳を欬てれば、どんど、打つ日本海の海鳴が聞かれる。かうした四境の中に、町數四十八街、しかも整然たる街衢は南北に長く、東西に短かく、〇・五一三平方里の面積を彩つてゐる。

町は、雪中往來の便宜のためにとて、古くから街路に鷹木庇を設けて來たが、

るだけに、その見るべき訪ねべきものがない。即ち長岡城址、寶田公園、大手通り、五尊文庫、農事試驗場、金崎神社、平沼神社、千手觀音、榮涼寺昌福寺、成願寺など、數へあぐるに遑なしである。

現在ではそれが本道に對する人道ともなつてゐる。戸數は約六千、人口は三萬五千餘人をかぞへる。

**沿革**

本市は、その昔關の庄、菩提ヶ原と稱する草蓬々たる原に過ぎなかつたが、天正の頃から漸く部落をなし、降つて慶長の十九年には、徳川家康の六男松平忠輝が高田城を築き、七十五萬石の國主となつてから、こゝに繁昌の端をひらき、北國屈指の名邑と謳はれるやうになつた。それ以來幾度か町の姿をかへ風を改めて明治四年の廢藩置縣によつて



つた。

同二十二年三月の町村制実施の際には



勇敢なるジャンパー

高田町と高城村とに分轄されたが、同四月十一日、この一月

砲兵の二ヶ聯隊が置かれてゐるに過ぎない。

政治的にはあまり恵まれてゐないが、軍隊、各官公衙の外に五ヶの縣立中學校二ヶの私設中學校があり、また上水道に瓦斯、簡易住宅、託兒所、職業紹介所、圖書館、塵芥焼却場、火葬場などが市費を以て經營され、都市としての一通りの施設はまづ完備されてゐる。

これまでの市内町数が百三であつたを昭和五年の四月、全市の町名改稱と區域變更とを斷行して十六ヶ町に改め、これを四十八行政区に區別して現在に至つてゐる。

### 交通

信越鐵道の一線が南北に縦貫してゐるが、一ヶ年間の高田驛の乗客は九十三萬餘人、その降客は九十二萬六千餘人をかぞへる。また國道は一線、縣道は八線、市道は百九十四線の多きにわたつてゐる。

### 教育

小學校教育設備の改善は、逐年實施され、四小學校は全部改増築を

斷行し、外形の整備と共に内容の充實に大なる注意を拂つてゐる。

中等學校は縣立に高田師範、高田中學校、高田高等女學校、高田農學校、高田商工學校の五校があり、特殊學校に市立青年學校、私立青年學校、市立幼稚園、私立幼稚園等がある。

### 市役所

本市役所を本町三丁目に置き市長一、助役一、収入役一、主事四、書記二五、技手六、その他の吏員と三十人の市會議員とによつて、市政の運行が圓滿に行はれてゐる。

### 社會事業

本市直接施設のものとしては職業紹介所、託兒所、市營住宅、方面委員などを主とし、年々好成绩を示してゐる。また救護法が實施されてからの新しい試みとして細民簡易住宅を建設したが、これは一般からその成功をたへられてゐる。

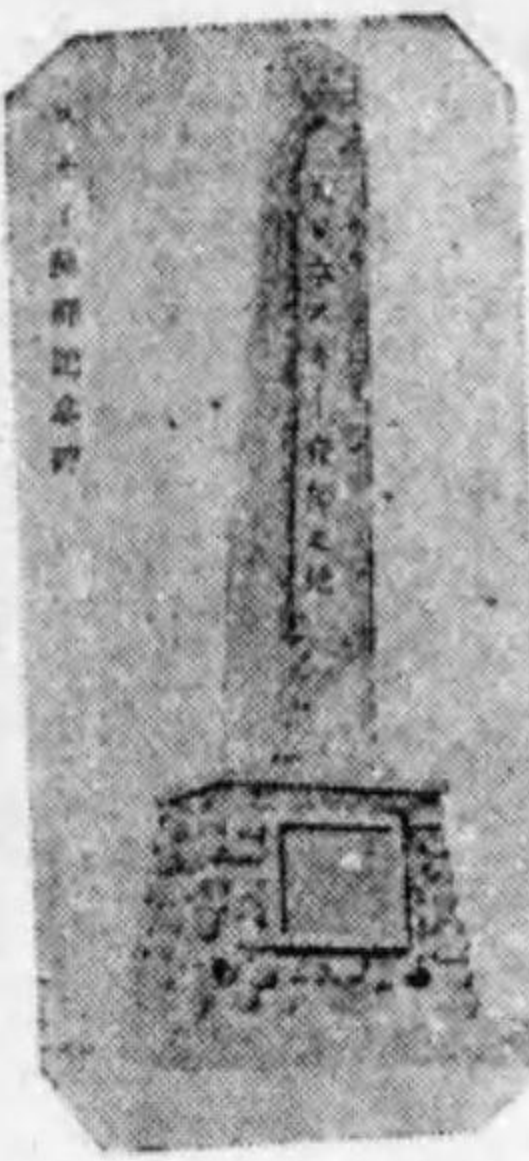
### 社寺

本市民の神社寺院に對する崇敬と信仰とは、古來少しも變化なく、神社には神社、日枝神社の二縣社の外

に村社五、無格社一三あり、寺院は東本願寺別院、善導寺、淨興寺、日朝寺、本誓寺、性宗寺などの合計一一八を、また教會及び神道の一一を算へてゐる。

### スキーの高田

本邦スキー發祥の地



スキー發祥記念碑

## 三條市

**工業の三條** まづ今も、天下にうたひ囃されてゐる小唄が、最もよく當市の地方色を鮮かにいひ表してゐる。

- 三條名物 鍛冶屋に足袋屋
- 寺子や御坊様 本成寺
- エ、菓子に染物 風鏡馬
- 越後金物本場の三條
- 三條町にや槌の音

として、本市の名は天下に著聞する。市外金谷山を中心上好箇のコースや、數多くのスロープを持つてをり、且つ縣スキー場としてシヤンツエの設備も完備されてゐる。

### 特産

本市の特産物には笹飴、栗飴、瑪瑙飴、翁飴、果汁飴、米菓、スキ煎餅、壽羊羹、シヤンビニヨン（西洋茸）。テープ、バテン、毛拔、スキー人形、深雪人形、木彫品等がある。

エ、日かな明けくれ槌の音

實際、市中に一步踏み入るや、トツテシカン／＼の槌の音が、其處からも、此處からも聞えて來るほど左様に、本邦隨一の金物の名産地として、普く庶人に認識されてゐる。その産出する製品は遠く滿洲、朝鮮、臺灣、はては南洋の地にまでも輸出されてゐる。

また瀟洒な、しかも粹な手拭巾形は、三條の特産物としてはあまりにも有名である。北海道、東京、大阪、名古屋へと旺んに移出されてゐる。その他は絹織物の代用品たる捺染も鮮麗優美なもので、年々その産出額を増大してゐるし、足袋また然りで、三條三大物産の一つにかぞへられて、全国的に噴々たる好評を博してゐる。

### 沿革

古くからいひ傳へられたところによると、本市は王朝時代は勇禮郷に屬し、寛治の頃、古津庄司の領に歸してゐた。鎌倉時代になりて大槻の莊となへ、後白河院の御料地であつた。今の三條なる地名は、三條左衛門定明がこの地に築城してからのことである。

降つて源平時代には城氏の治下に置かれ、戰國時代には長尾氏の一族の領となり、殊に爲景の代には勢威最も振ひ、中越地方を制御し、慶長三年堀秀治が越後を領するに及んで、その老臣堀直清の城地となつた。堀氏の國を除せらるゝや、

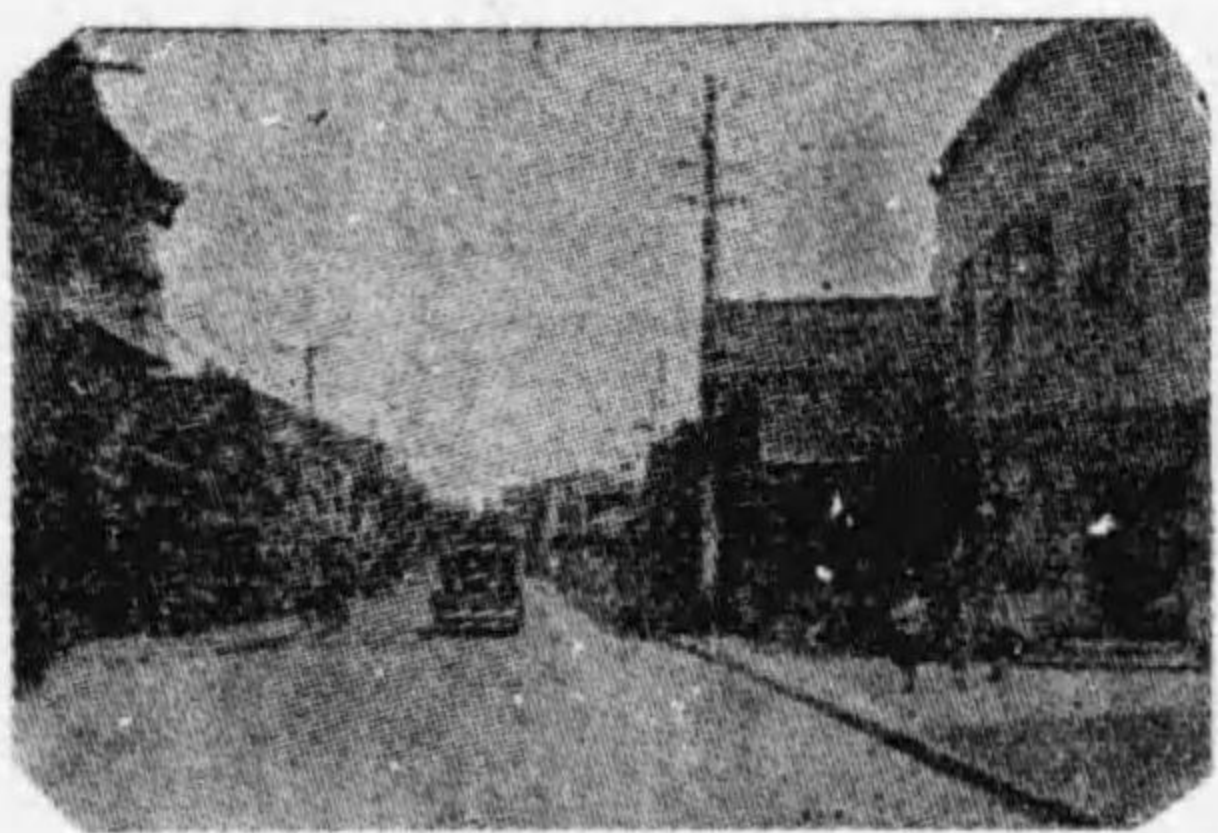


慶長十五年松平忠輝來つてこれを領したが、後ち元和二年市橋長勝封ぜられて四萬石を食んでゐた。同六年稻垣重徳二萬三十石を食んで城主となり、慶安四年稻垣氏封を移され、村上の領主松平直矩に屬し、次で廢城となつたが、爾來こゝに三百有餘年、今に遺る古城町裏館、一ノ木戸などの町名によつて、在りし昔をそぞろに偲ばれる。

明治維新の廢藩置縣を経て、同二十二年町村制の實施せらるゝや、三條及び一ノ木戸に町村役場を置き、同三十四年以上の兩者を合併し、更に大正九年隣村の裏館を合し、次で同十一年大島村島田を同十三年本成寺村の一半を、そして昭和二年栗林村の一部を併せて今日の三條市を構成したのである。

**戸口** 今日の本市の戸数は約六千人口凡そ三萬四千を孕んでゐるが、しかもこれ等の數字は、年と共に高まりゆきつゝある。

**地勢** 清楚たる五十嵐川と、世に



三條市内通り

ぞへる。  
**名所と舊蹟** 力の街、街のすみぐまでも伸びんとする活動力に充ちあふれてゐる本市も、その反面、信仰に生きる

の人、詩を知るの人、風光の美をたづねんとする人たちにとり、佛の地として、思案の地として、また遊覽の地として推奨するに足りる。  
八幡宮 仁和元年三月石清水八幡宮より勸請、祭神は譽田別尊、氣長足姫命及び比賣大神にして三條市の産土神とされてゐる。大祭は五月十五日、神輿渡御の式はまことに盛大なるもので、沿く人口に膾炙する。  
木成寺 開山は日印上人、草創は永仁五年、創立以來六百數十年の星霜を閱し十界勸請曼荼羅を安置する。慶安元年徳川幕府は朱印三百石を贈り、十萬石格に遇した法華宗の總本山で、境内は數萬坪にわたり、七堂伽藍輪奐の美、殊にこの間千古の老松古杉鬱蒼として生ひ茂り、晝なほ暗き壯嚴は稀に見る偉觀にして、到底他にその比を見ることは出来ない。眞に北陸の靈地、越後隨一の梵刹といふべしである。なほこの靈域を圍むに櫻樹の境壁を以てする。櫻花咲く春の晨には

觀賞者で雜踏を極める。

**嵐合戦** 六月五、六、七の三日間、新保堤上及び島田グラウンドに於て行はれる嵐合戦は、三條名物として見遺すことの出来ないもの、一つである。嵐は他の町村のと異り、六角にて空中高く揚げ、その勝負は地上一〇〇米以上で行はれ、技術を要すること、勝負の豪壯なることは蓋し天下に冠たるものであらう。  
その他競馬大會、夏の盆踊、秋の五十嵐川上流鮎狩、冬の瑞雲橋附近の狩獵、

## 北 蒲 原 郡

下越後の大郡にして、西は阿賀野川を以て中蒲原郡と相限り、南は飯豊山、五頭山の山脈を以て東蒲原郡と境する。西北は海洋に至り、東北は岩船郡に接し、今、四町三十二ヶ村に分れる。

古の沼垂郡にして、下越後または下郡と呼ばれた地方の一部である。北國太平記に

大崎山のスキーなど、何れも有名なものである。

**三條土産** 本市の名産としては、菓子では庭砂糊、煉羊羹、蒸物類、越のみぞれ、今朝の霜、都忘れ、玉吹雪。金物では組合せ箱入品、家庭用大小鋏、ナイフ爪切、食用スプーン、フォーク、庖丁。染物では浴衣地、足袋。果物では梨、葡萄、桃、柿。その他に紙風、竹製品などが擧げられてゐる。

阿雅北二郡の内蒲原郡は過半新發田因幡守が領地なり

と載つてゐるのは即ち本郡である。この阿雅北二郡はいつの頃から蒲原二郡に併せられたかは明かでない。黒川村蔵王權現の鰐口の銘に、永享八年、蒲原郡奥山黒川と刻んであるところを見れば、當時すでに沼垂郡の名稱はなくなつたもので

あらう。管窺武鑑に

阿雅北衆には黒川、相川、色部、加治、松本、竹俣、云々  
とあるうち、相川、色部は瀬波衆と云はれ、即ち岩船郡の武士にて、阿雅北二郡とは今の北蒲原と岩船である。  
沼垂郡は、延喜式に載せ、和名抄には奴太利と訓じ、三郷に分れてゐた。今の北蒲原郡及び中蒲原郡の北部沿海の狭地をいふのである。本郡の建置は岩船、出羽、秋田の諸郡と同じく、邊防の城寨より一轉して、郡郷の政治に歸せしものである。國造本紀には多く古國名を載すけれども、沼垂以北の地は改められず、當時全く邊外の夷境であつたと見るのが至當である。

郡の東より南は峻峯連亘するも、中部以北は平坦にして、河流縦横に流れ、灌漑の便に富み、農耕盛んに行はれ、米の産額が多い。鐵道は羽越線が新津より分岐し、本郡を通つて岩船郡に入る。郡内の人口約二十萬三千七百人にのぼる。



## 水原町

舊水原は杉原にも作つた。上杉家の時杉原氏ここにあり、その邑主たりしも、その居城の遺址は現在明かでない。その後、溝口氏の新領となつたが、徳川幕府は陣屋を置き代官を派して、六萬石の公料を支配せしめた。維新の初めには越後府を置かれ、また水原縣を置いたが、明治六年新潟縣に合併し、町制が施行された。福島潟の開田ありしより民業大いに増加し、その殷賑は北蒲原郡の中心をなすに至つた。

新井郷川の上流に倚り、羽越本線の一驛にして、本郡西南部一圓の交通要路にあたり、人口九千餘、新發田町と共に郡の大邑をなす。新潟、新津、保田、新發田、葛塚へバスの便がある。

面積〇・六六九方里。町内には警察署穀物検査所出張所、登記所、郵便局等の官衙あり、小學校のほか縣立水原農學校及び町立水原圖書館ありて教育施設整備

し、銀行支店二、産業組合二を有す。

社寺には村社日吉神社、同菅原神社、同八幡宮、一樂寺、西福寺、淨水寺等のほか二社九ヶ寺あり、無爲信寺は眞宗二十四輩の一にかぞへられる名刹である。外城堤の櫻は名勝として知られる。外城堤に一小沼あり、形状瓢箪に似たるを以て瓢湖の名あり、同湖に産する蓴菜は風味絶佳にして、東京その他へ多量に移出される。

## 葛塚町

葛塚は、いはゆる潟端新田にして、近世の開闢である。小市街の状をなし、水原に次ぐ市邑と稱される。人口約八千五百、福島潟の北西にして、潟の主流は一條の江水となり、常町を経て松崎濱に至り、加治川と共に阿賀野川に入る。これを新井郷川といふ、長さ三里、略風土記によれば

葛塚は七八十年前まで、沼にて草原多かりしを開闢して、今は人家數百軒

田畑甚廣潤なり

と出でる。明治三十四年、隣村を併せて町制を施行した。水原町の北方、沙丘に近き平野にあり東に福島潟の大湖を控へ、新井郷川の右岸に位す。本町は同川を通じて新潟市と農産物の取引盛んである。面積一・二二六方里。町内には警察署區裁判所出張所、郵便局、銀行支店、産業組合、寺院九ヶ寺がある。

## 新發田町

新潟市の東七里、北蒲原郡の中央に位し、もと溝口氏三百年の城下にして、慶長の初め五萬石、後、改封せられて十五萬石となつた。舊新發田城は今兵營となり、歩兵第十六聯隊が置かれる。人口二萬餘に達し、縣下第五位、大倉製絲會社は町勢發展の原動力にして、生糸及び木工品の生産殊に盛んである。また附近は越前米を産するを以て、所謂加治米中心市場をなしてゐる。

近くに山海を呼び、羽越線に沿ひ、赤谷線を東南に分岐する。加治川上流の南方田野の中に發達せる下越後の名邑である。面積〇・二二一方里。町内には新潟縣供託局出張所、聯隊區司令部、歩兵第十六聯隊、衛戍病院、借行社、刑務所、警察署、土木出張所、穀物検査所支所、稅務署その他の官公衙あり、學校に新發田農學校、新發田高等女學校、新發田中學校、新發田商業學校の四縣立のほか、私立新發田工藝女學校、町立圖書館等がある。また銀行の支店出張所や會社銀行も多く、郡酒造組合を初め、郡水産會、郡畜産組合、郡農會、郡養蠶同業組合等郡單位の各種團體の事務所が置かれ、郷社諏訪神社、村社愛宕神社のほか二社十九寺の社寺がある。

名勝新發田城址は、もと加治氏の族新發田氏の創築したものであるが、天正年間、上杉氏に叛いて滅び、慶長三年、溝口氏が入つた。また大正三年加治川の水害を豫防せんがため、巨費を投じて西岸

に堤防を竣成し、この記念に、兩岸日本海に至る堤上四里の間、萬餘の染井吉野櫻を植栽し、加治川堤の櫻としてその名縣下に著れるに至つた。その他寶光寺、諏訪神社、東公園、西公園、堀部安兵衛手植の松、松暖等名所舊蹟が多い。

## 中條町

本町は、郡の西北部に位し、東北は胎内川を境に黒川、乙の二村に對し、西北は築地村に、西南は金塚村に接し、東南一帯は楯形山脈の分水嶺によつて、黒川菅谷の兩村に連つてゐる。その廣袤は東西八軒、南北六軒の矩形をなし、約三十六平方軒の面積を有する。

地勢は東南一帯の山麓高地より、西北の方向に自然傾斜をなし、そして概ね平坦なる耕地であつて、主として胎内川を疏水して灌漑の便に供してゐる。土質は砂質壤土が大部分を占め、西北部は壤質植土で、胎内川の沿岸の地は、表土以下砂利層をなしてゐる。

## 安田村

本町の車道としては國道第十號線、縣道築地中條停車場線、乙中條線、中條停車場線があり、この間、定期自動車が行き交はつてゐる。また町道各線は、大字中條を中心として各大字に通じ、自動車の往來にも自由である。鐵道羽越線は町の中央を貫通し、驛は、大字中條にある。本町の部落は二五に分たれ、村社一、無格社三一、曹洞宗四、眞言宗三、眞宗一の社寺があり、住民は比較的勤勞尊重の精神に富み、そして淳朴である。本町は昭和九年、縣より經濟更生町村の一に指定され、農村自力更生の國策に則り不況克服に邁進するに至つたが、當時丹吳町長は熱誠これが劃策に努められたが、爾來更生委員會をつくり、本町有力者を網羅して更生委員及び基本調査委員を囑託し、多くの經費と勞力とを費して、所期の目的を達成すべく、上下協力一致、實行に當りつゝある。



郡の南端、阿賀川の環流せる右岸に位し、東部は寶珠山、菱ヶ岳の山崗を以て東蒲原郡と劃し、西に連亘し、中央附近にて鳥屋ヶ峰の丘陵を起して盡きる。西半は蒲原平野にして、耕地は概ね水田または露桑地となつてゐる。

貞享二年、安田村の安の字を改めて保田となし保田町とした事がある。今も大字に保田が残つてゐる。安田志料によれば、保田の寛文、延寶、天和頃の新聞檢地帳に、安田組、安田町と記してゐる。今、保田の東南に安田址がある。犁かれて田圃となつてゐるが、舊壘の遺趾たること明かである。孝順寺境内には親鸞聖人の三度栗あり、葉尖二又状をなし、毎年三回結實するを以てこの名がある。大字上野原はまた安田原とも稱し、屋根瓦陶器の製産が多い。

### 分田村

西に阿賀川が洋々蜿蜒して流下し、又一部に新井郷川の上流を貫き、土地極めて卑濕、分田、東町、上福岡、西岡、水ヶ曾根ほか六大字より成り、面積〇・七八方里である。阿賀川の水勢は、本村附近が最も險惡にして、天明三年伊藤舊記には、往古の渡津に就て、前に分田舟渡は福岡村へ舟着候處、元文三年に水が曾根村切れ川に成り、水曾根にて渡船相勤候、分田村大橋より川岸まで四百八十間、寛保三年より改めて分田村永々舟渡新江屋へ舟着申候云々と出てゐる。また北越軍記慶長五年の條に、越後一揆蜂起して三條を攻圍せるとき、新發田の溝口氏は分陀川に布陣し、一揆方は五泉に據りしが伏兵を發見せられて惨敗したことが出てゐる。

### 堀越村

水原町の南に接続し、庄ヶ宮、堀越、

### 京ヶ瀬村

本村は阿賀川の東岸にあり、中蒲原郡横越村と相對する。村内畑地多く、もと岡山地方と總稱し、蔬菜の名産地として知られる。西は水原町に接続し、同町より阿賀川を横切り、龜田、新鴻に至る縣道通過し、羽越線水原驛へは一里、バスの便がある。京ヶ島、下ノ橋、飯森杉、城田山ほか二十九字より成り、面積一・五八五方里に及ぶ。

村内梅護寺には八房梅なる名勝あり、昔、親鸞聖人が越後國府に在る間、小島村佐之助といへる民家にて、鹽漬の梅の實を庭前に植ゑたるに、花一輪に八つの實をむすぶ梅の木が生え茂つたといふ、今は天然記念物となつてゐる。また同所にある櫻は、親鸞が珠數をかけたるに、その花が珠數の如く薄紅に咲き出したといふ所謂珠數かけの櫻である。

### 笹岡村

### 神山村

福島潟の南に位する一村にして、西に陣ヶ峯の丘陵を負ふも土地概して低平である。新井郷川の上流ほか數流が流下して潟湖に注ぎ、融雪季には諸川出水して水害を被ること尠くない。

福島潟は本郡西半部の諸水を集中する卑濕沼澤の中心をなし、往昔は湖水面積も今日より遙かに大にして、地質學者のいはゆる澤湖をなせし時代もありと稱せられる。

近世に至り、新發田藩を主として四圍淺水の地を開墾し、俗に潟端新田といふ耕地が續々起され、近隣の諸村もまた次第に發達して豊沃なる米作地と化した。本村の如きもまたこの中に屬すべきものにして今四十七部落を含み、面積一・〇九三方里である。

羽越本線通過の地にして、水原驛及び天王新田驛へ近く、いづれもバスの便を持つてゐる。



岡方村

西に阿賀川の浩洋たる巨船あり、全村蒲原平野の肥沃なる耕地にして、美田の

際限もなく展開するを見る。大久保新田太子堂、三ツ屋、高森、高森新田ほか八

部落より成り、面積一・一〇五方里、東北は葛塚町に隣接する。

曾ては大久保、高森、越岡の三部落を以て岡方村と稱してゐたが、今は前記の如く十二部落を併せてゐる。往時、新發田藩政の時、小浮分田の邊より京島高森の近傍まで、すべて阿賀川東岸の地を岡方組と呼んでゐた。

阿賀川には水運の便あり、葛塚町へ出で、それより陸上バスの便による。また水上新井郷川により新潟市方面へも達するを得。

村内には郵便局、産業組合、漁業組合、村社神明宮、廣泰寺、最善寺、西蓮寺、淨應寺、長安寺等あり、村勢の發展大いに見るべきものがある。

長浦村

東に福島潟を擁し、北は葛塚町と接壤し、土地低平にして水量豊潤、耕圃は常に水を湛ふるの地である。福島潟の西南にはゆる潟端に起りたる農村といふべく

上土地龜新田、岡新田、上堀田、上大月里飯野、長場、浦木、下土地龜、長戸、太子堂興野、内沼、大月、高田村新田その他の部落より成り、面積一・二八六方里材名長浦は土地低平の水村を意味するものといはれる。

人口約七千をかぞへ、米の産額頗る多く、羽越線水原驛へは縣道通じ、約一里バスの便がある。村内には曹洞宗靈林庵眞言宗善行寺、同相淋寺、同長恩寺、同通惠寺、同福照寺の寺院がある。また代議士長場龍太郎氏、理學博士山田信一郎氏は共に本村が生んだ逸材である。

濁川村

阿賀川河口に近く、加治川の合流する

ところがあり、新井郷川は本村を貫き、融雪季には氾濫の憂ひがある。阿賀川の

對岸なる大形村との間には泰平橋あり、新潟新發田間の國道通路にあたる。新崎濁川、名目所、新崎新田の四大字より成り、面積〇・五六一方里である。

本村には河川多く集まり、しばしば氾濫するところより濁川なる村名も起つたのだといはれ、殊に加治川の瀬替と阿賀川堤の決潰のため、本村の地形は古來大いに變化あり、諸川の流下する方向等も従つて移動したのである。丁度、支那の黄河を想はせる。

木崎村

本村は内島見、佛傳、早通、下早通、須戸ほか十一大字より成り、新潟新發田

は米倉に源を發し、本村を東より西に横斷して福島潟に注ぐ。

二十四部落より成りて、面積一・五八四方里。大字天王には牛頭天王堂あるを以てこの名ありといふ。福島潟に近き地方は、全く干潟に開かれたる墾田にして明治時代、土地の人々にしてこの開田に盡力した者は少くない。

羽越線新發田驛へ一里、縣道あり、バスが通つてゐる。村内には村立圖書館、土地利用組合、産業組合、永見寺、圓福寺、長圓寺、長善寺、蓮華寺、神明宮、星宮神社、諏訪神社、四島神社、須賀神社等がある。

本田村

松岡村の西北に位して、福島潟に近接する。享保寶曆の頃より、盛んに潟端新田の開墾を計畫し、本田山の溪流に土流とて、土砂の流送を行つたといふところである。その頃から部落も次第に發達を見、現今は本田、岡屋敷、月岡の三大字

佐々木村

新發田町と木崎村との中間に位し、新發田の西に當り、新發田川の灌漑並に水運の便あり、水陸兩路の支會地である。即ち陸路は國道十號線並に縣道が十字に

中浦村

新發田町に北接し、西は福島潟にのぞみ、東は五十公野村に接續する。南端に眞木山の丘陵の起伏するほかは山岳岡地なく、藤原平野の沃地である。新井郷川

交叉し、新潟、新發田、葛塚、乙村へバスの便あり、新發田川には船舶の往來が頻繁である。

藩政時代にはここに關門が置かれた。佐々木は古書に佐崎に作り、建武三年、秩部高長軍忠狀に

五月十七日、於佐崎原會戰者、捨一命若黨中間討死被疵、其數不及注申

云々とあり、高長は足利方にて、佐々木加治近江權守景綱に屬して合戦したのである。佐崎原は福島潟の汀岸ならんと云はれる。

飯島新田、太田新田、下興野、鳥穴ほか十一字より成り、面積〇・九九五方里あり、郵便局、圖書館、村社八幡宮、その他社寺名勝がある。



より成り、面積〇・六一方里である。東南には陣ヶ峯、眞木山の丘陵を負ふて土地が高い。

米藪を主産物とし、本田産業組合は成績良好なるを以て知られる。

また村内には熊野神社、安念寺、見龍寺、仲山寺等の社寺あり、天王新田驛の東四軒半にある月岡温泉は、自動車の便あり、四季浴客を絶つことがない。弘法大師のコシヤウ清水なる名勝もある。

磐越西線に沿ふて天王新田驛を有し、新發田町及び水原町へは各二里、汽車のほかバスの便がある。

### 松浦村

五十公野村の西南にあたり、東南西の三方には荒城山、權現山の諸丘陵が連なり、北は中浦村と平地続きをなす。村内概ね山地丘陵にして、山林千四百町歩、耕圃七百餘町歩である。

八幡、放生橋等の大字あり、八幡に八幡宮鎮座し、古祠なるも縁起の明瞭を缺

く。西大寺峯が諸國に放生池を置きたることは、釋書、高僧傳等に記載あり、

本村はその一所と稱される。また村内に荒川山あり、五頭山の隣嶺にして、山中に魚止瀧あり、溪流の末は、本田村を経て三里餘にして福島瀧に入る。

面積一・九九一方里。羽越線新發田驛へ一里半、赤谷線五十公野驛へ三十町、交通の便は悪くない。

社寺には松浦神社、教海寺、正法寺、瑞泉寺、清流寺、法正寺、龍澤寺等あり庶民の崇敬信仰をうけてゐる。

### 五十公野村

今はイヂミノ村と云ふも、古訓はイキノである。新發田町の東南に隣り、その山丘を五十公野山といふ。五十公野はまた井地峰にも訛る。北國太平記に、謙信公の小姓井地峯勘五郎は剃髮して道如齋と云ふ

とあるのはこれである。昔は會津街道の宿驛であつた。今は省線赤谷線五十公野

驛がある。

面積〇・八〇九方里。米と藪と産額が多く、縣社豐田神社、村社月枝神社、白蓮寺、高昌寺、安樂寺ほか、一社十四ヶ寺を有す。白蓮寺は、五十公野山に在る式内沼垂郡の官社石井神社の別當にして來迎寺看司林峰の創草である。靈域内に觀音堂を建て、岩井堂と號し、當國巡禮二十八番札所となつた。

### 米倉村

村會議員一二、村長一、助役一、収入役一、その他書記、區長、學務委員、傳染病豫防委員、統計調査員、家屋税調査委員などの村機關の運行によつて、正しく、明るく、強い村たらしむべく、懸命と拍車をかけてゐる本村は、一・二三一方里の面積に、三百七十餘の戸數と二千二百餘の人口とを抱擁してゐる。

本村の南西一帯は、飯豊山脈で屏風され、東北に加治川流れ、その間に沃野ひらけ、東西に伸び、南北に狭く、東は境

川を隔て、赤谷村に對し、東北は加治川を挟んで川東村と對峙し、北は五十公野村、西は松浦村に接し、南方の一角が僅に笹岡村に界してゐる。

本村はその昔、豐田の社と稱し、新發田藩の領地だつた。明治維新後、新發田藩新發田縣を経て、同六年六月新潟縣の管轄となり、同十一年七月郡區町村が編

制され、米倉村、松岡村、山内村、中々山村の四ヶ村が組合戸長を置き、次で町村制の實施に際して米倉、山内、中々山の三ヶ村が合併、現在の米倉村となり、舊村名を大字としたのである。

小學校の外に農業補習學校、青年訓練所の設立あり、就學歩合は一〇〇・〇〇出席歩合は九七・七一を見せてゐる。

村農會、部落農區、副業組合、産業組合、信用利用組合などの産業機關は、何れも潑刺たる活動を示して、所期の目的に向つて邁進しつゝあるといふ、極めて活氣ある村である。

因に本村納税の慣習は、極めて良好で

大正七年来、更に各部落毎に納税組合を設けてからは、一層優良なる成績を挙げつゝあるに鑑み、將來この良風をして永く持續せんことを念願となしてゐる。

なほ社寺としては無格社四、曹洞宗が三、眞言宗が二、外に佛堂四がある。

### 赤谷村

本村は西は荒城山、松平山連峯より、東は飯豊山腹、即ち福島縣境に至る長延なる山村にして、南はその連脈を以て東浦原郡と郡境を劃す。加治川は村内を縦貫し、西北部流域には平地ありて米倉村と接壤する。

舊小川庄に屬し、會津の所領であつたといふ。往昔、東鑑に、小河庄赤谷と云ひ、趣後會津間の便道として、近世まで新發田候江戸往來の本街道として聞えてゐた。戊辰の役に、七月下旬、會津兵は水原、新發田より赤谷に退き、關柵に據りて守備し、官軍の大いに惱まされたところである。

### 鴻沼村

赤谷城址あり、大字瀧谷には小戸七瀧及び炭酸性温泉がある。赤谷嶺山は、雲母鐵礦、黄銅礦と黄鐵礦を産出する。赤谷線赤谷驛あり、新發田町へは汽車並びに縣道にて自動車の便がある。

面積九・九一六方里。

新發田町の北に續き、洪水氾濫を以て鳴る加治川の左岸(南岸)に沿ひ、全村平坦なる耕圃にして米の産地である。

加治川は大堤を以て水害を防ぐも、歲時決潰の憂あり、安政四年五月、明治二十九年七月の土堤決潰は、特に甚しかつた。中田、新井田、小船渡、長畑、中谷内ほか七大字を含めて一村をなし、面積〇・七六六方里。村名鴻沼は、新發田城北の沼澤たる鴻沼より由來せりといふ。明治三十四年、月、舊中井、島塚の二村を合併して現區域となつた。

加治川の櫻及び天平時代の古戰場たる鴻沼谷の名勝あり、交通は新發田町に接



續して便利である。

村内鴻沼信用利用組合は業績頗る顯著なるものがある。社寺に神明社、熊野社八幡神社、光宮寺、興善寺、高藏寺、全昌寺、鳳林寺、龍泉寺、龍藏寺などがあり村民は敬神崇祖の念に富む。

### 聖籠村

當村は明治三十九年の四月聖籠、蓮野、蓮濁、藤井村の内藤寄などの各村の合併によつて生れたもので、現在上大谷内、桃山、三賀、丸濁、大夫、道賀新田、山倉、直野、諏訪山、蓮濁、別行、蓮野、一本松、大夫興野、藤寄の各大字に別れてゐる。

思ふに當村の大部分は、往昔加治川治水の結果開發せられた新田村で、たゞ眞野附近一帯の沙丘と聖籠觀音堂とは古いのであるが、しかし正史の微すべきものが尠ない。彼の聖籠觀音堂の森は、砂浸たる水中に一小丘をなして、瀨伊呂の森は附近舟楫者の一つの目標をなしてゐた。

北國太平記に天正十五年上杉景勝が軍をかへして新潟に赴く條に「瀨伊呂の森を右に見て佐々木川を押渡す云々」とあり

正保圖にもなほ聖籠觀音堂を特に記してゐるなどによつても、それを推知することが出来る。

廣袤は東西二里餘、南北一里十五町で一方里五九の面積を有してゐる。東に鴻沼、猿橋の二村に境し、西に南濱、木崎及び龜代の三ヶ村あり、南は佐々木村、葛塚町に隣し、北は紫雲寺村と加治川とに接してゐる。

現在戸數は千百餘、約八千人の人口を擁し、米、麥、豆類を最も多く産する農村で、果樹では梨、そして養鶏の極めて旺んな地である。

小學校の外に補習學校、青年訓練所の設けあり、役場吏員一〇、區長一六、學務委員四、村會議員一八、水利組合議員九二、水害豫防組合會議員五三などによつて一村の向上發展が期圖されてゐる。村社一、無格社一八、寺院五を算へ、

加治川の櫻、聖籠觀音堂の名勝と舊蹟とが、世に名高い。

### 猿橋村

新發田町の北に接し、佐々木村の東に隣り、北國太平記に、

天正十五年、新發田治長が老臣猿橋和泉、俄に心を變じ、猿橋口の寄手藤田能登守の陣へ矢文を射入、敵を引入、云々

とある所である。

猿橋、船入、富塚、弓越、奥山新保、中曾根の六大字より成り、面積〇・三七三方里あり、全村概ね水田にして、良質の米を産す。また近時納稅成績良好の模範村と稱される。

新發田町に近接するを以て交通の便は頗る良好である。

村内には圓福寺、延命寺、正壽院、正龍寺、善能寺、本福寺等の佛閣あり、村民は信心の念に富み、精勵勤儉の美風高く、一村平和である。

### 松ヶ崎濱村

郡の西端に位し、阿賀川河口の左岸を占め、その南端に於て加治、阿賀二川が合流して日本海に注いでゐる。民家の多くは砂丘上に點在し、遠望甚だ佳絶である。面積は〇・四三方里。

古は一孤島であつたが、次第に變遷して遂に陸地と接したるのである。今、この地方より阿賀野川に合流しつゝある諸水は、往昔、松ヶ崎より西に至り信濃川に注いでゐた。即ち、享保十五年、新發田藩はこの地の砂丘を開墾して直ちに海に導いたのである。爲めに福島潟及び諸水の氾濫は大いに減じたといふ。戊辰戰役の時、東西の兩軍が長岡出雲崎の間に對抗して秋に至り、新發田孤立し、官に應ぜんとするも形勢甚だ難しく、七月下旬、官軍艦に依りて松ヶ崎に至り、進んで新發田を取る云々といふことが維新史料に見える。水上舟楫の便あり、新潟市へは僅かに二里。

### 南濱村

當村は、本郡沿海の一部を占めてゐるその中央は西から東にわたつて砂丘が起伏し、松林が斷續し、畑地がその間に點在する。そして南部に走らせる二條の銀蛇こそは、これことごとくが水田なのである。一は山邊と稱し、古くからの水田であり、他の一は加治川の開墾地で、いはゆる新田である。

當村の東南には四里にして新發田を、西には五里にして新潟を控へ、東西は龜代、松ヶ崎濱の二村に限られ、南は加治川を挟んで木崎村と相交錯し、その兩端は聖籠村と濁川村の一角に觸れ、此の一帶は日本海で、長さ二里、幅二十町餘の長方形をなしてゐる。戸數約五百、人口三千餘で、地籍は實に一千五十町歩に及んでゐる。

當村の創設に就ては、容易に知ること出来ぬが、その昔、沼垂及び岩船の兩柵が置かれた頃には、既に部落をなし

てゐたであらうといひ傳へられてはゐるが、確たる史料の微すべきものがない。

慶長三年以來、新發田藩に屬し、明治四年七月廢藩置縣後、一時水原縣新發田出張所支配となつたが、同年十一月に至つて始めて新潟縣廳の管轄に歸し、同十八年八月鳥見濱、太郎濱、大夫濱、神谷内の四ヶ村戸長役場の設置となり、こゝに四ヶ村合併してこれを大字となし、同十二年の町村實施に際して南濱村と改稱し、今日に至つてゐる。

當村初代村長は金田保三氏で、役場を初め金田吉一郎氏宅に置き、後ち順慶寺の奥座敷に移したが、大正四年の火災後金田忠太郎氏宅に置き、同十一年現在の廳舎新築成るや、その十月こゝに移轉したのである。

當村には小學校の外に實業補習學校があり、その他團體教育など何れも好成績を擧げてゐる。神社は無格社四、寺院は眞宗三、曹洞宗二がある。



## 龜代村

本村は新發田驛より約三里のところ  
あり、新發田町、南濱村、聖籠村、紫雲  
寺村、松塚村、松ヶ崎濱村などは、經  
濟的に密接なる關係が結ばれてゐる。

本村耕地の總土地は一千五十三町歩  
あり、うち田の總數は百五十九町歩、畑は  
三百四十一町歩あつて、戸數四百七十餘  
のうち、三百三十餘戸が農に従事してゐ  
るといふ農村である。次は水産、商業の  
順で、工業の如きは殆んど見るべきもの  
がない。

人口は四千五百餘人、これを職業の上  
から見ると、農業を最とし、水産、商  
工、鑛業その他に分れてゐる。

團體としては、農會、産業組合、漁業  
組合、青年團、女子青年團、消防組及び  
實行組合などの設けがあり。しかもいづ  
れも活潑なる活動をなしてゐる。

## 川東村

東は飯豊山脈二王子山に面し、南西一  
帯は加治川に沿ふ。東南は山地にして林  
産物に恵まれ、西北は展けて蒲原平野と  
つらなり、田地よく拓け、米産年額三萬  
石にのぼる。

宮古木、板山、上羽津、下羽津、下高關  
ほか十五部落より成る大村にして、面積  
六・六八五方里、西北は菅谷村及び五十  
公野村につゞく。

二王子山は標高一四二一メートル、加  
治川の支流諸川の發源嶺をなす。大字田  
貝より登り一里にして不動堂あり、二里  
にして山頂虚空藏堂がある。大字虎丸は  
舊竹俣といひ、石喜は中世の語原にて、  
私有田宅の一跡、または一職の轉訛せる  
ものである。

明治二十二年四月、村制施行、同三十  
四年十一月、四ヶ村を合併して現在の川  
東村となつた。村名は加治川の東方を意  
味する。

縣廳へ七里半、赤谷線に近く、縣道通  
じ、新發田町その他へ交通至便である。

## 菅谷村

村内には營林署、川東實踐女學校、川東  
國民學校、村立圖書館等あり、また産業  
組合、漁業組合が組織される。

大友稻荷神社、二王子神社、二王子山  
加治川櫻の名勝あり、赤谷驛の東北二里  
餘、二王子岳の南斜面内倉川の上流に小  
戸の七瀧あり、中にも不動瀧が最も壯大  
である。

本村は西北に楡形山連峰を負ひ、南方  
に飯豊山脈二王子山が峙立して西北に向  
つて傾斜する。その中間を坂井川が流走  
し、諸流をあつめて西北に下つてゐる。

菅谷、上石川、中川新村新田、下石川ほ  
か二十部落より成り、面積四・七八六方  
里、部落は概ね坂井川の沿岸流域に散在  
する。

村の西北なる奇峯楡形山は、紫雲寺瀆  
の東なる第三紀層高丘にして、附近より  
石器時代を發掘することがある。

名勝菅谷のあきには、加治川の東北

三里、本村溝足の米澤街道にあり、俗に  
お木といふ。本幹は枯死し、皮部のみ生  
存してこれより枝葉を出す。また菅谷の  
不動は眼疾に効顯ありとし、賽者常に絶  
えず、寺院の前に客舎軒を並べ、小市街  
をなす。大峰山の櫻も有名である。

新發田町へは二里、縣道通じ、バスの  
便がある。

## 加治村

本村は四十二部落より成る一村にして  
加治川の東岸にあり、蒲原平野の沃地を  
占め美田相連る。

往昔、佐々木盛綱の子信實は當國に來  
つて加治氏と稱し、子孫は下越後の名族  
となつた。近世、柳澤左内時隆甲州より  
移封して陣屋を置き、封土一萬石を世襲  
して明治維新に及んだ。

面積一・七二方里。村内には穀物検査  
所出張所、郵便局あり、また押廻農家利  
用組合、報徳共同苗代生産組合、關妻土  
地利用組合、日光農業倉庫等組織され、

産業經濟は隆盛である。

羽越線加治川を有し交通は至便。

その昔、佐々木氏が加治の庄を知行し  
たるは、備前藤戸渡りの先陣の功を賞し  
て賜はりし故なるにより、これに因んで  
藤戸神社が創建され、今も庶民の崇敬を  
あつめてゐる。村内社にはこの他八幡  
宮、日枝神社、溪岩寺、常勝寺、善積寺  
等がある。加治川沿岸の櫻は名所として  
知られ、市島春城の文に

右岸も左岸も上流も下流も、水の通ず  
る所、堤の列なる所、花ならざるなく  
紅雲たなびき渡つて清き流れに映發す  
る光景は眞に天下の奇觀で、先づ吾等  
をして覺えず快哉を叫ばしめた。  
とあり、風景以て察するに餘りある。

## 紫雲寺村

西北は龜代村及び松塚村の海岸丘陵を  
負ひ、山林原野五百餘町歩あり、東及び  
南は耕圃拓け、米藪の産が多い。

紫雲寺新田は近世まで二里程の沼澤で

## 金塚村

あつたが、新發田藩がこの開墾にあたり  
着工せんとするや、近傍諸村民の利害相  
一致せず、爭論頻りに起りたるも、享保  
十五年遂に和約成り、近世北越に於ける  
一大農功はやうやく成功したのである。

一説に、鹽津瀉といふ一小湖があつたの  
を、竹前權兵衛なる者治水開拓の事に從  
ひ、事業を達成し、これ紫雲寺村の起原  
なりといふ。今、本村は稻荷岡、米子、  
宮吉、人橋、元郷ほか二十大字より成り  
面積一・三五四方里である。

鐵道はないが、縣道は村内を貫き、バ  
スが往復し、交通不便でない。村内には  
郵便局あり、また社寺には村社白山神社  
觀音院、觀音寺、紫雲寺、前導寺、託法  
寺、東光寺、要行寺等がある。

楡形山脈の西陰に蟠居し、西半は平坦  
にして水田疊々と拓け、地味豊沃、水利  
の便あり、米の産額が多い。

金塚、中川、依橋、相馬、岡島、戸野



港ほか十二大字より成り、面積一・二〇四万里を占める。この邊一帯は、往古、奥山加治兩庄の境界地と稱される。大字金山には寶塔山城址がある。寶塔山はもと願文山といひ、勤王の志土酒匂八郎家賢の立籠つた古城跡である。椽平櫻樹林は天然記念物に指定されてゐる。

米、藪の産多く、村内には郵便局あり且つ羽越線に沿ひ金塚驛を置きて交通至便である。金塚信販購組合、村農業倉庫が組織され、金融並に産業状態良好、小學校また成績見るべきもの多く、衛生状態も概して良好である。社寺には村社八幡神社。法藏寺等がある。

### 松塚村

新發田町の北方なる海岸砂丘上にあり藤塚濱、村松濱の二大字より成り、面積〇・六四万里の小村にして、全村殆ど山林畑地にて、水田の見るべきものない。前記二部落は落堀川口を挟んでその兩側に相對する。

村松濱には琴平神社あり、境内の風致勝れ、社殿彫刻の美また縣下に冠たるものあり、頗る著名である。不動院は眞言宗の古刹として知られる。

小學校は各種施設よく整ひ、殊に校外教育に見るべきものがある。村民の求知心を慰すものに私立松塚圖書館あり、利用者は年々増加の一方である。

兩部落にはそれ／＼漁業組合が組織され、共同作業その他組合の活動活潑にして効果ある業績を示してゐる。

羽越線新發田驛まで三里の距離を有すと雖も、近代交通の窺見たる自動車の便がある。

### 築地村

當村は、縣廳所在地たる新潟市を距ること三九・七軒のところに在る。郡の北部に位置し、東北は胎内川を隔て、二村に境し、西北は日本海に面し、西南は落堀川の流域を隔て、紫雲寺村に接し、東は金塚村と中條町に連つてゐる。

土地は平坦で、地勢は西南又は東北に緩斜し、田耕地の大部分は南方紫雲寺瀉開墾地にして、即ち、新田地と稱し、北方築地以北は本地古田と稱する古田新田よりなり、小流各地にわたり灌漑水利の便はよかつたが、近年は新田地の一部用水が不足し、古田の一部湛水の個所がある。そして當村の田土質は植土が大部を占め、一部は砂質壤土、壤土植質壤土で、畑地土性は砂土大分を占め、砂質壤土、壤土植質壤土にして、いづれも地質は第四紀新層である。

當村は東部山嶽を距ること三・九三餘軒、西北部日本海に面し、通氣よろしく溫暖なるがために、養蠶の發育良好にして、耕作物も全村の生育大差なしであるが、稲作は氣候の關係からではないが、土質の上からいつて新田地は收穫多く、古田地は收量が少ない。

### 乙村

本村が蒲原の郡奥山の庄、地本と呼ん

だのは、多分今の大字地本であつたらうか。口碑の傳へるところに據ると、今より約一千三百年前、既に一の部落をなしてゐたやうである。つまり文化以前の古刹、乙寶寺の建立などに見るも、その創始のいかに久しいものであるかを察知することが出来る。

本村の地勢と産業との消長は、終始胎内川の流域の變遷によつて左右されてゐたやうで、以前本流は紆餘曲折して村内を北方に流れ、岩船郡の荒川に注いだ遺跡がある。且つ今に遺る村内所々の河床の跡や、河原、古川、川原などの字名によつても知られる。かく左折右曲して一定の川敷がなかつたため、出水毎に河水が氾濫し、その被害が全村に及んだので明治二十一年に至つて宮原泰治郎氏の主張の下に、本流を直下日本海に注がしむべく、現在の砂崩方面六百餘間を掘割つた結果、爾來甚だしい水害を免れ、本村の産業振興上に裨益する著大なるものがある。

### 黒川村

本村はもと乙村、桃崎濱、荒井濱、大出村、富岡村、菅田村の戸長役場を乙村に置き、また地本村には江尻、地本、古館、十二天、高野、土作、横道、平木田小池谷、山屋、伊徳寺の十一ヶ村の戸長役場を置いたが、後乙村外五ヶ村を乙村と稱し、地本村外十一ヶ村を横田村と呼んだが、更に降つて兩村を合併し、現在の乙村と改稱、合併後の初代の村長として丸岡寛平氏が推舉されたのだつた。廣袤は東西一里十四町、南北二里六町で、全面積一・九五五町、戸数は約一千百、人口は六千三百餘人をかぞへる。全面積のうち田七、九四三反、畑三、一一六反、山林三、四九五反、原野二、九九七二反、雑地二四反、池沼三六反、宅地一九七、六九三坪を示してゐる。

本村は南北八里にわたる長延なる山村にして、東北面は飯豊山脈を以て岩船郡と境を劃す。黒川、東牧、下赤谷、下江端ほか二十部落より成り、二集團にわかれ、一は黒川を主とする本村西北端、胎内川右岸の平坦地を占め、一は西方楡形山を東牟禮山の山間なる盆地に位し、鼓岡、夏井の一團が後者である。面積一一・六七方里。近世、柳澤氏の陣屋あり、享保八年、柳澤刑部少輔時經(吉保二男)が甲州より轉じ、黒川に一萬石の食邑を賜ひ、子孫世襲して明治維新に至つた。羽越線平木田驛及び中條驛へは何れも一里にして達するを得、共にバスの往復ありて交通の便良好である。住民いづれも鼓腹してゐる。村内には村立圖書館、産業組合、土地利用組合、農業倉庫等あり、社寺は大藏神社、圓福寺、正續寺、諸善寺ほか二社七ヶ寺をかぞへ、敬神崇祖の念に篤い。



# 中蒲原郡

## 位置・區劃

東南二面は崇山峻嶺を以て東蒲原、南蒲原の兩郡に界し、西北は中ノ口川、信濃川によつて西蒲原郡及び新潟市と相對し、東北は阿賀野川を北蒲原郡に隣り、北西は日本海に面し、遙かに佐渡ヶ島をのぞむ。

郡中を分ちて六町二十八ヶ村とし、町村名は左の通りである。

町 白根、小須戸、新津、五泉、村松、龜田。

村 新飯出、須田、庄瀬、白井、大郷、鷺巻、根岸、小林、茨會根、小合、金津、萩川、新開、橋田、菅名、大蒲原

七谷、十全、川内、川東、巢本、横越、大江山、石山、大形、鳥屋野、曾野木兩川。

## 地勢

本郡は越後山脈の西側郡に在りて、南東には粟ヶ嶽、闇見嶽、青里嶽の三山が崛起して川内、七谷兩山を

形成し、山地の面積は全郡の約三分の二を占め、南東地方は概して高燥にして山水秀麗なりと雖も旱害少しとしない。

しかし北西は蒲原平野に屬するため、地勢平衍膏腴にして田園遠く開け、信濃阿賀、小阿賀、中ノ口以下無數の河川縦横に貫流して灌溉漕運の利あり、穀果蔬菜の栽培に適する。

山地と平地の接觸點が新津町だ。

## 鑛業

郡の南東山間部は、地層極めて單一なるを以て金屬鑛脈著るしく發達し、隨つて鑛量豊富にして處々にその床頭を露出する。故に幕政時代に於てすでにこれが探検採掘に従事せるもの尠からざりしが、不幸にして或は鑛脈の狭少或は費源の濶澤ならざりしため、遂に中絶廢坑の状態に陥つた。しかるに明治維新後、再びこれが探検試掘を試みる續者出し、各多少の利潤を收めざるはない。

主なる金屬、非金屬鑛脈の所在を挙げれば、

川東鑛床地、小西谷鑛床地、仙見谷鑛床地、杉川谷鑛床地、新津油田。

## 産業

鑛業以外の産業では農業及び工業が隆昌を呈し、生産總額(含鑛業)三千七百萬圓を越え、縣下四市十六郡のトップにあり、第二位の新潟市を引離すこと三百二十餘萬圓である。而して一戸當りは千五百五十餘圓にて郡市制第五位にあたる。

## 白根町

本町は郡の西部に位置し、信濃、中ノ口兩川に圍繞せられたる舊第十九大區に屬してゐる。町の東南は白井、小林の二村に接し、北東は根岸、鷺巻の兩村に連なり、西は中ノ口川を隔て、西蒲原郡味方村と相對峙してゐる。

地勢は平坦、中ノ口川に沿つて南西より北東に展開する。長いところは一里二

町、東西の廣いところは二十町、狭いところは七町で、總面積は六百五十町歩餘ある。

本町の現在戸數は一千五百餘戸、人口



本町通り

〇〇九、畑は六四一反九一八、雜地五反二〇七で、合計五、九六二反二二九、その賃貸價格は一四一、四八八圓である。全町民の約半數は商業に従事し、次は農を營んでゐるだけに、銀行三、無盡一

あり以て本町金融の圓滑を圖つてゐる。小學校の外に青年學校、實科高等女學校があり、また町立圖書館の設けもある。

神社には村社一、無格社六、寺院六、官公署諸團體には白根警察署、白根郵便局、新潟區裁判所白根出張所、煙草專賣局白根出張所、穀物検査所白根支所、白根教育會、白根町在郷軍人分會、白根町青年會、白根町婦人會、白根町國防婦人會、白根町商會、同農會、同信用組合、白根小須戸郷利用組合、白根町花卉球根組合、白根養鶏組合、白根染織同業組合、白根郷普通水利組合、白根郷耕地整理組合、白根町佛檀商組合、白根履物商組合、白根米穀商組合、白根町箆筒組合、白根町大工組合、白根町疊組台、白根町小間物組合、白根町鍛工組合、白根町梨出荷組合、白根町菓子商組合、白根町料藝組合、白根町理髮組合、白根町金物組合。

なほ本町の主なる物産としては米を第一に、園藝農産物、佛壇類、建具類、又

物類、菓子類などである。

## 小須戸町

新津町の西南二里半の地に位し、三條酒屋間の水驛にして、信濃川交通の一要邑である。即ち航漕は新潟、長岡への便を持つてゐる。また陸上は信越線矢田驛へ一里弱、縣道集中し、新潟各地方へバスが通つてゐる。

この町の名は古書に見えず、近世になつてからの發達だらうといはれる。大字天澤には舊き石腦油井がある。矢代田と小須戸との間の鎌倉湯は、古くは五社川に連つてゐたが、今は拓かれて壱田となつた。五社川は螢の名所である。

小須戸、水田、小向、横川濱はか五大字より成り、面積一・〇八八方里、商勢頗る活潑にして、夜具綿及び木綿織物の産は縣下第一である。

町内には警部補派出所、郵便局、銀行支店、産業組合、織物同業組合等あり、社寺は感應寺、西善寺、正福寺ほか三社



九ヶ寺をかぞへる。

### 新 津 町

新潟市を距る五里半、新發田町を去る六里半の地にして、南蒲原郡加茂町より連瓦せる山脈の北端に在り、能代川に跨つてゐる。秋葉山はその背面に聳える。信越本線新津驛あり、羽越、磐越、信越三線の聯絡交叉驛たる交通上の要衝にあり、縣道四通八達し、自動車網は近傍一圓にわたつてゐる。

東鑑建仁五年の條にこの地の豪族新津四郎の事を載せ、また北越軍記に、越後新津保の支配新津丹波守義門のことを記せるも、兩氏は別族なりと傳へられる。今は中蒲原郡内の最も繁華なる市邑にて附近は石油の名産地にして、小口、新津金津、朝日、熊澤等の油鑛あり、黒色濃重なる機械油を産する。これら油田は磐越線の車窓近く見ることが出来る。

新津、東金澤、柄目木、飯柳、田家はか十大字より成り、面積一・五四八方里

あり、町内には保健事務所、運輸事務所土木派遣所、警察署、蠶業取締支所、穀物検査所出張所、區裁判所出張所、郵便局等の官衙を有し、學校は小學校のほか縣立新津高女がある。

越後七不思議の一なる田家の煮壺は、秋葉山下なる舊油泉、六角形の小池にして、深さ十二メートル、水面に天然瓦斯を發生し、宛も水の沸騰する状をなしてゐる。秋葉山は櫻の名所である。

### 五 泉 町

四面平坦にして崗丘なく、能代川及び早出川の支流が貫流する。磐越線通じて五泉驛あり、隣接村松町に至る約三哩、また蒲原電鐵を有し、各地にバスも走つて交通至便を極め、舟は阿賀川を経て新潟へ通じてゐる。

五泉は天保年間より駿河沼津藩の治所にしてその陣屋の在つたところである。上杉家の時は、甘糟某の食邑となり、今の八幡家境内がその城址である。五泉の

### 村 松 町

名義については所説いづれも附會に近く採るべきものがない。たゞ清泉五條西北に貫流するを以て地名またこれに聯關するものであらう。明治三十四年、町村合併行はれ今日に至つた。

五泉、能代、荻曾根、一ツ柳、三本木ほか六大字より成り、面積〇・九〇五方里である。附近に織物を産し、殊に袴地即ち五泉平の名は天下に高い。官衙銀行團體事務所等多數存す。

東南部は丘陵起伏し、北西部は平潤である。田園よく開かれ、茶、桑、蔬菜の栽培に適し、産額も多い。郡内新津町に次ぐ大邑にして、蒲原鐵道村松驛及び西村松驛あり、縣道四通し、五泉町、加茂町及び信越線羽生田驛の電鐵並にバスの便あり、陸上交通の要地である。

### 新 飯 田 村

本村は郡の西端に在り、中之口川の右岸に沿ふ。三條市や燕町に近く、縣道は村を南北に縦横し、バスの便あり、中之口川には舟楫の便ありて新潟市へも出られる。

純農村ともいふべく、米と桃の産が多し。春になると、全村が桃の花で埋められるといふ物語のやうな村だ。村當局及び農會、産業組合等では、産米の改良増産に常に意を用ひて怠ることなく、害虫驅除のごときは小學生をしてこれに當らしめ、秋ともならば田圃を縫ふ學童の群が農村異風景を現出する。今次支那事變が長引くにつれ、集團勤行、勤勞奉仕等が叫ばれるに至つたが、本村ではすでに古くからこれを實行して居り、たゞ現今では一層強化せられて他の模範たる矜持を有するに過ぎない。

衛生展覽會や衛生週間を催はしてゐるのも本村の一特色である。

三萬石を分封した。嘉永三年、城主格に列せられ、戊辰の亂には東軍に應ぜしが七月二十九日大敗し、八月四日城邑を燒かれた。時に泉仙助、稻垣覺之丞、佐々耕庵、山崎彌平、國村定之丞、中村勝右衛門、下野勝平の七士勤王の藩論を鼓吹せんとせしも、俗論黨のために疎外され終に斷罪に處された。當時これを村松藩殉難七士と稱し、いづれも後年贈位の御沙汰があつた。またこの七士のほか、勤王家に近藤貞、吉田又内、堀齋等を生んだことは本町の名譽である。

面積〇・三六五方里。町内には歩兵第十六聯隊のほか警察署、區裁判所出張所、營林署、縣立村松中學校、同村松高女、村松教育圖書館、銀行支店、各社團體、郷社日枝神社ほか二社十二寺がある。

### 龜 田 町

信越線の一驛にして、郡の中央より稍北方、新潟新津の中間に位する。鐵路新潟へ四哩、新津へ六哩だ。粟ノ木川の水

運ありて殊にその繁華をなした。北越軍記に、上杉謙信に仕へし龜田小三郎といふ人あり、この地の郷士なりと傳へられる。方俗に横越島を龜田島ともいふ。曾て佐久間象山の龜田より新潟に至る船中所見の詩あり。

久しく長途に倦んで此に船を放つ、塞江雨暗うして遠く天に連る、棹は湖水に隨つて臥すに堪ゆと雖も、鴨は蓬窓を近うして眼につき難し、岸樹風を含んで風浪々、汀沙露を帯びて草綿々、郷園見えす空しく首を圍らす、日暮れて煙波思渺然。

と詠んでゐる。龜田、船戸山、荻曾根、貝塚、袋津ほか八大字より成り、面積一・一二方里。町内には警察署、區裁判所出張所、郵便局、染色試験場分場、穀物検査所出張所、町立龜田圖書館、龜田實科高女、第四銀行及び新潟銀行各支店、織物工場三十有餘、産業組合、神社八、寺院十二あり、町勢の發展は、近來頗に顯著なるものがある。



須田村

信濃川は本村東部より分岐して半月形の中洲をつくり、西蒲原郡黒崎村附近にて半月形の北端を終つてゐる。曾て水害を受けしこと數次、今は堅固なる堤防を構ひ、土木日本の誇りを高らかにその憂ひを絶つた。

略風土記に、浦須田に須田氏の館址あり、須田相模守滿國は謙信公を頼み當國へ移り云々の記事が出てゐる。今は前須田、後須田、砂押、北潟、五反田、鵜麥上新田、田中新田等の大字より成り、面積〇・六〇七方里にして人口約二千八百人、役場は前須田に置く。

縣道東西に走り、加茂町會根村間のバスが通つてゐる。

小學校は兒童の學業成績よく、就學歩合も出席歩合も殆ど百パーセント、また村民のためには村立須田圖書館が設けられてゐる。分院には延命寺、地藏院、順行寺がある。

庄瀬村

白根町の南にあり、信濃川の左岸にして、中之口川の堤を往來とする。北越軍記には、

庄瀬新藏は謙信公代に度々戦功有之候先祖傳記不詳

云々と見え、この地の郷士ならんと傳へられる。

庄瀬、古川新田、兎新田ほか十四部落より成り、面積〇・七六五方里、村内には郵便局、圖書館等がある。小説家相馬泰三氏は本村の出身である。

産業は灌漑の便と耕地よく拓けてゐる爲め、農業盛大にして、縣下有數の米産地である。村農會では副業の奨励をなし蔬菜、葡萄の栽培を行ひ、出荷組合等を組織して共同販賣に當つてゐる。更に球根は水田裏作として成績よく、開墾事業も大正十四年頃より實施して今日百餘町歩に擴張した。産業組合も一般によく利用されてゐる。

白井村

本村は信濃川の左岸に位し、小須戸町と一葦帯水の間に在る。蒲原平野の沃地にして、水田五百五十町歩、米作が盛んである。

白井、中山、小藏子、下八枚、戸石新田、古川の部落より成り、面積〇・五八六方里を有し、新津町及び白根町の交通路に當り、バスが通つてゐる。白井より鷺ノ木の方へ信濃川舊河道の跡が残つてゐるといふ。

戸石修養文庫、白井村圖書館等ありて村民の知識慾は相當程度まで満たされてゐる。

主要作物は梨、温床育苗の茄子、胡瓜等で、副業には豚、兎、鶏の飼育が非常に多い。教育會、在郷軍人分會、男女青年團、婦人會、修養團、青年學校、自治會等の協調により、社會方面の實績は目覺ましきものあり、殊に納税奨励、勤儉貯蓄の實施に著るしい。

大郷村

信濃川の幹流とその支流たる中之口川に包圍される白根島の東北部に位し、信濃川の左岸にあたり、兩川村酒屋と相對する。東西半里、南北二里餘の長延なる地形にして、土地平坦なる農村である。西には鷺卷村がある。

この地はまた大郷島ともいふ。近世まで河水環繞して、白根島のほかに別に一洲を成してゐたからである。本村の南を白井村といふ。白井より鷺ノ木の方へかけて、今も舊河道の跡のこり、閘門を築造して洪水に備へてゐる。

大郷、西酒屋、犬歸、赤澁、東笹卷の五大字を合し、面積〇・五九一方里、大字大郷に村役場を置く。

村立大郷圖書館、大郷産業組合、村社神明宮、眞言宗清願寺、同本乘寺等有し、交通は新津町へ二里半、途中バスの便があり、相當の要村として、知られてゐる。

鷺卷村

東は大郷村、西は根岸村に接し、信濃川と中之口川の中間なる低地にして、耕地水に掩はれ、水郷の感がある。

東笠卷新田、引越、西笠卷、西笠卷新田、鷺ノ木新田等の部落より成り、面積〇・六一四方里、水田五百五十餘町歩、畑地百二十町歩を占め、米産が多い。産業組合は二あり、共に本村農業經濟の向上と發展に努力し業績顯著である。

地形は所謂三ヶ月形中洲の最北端を占め、五つの部落は、多くは川堤に近く、比較的高梁の地に在る。

新鴻市へ二里半バスの便がある。小學校及び村立鷺卷圖書館を有し、體育及び校外教育方面に新機軸を出して漸次優良校たらんとしつゝあり、村民の教育に對する理解は相當に深い。村内寺院には長惠寺、長福寺、東福寺、福圓寺、林葉寺等がある。産業、經濟、教育等多方面に隆盛を示してゐる。

根岸村

鷺卷村と共に所謂三ヶ月形中洲の北端にあり、中之口川下流の右岸を占める。山崎與野、上鹽俵、中鹽俵、下鹽俵、松崎、下山崎、高井興野、北田中、夏保、中高井、下高井等の部落より成り、人家は概ね中之口川沿岸の一線上に點在する。面積〇・六四二方里。新鴻市へ二里半、陸にはバス、川口は舟楫の便がある。

本村に於ける産業に於て、第一に擧ぐべきは球根の栽培である。初めの頃、球根栽培は可成り危険視されてゐたが、郡農會からの大量注文により、これが栽培を刺戟され、今日ではその産額は縣下生産の約八割を占めてゐる。これに次では葎工品の製造がある。同製造は、初め殆ど農家の副業として手工業的に生産されてゐたが、近年は動力を用ひて製造に従事する者もあり、年産三十餘萬貫に達する。實に以上の如く、本村農家副業の發達は縣下第一等の稱さへある。



### 小林村

本村は下木山、上木山、鍋湯、和泉、浦梨、田中、平湯、萬年、蔵王、楠笥、戸頭の十一部落より成り、茨曾根村及び白根町に隣接し、役場は大字下木山に置く。三ヶ月形中洲のほとん中部を占め、沃田相連り、大字戸頭は中之口川の東岸に臨んでゐる。

面積〇・六一四方里、人口約二千三百をかぞへ、米の産が多い。

村内には小學校、村立圖書館、産業組合、長願寺などあり、村民は勤勞奉仕その他、銃後援護に熱心をきはめ、自治の円滑なる運轉に相俟つて、村勢日に發展を見て居る。

勤儉貯蓄の勵行、消費節約の徹底、生活の簡易化等は、ことによく實行されてゐる。

縣道あり、新津町及び五泉町に近く、バスが往復し、交通の至便は當村の發展を助成してゐる。

### 茨曾根村

本村は中之口川の東岸にあり、小林村に隣接する。また北に白根町を控へ、南に新飯田村を有す。北越雜記に

茨曾根は村上領にて、諸村を併せて茨曾根組と云ひ、三條陣屋支配なり、中口川の堤を往来とす、此川は昔蒲原中郷の養水に堀たる流なり。

云々と見え、舊幕時代には三條領に屬してゐたのである。

國道並に縣道が村内を走り、北は白根町、新湯方面、南は三條方面へバスが通じ、信越線加茂驛へは二里半である。また、水上中之口川には舟楫の便があり、海陸の要をなしてゐる。

茨曾根、東賣場、下道湯の三大字を合せ、面積〇・四四九方里、人口二千五百有餘人である。村内には簡易圖書館、産業組合、永安寺、玄龍寺等あり、村民は質實素朴、最近勤儉貯蓄、勤勞奉仕運動に見るべき成績を示してゐる。

### 小合村

本村は信濃川の東岸に位して新津町、金津村、小須戸村、荻川村等に堺し、小戸上組、小戸下組、栗宮、子成場、藤曾根、四ツ興野、大秋、梅の木、出戸、小屋場、川根、浦興野等の部落に分れてゐる。徳川時代には溝口侯の支配するところ、明治三十五年小鹿村と小梅村を合併して現區域となり今日に至つた。東西一里三町、南北一里五町の純農林で、主産物は米、麥、蔬菜、苗木等である。

古來惡田なりしたため、古くから盆栽、果樹、苗木等の栽培を産業とする者は非常に多く、十數年前より球根、花寺類の園藝が盛大となり、村内信濃川沿岸全部落をあげて栽培に従事し、壯大な專業花園十數園、チューリップ、牡丹をはじめ各種の西洋花が妍を競ひ、縣下の一名所に擧げられ、觀覽視察の人が雜踏をきはめてゐる。村社八幡宮は村民の敬神に於ける象徴で、寺院は五をかぞへる。

### 金津村

當村の起源については、據るべき確かな記録はないが、傳ふるところによれば、源平時代から金津の莊と呼んで、部落を成してをり、領主は地名をとつて金津氏と稱し、上杉氏の頃にはその部將として相當の豪族であつたといふ。

慶長年間、上杉氏が金津に移封せらるるや、新發田藩主溝口氏の領となり、寛政年間、更に徳川氏の自領となつた。當時十一ヶ村のうち朝日村だけ溝口氏は次子伊豆守の食邑に割與した。明治元年藩籍奉還となつてからは、越後府の管轄に歸し水原、三條の各民政局に分屬し、後ち水原、新發田縣に轉じ、明治五年始めて新潟縣の直轄するところとなり、大八區小三區に編入し、同七年更に、大二十區小三區に編制替となり、同十二年區制が廢されて中蒲原郡に屬し、當村を三分して金津、西島、田家の各戸長役場に屬したが、戸長役場の區域分合により始め

て十ヶ字は、大津戸長役場に統一せられたのである。

同二十二年町村制實施に際し、津島村を組織してその役場を古津に置いたが、同二十六年、中村程島は別に中島村を組織して獨立し、同三十四 町村合併のことあるや、再び併合して今日の金津村を生み出したのである。

當村併合して三十餘年を経るが、村機關たる村長、校長、村會議員、役場吏員等何れも勤績長きにあり、いよゝゝ創業建設に對する内容充實時代に進みつつある。すべての設備を中心集注主義を採り、村役場は學校と相對して近代建築に變り、役場はこれと鼎立して圖書館信用購買組合、事務所を利用され、小學校は新教室、屋上運動場、特別教室等増築を施し、また中野家寄附になる奉安殿、講堂、農業教室の新装を加ひ、四十坪の新式グラウンドを設けて面目頓に革まり、傳染病院も改築されて瀟洒な姿となる。これ等外形の擴張と共に、内容の順

次改善せられたことは、改めていふまでもないことである。

即ち教育の方面は農業補習學校は學則を改正して通年制となし、女子部を設けて必須な教育を施し、青年訓練所は新たに設置され、小學校は經營機宜に叶つて縣下の模範校と稱せらるゝに至つた。更に衛生設備については醫師なき村の不便を緩和するために診療所を設け、警備施設は従來の私設消防組を統合して七部の公設消防組を組織し、一層その機能の發揮に努めつつある。

また産業方面に於ては農會、信用購買組合、小學校と力を戮せ、農業立村を提唱し、各種團體村民また相呼應して農業の復興に努めつつあるので、漸次面目を一新、農村に還りつつある。

### 荻川村

本村は信濃川の東岸、小阿賀野川の合流するところであり、北は兩川村と相對し、荻原平野の平坦にして、米産多く



且つ廣大なる花卉園がある。本村の花卉は單に縣内に著名なるに止まらず、遠く海外にまで輸出され、市場の好評を博してゐる。田中新左衛門といふ人が丹精込めて始めたものである。

中野、市之瀬、車場、荻島、覺呂津、北鴻、福島、田島、川口、結等の部落より成り、面積〇・九七七方里、水田九百二十町歩、畑地百六十町歩を有し、村内には信越線荻川驛あり、縣道も通り、バスの往來繁く、交通至便である。

小學校は施設の整備せること他校の範といはれ、青年學校を併設し、また荻川圖書館がある。神社は無格社二社を有するのみ、寺院は光雲寺、西光寺、正願寺、法嚴寺、明圓寺、改觀寺等があり、善男女の信仰があつた。

### 新 關 村

新津町の東南一里、阿賀川の左岸に位し、能代川の過ぐるところである。西部は緩漫なる丘陵連立し、東部には低地が

多い。大河に瀕するが故に、その激奔により古來地形しばしば變易した。今は下新、小口、岡田、大關ほか十五大字より成り、面積〇・七二六方里である。縣道あり、新津、五泉の兩町へはバスが通つてゐる。新風土記に

小口村(現大字)の若宮廟所は能代川より東の方五丁許り、字御神と云ふ所にあり、何れの比にや土人觀音山境内より瓶掘を出せしかば、是は若宮の廟所なりとて、其所に小堂を建立す、その後此邊より太刀五十三振を掘出しぬ云々と見える。

村内には産業組合、漁業組合、熊野神社、神明宮、善精寺、林祥寺がある。

### 橋 田 村

本村は橋田、山崎、丸田、小熊、石倉菅澤、尻上、大澤、西四ツ藏の九ヶ大字を以て一村を組織し、東西約一里、南北一里三十町、三面に丘陵起伏し、東南には能代川が環流する。川の沿岸は卑濕の

田圃多く、土地概して肥沃である。面積一・三三三方里。

源平盛衰記に見ゆる橋田太郎は、この地の郷士である。北越軍記に載せたる橋本峠または橋本橋とある本は田の謬りにて、即ちこの地をいふと説く者がある。

字能代の若宮明神は、順徳院の皇子を祀りしものと傳へられる。孤峰削るが如く頂上に井水ありて要害堅固である。平賀左衛門尉の居城であつた。

五泉町へ一里、バスの便通じ、村内には村立橋田圖書館、村社中山神社、眞言宗延命寺、曹洞宗岩松院、同吉祥寺、同正善寺、同正善寺、眞言宗淨林寺のほか二社七ヶ寺がある。

### 菅 名 村

村松町と五泉町の中間に位し、能代川の分流數條は村内を灌漑し、土地豊饒、耕作に適す。石曾根、木越、町屋、千原今泉等の部落を併せ、面積は〇・九五六方里である。

木越に城之館、馬場、殿小路など呼ぶ地名ありて城址は今も跡をとゞめるが、

何人の居城なりしかは詳かでない。たゞ平維盛の末流城織部正資充の居つた所であらうといはれる。資充は上杉、武田、徳川の諸氏に仕へた人である。

村内には村松借行社、村立菅名圖書館産業組合、漁業組合等あり、村役場は大文字石曾根に置く。蒲原鐵道今泉驛及び磐越西線五線驛より共に一里十五町、バスの便がある。

名勝には熊ノ堂仁王尊、若宮の城跡を有し、社寺は村社伊志會彌神社、觀音寺、眼向寺、高岳寺、常照寺、禪定院のほか二社五ヶ寺がある。

### 大 蒲 原 村

郡の西南部に位し、七谷、十全、川内村松の町村及び南蒲原郡田上村、同加茂町と隣接する。地勢西南方に稍々丘陵を見るが、その他は概して平坦にして耕地よく拓けてゐる。

先年、經濟更生村に指定され、計畫も無事遂行して所期以上の効果を收め、村勢の發展に頓に見るべきものがあつた。

殊に村内各種團體の活動は活潑を極め、今次事變勃發後は、村民悉く非常時意識の下に一致協力の實を示し、國民精神總動員に、戦線勇士の慰問に、他に卒先して好成績を示してゐる。産米の共同販賣、自家用醬油の製造が奨励され、衛生設備の充實は縣下稀に見るところである。

名所舊蹟としては高砂湯、龜徳温泉等あり、遠近より來浴する者、四時絶えることがない。また村社八幡神社は本村の鎮守にして村民崇信の的である。

### 七 谷 村

郡の最南端に位し、東南北の三面は粟ヶ嶽、權の神嶽、白山、寶藏山、猿毛山等の諸山相對し、山脈は起伏して西北に走り、各字は七個の谷に點在せるため、嘗ては七谷郷とも呼ばれ、村名もまたここから起つた。加茂川は源を粟ヶ嶽に發

し、大谷川、高柳川、黒水川の諸水を併せて村の中央を貫流する。

面積五方里弱。

産物は食用農産物、特用農産物、口、果實、畜産、工産、林産の順位で、米の産額がその主位を占め、これに次ぐものは甘藷である。最近、村農會の活潑な活動のため生産額は頓に増大し、經營方法また改善を加へられてゐる。

村内には村役場、村農會、専常高等小學校、産業組合、製炭組合、在郷軍人分會、男女青年團等がある。

### 十 全 村

本村は、郡の南部に位置し、東經一三八、五九、北緯三七、五五、縣廳を距る南十里六町の場處に在る。東は白山岳、誇腰山、神戸山などを以て川内村に連り西は鴻ノ巢山、一ノ澤山、戸倉山を限りて大蒲原村に接し、南は寶藏山、楨ノ入山等を以て七谷村に接し、北は猪澤山及び耕地を以て村松町に隣り、山河自然の



形勢によつて區劃をなしてゐる。

本村の南端にそびゆる白山岳は、海拔一、〇二二米四で、神戸山、寶藏山等がその左右に連互し、山脈は蜿蜒東西に起伏して本村の外望をなし、北に向つて漸次低下する。

白山岳を源とする瀧谷川、城ノ入川、能代川の三川がある。瀧谷川は大字蛭野から北に向つて走り、本村の要部を貫流して村松町に入る。城ノ入川は大字下戸倉を流れて上戸倉に入り、能代川と共に大蒲原村に至つて合流する。そしてこれ等各川の流域に沿うた土地はやゝ平坦であつて、田圃開け、その間に各部落が散在してゐる。

地質は第三地層と第四地層とから成り、土性は耕地の大部分は砂質又は植質壤土であつて、米作には適するが表土は概して浅い。

縣道は八、七二四米、村道は七、六〇六米あり、鐵道はなく、また舟筏の便もない。大字數は一〇、部落數一〇、神社

數は一三で、何れも無格社、寺院は慈光寺、長壽院、天照寺、勝泉寺の四つがある。

産業團體には十全村農會をはじめ同養豚組合、同養鶏組合、安出小學校養兎組合、部落農區、酒造米供統組合、十全村養蠶實行組合、同信用販賣購買組合などの設けがあり、何れも好成績を示してゐる。

### 川内村

東西三里、南北六里、本郡南方の地域一帯を占め、東南西の三面は、標高一千メートル以上の峻嶺が波濤のごとく連互し、部落の多くはこの山腹豁間に散在する。地勢高低甚しきも、湧泉到るところに湧出し、灌漑容易なれば、耕田ありて稲木は相當に成熟する。川内、矢津、下阿彌陀瀬、十淵、水戸野ほか十一大字より成り、面積一・二二二方里に上る。有數の高原村落とも稱すべき地にして、地質は古生層の岩石である。大字矢津の

### 川東村

川東とは早出川東方の義にして、阿賀野川の南岸に位し、早出川の右岸を占めてゐる。東南に山岳蜿蜒と連互し、西北に向つて漸次低下する。東西二里三十町南北二里餘の畷を有し、面積二・〇六六方里、地勢平衡ならず、急雨の際、溪流奔旋し、往々田圃の被害あるも、平野には耕地乏しくない。中川新、菅出、笹堀、尾白、小堀ほか十五大字より成り、磐越西線馬下驛を有し、新津町より四里十町、五泉町より一里三十町、村松町より二里十八町、いづ

れも縣道通じ、バスの便がある。

小山田の櫻は天然記念物に指定され、馬下驛より一里、菅名嶽の麓にあり、越の小吉野と稱される。また柄澤の大樟、切畑の大銀杏樹も名稱として縣下に有名である。神社は二、寺院は七を有す。

### 巢本村

郡の東北に位し、東南に天正川及び耕圃を堺として川東村につゞき、西は五泉町、北は新關村に接し、東北は北蒲原郡安田村に連る。

往古、村上周防守義明の治下にして、明治六年には第三十六區十二小區となり自治制施行の際、東四ツ屋、四ツ屋新、土堀、赤羽の四ヶ村を川東村に割き、一本杉、論瀬、高山、清瀬の四村を以て巢本村とした。

産物は農産物及び農家副業産物のみで米と藪がその主位を占める。農村經營合理化の一方途たる金肥節約のための紫雲英、その他自給肥料の増産は、成績頗る

良好である。勤勞を愛する村民性は、若き人々を戦線に送り出しても微動だもせぬ力強さを見せてゐる。

戊辰戦役の戦死者關川平太の墓、神明宮、天満宮、諏訪社、稻荷社、淳心寺、十輪寺、西福寺等の社寺名蹟がある。

### 横越村

本村東部を阿賀野川貫流し、土地卑低なれども地味概ね肥沃にして米、麥、蔬菜、桑葉の産が多く、龜田町に隣接し、信越線龜田驛へは一里、羽越線水原驛へ二里、共にバスが通じてゐる。横越、小杉、二本木、木津、澤海等の部落を以て一村を組織し、面積一・五三四方里、水田は七百四十町歩、畑地七百三十町歩を越え、人口は約八千人をかぞへる。

この附近諸村の總稱を横越島といふ。大字澤海は近世江戸旗本小濱氏四千石の采地であつた。字木津は、北越軍記に、「新津義門の兄は木津左衛門尉資直とい

ふ」とあるは、即ちこの地の在名なりといふ。明治三十五年四月、町村合併行はれ、以て現今に至る。

村内には無格社五社、安樂寺、光明院松韻寺、宗賢寺、大榮寺、通林寺ほか寺院七ヶ寺がある。

### 大江山村

郡の東北方に位し、東は阿賀川を隔て北蒲原郡岡方村に境し、西は龜田町及び石山村、南は横越村、北は大形村に接し、東南一帯に砂丘起伏して竹林畑作に適し、西北は平坦なる低地にして米作によい。從來しばしば洪水の被害を受けたが、近年、堤防の完成により、水の憂患は全く解消した。

古くは金津庄に屬し、天正年間、上杉氏の臣、新發田因幡守治長の所領となつたが、治長滅亡の後、小倉伊勢守、宮島三河守、佐藤氏等相次でこれを領し、慶長三年、上杉景勝會津に移封後、溝口秀勝の采地となり維新に及んだ。



主産物は米、蔬菜、繭、竹製品、薬工  
品、清酒等である。道路の發達は、生産  
物の集散に多大の便益を與へてゐる。な  
ほ名蹟に菅原神社、東陽寺があり、いづ  
れも文安五年の創建、他に本興寺、本傳  
寺、寶泉寺等の淨刹がある。

### 石山 村

新潟市に近く、信越線沿線の地にして  
交通至便を極め、また文化程度の高い村  
である。産物は米と繭が主であるが、先  
年、更生計畫が樹立實行されてから産業  
經濟は全般的に驚異的發展を遂げ、菓細  
工の製造だけで一家に三百圓の収益をあ  
げた農家があり、養鶏によつて六反歩の  
田地に殆ど金肥購入をしなかつた家があ  
るなど、事例は枚擧に遑がない。

村民は一村一家の如き協調心を以て全  
般的繁榮に邁進してゐるのだ。産業資本  
の節約やら技術的改善、日用必需品の共  
同購入、副業の奨励、生活の改善、貯蓄  
の實行などに特に重點を置いて銃後の農

村を護り、禁酒の勵行、儀禮的贈答の廢  
止、勤勞奉仕等は特に成績良好なるもの  
あり、家屋の新築のごとき悉く延期に決  
し、これらに反した場合は信用組合に於  
ては資金の融通をしないと云ふ。文字通  
り國策の村である。

### 大形 村

新潟市の北方、阿賀野川の左岸にあり  
北は物見山の砂丘によつて日本海に達し  
南は平坦にして通船並に水利の便あり、  
海老ヶ瀬、津島屋、松崎、河瀬新田、逢  
谷内新田、寺山新田ほか六大字より成る  
農村にして、面積一・一三九方里、新潟  
驛より二里、バス及び海上汽船の便を有  
し、且又阿賀野川泰平橋を以て北蒲原郡  
との往來の通路とする。信濃川と阿賀川  
との中間の地である。

舊幕時代には八箇濱組と唱へたが、義  
經記にある八十八里濱はこの地であると  
いふ。ここはまた大佛渡或は河渡と稱し  
沼垂が王瀬を退轉したる後に一村を形成

### 鳥屋野 村

沼垂の西南に當り、前に信濃の巨流あ  
り、背後に鳥屋野潟を負ひ、その間の低  
平地に散在する十六部落より成り、面積  
〇・九三一方里である。

古くは蒲原新田の中に屬したところ  
ある、名寄に「鳥屋野てふ名所は何書に  
も未勘の歌枕とす云々」と見え、新古今  
集に、順徳天皇の御歌

はし鷹の鳥屋野のあさぢふみ分けて  
をのれと歸る秋のかりうど

と記され、略風土記には「鳥屋野の御天  
皇山は今も地震の際も動かぬ靈地なり」  
と見える。鳥屋野地また親鸞聖人配流の  
折、この地に一字を營みりとも傳へる。  
所島は現今上下に分れ、戊辰の亂の舊越

である。鳥屋野潟は往時はゆる横島  
の中心を占めし大江灣なりしことあら  
と稱せらる。村内西方寺境内には親鸞聖  
人の遺跡にして越後七不思議の一に數へ  
られる指定天然記念物、「逆竹」がある。

### 曾野 木 村

信濃川の東岸に位し、北に鳥屋野の潟  
湖を控へ、土地低平、小流縦横に灌漑し  
水田八百餘町歩、米作に富む。

曾川、鐘木、久藏興町、大右衛門、祖父  
興野、依柳、楚川、合子ヶ作、嘉木、天  
野、丸潟、鍋潟新田等の部落より成り、  
以上のうち鍋潟、鐘木、曾川、天野、丸  
潟等は稍々人家が多い。面積一・一一方  
里、人口約四千五百人である。

新潟市へ約二里半にして達するを得、  
陸上は縣道をバスによつて通じ、水上は  
信濃川に舟楫の便がある。

産業組合は銃後の護りの第一線に立つ  
て活動見るべきものあり、また村民の今  
次事變に對する態度は相當深き認識の下

に立ち、戦線の勇士の辛苦を己が辛苦と  
して銃後を固めてゐる。

なほ村内には永勝寺、廣誓寺、最福寺  
誓林寺、専福寺等の淨刹がある。

### 兩 川 村

本村は澤海の西にありて、小阿賀野川  
の信濃川に入る地に當つてゐる。大字酒  
屋は水路新潟を距る四里、長岡、三條、  
會津、津川、五泉、新津等の水運ありて  
舟楫の一要地である。また縣道沿線の地  
で自動車の便もよい。  
面積〇・六八七方里。酒屋、舞潟、平

## 西 蒲 原 郡

西蒲原郡は西方一帯海に面し、他は多  
く平野に連る。南は大河津の堀割を隔て  
て三島、南蒲原の二郡と相對し、東は信  
濃川の分流中之口川を境として中蒲原郡  
と區別し、北は即ち新潟市と相接し、西  
北一帯は日本海に面し、地勢は東南に向

賀、和田、花ノ牧、上和田、刺野、嘉瀬  
等の部落より成る。

耕地は小阿賀野、信濃二川の沿岸に位  
するが故に、沖積土にして地味肥沃、灌  
排水の便よく、更に農産物の消費市場た  
る新潟、新津、龜田、大野の都邑に近く  
稀に見る恵まれたる農村である。主なる  
産物は米、麥、繭であるが、村農會、産  
業組合等が中心に、産額の増加と收入の  
増大を圖り、また共同販賣の如きも統制  
よく行はれてゐる。近年、著るしい傾向  
は有畜農業の優良村として頭角を現して  
來たことである。



新潟電線がある。

王朝、源平、足利時代には、それ／＼時代の主権の下に支配され、足利氏の末に至り、上杉氏の支配を受けた。然るに慶長三年上杉景勝が會津へ移封せられた後は、堀左衛門尉秀治の所領となり、同十五年堀氏が信州飯岡へ移封のことあり家康の第六子越後少將忠輝が六十萬石を以て越後に封ぜられるや、一時その領分であつたが、間もなく、忠輝は國政不取締の廉をもつて、元和二年領地を沒收せられて、翌年元和四年堀丹後守直寄に屬することゝなつた。爾後、常に數諸侯の分ち領する處となり、幕末の頃には松岡藩、村松藩、會津藩、桑名藩、高崎藩、新發田藩、奥板藩、峰岡藩、幕府直轄の如き、混みいつた状態となり、以て明治維新に及んだのである。

本郡が獨立の一郡をなしたのは明治十二年四月のこと、それ以前は他の蒲原諸郡と共に、たゞ蒲原郡の總稱を以て呼ばれてゐた。その後明治二十二年の町村

制施行に際し三町七十七ヶ村に分たれ、同三十四年廢合を行ひて三町三十四ヶ村となり、同三十九年更にその一部が併合されて三町三十二ヶ村となつたが、後年町制施行するもの殖え、現在は六丁二十八ヶ村である。即ち

- 町 卷、地藏堂、燕、吉田、會根、内野
- 村 坂井輪、赤塚、角田、松野尾、峰岡、浦濱、間瀬、岩室、彌彦、國上、粟生津、米納津、漆山、和納、鏡郷、中野小屋、黒崎、味方、四ッ合、大原、月湯、道上、松長、小中川、小吉、小池、島上

の町村がそれである。郡内の大部分は農村で、特に稲作が多く、稲作の改良は頗る見るべきものがある。従来西蒲原郡の農民は、畑地を變じて稻田とするを得策とし、兎角畑作を嫌ふと共に、これが耕作法も疎漫に附するの傾きがあつたが、近年は畑地の利用法が研究され、果樹の栽培多く、また水害を苦にせざる藁草も普及してゐる。養蠶

及び水産業は見るべきものがない。工産物は、燕町の銅器、彌彦、内野、卷、岩室等の酒類、角田、浦濱、會根の製薬、月湯の飴など稍々見るべきものあり、吉田の白木綿は特産として知られる。間瀬の銅山石材及び水産物鹽表をはじめ、西山一帶の植林事業に伴ふ製材事業は盛んである。畜産も相當の成績を示し、赤塚地方の馬、海濱地方に於ける牛は、年々種類の改良に熱中し、漸次發展しつつあり、多くは農用に供してゐるが、食用として移出される數も尠くない。生産總額は二千萬圓を突破し、これを産業別に見れば、

農産	一五、一一三、七八一圓
蠶絲類	一〇六、七〇七圓
畜産	二六〇、一四八圓
林産	一三九、二六九圓
水産	一〇八、六七八圓
工産	四、六四〇、一二一圓
鐵産	三二、四四二圓

となる。

なほ郡内名所としては彌彦村の國幣神社彌彦神社、國上村の國上寺及び五合庵あり、また岩室、長崎兩鐵泉も普く有名である。

### 内野町

新潟市を去ること三里、砂丘を脊にして西川に臨む。海岸線は單調である。新川は本町の中央を貫流する。

舊北陸道の一要點にして、内野、五十嵐、濱中の三大字より成り、面積一〇・六七方里である。底樋工事で名著はれ、越後線に沿ひ、西川改良工事によつて海運の便がひらけ、佐渡その他より薪炭や木材等を吸集して附近へ賣出してゐる。當地方に於ける小物貨集散地で、最近は商況頗る振つて來た。

昭和三年十一月、町制を施行した。町には警察署、區裁判所出張所、郵便局、縣立新潟學園等あり、産物は米、麥、蕎麥が主要なものとして擧げられ、清酒の産も尠なくない。内野信販購利組合、五十

### 地藏堂町

郡の西南端にあり、信濃川の支流西川は當町に於て分岐し、新潟へは上下の航行あり、米穀の集散高數十萬石に上り、郡内屈指の商業地である。

大川津と相對し、信濃川の分水路を扼し、川中島の渡頭にあたり、昔、こゝに靈驗ある地藏堂ありしが、洪水のために水中に墜つと傳へ、町名の由來はこゝにある。文治三年秋十月、寂寥の法師西行が、錫を留めて數ヶ月、

越路なる狭の渡しの朝嵐  
昨日も吹くか今日も吹くらし

の歌で有名な狭の里は、即ち當町の古い呼び名がある。往昔、狭村または勢婆村勢代村と稱し、寂莫たる孤村で、徳川幕府時代は内蔵紀伊守の所領であつた。會て寺泊が米穀輸出港であつた時、同港と

郡南米産地の中間に在つて、米商會社を設け、次で米穀取引所を設置して繁榮を極めた。

越後鐵道地藏堂驛あり、縣道四通し、三條、寺泊、與板へバスの便がある。

地藏堂驛に下車すると、この邊一帶は兩側に櫻の並木あり、満開期には花のトネルを現出する。面積〇・〇六六方里町内には穀物検査出張所、區裁判所出張所、郵便局、銀行支店、産業組合、顯成寺、常昌寺、淨林寺等がある。

### 吉田町

郡内の大邑にして、郡西南部の交通の要衝に當り、本郡産米の大部と郡内第一の漁場たる間瀬の魚類は概ねこの地にて集散する。

吉田、松岡、野沖村古、本所、宮小路法華堂、下中野、西太田、鴻ノ巣の諸部落より成り、面積〇・六八方里、越後線と彌彦線の西吉田驛は何の東端にあり、三條、彌彦へはバスの便がある。



穀物検査所支所、區裁判所出張所、郵便局等の官衙、信用組合、織物組合その他の團體あり、小學校は二十三學級に編成され、青年學校を併設する。

産業の仲展は町農會が中心となつて行ひ、振興物凄きものがある。米産最も多く、これに次では小巾織物、足袋底、木竹製品、農具等の工産物である。社寺には村社諏訪神社、永蓮寺、觀音寺、善光寺、善興寺、本久寺、明隨寺、願生寺ほか二ヶ寺がある。

### 卷 町

本町は郡内第一の都邑で、西に西川が北流する。地勢平坦、鐵道並に縣道四通し、交通の要衝である。元郡役所の所在地で、町家揃比してゐる。

往昔、彌彦の庄と稱し、皇紀二千五十年頃、後小松天皇の朝、西山某なるもの當地を開發したと傳へ、慶長以前より上杉氏の領であつたが、元和四年堀丹波守の治所となり、正和四年より牧野侯長岡

藩の所領となり、爾來二百數十年を経て明治維新に及んだ。名勝鯉鴻は周圍二里、魚族群遊し、風景絶佳である。

町内には新川改修事務所、警察署、種雞場、穀物検査所出張所、稅務署、區裁判所出張所、郵便局等の官衙あり、また新潟貯蓄銀行、第四銀行各支店、産業組合、郡水産會、郡農會、郡酒造組合、郡産牛馬畜産組合、郡醬油醸造組合などがあり、養蠶業組合は、縣下屈指の優良組合との評がある。町農會をはじめ、産業關係諸團體の活動は極めて良好にして、蠶の製産が多い。

更に縣立卷中學校、同卷高女、卷三光圖書館のほか、尋常高等小學校、青年學校があり、理想的施設の下に教育は普及してゐる。

### 曾 根 町

鯉鴻の北にあたり、東部は低濕にして融雪季には田圃一面が水に掩はれる。西

に西川あり、縣道に沿ふて街巷をなしてゐる。越後線曾根驛が設置され、新潟、彌彦へバスが通ずる。町の北方約一里の地には卷町があり、車馬の往來頻繁を極めてゐる。

舊北陸驛路より東方約一里の地を占めし寒村なりしが、今は吉田、内野等の町町と共に發展物凄く、善光寺、曾根、桑山ほか三大字を合せ、面積〇・四一六方里、人口四千四百人である。

米、繭の産が多い。加ふるに附近村落は物産の豊富なところで、殊に毒消し賣りの本場といはれる角田や越前濱は程近いところであり、附近の赤塚は佐渡鰻の産地として名高い。

町内には村社曾根神社、一心寺、慶應寺、光善寺、金剛寺、明誓寺のほか、無格社一社がある。

### 燕 町

明治二十二年町村制の施行さるゝや、本町は單獨する町として維持經營して來

つたが、昭和二年十月一日、太田村を合併して、今日の燕町を形成するに至つたのである。

本町の起源は詳かでない。併し徳川時代には既に一小部落をなし、蒲原郡大槻



慶安二年改めて村上藩の領地に屬する。

の莊及び彌彦の莊に跨つて屬してゐた。田氏の領地

の領地は寛文七氏の領地に寶永元年本所領となり更に松平氏となり、享には間部氏となり、同五年内藤氏の領に復し、明治元年八月三條民政局の支配下となり、同二年更に村上藩に屬し、同四年七月廢藩置縣となるに及んで村上縣下に屬し、同

年十一月更に新潟縣の管轄となつたのである。

廣袤東西約一里半、南北約一里、面積は約一方里を占めてゐる。戸數は二千五百餘、人口約一萬五千餘、商工の旺んな地で、特に銅器、煙管、双鑑、洋食器の産地として知られてゐる。しかも銅器の特徴は實用的にして耐久力を有し、且つ價至廉であり、煙管の特徴は品質良好にして安價、双鑑は双金燒入の妙味と持續性に富み、價また廉であること、そして洋食器は價格低廉、品質優良にして製品は高尚雅致に富み、優に外國製品を凌駕するの特徴を以て天下に鳴つてゐる。官公署には燕警察署、燕郵便局、燕驛穀物検査出張所、燕役場等があり、神社は村社が二、無格社が八、寺院は四をかぞへる。

### 坂 井 輪 村

新潟市に接續し、西川の流末に位し、その西北は海濱の砂丘が連亘する。大字

### 赤 塚 村

郡の西部に位し、西は砂丘を負ふて角田村に境し、北は内野町に續き、東は曾



ての信濃川彎曲氾濫の跡にして低濕の地多く、佐瀉の沼湖がある。面積〇・九一方里にして西蒲原郡の總面積の丁度三分の一に當る。

古くは北陸道の一要驛であつた。傳によれば、往昔沼垂まで七里、信濃川の氾濫により、洲鴻島汀錯綜し、船にて渡航するを七里渡と云つたといふ。國道の西に沿ふ佐瀉は方十餘町、鴨や雁が多く集まると稱される。

蒲原平野の西隅に當り、土地一般に低平、東方二十五町にて西川あり、舟楫の便を持つ。また村内には越後鐵道越後赤塚驛あり、北陸街道には自動車があり、交通頗る便利である。土地肥沃なるため農産物に富み、米、西瓜、麥、大根等多く、特に有名なのは煙草の産で、年額四萬圓を越えるといふ。

### 角田村

日本海に臨み、幅員十數町、長さ二里半の細長い砂丘上に在り、南に角田山の

高峰を負ふ。越前濱、角田濱、四ツ郷濱より成り、面積〇・八八五方里だ。

角田山の北麓角田濱附近に起れる丘陵は、こゝより東北に伸びて、新瀉地方信濃川口に至るまで、海岸と平野地との分界をなしてゐる。北國太平記によれば、天正十三年、新瀉乗足城攻略の時、宮島將監が大將分となりて、その勢都合千五百餘騎、賀久陀濱より湊へ向つて進軍したとのことである。明治三十五年、現區域を以て一村となつた。嘗て納税成績優良の廉を以て撰奨されたことがある。

産物は米、麥、茶種等の農産物が主で水産物及びこれが加工品等もある。交通は縣道發達して便利である。村内名勝には日蓮の古蹟、浦濱、妙光寺等あり、寺院に願正寺、京住院、西遊寺、心行寺がある。

### 松野尾村

本村は角田村海岸丘陵の東方に蟠互し土地一般に低下し、佐瀉、及び松山に近

く一湖あり、他にも小沼澤が散在する。謂はゞ角田山の東北なる湖の周圍に開かれた村落である。松野尾、松山新田、新保、大原より成り、面積〇・三九二方里

越後鐵道會根驛へ一里餘、縣道に沿ひたる地にして、バスの便がよい。

松野尾産業組合は、本村に於ける産業經濟の中心機關にして、殊に農村金融の重點である。昭和三年四月の創立で、保證責任組織、組合精神の普及と相俟つて事業量は年々増加してゐる。産物は米と藪が主なものだ。

小學校は七學級編成、青年學校を併置し、各種施設の充實せるを見る。なほ村内には光照寺、仙城院、善正寺等の寺院がある。

### 峰岡村

角田山の海岸山脈の東麓口にあり、東方一帯は耕地拓け、西川、矢川の水が灌漑する。東には卷町が續く。

古くは峰山と云ひ三根山に作り、長岡

藩の分家たる牧野氏の陣屋があつた。明治二年、峰岡藩を稱したこともある。今は竹野町、前田、仁箇、布目、稻島、伏部、松郷屋ほか七大字を含み、面積一・二二六方里、大字竹ノ町は舊北陸道の驛路にして人家楡比する。

越後鐵道卷驛へ半里、縣道三方に通じ何れもバスの便がある。村内には産業組合、郵便局二などあり、米産が多い。

古墳指定史蹟たる葛浦塚は、前方後圓の墳にて、長さ四八メートル、當地方に類例なく、源三位賴政公の室葛浦御前の墓といはれる。なほ社寺には三根山神社一山寺、海見寺、金仙寺、景清寺、淨福寺、長福寺、萬福寺、遍照寺、淨善寺、隆崇寺、金仙寺等がある。

### 浦濱村

角田山の背後にあり、日本海に面し、所謂彌彦浦に屬し、景勝の地が多い。彌彦浦とは、彌彦山裏一帯約二里に亙る海濱にして、彌彦の山裾は直に波濤に嘯ま

れ、雄大壯麗の景趣は譬ふるに物なく、野積浦の石窟、夫婦釜の岩壁、帆の浦の絶壁、御泉水馬形石、太兵衛浦、太鼓石獅子ヶ鼻の奇岩怪石等、悉く凄壯美の極致である。

五ヶ濱、角海濱の二大字より成り、面積〇・三九九方里である。越後鐵道卷驛へ二里、縣道は峰岡村に通じ、卷驛までバスの便がある。

海岸線は野積浦より北へ間瀬浦、五箇濱を経て角田に至る凡そ五里、斷崖絶壁の岩鼻には隼小鷹も棲息し、西には佐渡ヶ島が見え、北方を見下ろせば閑靜な小溪あり、巖の洞門、寄せ來る女浪男浪には飛翔の千鳥、濱の向ふ大磯には磯馴れ松が繁つてゐる。

### 間瀬村

本村は野積浦の北に隣り、石瀬と多賀山の嶺を分ち、郡中切つての漁業地である。柏崎風土記には、間瀬村は海崖にして村民海獵或は船運送を業とすと出て居

り、北越太平記には間瀬を南雲(マゼ)に作つてゐる。

面積〇・六七九方里。越後鐵道卷驛へ二里半、村内を縣道の通過するあり、バスの便良好である。名勝には獅子ヶ鼻、洗足岩等ありて一日の清遊によく、近時杖を曳く者の數が多くなつた。

魚介類は本村重要物産にて、村民の大部分は漁に従ひ、間瀬とは海人居より轉訛したものとも云はれる。村内には郵便局、間瀬圖書館、佛教圖書館、間瀬信購販組合、漁業組合、海運寺、願龍寺、西蓮寺、惠光寺等がある。

### 岩室村

彌彦山の秀峰を南に負ひ、東北には蒲原平野展がり、耕田積々として相連る。西長島、岩室、橋本、尻引ほか十七大字より成り、面積一・二五六方里、越後鐵道卷驛へ一里半、縣道通じ、交通の便良好である。吉田町、國上村、間瀬村に挾



また平和な農村である。

産物の主なるものは米を筆頭に、大根馬鈴薯、甘藷、茄子、胡瓜等の農産物で僅かながら林産もあり、最近は一毛作地が頗る増加を見てゐる。

大字岩室には鹽類泉の岩室温泉あり、温度低く加熱を要すと雖も、弦歌さんざめく歓樂境として著名である。また大字比曾には彌彦の末社今宮がある。

村内には郵便局、圖書館、産業組合、松岳庵、淨日寺、淨惠寺、青龍寺、慶覺寺、種月寺などあり、村民は概して質實剛健、敬神崇祖の念に深い。

### 彌彦村

著名なる彌彦山東麓の扇状地を負つて立つ舊北陸道の一大村にして、彌彦神社の賽者の多きため旅館少なくない。實に本村は彌彦神社あるを以て著はれる。神社は天香山命を祀り、越後國一宮として國幣中社に列する。東鑑文治三年の條に「彌彦庄三位大納言家領」とあるは、即ち當地である。今、大字泉に彌彦庄司の

本村は古來彌彦神社の參拜者の往來のため所謂商業町、消費地として發展したるため、生産物の増額を圖るといふことには、あまり意を用ひなかつたので、一時産業疲弊の色が見えたが、昭和八年頃より二毛作の奨励、養鶏養兔の奨励、吠の増産、木竹工品の普及が行はれ、米、麥、繭の主産物の増加と相俟つて、産業大いに隆盛を加へ、嘗ての消費地は一轉生産地となつた。村内には社寺名勝が非常に多い。

### 國上村

本郡地藏堂町と三島郡寺泊町の中間に位し、彌彦山の南麓を占め、西方は國上山の山丘起伏し、東方は廣潤たる蒲原平野につゞいてゐる。

村の起源は古文書に徴すべきものないが、往古、彌彦神社の祭神と密接な關係があり、和銅年中、國上寺の創建された

頃には寺泊濱と稱して村落を成してゐた。彌彦庄の一部で、徳川時代には村上藩に屬し、明治維新後、同三十四年從來の國上村及び中島村を合併して一村となし今日に至つた。中島、國上、渡部、眞木山源八新田ほか十三部落より成り、面積は一・四四六方里である。

### 粟生津村

抑々國上寺は國上山の中腹にあり、幾多の支坊を有し、今なほ草創當時の面目を存する眞言宗の靈刹で、村名はこゝから起因してゐる。山麓には良寛禪師の庵室たりし有名な五合庵がある。

南北に長く、東方に屈折する村で、信濃川支流西川に沿ひ、土地平坦にして地味肥沃、且つ交通機關整備し、村の中央に越後鐵道粟生津驛を有し、附近に消費市場たる地藏堂、吉田、燕の三町があつて、農産物を消化し、地理的に恵まれた農村である。

昔時は彌彦庄に屬した。文祿年間、豪

族和田氏が蕪蕪地を拓き、植民を計り、

それより稍々村形をなしたといふ。その後、寛文年間、長岡藩に隸屬し、明治維新に及んで三條民政局に支配され、自治制發布後は自治の實績大いに擧り、殊に近年更生運動が完成し、農民精神を復興し、質實剛健なる氣風を培ひ、進んで隣保共同團結を堅くすることに成功してから、近郷に誇り得る理想郷となつた。

勤王家長谷川鐵之進、儒者鈴木順亭、和田天山、鈴木文臺等の諸氏は、皆本村の出身である。

### 米納津村

吉田町の東に續き、蒲原平野の低坦地にして、大通川の灌漑あり、水田よく拓けてゐる。雀森、佐渡山、西嶺新田、富永、富永十兵衛新田ほか四部落より成り面積〇・七三一方里を占め、大字富永に就いて、北越軍記に

天保八年六月十一日晝七ツ時に富永村の田中へ隕石降る、縦三尺七寸横二尺

七寸、高さ一尺、重量八貫七百匁云々と記されてゐる。越後線吉田驛へ半里、交通の便悪くない。

産物の主なるものは米、繭である。最近は農會及び産業組合等を利用して共同販賣をなし、産米改良運動も着々實果を收めつゝあり、その他種苗の改良、薬工品、養鶏、養兔、養豚、養鯉等もその成績は良好である。

村内寺院には安樂寺、教願寺、光福寺、西性寺、勝泉寺、頓了寺、本土寺、本徳寺、林應寺がある。

### 漆山村

鎧瀉の南方に在り、西に彌彦山を仰ぎ東に中之口川の流れを見る本村は、蒲原平野の西端に位する農業の地である。鎧瀉は方二十町、一方菱瀉とも稱し、川中島南部の悪水は當地附近にて鎧瀉に入るのである。古書に

鎧瀉は元來查原なりしに文祿以前洪水度々、三方の瀉流入して瀉となる、周

端に菰を生じ菱買多し、故に一名菱瀉とも云ふ、昔は蓮田多かりしと。と誌されてゐる。

村は漆山、馬堀以下十二部落を合して成り、面積一・〇一方里、越後線米納津へ一里、縣道通じ、交通へである。所謂越後米の産地で、農民の生活は、すべて米の上に立つてゐる。従つて増産計畫品質改良等も屢々叫ばれて來た。

村内寺院には永徳寺、久福寺、西福寺、宗覺寺、長善寺、源昌寺、遍照寺、長光寺等がある。

### 和納村

卷町の南に接續し、上和納、高橋、富岡、津雲ほか五大字より成り、郡の中央稍々南寄りに位し、上和納には和納驛あり、交通の良好である。

面積〇・五九三方里。蒲原平野の西端にして米作を第一とし、茶種、薬工品がこれに次ぐ。近年、産業發展のための諸施設よく整備徹底し、不況に荒された農



村更生に萬丈の氣焔を吐き、銃後の勞力問題も難なく解決されてゐる。

和納なる地名は、或る説によれば、古事記、垂仁帝の御宇に見ゆる「和那美之水門」とあるところなりと云ひ、尤もな理由である。

村内には和納郵便局、和納信用組合、村上天皇皇子桃井親王墓(傳説)、願善寺、大信寺、福成寺、廣海寺、楞嚴寺等あり、小學校は高等科を置き、十三學級編成、共同作業、體育獎勵、愛郷精神の徹底など見るべき施設が多い。

### 鎧郷村

本村は郡の稍々中央、卷町の北につづき、東は鎧湯に臨み、越後平野の沃地を占め、面積〇・八四二方里、人口約四千人を有する中級農村にして、道路、交通機關完備し、越後鐵道會根驛へ十町、縣道通じ、バスの便あり、西川による水路の運輸も完備し、氣候風土共に農業に適し、また灌漑の便もよく、農産には頗る

恵まれてゐる。牛馬の飼育獎勵、宅地利用の合理化、桑園の改良、更に家内工業の獎勵が行はれ、その實績見るべきものあり、特に最近は教育風俗に關しても改良せられつゝある。

大字押付なる押付八幡は、また鎧八幡とも稱され、鎧湯の名勝と共に、本村が他に誇示し得るものである。他に無格社一あり、寺院は應聲寺、淨照寺、念稱寺、本念寺、泉上寺、蓮照寺等があり、いづれも賽者の影を絶たない。

### 升湯村

會根町の北に隣り、一帯の水田にして水量豊富、濕田なるを免れない。升湯、兵右衛門新田、大湯村古新田、浦村新田、大關村古新田、升岡新田、貝柄新田、三角野新田、堀上新田、與兵衛新田等の部落より成り、面積〇・四六七方里、人口二千三百人である。大字升湯のほかは、何れも新田の名稱を附ける所より見ても開拓の近代なること分明である。

越後線會根驛へ半里、縣道南北に貫通してバスを通じ、交通の便良好である。明治二十二年自治制施行以來分合のことなく今に至れる一村にして、住民の多くは農業に従事し、耕作を以て生活としてゐる。従つて米は本村産物中の第一位を占め、年産額も相當である。

警察は卷署管内、郵便は會根局管内である。神社九、寺院光西寺ほか一を有し村民は信仰心に篤い。

### 中野小屋村

本村は十九箇の大字より成る。即ち中野小屋、明田、保古野木、前野外新田、大友、大湯、田湯、藤野木、小瀬、道河原、金卷新田、田島、下泉、會和新田、早湯、勸助郷屋、笠木、高山、横尾がそれだ。蒲原平野中、代表的な水村と稱すべき地にして、水田桑畑の間に徐々に發達せる小部落を多数含めたのである。面積は〇・九方里、人口四千二百人を有し、殆ど農業に従事し、米と繭とを主要産物

としてゐる。

越後線會根驛へ一里、縣道あり、バスが通つてゐる。交通至便である。

小瀬尋高(八學級)、笠木尋常(四學級)の二小學校あり、教育上の諸施設は兼ひ優秀な成績を擧げてゐる。なほ村内には郵便取扱所、産業組合があり、寺院には圓光寺、慶念寺、善寶寺、寶光院、願正寺、勝樂寺などがある。

### 黒埼村

當村は郡の北東端に在つて、新潟市へは、西南僅か數町を隔つてゐるに過ぎない。北方の一帯は坂井輪村と水陸相接し、東南方一帯は信濃川、中之口川を隔て、中蒲原郡に連なり、西方は坂井輪村、中野小屋村と相接し、西南は升湯村、味方村に隣接してゐる。

中之口川、信濃川沿岸の大字は、土地や、高いが、西するに従つて低窪となり池沼をなしてゐる。東西一里七町、南北二里十四町、面積一方里二七強を擁して

ゐる。戸數一千六百餘、人口約二萬、農を第一に、商、工の順により生業となしてゐる。

當村は明治三十四年、町村大分合の結果、當時の金卷村、鳥原村、黒鳥村、木場村、坂井村の五ヶ村を合併して一村となしたものである。當村は信濃川、中之口川の兩河の左岸に位してゐるところから、また地勢平坦低濕な關係等から、溝渠東西に走り、南北に通じて舟楫の利が極めて便である。殊に信濃川、中之口川には汽船の往復あり、下は新潟市より上は中蒲原郡白根町を経て燕町に至る。交通運輸、樞軸をなしてゐる。

黒崎村農會をはじめ部落農事實行組合、部落農區、水稻部落採種組合その他の團體が、何れも發刺たる活動をなし、産業方面に貢獻してゐる。

當村附近名勝の地としては、緒立八幡宮、鷲の木、櫻、逆竹、舊蹟、波切の御名號それに、燒酎、舊蹟などがぞへられる。

### 味方村

本村は白根町に近接し、味方、白根、吉江、吉田新田、山王、山王新田、大倉新田、居宿等の部落より成り、中之口川の堤防に倚り、面積〇・九四四方里、人口四千九百人である。

北城雜記によれば、味方村は村上領にて、三條陣屋の支配下と、此村は四近皆彌彦庄と稱するに、獨り大槻庄と稱す、

と記載される。村内に實盛と字する畑ありて地中より瓦器類を掘出すこと屢々なれども、その由來は詳かでない。また大字吉江には、上杉家の臣、中條氏の一門吉江家の舊墟を傳へられるものがある。寺院は圓性寺、高念寺、西源寺、常敬寺、照嚴寺、法順寺、圓德寺、願信寺、善了寺等がある。

また味方郷用排水改良事務所、味方郵便局、七種圖書館、味方圖書館、産業組合などがある。



四ツ合村

白根町と本郡白濱との中間に介在し、早通川の水量豊富なる河川縦横に通じ、且又所々に湛水池を有し、千餘町歩の水田に對する灌漑は充分である。

古くは四ツ郷屋と稱され、鏗湯の東北にあたる。横戸、山口新田、熊谷ほか十五部落を併せて成り、面積一方里、人家は概ね縣道筋または諸川の堤丘上に建てられる。越後線會根驛へ約一里、交通の便は悪くはない。

村には村立御成婚記念四ツ合圖書館、四ツ合信用組合、大正購買組合のほか各種團體の組織を見、いづれも活潑なる活動を展開して成績良好である。小學校では勤勞愛好の精神鼓吹につとめ、郷土の實情に立脚した各種施設大いに見るべきものがある。

なほ村内寺院には、嚴念寺、長徳寺、法護寺、善養寺、西八寺、西念寺などがある。

大原村

本村は、茨島、國見、今井、大會根、新飯田湯上新田、新飯田湯下新田、下大原、番屋、上大原等の部落より成り、面積〇・五三三万里、村内一般に低濕の地にして水田多く水を湛ふ。いはゆる湯端低濕地の南端に位置し、漆山村に隣接する。人口約二千五百人。

明治三十五年一月、共和村と湯前村とを合併し大原村と稱したので、村内水田五百數十町歩にのほり、米穀を以て重要物産となす。

縣道東西に通じ、白根町及び卷町へはバスの便がある。

村内には私立癸亥圖書館、産業組合、眞言宗長周寺、同行徳寺などあり、村民は概して、質實勤勉、社會奉公の念に甚だ篤い。

今次支那事變に對しても、一村一丸となつて克くその責務を果し、貯蓄の實行勤勞奉仕等、特に良成績である。

月潟村

本村は創始以來、實に八百年の歴史を閲してゐるが、併しこれが記録を明かにすることは出来ない。何人が創始したかを詳かにしてゐないが、中世以降、月潟村と稱したのである。

永祿年間のことか、信濃の國より阿部九左衛門といふものがこの地に移住し來つて、當時の荒蕪地を開墾したと傳へられてゐる。享保二年、村上領四萬石を高崎、村上の二藩に分つにあたり、本村外十四ヶ村を鈎寄組と稱した。

明治初年、廢藩置縣と共に新潟縣の管轄となり、同十二年の郡區改正に際し、本村十四ヶ村を川前組と稱して西蒲原郡に屬したのである。同二十二年町村制實施にあたり西萱場及び大別當村と合して秋津村と稱し、同三十九年四月一日、四通村、中合村とを併合して月潟村と改稱今日に至つてゐる。時に大橋養作氏を事務取扱者となし、同年八月會山志計雄氏

を初代村長に推し、續いて市島熊治、青柳良太郎氏を経て、會山毅八郎氏を現村長に仰いでゐる。

本村の戸數は六百餘戸、人口約四千人をかぞへ、米の外に梨、種煎餅、飴、笈笠、大別當鎌などを産し、何れも天下に噴々たる名聲を博してゐる。

本村は中之口川に瀕し、年々田畑の水害多く、生活の道が立ちがたいところから、同村の農角兵衛といふものがこれを憂ひ、子供に獅子舞をさして、農業の餘暇に諸國を廻り勸進せしめたが、これを越後獅子舞の、元祖とするといはれてゐる。

道上村

郡の中央、鏗湯の東南方に在り、蒲原平野の平坦地にして、道上、福島、河間三ツ門、打越、牧ヶ島の六大字を合して成る農村である。各部落は所々に點在し四時典型的な農村風景を現出する。面積〇・五九三万里、人口二千八百餘

松長村

蒲原平野中央部の農村にして、西方は大通川を挟んで米納津村と界し、長所、館野池、大嘉新、館野、松橋、長渡、眞木、羽黒、姥島の諸部落より成り、四邊は廣漠たる沃野である。明治二十二年町村制施行、同三十四年

小中川村

隣接加奈居村を合併して、面積〇・五三七方里となつた。彌彦線燕驛へ一里半、バスの便がある。産物として第一が米で他に農産物及び手工業的なものが僅少であるが、別に見るべきものはない。各戸に一本以上の柿の木のあることは本村の大特色である。

松長東尋常(三學級)、松西尋常高等(五學級)の二小學校と青年學校とは、成績よく、就學率も良好である。本村の社寺は無格社十五社、綠芳寺、專精寺、專徳寺、久昌寺がかぞへられる。

郡の東南端に位し、中之口川の堤防により中蒲原郡新飯田村と相對する。小古津新、又新、二階堂、勘新ほか十一部落より成り、面積は〇・六四二方里ある。古來米藪の生産と消長を共にせる農村にして、この二つが村内の最重要物産である。産業組合、村農會等では、常に米藪の増産と品質改善に努力を拂ひ、村民



また一致協力し、これが達成に努力しつ  
つある。彌彦線燕驛へは一里、バスの便  
がある。

教育機關の擴充は村有力者の多年の宿  
望で、小學校は勿論、在郷軍人分會、男  
女青年團、村教育會等に對する補助額は  
相當多額に上つてゐる。村民も概して教  
育に理解深い。

村内社寺は兒木神社、重遷寺、正定寺  
福泉寺、寶泉寺、萬福寺等である。

### 小吉村

中之口川の左岸に位し、中蒲原郡曾根  
村と相對す。往時はしばしば中之口川の  
氾濫に遭遇し、耕圃地は皆原野荒地と化  
せしも、村民の努力により、今日の美田  
を見るに至つた。

對岸に國道あり、白根町及び三條市、  
はバスの便がある。高野宮、長場、浦瀨  
新、東中、六分、門田、東船越、針ヶ會  
根等の部落を以て鳴り、面積〇・五〇四  
方里である。水田四百七十餘町歩、畑地

百餘町歩を有し、村民は概ね農耕の業に  
従ひ、米作が最も多い。養蠶組合、畜産  
組合の獎勵、低利資金の借替等、勸業施  
設よく整ひ、土木工事も近來頗る目覺ま  
しく、殊に銃後施設としての出征軍人遺  
家族慰問授護は完全である。

### 小池村

信濃川の北岸に位し、中之口川の分流  
する所である。村誌に

福應庄道金は萬年中間中之口の河口を  
疏通したる地とす、中之口は初め須頃  
村に分派したりしが、水駛走せざるを  
以て更にその西方なる道金の村内を穿  
ち通水せり、即ち今の中之口是也  
と見える。

面積約〇・五方里、生産物の主なるも  
のは米、麥、大小豆等の農産及び農具器  
械類で、稻扱、萬石、唐箕等は本村の特  
産である。越後線地藏堂驛、彌彦線燕驛

及び三條市へ一里乃至二里、いづれもバ  
スの便がある。

### 島上村

信濃川の幹流を前にし、川中島の頭首  
に當り、洪水の時、奔流の激突地にして  
明治二十九年の如き大水害の懼れありし  
が、治水工事完成して後は、憂患は全く  
一掃せられた。

柏崎風土記によれば、本村横田は信濃  
川堤防に多數の埋樋を設け、灌漑の水を  
引入れたことが出でる。明治四十四年  
町村合併の際、舊笈砂、熊麥、横田の三  
ヶ村を合同したもので、面積〇・七七方  
里を有す。

生産は殆ど農産に限られ、米、大根、

馬鈴薯、胡瓜、甘藷、漬菜等が多い。金  
融は産業組合が主となり、最近、貯蓄獎  
勵の結果、その成績良好である。なほ組  
合としては養鶏、園藝、副業各組合があ

## 南蒲原郡

**位置・地勢** 横に廣く、縦の短かい  
米の越後の眞中に位置した南蒲原郡は  
澎湃とした日本海を距る西方四里、東は  
福島縣南會津郡並に本縣北魚沼、東蒲原  
の二郡に連接し、西は千歳不測の信濃川  
と中之口川を隔て、西蒲原、三島の二郡  
につゞき、南は古志郡、北は中蒲原郡に  
境して、東西十四里、南北十二里、面積  
五十方里、人口十一萬七千六百人をかぞ  
へる。

河川には刈谷田川、國境粟ヶ岳の朽葉  
の下を潜つた五十嵐川の清流あり、信濃  
川は北に向つて郡の西端を流れ、その他  
中之口川、加茂川、下條川、猿橋川、五  
社川の諸川縦横に走つてゐる。

郡の東端部には守門、駒ヶ嶽、鞍掛、  
開見、丸倉、粟ヶ岳の聳ゆる山の波が、  
縁に高く、地勢自ら二分されて、山間部  
は植林畜産に適し、平坦部は所謂蒲原平  
野に屬してゐる。

**沿革** かうした南蒲原郡は古より  
越後に屬し蒲原郡の一端に編入されてゐ  
た。その開闢は遠く、垂仁天皇第八皇子  
五十日帯日子命が越君となり玉ひ、越後  
の國に下向し、初め魚沼地方から漸次本  
郡に來玉ひ、飯田に御住居を營んで、沼  
澤不毛の地を開墾し、庶民に耕耘の業を  
勸め給ひてより、田圃大いに拓けて沃野  
遠く連り、當時下沼と稱した不毛の地は  
變じて良田佳圃となり、總稱して下田と

呼ぶやうになつた。近年に至るまで五十  
嵐川沿岸一帯の地は下田郷と呼ばれた。  
和名抄郷名には青海、小伏、勇禮の三  
郷があるが、青海は今の加茂町、小伏は  
大西村、勇禮は井栗村附近一帯の總稱で  
あつた。莊園の制度を施行された時、大  
槻莊(三條市附近)、青海莊(加茂町邊)、  
大西莊(大面村邊)の各莊に分れた。

主政維新の後、明治十二年四月、郡區  
改正によつて蒲原郡より分裂して南蒲原  
郡となつた。

**區劃** 分裂獨立當時の町村數は三  
町二百六十八ヶ村を有したが、明治二十  
二年三月自治制の發布に基づいて町村を  
分合廢置し、四町五十九ヶ村となり、更  
に三十四年にその區域を改正して四町十  
八ヶ村としたが、その後三條町に市制が  
施行されたり、村が合併されたりして、  
現在は左の三町十四ヶ村である。

**町** 加茂、今、見附。  
**村** 井栗、大崎、下條、田上、大島、長  
澤、森町、鹿峠、本成寺、福島、大面



新潟、葛巻、中之島。

産業 郡内住民の過半数は農民にして、生産総額二千六百二十万圓の中九百五十萬圓は農産物で、別に工産の千四百八十萬圓を除けば、郡内第一の産業である。その他では蠶糸類四十萬圓、畜産類十八萬圓、林産九十萬圓、鑛産四十萬圓があり、水産は記するに足りない。農産の第一は米で、次が蔬菜、大豆、果實、麥の順である。また養蠶は副業中の首位にあり、下田郷一帶の地方には楮の産あり、坂井、中之島、福島方面は大麻の産地である。遠く文化年間より大麻は栽培され、文久年間より漸く隆盛となつたのである。

郡内養蠶の嚙矢は鹿峠村で、今より二百年前すでにこれを副業として飼育し自家用に供したといふ。その後安永年間には見附町で、天保年間には大崎村で行はれ、蠶糸業は漸時盛んになつた。農業もさることながら、南蒲原郡は工産地として有名だ。工産、特に織物地で

ある。殊に見附織物の名は天下に冠たるもので、安政の頃よりすでに結城木綿の産地として名高かつた。また加茂の羽二重、木綿織も産額が多い。

勝地古蹟 前は大川うしろは深山、石の唐櫃で出場がない、の俚話で有名な笠淵の三溪をはじめ、眞生ヶ池、八木ヶ鼻、五十嵐神社、青海神社、見付、柳橋今町の各古戦場、田上鑛泉、加法寺温泉矢田鑛泉、四十八地藏、十八阿彌陀、十三觀音札所、五十嵐城址、大面城址、月岡城址、護摩堂山城址、和田城址、見附城址、高城城址、池殿館跡などがある

### 加茂町

信濃川支流加茂川の兩岸に跨り、人家稠密にして、産業の盛況縣下有數の地と稱せられる。萬葉集に

天離る雖はあれど水鳥の鳴は善き里加茂山と名づけてあるも、其郷を圍める御山、賀毛河と人の渡るも其山の帯にせる川、然れこそ我皇神の宮柱太敷き立てれ、水鳥の鳴

は佳き郷、内日朝都おもほれ山の名川の名と嘆美しあるはこの地のことである。古くは青海と稱し、和名抄に、越後國蒲原郡青海郡とある地である。堀河天皇の寛治四年、青海郡内石河庄公田四十町を賀茂上下兩社に御供用として奉られ、次で賀茂兩社を延喜式内青海神社境内に奉祀した爲め、いつしか、加茂と改るに至つた。慶長三年新發田藩の所領となり、寛政元年幕府直領に移り、弘化四年桑長藩の預り地となつた。古來北陸街道に沿ふ名邑で、信越線開通後は、近郷物資の集散町となり、郡内第一の繁華地である。

由來機業の盛んな地で、加茂絹及び羽二重の産地として著聞し、近年は生絹及び巾織物を出す縣下人絹織物の先驅地である。また箆笥、建具、澁紙、白玉粉、瓦等、工場組織を以て製造し、以上のほかに綿結城、マンガン餅、うどん、マカロニーの産も尠なくない。官公衙學校並に諸團體には、警察署、縣輸出織物検査所支所、加茂木工作業所

縣穀物検査所出張所、區裁判所出張所、郵便、縣立加茂農林學校、青年學校教員養成所、加茂圖書館、養徳文庫、實業協會、第四銀行支店、越後輸出織物販購利組合、加茂信用組合、加茂織物同業組合郡酒造組合、普通水利組合、町農會等があり、名所舊蹟としては縣社青海神社、村社長瀬神社、長福寺古戰場、加茂次郎義綱墓、大旗峠、矢留杉、加茂新田大池その他がある。

### 今町

今、東西一里、南北一里十八町、面積九百十二町八反歩を有する本町は、幕府時代は新發田藩主溝口氏の領するところであつた。寛永の頃に至り、これより先き三島郡寺泊町に漂着して居住せる羽後國酒田町の漁民十數名が轉住し來り、今の橋場町の地に家居して開墾に従事したといひ傳へられてゐる。後地名の新田を上下に分ち、上新田下新田と稱したが、寛文の頃に至つて下新田を今町新田と改

稱したのである。

延寶六年坂井道を築いて大に交通に便し、三條方面への通路は字新町より刈谷田川に沿ひ、今の安田、丸山などを経たものであるとされてゐる。爾來幾度か變遷を重ねて今町新田は漸次發展して市街地となり、遂に農村部落たる上新田と分離したものといはれてゐる。

本町の戸數は一千二百、人口六千六百餘、農を最とし、商と工とに従事するもの多く、工産物の筆頭は毛筆で、年産約三十萬本、その他醤油、酒、人絹織物、燒酎、味噌等を産してゐる。

本町役場は町長一、助役一、収入役一、學務委員九、區長二四、書記六、雇二あつて、村行政が處理されてゐる。各種の團體としては在郷軍人分會、尙武會、戰友會、海軍協會、國防婦人會、分會後援會、婦人會、青年學校後援會、教育會、青年會、婦人會、處女會、愛國婦人會、社會事業助成會等が設けられ、その何れもが職分に對して忠實なる働きをなしてゐる

村社二、無格社九、寺院五あり、住民は質朴熱心、そして崇神敬神の念に篤いものが多し。

### 見附町

越後古代の地圖によると、本町は「三付」の文字を以て表示されてゐる。有史以前(即ち約三千年)すでに先住民族の有力な活動舞臺であつたことは、隣接の古志郡北谷村大字耳取に石器時代の遺蹟があり、また出雲神社の變形たる素盞鳴尊の大蛇退治の傳説や、本町觀音山で石器を拾つた人のあるなどによつて、それが立證される。

本町は平安朝時代には蒲原の勇禮郷と古志の久原郷とに屬し、鎌倉幕府時代には大面庄に屬してゐたやうである。そして南北朝時代には北軍の勢力範圍に於て、室町幕府時代には上杉氏の領有となり、戰國時代に入つては長尾爲景の領地となり、元和年間村上藩主堀丹後守直寄の所領となり、寛永年間二男丹後守直時



遺領を継ぎ、安田庄三萬石城主となり、その子丹波守(後ち丹後守)直吉に傳へた。爾來その子孫の村松藩主の領有に屬して明治に傳へ、同二十二年の町村制施行と共に見附町と改稱して現在に及んでゐる。

廣袤東西八・一軒、南北四・一軒、面積一九・五平方軒を有し、東南は長澤村に、東北は大面村に、北西は新湯村に、西は葛巻村に、それ〴〵連接し、西南は刈谷田川を境して古志郡北谷村、同上北谷村、同下鹽谷村に對してゐる。

本町の行政區數は五二、戸數二千九百戸、人口約一萬五百人、商業を營むものを主位に、工業、農業等に從事し、小學校の外に見附青年學校、町立高等女學校、町立高等實踐女學校、幼稚園、圖書館の設けがあり、神社一五(うち村社二)、寺院一二がある。

名所舊蹟には 明治天皇行在所、新田公園、觀音山の展望、城山城址、杉澤寺の櫻などがある。

### 井 栗 村

當村の起源については、しかとした正史の據るべきものはないが、今より一千餘年前、既に一の部落をなしてゐたと、いひ傳へられてゐる。

現在は井栗、塚野目、大宮新田、鶴田下谷地、西湯、北野新田、白山新田、須戸新田、柳場新田、柳川新田、三貫地新田の舊村を大字となして、一村をなしてゐる。戸數五百八十餘戸、人口四千二百餘人を有し、多くは農を生業となしてゐる。村社一、無格社一二、寺院は六。

官公署には井栗村役場、井栗郵便局、井栗駐在所があり、團體には井栗村農會、産業組合、在郷軍人分會、青年會、婦人會などの設けがある。

一村の産業方面に活躍すると同時に、非常時下に處して、銃後の護りを牽うしつゝある。

### 大 崎 村

郡の北西部、三條市の東南にあり、五十嵐川の東岸を占め、全村概ね耕圃山地相半し、東半は丘陵蜿蜒して山林原野となり、西北面は開けて越後平野に連り耕田穰々としてゐる。東大崎、西大崎、中新、籠場、三竹、下坂井、北入藏ほか二大字より成り、面積一・四八六方里、人口五千七百人である。

大崎は舊庄保の號名である。これは今三條八幡宮の金口(徑一尺二寸)に誌してあるの銘に、

奉納大崎保八幡宮御寶前文明三卯年顯主新保盛秀

竹林が多くて筍の産出あり、また竹材が容易に得られるところから、籠篋、竹行李、蠶籠などの製造行はれ、最近は藝術的な風俗人形、竹塗等が研究製作されてゐる。

本村はこれを大崎並に保内の二學區に分ち、學區毎に小學校を設置する。修養及び社會教育團體は活動活潑にして、在

郷軍人分會、教育會、男女青年團、婦人會等の緊密なる聯繫の下に、銃後の援護も先づ満點である。

麻布谷鑛泉場、下坂井鑛泉あり、共に消化器病、貧血症に特効がある。神社は中山神社をはじめ、八幡神社、神明社等十數社を有し、寺院には永明寺、西福寺寶藏寺他三ヶ寺がある。

### 下 條 村

郡の東部に位し、加茂町の西に連り、南に高館山聳え、地域東西に狭く、南北に伸び、その北端は信濃川に至る。全面積の三分の二は山地で、大字天神林のみは越後平野の平坦地を占める。

下條、天神林の二大字より成り、略風土記を按ずるに、  
加茂下條氏は越後新發田の一流にて、下三條三郎重繼を祖先とす、ついで上杉景勝の頃に下條駿河守忠親あり。と見える。村内西光寺には加茂次郎義綱の墓と傳ふるものがある。

納税成績の良好なことは、全國優良四十ヶ村の一に數へられ、二十年繼續優秀の表彰も受けてゐる。村内消防組は全部公設で、加茂署管内他に類を見ない。これを本村の二大特色とする。村民の政黨的色彩は多少見られるが、村政上に露骨にあらはれる程ではなく、一概に思想善良といひ得る。教育も順調に發達し、小學校は一校、冬季のみ分教場を設けて、兒童の安全と便を圖つてゐる。交通は信越線加茂驛へ數町にして便利である。

主要産物は米、麥、里芋、大根、馬鈴薯、茄子、蕪苔等の農産物が最も多く、これに次では杉、松、桐等の木材、副業には機業が行はれ、蕪細工品の製造並に養蠶も盛んである。

### 田 上 村

郡の最北端に位し、中蒲原郡矢代田村に隣接する。西方は信濃川に臨み、土地平坦にして、大字保明は加茂川の信濃川と合流する地點にあり、東方にある田上



増加し、品質優良を以て聞え、米に次では麥、大豆の栽培が多く、副業としては養蠶、養鶏、養豚が盛んである。また石材、瓦等も産す。

### 大島村

本村は郡の北端、信濃川の流域にあり地勢は大體平坦であるが、土地高低の差多く、水路また曲折せるため、從來排水の便が悪かつたが、近來は設備完成して耕地の開拓は全村に普及してゐる。信濃川と中之口川との中間岬角状の地にして須頃島とも呼び、文字通り川中島ともいふべき地で、村名もまたその地形より起つたものであらう。三條市の西北に當り下須頃、上須頃、井土卷、大島ほか三大字を含み、面積〇・七四四万平方里、凡て耕田桑地より成る一村である。

三條市及び燕町との中間にあり、いづれもバスの便を有し、交通状態は良好である。住民は殆ど農を以て立ち、主産物は米、麥、大小豆等にして、近年、園藝

作物も大いに發達を遂げ、副業としては養蠶、草鞋、二子繩製造等が比較的が多い。各種團體はいづれも見ると成績を擧げてゐる。

### 長澤村

當村は郡の東南に位置を占めてゐる。東は五十嵐川を隔て、鹿峠村と相對し、西に見附町、大面村、本成寺村あり、南は森町村と古志郡下鹽谷村に接し、北は大崎村に連つてゐる。

東西二里餘、南北一里餘、その總面積は約二平方里に達する。そして當村の地形は殆んど三角形で、東方五十嵐に沿ひ、南北西の三面は山岳起伏相連り、土地西より東に傾斜し、川岸より西方に向つて耕地、實地の平坦地もあるも、全面積の約五分の一に過ぎない。

縣道三條大江線は當村の東部を貫通し乗合自動車各地に通じて至便を極める。縣道村松見附線は東西に通じ、荻堀に於て交叉し、長澤村尾線は長澤より大面を

經て柄尾町に至る里道は縱横に各部落及び耕地間に通じ、東西の交通は自在である。鐵道彌彦長澤線は、大字荻堀まで通じ、人畜の交通、貨物の運輸頗る便、乗合自動車は森町村まで通じてゐる。

當村は元和元年以來、村松藩主の管領地だったが、明治二年二月新發田藩主の管領に移り、同三年三月廢藩置縣によつて新瀉縣に屬したものである。同二十二年四月町村制實施により笹岡、檜山、花關、中ノ原の六大字を笹岡村荻堀、原、桑切、笹卷、大澤、長澤、駒込、廣手、大平の九大字を長堀村、上大浦、馬場下大浦の三大字を大浦村高屋敷、瀧谷、島湯、福岡、高岡の五大字を高島村と稱し同三十四年十一月、以上の四ヶ村を合併して長澤村と稱し、現在に及んでゐる。戸數現在九百餘、人口五千五百餘、主として農を生業となしてゐる。小學校の外に青年學校あり、村社一、無格社二、寺院數六、各種團體には村農會、在郷軍人分會、男子青年團、女子青年團、婦人

會及び國防婦人會、養蠶實行組合、綿羊養豚、養狸、養兎等の各組合がある。

### 森町村

本村は東西十里、南北三里、面積約十三万平方里を擁し、長澤村、鹿峠村、古志郡上鹽谷村、福島縣南會津郡伊北村などに隣接してゐる。

本村は一千年以前に部落をなしてゐたと傳へられてゐるが、その沿革等は詳かでない。明治維新前は村松藩主堀氏の采邑であつた。廢藩置縣と共に新瀉縣の所轄となり、行政區劃を改めて大小區劃が布かれ、森町組と稱し、第十八大區七區となつた。同十二年大小區劃が廢されて郡區劃となり、戸長役場を一村或は二三ヶ村に置かれたが、同十七年八月その區域を擴張し、吉ヶ平以下の八ヶ村を合併し、牛野尾外七ヶ村戸長役場を牛野尾に、栗山以下の八ヶ村を合併し、北五百川外七ヶ村戸長役場を北五百川に置き、森町、田屋の二ヶ村は飯田村外七ヶ村戸

長役場に、棚外三ヶ村は笹岡村外十ヶ村戸長役場に屬した。

現在の森町村は吉ヶ平外二十一の大字から成り、戸數一千餘戸、人口五千八百餘人をおぼへ、殆んど農を以て生業となしてゐる。産物は米、木炭、木材、砥石などで、郵便局、營林署官舎、部長派出所、巡查駐在所、軍人分會、教育會、青年會、婦人會等の設備がある。

なほ本村の名勝地としては八木ヶ鼻、笠堀の橋、吉ヶ平の大池、雨生ヶ池、八木鑛泉などがある。

### 鹿峠村

五十嵐川の東岸に在りて長澤村と相對し、東南北の三面には青山を負ひ、地勢高燥である。

大字鹿峠はか十二部落より成り、面積二・七九四平方里。往昔、下内郷または五十郷と稱し、郡の東半部を占め、他と觸立した一區をなしてゐた地域の内、現在、東西二里、南北一里八町の廣袤を有

し、東北より西部にかけて駒ヶ嶽の連峰袴腰の山脈が連なり、河川は五十嵐川、鹿熊川の二川があるが、鹿熊川は夏期河水涸渇して舟運の杜絶することが往々である。

重要物産を擧げれば、米、大豆、甘藷、馬鈴薯、大根、青芋、漬菜等の農産物が主位で、副業としての養蠶、葡萄栽培も多く、林業として木炭、薪炭材、杉材、桐材あり、この他鮭、鱒、鮎等の水産物も擧げられ、養鶏、養豚も近年ますます旺んになつて來た。

### 本成寺村

當村は郡の西南部に位し、東は長澤村西は福島村、南は大面村に接し、北は三條市、大崎村に連つてゐる。

鐵道信越本線は、村の中央を南北に貫通し、西端には國道第九號線あり、東部山手に沿ひ縣道加茂見附線、中央平坦部には縣道三條見附線あり、運輸交通に極めて便利である。



當村の起源については、あまり詳細に知ることは出来ないが、明治初年大小區制の行はるゝや、第十七大區一小區に屬し、同二十二年町村制の實施に際し金子村、槻田村、本成村を構成し、同三十四年一月町村合併により右三村全區域を以て本成寺村を組織したのである。のち大正十三年の一月一日、三條町と境界變更の結果、大字西本成寺、四日町、曲淵、新保の一部を割いて三條町に編入し、現在、字數は十六ヶにして、村役場を大字片口地内に置く。

戸數を百七十餘戸、人口五千七百餘、農を主業となして生計を立てゝゐる。産業としては米を最なるものとし、養蠶、養鶏、養豚などが旺んでゐる。

### 福島村

郡の西北部に位し、東は三條市につゞき、西は坂井村及び今町に、南は大面村に、北は刈谷田川、信濃川を境して西蒲原郡に連つてゐる。全村越後平野の沃野

にして、古來米藪の生産地として三條領内の要地といはれ、灌溉頗るよく、恵まれたる農村である。三條驛へ一里半、バスの便ありて交通も便利である。行政區劃は新堀、東光寺、若宮新田、一ツ屋敷、渡前はか十五大字に分れ、面積一・四八四平方里を占め、人口は六千六百人である。主要産物は前記米藪のほか麥、大豆、果實、蔬菜類の農産物が擧げられ、織物、養蠶、その他副業工産物がこれに次ぐ。

諸團體には村農會、教育會、尙武會、在郷軍人分會、男女青年團、産業組合等あり、村内鎮座の神社は二十六社、寺院は六ヶ寺である。勤王家片桐省介は本村の出身である。

### 大面村

三條市の西南二里の地を占め、東半は丘陵性にして、西部は蒲原平野の耕地となり、水田相續。明治三十四年、従前の大瀧村及び帯織村を合併して成る一村

### 新瀧村

信越沿線の地にして、今町の東に隣する。大字小栗山、新瀧、指出、芝野、江向新田、片桐、梅田、下鳥等より成り、面積〇・五九一平方里にして人口約二千九百人をかぞへ、大字小栗山は本村東部にあり、丘陵を負ふてゐるが、その他の部落は越後平野の低平地にある。

帯織と見附町の中間に當り、信越線見附驛へ半里、縣道通過し、三條市及び見

附町へはバスが通ひ、交通の便頗る良好である。大字小栗山には當國第十七番の觀音堂あり、庶民の信仰が篤い。維新史料によれば、本村もまた戊辰戰當時、東西兩軍亂戰の地であつた。

産物は米、藪、石油を以て主たるものとし、村内には教明寺、淨恩寺、淨土寺、天徳寺、明仁寺、不動院等の寺院あり、また本村は勤王家として有名な大橋一藏を生んだ村である。

### 葛巻村

當村は舊幕時代には、永く村松藩主堀氏の所領だつたが、明治元年水原民政務の管轄となり、同二年また村松藩に隸し廢藩置縣後新潟縣に屬した。同二十二年町村制の實施と同時に葛巻、傍所、鹿熊、青木、山吉、連水、反田、北野、加坪川、福島、柳橋、市野坪の舊十二ヶ村が合併して葛巻村と改稱、今日に至つた。

東に見附町、西に刈谷田川を界して中之島村、南に古志郡新組村、北に今町及

び新瀧村に隣接してゐる。東西四・三六、南北四・九六、面積一二・二平方、戸數約五百、人口三千四百餘を擁する農村である。

### 中之島村

當村は郡の西南に位置し、外廓は河川にて圍まれてゐる。即ち東部は刈谷田川を隔て、今町、葛巻村に對し、西部は猿橋川を境して古志郡黒條村に面し、西部は信濃川を隔て、三島郡興枝町、大河津村、また北部は西蒲原郡島上村に相對する。従つて當村は地域頗る廣汎にわたつてゐるが、一の丘陵なく、南方より北方に向つて極めて平坦なる緩斜をなし、頗る農耕に便してゐる。

當村々落は外廓を廻る河川に沿つて配在する。即ち東部なる刈谷田川沿岸に存

する村落を俗稱小川通り、西南部の猿橋川沿岸の村落を上通り、また西北信濃川沿岸の村落を大川筋と稱する。そしてこれ等の村落を連結する還狀通路は多くは村道にして車間の通行に支障はない。

幹線道路として國道は長岡より大口、灰島、中之島を経て今町、三條に通じ、縣道は三條ある。その一は今町より中之島を経て當村中央部を横斷して中野に於て二線に分たれ、一は三島郡與板町に通じ、一は中條新田を経て西蒲原郡地藏堂町に至る。その二は三條より福島村を経て當村赤沼に至り、當村の北部を横斷して下沼を通じ、中條新田を経て中部横斷線と合して地藏堂町に至る。その三は長岡より押切驛を経て押切思川を通り、見附町に至つてゐるが、これは短距離に過ぎない。

また鐵道は當村南部に押切、中部には約半里の距離に見附驛があり、なほ信濃川、刈谷田川、猿橋川は何れも舟楫の便開け、村内外の交通極めて便利である。



# 東蒲原郡

## 位置地勢

本郡は、東は福島縣河沼郡、西は中蒲原、南蒲原の二郡に接し、南は福島縣大沼、南會津の二郡に隣り、北は北蒲原郡と境し、東北の一部が僅かに山形縣西置賜郡と交はる。而して全郡平地少なく、山嶽四方に連互して千山萬嶽波濤の如く起伏する。その主なる山嶽をあげれば

大日嶽	豊實村	二、一二三米
飯豊山	同	二、一〇五米
烏帽子山	同	一、五七二米
御神樂嶽	西川村	一、三八六米
蒜場山	日出谷村	一、三六三米

等あり、その他高陽山、笠倉山、鍋倉山、日本平山、魚止山、駒形山、筆塚山、太郎山、棒掛山などはいづれも千メートル以上の高山である。

而して郡内山嶽は主に火山岩にして山勢峻峻、山骨を露はし、特に阿賀川峡谷

の風光は警ふるものがない。

阿賀川は會津四郡の諸水を合せ來つて郡の中央を貫流すること十二里、郡内の諸水を受けて西北流して中蒲原、北蒲原二郡の境に入る。

郡内殆ど平地を見ない。

沿革 本郡は昔時小川莊と稱し、明治十二年行政區劃を定められるに當り、

一郡となつたもので、皇化に浴せる始めを詳かにせずとも、崇神天皇が四道將軍を派遣せられし時、大彥命が當地を巡察し、阿賀川に沿うて本郡を通過せられ御神樂嶽に登つて諸冊二神を奉祀されたのである。

古くは會津侯の領地で、會津より代官を津川に派してゐた。されば明治五年三月には若松縣(後福島縣となる)に屬したが、明治十三年五月、蒲原郡を分けて新潟區及び東西南北中の郡に分けた時五

に東蒲原郡と稱し、後、明治十九年五月より新潟縣の管下に移り、以て今日に至つた。津川町ほか十ヶ村に分れる。

町 津川

村 兩鹿瀨、日出谷、豊實、小川、上條

西川、東川、揚川、三川、下條

産業 郡の主産業は林業である。しかし産額からいへば工業が主である。即ち、

工産	九、九五七、〇〇四圓
林産	八四五、八一六圓
農産	七五七、二七〇圓

これに次で鑛産及び蠶絲類あり、總額は千二百萬圓を超える。

## 津川町

當地は往時小川莊と稱し、會津藩の采地であつた。天正十八年、蒲生氏郷の臣北川土佐が麒麟山狐辰城代となり、元和二年には津川代官所が置かれ、爾來引續き明治維新に及んだ。東西三十二町、南北二十五町、周圍四里十一町の面積を有

し人口約四千人である。

本郡第一の市邑地にして、町には警察署、郵便局、區裁判所出張所、小林區署等の官衙をはじめ、郡農會、郡蠶絲同業組合、郡木炭同業組合、郡畜産組合、その他郡の各種團體事務所が置かれ、且つ町の公共團體としては在郷軍人分會、男女青年團、教育會、婦人會、商業組合、漁業組合、實行組合、赤十字少年團等がある。産物は米を以て第一となし、次で魚類の收穫あり、木材(特に桐材)、蔬菜類、繭、木製品の産多く、附近村落から生産される物資は殆ど全部が當地に集りこゝで取引され、商業も隆盛である。金融機關としては第四銀行、新潟貯蓄銀行各支店、津川信用組合がある。

また縣立津川農林學校も當町にあり、商業青年學校、小學校と共に教育の充實が圖られてゐる。神社には郷社住吉神社、古四王神社鎮座し、遠近に信仰者多く、寺院には京都知恩院派の新善光寺ほか四ヶ寺がある。麒麟山、御小屋館跡、船番

所跡、阿賀野川等の名所、舊蹟はその名廣く人口に膾炙する。

## 兩鹿瀨村

東南北の三方は榛樹山を初め、五百米内外の峰巒連互し、西方のみ展けて津川町に接してゐる。村の中央を阿賀野川の溪流が蜿蜒蛇行して走り、鹿瀨、白鹿瀨の兩部落がその對岸をなす。

會津領の時、鹿瀨組九村と云つたのは今の兩鹿瀨、豊實、日出谷の三ヶ村を總稱したものである。温故拾要抄には「鎌倉の僧某、昔鹿瀨邑に方八町の地を錢五貫文にて買ひ、多寶寺を草創す、云々」の記事が見える。村内草倉銅山は會津新風土記に依れば、元文四年より銅を採り寛政二年吏員を置いてその事を司らしめ明治維新の際、これを民業に任せ私採を許したといふ。

東西一里、南北二里餘、面積一・八七二方里に及び、米、蕎麥、薪炭、蔬菜、苹果、鮭、鱒、鮎、馬匹を主要物産とし

磐越西線鹿瀨驛ありて交通の便は極めて良好である。

## 日出谷村

本村は往昔より日出谷と呼んだ地方で津川町より松坂峠及び崎嶇一里に渉る越戸峠を通過して東西三里強の地に位置する。廣袤東西二里四町、南北一里三十町にして六部落より成る。

遺文傳説によれば、文治五年佐原十郎左衛門藤連公が會津を賜はりしより始まり、天正十七年伊達家の領となり、翌十八年蒲生氏卿會津に封ぜられてこれに屬し、その後加藤式部少輔、保科宰相、松平若狭守等の支配を受けた。

日出谷驛を距る十八町の中村部落にある觀音堂は、本尊に秘佛聖觀音を安置し大同二年の創草、堂宇は間口三間奥行三間、飛騨匠の建築に係る。徳瀨部落に鎮座する白山神社の境内には姥櫻の大樹あり、目通り廻り一丈八尺、廣さ及び高さ各十五間、樹齡凡そ一千年を數へる。ま



た字宮野には長者の住居址あり、時々矢の根石、石器、土器が發掘される。

### 豊實村

本村は郡の東端に位してゐる。飯豊山を分水嶺とし、西北に面してゐるが、東は山形縣中津川村と福島縣一ノ木村とに境し、西は本郡小川村に、南は福島縣奥川村に、北は北蒲原郡赤谷村に隣り、西南は福島縣郡岡村、西北は本郡日出谷村に連つてゐる。

本村の創設年代は明かに知ることは出来ぬが、皇紀一千三百七年、孝徳天皇の大化三年、蝦夷防禦のため沼垂柵が設けられ、そして津川を東方防禦の分班とせられた當時から、一千三百七十年元明天皇の和銅三年蒲原郡に「五郷」を置かるゝに至るまでの約七八十年間に、本村の實川が上條村小出牧野、三川村細越、兩鹿瀬村向鹿瀬の部落と共に、郡内屈指の最古の部落として形成されたものであるといはれてゐる。

後鳥羽天皇の文治五年源頼朝が奥羽の菅原氏を征伐する時、會津に入りたる當時、戦功あつて佐原藩連を會津に封じたので、本村は會津藩に屬し、佐原十部義連の領有となつた。天正十一年蒲生秀郷が會津に封ぜらるゝに及んで、津川町に代官所を置き、寛永二十年保科正之の會津を領すると共に、本村も小川莊鹿瀬組としてこれが支配を受け、會津藩に統治せらるゝこととなつた。

當時の本村は菱湯村、船渡村、麥生野村、新渡村、馬取村、實川村の六ヶ村から成り、明治維新若松縣に屬し、支應を置かれたが、間もなく出張所に代つた。同八年菱形村と船渡村とが合して菱渡村となり、麥生野村と馬取村と新渡村とを合して麥馬渡村となつた。同九年菱渡村と麥馬渡村と合して豊田村となり、同年福島縣に轉屬して日出谷村、豊田村、實川村、鹿瀬村、向鹿瀬村の五ヶ村を以て日出谷村外四ヶ村戸長役場を日出谷村に置くことになつた。同十二年の郡區改正

と共に東蒲原郡と稱し、同十九年五月、新瀨縣に編入せられ、同二十二年町村制實施と共に組合村役場を解散し、豊田村と實川村とを合併して豊實村と改稱、今日に至つてゐる。

廣袤は東西一六、〇〇米、南北一三、〇九〇米で、面積は一四二・四〇方軒である。現在戸數は三百餘、人口は約二千農を業となしてゐる。

### 小川村

本村は郡の東南端に位し、津川町を距ること一里餘の地で、東西三里十六町、南北二里十三町の面積を有し、縣道若松線に沿ひ、十部落より成る。

舊藩時代には越後より會津城下及びその附近に鹽その他の物貨を運搬する唯一の要路に當つてゐた爲め、住民殆ど全部は荷馬を追つて生計を立て、來たが、明治維新後、鐵道の開通と共に鞍馬に依る運搬は衰へ、代つて農蠶業が隆盛を呈するに至つた。

されば現時當地の産物として一般に知られるものは、米、大豆、蕎麥、紫蘇、木材、木炭、薪、杉皮、栗、柿、百合、鐵器、馬匹等である。水田は百七十町歩を有し、米は縣の獎勵品種に統一されてゐる。また近時畜農業が旺んになり、馬、豚、兎等の飼育者は年々増加の傾向を辿つてゐる。

### 上條村

本村は西方に二倉山カタガリ山の高峰を受けて、その山脚に抱かれ、常浪川の急湍數條ありて溪谷をつくり、耕地に乏しく、村内概ね山林原野である。

往昔、上條谷とは常浪川の山谷一帯を總稱し、本村及び西川、東川の三村を含んでゐた。舊會津領の時は、上條組三十ヶ村に分れてゐた。今は兩郷、拂川、九島、小出の四大字より成り、津川町の南西一里餘にして、東西二里、南西一里餘面積二・三六二方里を占める。

盤越西線津川驛へ二里弱、山間なれば

交通は便利でない。住民の多くは農を本業とし、傍ら製炭、製紙を副業とし、現在は養蠶業も相當發達してゐる。

今養蠶業も相當發達してゐる。字兩郷に猪俣人の遺跡石祠があり、その東北部に五ヶ塚がある。平塚といふ。小字を設け、木像二體を安置し、優婆尊と稱へる。また九島地内には源頼政の臣渡邊唱丁七の住居したといふ城址があり城山と稱へる。大字拂川にある日光寺は延暦年中、傳教大師の開基といひ、瀑布巨杉、奇岩見るべきものあり、拂川の景勝として有名である。兩部の瀧は、一は高さ十丈、一は十五丈の二條の白布並び懸るを以て、別に夫婦瀧の稱あり、當國屈指の名瀑である。

### 西川村

南に御神樂を主峰とする會津國境の分水嶺あり、面積十四方里にして東西一里半、南北十里に及ぶ面積を有すと雖も、概ね原野山林にして、村内を縦貫する室谷川沿岸に僅かの平地點在し、部落も多

くこゝに聚る。

往昔、上條谷と稱したる山谷の一部にして、住民は専ら薪炭並に伐採の業に従つてゐるが、米、麥、大豆、粟、蕎麥等の農産物も尠ならず、室谷よりは若干の紫蘇を産し、品質良好なるを以て普通品よりは三四割方高價に賣却出来る名産である。

古來村内は道路險惡であつたが、逐年村道も開鑿され、津川西川線は大正十二年縣道として認定を見、室谷川や常浪川も利用されて交通運輸の便はよい。名所舊蹟には松坂新路の碑、御生害峰の洞窟、神谷室谷の穴居時代の遺跡などがある。

### 東川村

東南の二面は福島縣との分水嶺なる山脈に包圍され、村内到る處山岳重疊し、柴倉川の水源地をなす。部落は山間原野の間に點在し、大字三寶分は村の西北なる日山の背後にある。



三寶分、東山、三方、小手茂、七分、大倉等の部落を含み、面積七・三三三三方里の大村であるが、山村にして交通に恵まれず、磐越線津川驛までは約三里を要する。

所謂上條谷の一部を成すものにして、傳説に依れば、大字東山の山中に松橋殿なる貴人寓居せる事あり、また中山と云ふ地に高倉宮似王の遺跡と稱して數多の傍證を擧ぐる者があるが、未だ史家の定説を得ない。

村内には私立東川村青年圖書館、東川産業組合、東山土工森林組合、淨土宗地藏院、眞言宗井龍寺がある。

### 揚川村

津川町に近き農山村にして、明治十三年戸長役場制度が布かれた當時は、清川西村と共に津川町に組合役場を置いた。古くは小川莊下條組に屬し、舊六ヶ村を併せて成り、今の阿賀野川は元は揚川と呼んでゐたに因み揚川村と名づけた。東

西三里、南北二里餘。

往古は運送業を營むもの多く、大正二年磐越線の開通後は、農業、製炭、養蠶業が振興を見た。従つて米、木炭、木材薪材、石材、栗、紫蘇、柿、馬匹等は本村の主なる産物で、西の澤には亞鉛鑛、阿賀野川沿岸には石灰を出す。

また阿賀野川沿岸は、到るところ風景絶佳にして、岩石亂立し、本尊岩、恵比壽岩、屏風岩、袈裟掛岩等の奇岩あり、懸崖數百尺の岩石突起の間には、老松古杉が趣を添へ、また白米瀧と稱する烈水溪天正の頃まで小田切平六の住居したと傳へる要害山等の古蹟にも富む。また郷社八幡神社は延暦十二年の創建にして、源義經の筆に成るといふ願文が藏され、大字谷澤には龍耕寺あり、明應元年の創立に係り、古木鬱蒼としてその古きを偲ばしむるに足る。

### 三川村

阿賀野川上流の北岸に位し、北は飯豊

連峰の背嶺を以て北浦原郡と堺する。村内山丘連互し、山林原野多く、地勢概して高原性である。村の中央を新谷川が貫流し、その沿岸に僅かながら平地を見、諸部落はこゝに聚つてゐる。村民は概ね農蠶林業に従事する。

新發田、津川間の街道筋に當り、磐越西線白崎驛を有し、山間と雖も交通の便は悪くない。明治四十一年六月、舊綱木村を併せて現區域となり、面積八・八五二方里である。大字岩谷に哀溺鑑戒之碑あり、また平等寺もこの地である。平等寺境内には平維茂の墓及び老杉あり、杉は天然記念物に指定され、境内の藥師堂は特別保護建造物に指定されてゐる。大谷銀山のありし五十澤は、今、内川と改められた。大字綱木は會津風土記にも見える舊い部落である。

### 下條村

郡の西端に位し、東西三、南北五里餘、九部落より成り、阿賀野川は村を東

西に貫流し、縣道がこれに沿ひ、部落は更にこれを挟んで點在する。

住民は専ら農業及び山林業を主とし、米、麥、木炭、石材、亞鉛、螢石、杉皮、鐵器、蕎麥、大豆、山百合、紫蘇、柿、繭の産出が多い。養蠶は明治十年頃より發達し、一時郡内第一の盛昌を謳はれたが、今は稍々衰微の傾向にある。村内各所、殊に阿賀野川南岸一帯は美林として

知られ、林産物は郡内總額の約五分の一を占めてゐる。

五十島驛の西方に在る村社若松八幡神社は大鷲尊を祭神とし、他に村社三社大神社、同若松神社あり、いづれも古き歴史を有すと傳へられ、寺院は正壽寺、西照寺(僧呑龍の開基)あり、大字石間地内には天正の頃築いたといふ小田切彈正の館址がある。

へられ、寂寞荒涼の日本海に面して出雲崎一帯の海岸も、實は上代越後文化の生みの母胎であり、搖籃でもあつた。これは確かに三島郡の誇とすべきものであらう。石器時代の遺跡も所々に發掘される。元明天皇の和銅年間に初めて三島郡が置かれたが、今の三島郡は、當時古志郡の一部で、古志郡の文化の中心は出雲崎地方であつた。當時の三島郡は今の刈羽郡の地にあたる。

後醍醐天皇の皇子宗良親王が、出雲崎の地に滞在したひ、當地方の人が王事に奔走したことは有名である。

足利の頃は一定の領主なく、上杉謙信の時、その配下に屬した。豊臣氏より徳川氏に至つて、本郡は數藩の管下にあつたのみか、一村にして數藩に分屬するものさへあつた。即ち、高田藩、長岡藩、村上藩、與板藩、その他、桑名領、上の山領、淀領が入交り、その中に更に公領さへ加はつてゐた。

産業 本郡總生産額は年に約一千万

## 三島郡

**位置地勢** 三島郡は殆ど縣の中央に位し、地形南から長く斜に東北に延び、北は大河津分水を隔て、西蒲原郡と境し、東南は信濃川を隔て、南蒲原、古志の二郡に對し、南は北魚沼、西南は刈羽と接し、西北六里は日本海に臨み、遙か佐渡に相對する。面積三百五十五方軒餘ある。地勢概ね平坦で、平地は全面積の三分の二を占めるが、中央には刈羽八石山より發する小木城山脈が起伏し、また高く

はないが出雲崎から寺泊邊に連互する海岸山脈がある。このほか小木城山脈と並走する新城山脈や小木城山脈と海岸山脈をつなぐ分水山脈がある。その間に澁海、黒川、島崎の諸川は、それら山脈丘谷に發源し、南流して信濃川に、北流して新信濃川に入り、地形自ら北部、中部、南部の三に分れる。

**沿革** 大國主命が越後に來り、頸城居多の地から海路出雲崎へ來給ひしと傳



圓餘にのぼり、生産額の最も多いのは農産で總額の二分の一以上を占め、続いて工産があり、水産はその額あまり多くないが、他郡市に比して多い方で、最も少ないのは鑛産である。今、その産額を示せば、

農産	五、六二九、五一二圓
畜産	五二九、三〇五圓
林産	一三二、七九七圓
水産	三〇七、一〇三圓
工産	三二一、五四三圓
鑛産	三、〇一四、八七三圓
雑産	二二二、三七六圓

農産物のうちでも、米、麥、豆類、野菜等が最も多い。米作では大津津を第一に、寺泊、來迎寺、西越、日越等がこれに次ぐ。果樹の栽培はあまり振はないが柿、栗に稍々氣焔を吐いてゐる。

**交通** 本郡には國道は通つてゐないが、縣道は實に四十有一線に達し、垣として砥の如き道路は四通に達し、殆ど完

成してゐると云つてよい。これに伴ふ橋梁も漸次改設せられ、從來の木橋に代るに鐵筋コンクリートの近代式永久的のものとなり交通道路は實に恵まれてゐる。郡内を通過する鐵道は、國有に信越、越後、魚沼の三線、私設に長岡鐵道の一線がある。信越線は古志郡宮内驛より來り、信濃川を渡つて本郡に入り、來迎寺塚山を経て刈羽郡に去る。その距離僅か二十キロである。越後線も郡内の距離十五キロである。今後、新潟白新線、新潟新發田線の兩線完成の暁は、裏日本縦貫の幹線として、將來大いに期待すべきものがあらう。

千田村には飛行場ありて空の航空に便し、港灣は出雲崎と寺泊の二を有し、共にその入船数は新潟、直江津兩津に次ぐ成績である。

**遺跡** 神武天皇御東征の業成るや、直ちに天香語山命をこの地に御遺しになつたが、命は今の寺泊野積から彌彦、岩室の邊にかけて農耕漁鹽の業を教へ給う

た。上古文化の中心であつただけに、舊蹟傳説は他郡に比して非常に多い。また寺泊、出雲崎は佐渡へ渡る當時の大事の港であつた。しかも佐渡は流謫の地である。公卿も流されて來たし、名僧も流されて來た。それのみか上皇さへも御遷幸になられた。それに關する舊蹟、口碑の多いこともまた他の及ぶところでない。佐渡が詩の國、歌の國であるとせば、三島は舊蹟、傳説の里である。

### 關原町

本町は郡のや、南部に位置し、東西十三町、南北一里十六町、面積〇・五三八方里を有する人情溫和、醇厚にして勤儉の氣風あり、且つよく協力一致、政黨色を以て事を構へたことがない。東は日越村に隣り、西は黒川を隔て、日吉、宮本の兩村に對してゐる。南は西山の裾に沿つて深才村に連り、山澤丘早相半する、北は萬頃の田の彼方王寺川村及び日吉村に接し、一度郊外に行けば小

木の城跡青巒に摺んじて指呼に迫り、山脈のうねり絶えざる際涯、彌彦の靈峰が遙に霞んでゐる。

本町は興國中、枇杷島の領主宇佐美越中守孝忠の支配下にあつたが、正平年間宇佐美駿河守定行の領地となり、後ち上杉謙信、同景勝の所領となつた。蓋し「字笹川の郷、白鳥の莊、大積の堡」と稱したのは、この頃に始まつたと傳へられてゐる。

降つて慶長三年來は堀久太郎、松平上總介、酒井左衛門尉、松平伊豫守、松平越後守などの、支配を繼續したが、當時は一望荒涼の地に過ぎなかつた。寛文二年柏崎村枇杷島の人關矢清左衛門といふもの開發によつて、今日の町を生むの基因をなしたのである。天和元年松平越後守伊豫へ配流さるゝに及んで、貞享三年まで御藏入となり、この間天和三年津輕越中守の臣大導寺隼人をして本土一般を檢地せしめた。後ち稻葉丹後守等の所管となり、明治元年王政復古の際には越後

守の所轄にあり、同二年再度松平氏の領に復した。同四年柏崎縣の管轄となり、次で新潟縣に轉じ、昭和九年四月一日町制の施行を見るに至つたもので、戸數七百餘、人口三千六百餘を有し、その鬱勃たるの力は、着々として町格の完備にと邁進しつゝある。

### 脇野町

當町は脇野町、元崎、上岩井、中條、新保、大野、下河根川、瓜生、その他無氏戸の葛蒲新田、烏雲新田、瓜生市郎左衛門新田、瓜生權六新田などが合併から成り、町役場を大字脇野町に置く。

東に古志郡福戸村、下川西村、東北に黒川村、西北に西越村、大津村、南に日吉村、王寺川村がある。東西二十八町餘南北約五十四町、その面積〇・六八九方里を占めてゐる。戸數約七百、人口四千餘人で、約四百戸は農を本業となしてゐる。

當町の公署その他として圖書館、男子

### 與板町

新潟市を距ること十五里、信濃川の西岸に在つて水陸運輸の便に富み、本郡第一の市邑にして、北陸街道と長岡街道の交會地にあたり、全町の商況頗る活潑である。

寛永十一年、長岡城主牧野忠成の二男康成が一萬石の墾田を賜つてこゝに陳屋を置いたが、三世康重の時、元祿十五年信州小諸城へ轉封され、井伊氏これに代つた。その後井伊氏に變遷あり、寶永二年に至り、井伊氏の族直矩與板二萬石を賜はり、この地に陳屋を建てた。文化元



年、城主格に列し、陣屋を修めて城と稱し、以て明治維新に及んだが戊辰の役に東軍與板を攻めた時、五月下旬より争戦七十日に亘つたといふ。郡制時代には郡役所が置かれた。

町は與板、元與板の二大字より成り、長岡鐵道與板驛及び上與板驛あり、縣道四方に通じ、長岡市、見附町、地藏堂町等へバスの便がある。

面積〇・六五七方里。

神社には郷社都野神社、無格社一四、寺院は本願寺與板別院ほか十四ヶ寺がある。都野神社の祭神は、筑紫宗像姫で、相殿に息長足姫之大神、譽田別之大神を祀る。都野明神ともいはれ、大津の神社の謂で、代々藩主鎮護の神として祭られ郷民の崇敬を収めた。例祭は毎年八月十四、五、六の三日間で、境内末社に神明社、金比羅社、菅原社、稻荷社等が鎮座する。村内の妙法寺、三島城址は舊蹟として著聞する。

因に當地は古くは信濃川の水路定まら

ざるを以て、激流奔騰の入江であり、上下の船の休泊所であつた。依つて大津の莊與板町と記されたのがその初めである。

### 出雲崎町

郡の西端、日本海に面するところに在り、往昔より北陸街道の一要津として市街を形成した。現に柏崎新潟間の國道通過し、越後鐵道出雲崎驛あり、寺泊、刈羽郡石地町へバスの便がある。

近世、幕府の代官所を置いたところで諸郡散在の公領六萬石を支配した。戊辰役の時には、水戸藩の脱走兵がこゝに屯したけれども、官軍に敗られた。維新に至り、民政局が設けられ、後、柏崎縣より新潟縣管轄となり、明治三十四年町制を施行して今日に至つた。

尼瀬、住吉町、石井町、羽黒町、鳴瀧町、木折町、井鼻、勝見等の大字を含み面積〇・一七五方里である。町には出雲崎築港事務所、出雲崎警察署、長岡區裁判所出張所、出雲崎郵便局、尼瀬郵便局

井鼻郵便局、町立出雲崎圖書館、私立教化文庫などあり、第四、柏崎兩銀行の支店も存し、團體には出雲崎信用組合、雲之浦信用組合、三島郡水産會、出雲崎漁業組合などがある。

一代の奇僧傑僧としてその名聲を傳へられる僧良寛は、この地の出身である。町には寺院が多く、運行寺、圓正寺、圓明院、海圓寺、養泉寺、西方院ほか二十ヶ寺をかぞへる。明治天皇行在所、良寛堂、尼瀬油田は名所として知られ、尼瀬油田は本邦石油の發祥の地ともいふべきところである。

### 寺泊町

圓上山麓の西方海岸に在り、市街狹長にして帯を延べたる如く、後方に山陵を負ふ。附近一帯は縣下有數の漁業地として聞える。十數年前築港完成し、爾來船舶は一層幅濶するやうになつた。

佐渡呼べば佐渡も答へん夏の海と小波が詠んだ如く、寺泊は越佐連絡の

要津にして、また中越の門戸に當つて居り、佐渡ヶ島との間には海底電信が敷設されてゐる。寺泊、白岩、京ヶ入、本山辨才天、川崎ほか十九大字より成り、面積二・四三一方里、橋南谿の東遊記を見るに、

出雲崎より四里東北に寺泊と云ふ所あり此所も頗る繁華の地なり、此寺泊は佐渡へ第一に近き地にて十六里の海上なり、(中略)

昔爲兼大納言佐渡國配流の時、此寺泊の驛にて數日風を見合せて逗留し給ひける時、此里の遊女初君といふを相知りたりし、初君別を惜みて和歌を詠む。其和歌今に町の中程の南側に石碑に彫付て残り、碑面を見れば「物思ひ越路の末の白浪も立歸る日の有とこそきけ遊女初君」とあり

と記され、古來北陸道の要驛にして、順德上皇佐渡御遷幸の砌り宿らせ給へる遺跡あり、また日蓮上人の同じく佐渡配流の時の遺跡もある。その他名勝としては日蓮上人説法十七日に及びしといふ法福寺、鮎、尊茶の名産地たる圓上寺瀉、眞言宗の僧弘智法印の自ら乾涸したといふ

西生寺内の即身佛、石器時代の遺物たる二つ塚、アルカリ性食鹽泉の寺泊溫泉圓福寺内の佐藤忠信の墓等がある。また町には寺泊警察署、縣水産試験場長岡區裁判所出張所、寺泊郵便局、私立寺泊通俗圖書館、第六十九銀行支店、漁業組合がある。

### 片貝村

本村は郡の東南端にあり、西北方面は山岳連亘し、北から東南にかけて耕地が拓け、東方は信濃川の流れに沿ひ、交通の便は長岡鐵道が村内を通じて良好なるほか、縣道小千谷與板線が村の稍々西部を走り、また無數の里道が網の目のやうに擴がり、往來頻繁である。

戸數約千二百をかぞへ、人口は六千六百を超え。面積南北二里、東西一里。住民は殆ど農を以て生業とし、産業は一般に活氣あり、殊に村農會の目覺しき活動による裨益は頗る大きい。

村内に村役場あり、高梨尋常高等小學

校、片貝尋常小學校、片貝尋常高等小學校、片貝青年學校等の教育機關を始め、村農會、實業組合、産業組合、郵便局、衛生組合、女工保護會、消防組合、在郷軍人分會、男女青年團、婦人會が置かれて、また指定村社一を有する。

大字片貝は、明治維新前は松平肥後守の所領であつたが、維新の改革により小千谷民政局支配となつた。また大字高梨はもと牧野備前守の所領たりしところでは一時公領にも屬した。大字山屋は夙に片貝に所屬してゐた。明治二十二年、以上三ヶ村を合して自治制を布き、今日の片貝村をつくつたのである。

### 來迎寺村

信濃川と澁海川の合流點に位し、地勢概して平坦なる沃野である。地形よりすれば北魚沼郡に屬すべき地である。近時信越本線、長岡鐵道及び魚沼線の交會地にあたり、鐵道交通の要路にして、小千谷へはバスも通じてゐる。村名の由來は



佛教に關係あるやうに思はれるが、その詳細は不明である。宮川外新田、浦、道半、突切島、中澤ほか九大字より成り面積一・〇二五方里を占める。官公署及び諸團體には澁海川改修事務所、縣穀物検査所出張所、浦村、來迎寺兩郵便局、村役場、村農會、在郷軍人分會、男女青年團、消防組、漁業組合、神谷、來迎寺、來迎寺各産業組合等があり、社寺は村社八幡宮、無格社一、安淨寺、慈敬寺、慈光寺、地藏寺、長永寺、朝日寺、本法寺を有す。小學校は來迎寺、神谷各尋高、浦、中野島各尋常四校ある。

### 塚山村

郡の南端にあり、東南西の三方は山嶽を以て北魚沼郡及び刈羽郡と堺する。澁海川は本村を貫通し、高低少なからざるも沿川には耕地あり、田百七十町歩、畑百五十六町歩を有す。地勢上は古來北魚沼郡に屬すべき地なりと稱されるも、諸種の關係より三島郡に屬し、西谷、東谷

塚野山の三大字より成り、面積〇・八七方里である。

往昔、太田の堡に屬し、多少の變革はあつたが、その區域に變化はない。町村制實施以來今日まで分合なき固有の一村で、また從來納税の成績及び、産業上に關し表彰されしこと再三に及ぶ郡内の優良村である。

米及び繭の産が多く、村民の多くはこれに生活の基礎を置き、特産として百合の栽培が盛大である。また塚山製糸工場があつて、製糸も本村主要産物の一に數へられる。

信越線の沿線で、村内には塚山驛がある。縣道伏線及び原停車場線も村内を走り、自動車の便がある。

村には縣穀物検査所出張所をはじめ、塚山郵便局、塚山信用組合等あり、社寺は村社八幡神社、眞言宗の寶光院などが擧げられる。

### 岩塚村

郡の南部に位し、東は來迎寺村、西は大積村及び刈羽郡北條村、南は塚山村並に片貝村、北は深才村等に隣接し、西方には榊湯山脈あり、中央以東は平坦にして蒲原平野に通じ、澁海川は南より北に向つて村の中央を貫流する。

往昔、當地は太田莊と云ひ、徳川時代に至るまで部落一定しなかつたが、その主なる領主を挙げれば、寛永三年松平越後守領に、天和元年津輕越中守領に、貞享三年稻葉丹後守領に移り、元文六年には公領となり、嘉永元年牧野備中守の支配下に入つた。明治三十四年飯塚と岩田村を併せて岩塚村と稱した。

生産は農産物が最も多く、米、豆類、蔬菜類に次では木製品、蠶糸、清酒等がある。なほ近頃は村農會が指導の中心となり綿羊の飼育が奨励され、その實績すで見ると羊の飼育が、今後は羊毛加工品に進展せんとしてゐる。

史蹟には榊形城址がある。これは上杉氏の臣甘糟近江守景持の居城にして、今

なほ本丸、二の丸の殘礎がある。勝平城址は延仁年間當郡の守護職飯沼遠江守頼泰の築いたもので、爾來代々の居城となり、その後幾多の兵亂を經、太田兵衛は上岩田五疋屋に住し、勝平を以てその奥城と定めた。また澁海川は昔は四海川といひ、

おぼつかなしうみの川のかはる瀬を  
いかなる人の渡りそめけん  
と古歌にもうたはれた名所である。

### 深才村

郡の南部、澁海川左岸に位し、西部は山地をなし、岩積、大積、宮本の諸村に續き、南は澁海川を隔て、來迎寺村に、北は關原、日越の二村に、東北は古志郡上川西村に接し、大字本大島は村の北端にあり、信濃川を挟んで長岡市と相對する。上富岡、深澤、親澤、福田ほか七大字を有し、東西約三十二町、南北凡そ三里、面積一・一九八方里あり、西に山を負ひ、東に平地を持つ。

官公署及び諸團體には村役場(上富岡)

本大島郵便局、在郷軍人分會、男女青年團、村農會、信用組合、漁業組合等があり、寺院は阿彌陀寺、圓覺寺、圓超寺、願誓寺、正林寺ほか四ヶ寺を數へる。

米を村内第一の産物とし、これに次で繭の生産が頗る多い。長岡鐵道沿線にして、村内に上富岡、深澤、才津、西長岡の四驛を置き、長岡市に接し交通の便良好である。

### 日越村

深才村の北に接し、榊形山は本村南隅に於て山勢盡き、全村膏沃なる越後平野中に位し、水田五百六十町歩、畑百八十歩を有し、北才津、福山、喜多、石動富安ほか十六字より成り、面積〇・六二二方里である。

往昔の所謂才津の地にして、深才村と同じく沖積津野の一部をなす。長岡鐵道は村の南を走つて日越驛及び上除驛を置き、長岡市へはバスが通じる。

### 王寺川村

産物は米を筆頭に、蔬菜、馬鈴薯、繭等が主要なものである。金融は日越信販購利組合及び日越信用組合を重要機關とし、農家によく利用されてゐる。

小學校は一枚、尋常科十二學級、高等科二學級に分れ、出席歩合九八%を示し成績良好である。また村立圖書館が設置され、所蔵部數千三百冊、青年男女の讀書慾を満たすに充分である。

明治二十二年、寺寶、王番田、河根川能上古新田の四部落を以て一村をなし、自治制を施行した。黒川は本村の西南方にて二川に分れ、王子川を東方に流せども、兩者は脇野町の東方に於て再會し、稍々北流して信濃川に入る。字王番田はまた大番に作り、昔、妙法院二品法親王の移り住まはせ給へる地なりといふ。字寺寶は治風に作り、親王の供奉治部卿と云へる人の名より起つたものである。

村は日越川の西につらなり、面積僅か



○一八九方里の平坦なる小農村にして長岡鐵道王子川驛あり、縣道は南北に通じ、交通至便である。

村内には村立王寺川圖書館、王寺川産業組合あり、寺院は究竟寺、淨願寺の二寺有し、何れも眞宗である。また儒者青柳剛富は知つてゐても、それが本村出身なることを知る人は少い。

### 宮本村

郡の南偏り、關原町の西につゞき、大積村の北に並び、西に山嶽ありて一部は刈羽郡との境をなし、北は日吉村に連つてゐる。宮本、堀之内、東方の三大字より成り、面積〇・八三九方にして、人口約二千六百人をかぞへる。

古來與板及び長岡より柏崎へ通ずる驛道に當るを以て、その名知られ、近時關原及び大積間のバスも運轉され、長岡鐵道關原驛へ一里、村勢の發展頗に顯著なるものがある。大字東方は大積堡の東部の義なりといふ。村内を黒川貫流し、民

家はその流域に聚落する。

水田二百四十區町歩、畑地百六十町歩の耕地あり、米及び藪は本村主要物産の首位を占める。村には村立宮本圖書館、宮本産業組合あり、寺院には眞宗長福寺同長明寺、眞言宗不動院、同法明院などがある。

### 大積村

本村は四圍に山嶽をめぐらし、西南方なる刈羽郡分水界より發する水は宮本川となつて村内を流れる。大、三町田、善田、三島谷、水梨新田、灰下、千本平、田代等の諸部落より成り、面積一・四四三方里にして、有租地は千三百九十町歩あり、耕地は水田二百六十六町歩餘、畑地百四十五町歩に分れる。また山林は約九百六十町歩に上る。戸數四百四十餘、人口千九百人である。

舊大積保の地にして、近時、長岡鐵道を本村より柏崎へ延長する計畫ありしが本村までバス開通のため、一應取止めと

なつた。長岡鐵道關原驛へは縣道により凡そ一里半、バスが通ふ。

村民は養蠶業を主とし、米及び藪の産が多い。また村内には大積郵便局、大積産業組合あり、寺院には安養寺、光照寺大日寺を有す。

### 日吉村

本村は明治十八年下村新科、下村古科を合して鳥越とし、更に同二十二年町村制實施に際し鳥越、七日市、雲出の三字を合併して日吉村と改稱、現在に至つたもので、村役場を大字鳥越に置く。

本村は郡の中央に位し、西部一帯は山脈を以て圍繞し、東部は沃野よく開け、黒川その間を貫流する。北は脇野町、大積の兩村に連り、西北は山脈を隔て、西越村及び刈羽郡内郷村に接し、西南は宮本村、東は王寺川、東南は關原町に隣する。縣道與板片貝線に沿うて面積一方里餘にて、一千十二町餘、縣廳より西南七〇・七軒のところにある。

### 大津村

本村西部一帯の山脈は謂ゆる中央油帯に屬し、明治の初年頃より手掘を以て採掘を試みたるもの十數坑に及んだが、後ち米石油株式會社機械鑿井を試みてからは、或は藏王、日本、寶田、東西などの諸會社競つて掘鑿を試み、共に相當の出油あり、事業に時に消長はあつたけれども、出油は今に持續してゐる。

戸數五百餘戸、人口三千五百餘、全村の殆んどが農業に従事してゐる。なほ本村の村訓に

- 一、至誠村是を尊奉し忠實勤勞の村民たるを期すべし
- 二、自治自營を信條とし勤儉力行よく經濟建設に忠實なる村民たるを期すべし
- 三、協同昇進して平和と秩序とを尊重する村民たるを期すべし
- 四、減私奉公以て郷土を美化し理想の大日吉村建設のため貢獻する餘力ある村民たるを期すべし

を大書し、學村この理想に向つて奮進、具現化を期してゐる。

笠拔連峰の東麓に位し、丘陵起伏して高低あれど、平地その間に點在し、部落は主に平野に聚つてゐる。北は與板町につゞき、西方山中には温泉が涌出する。

氣比宮、蓮花寺、中永、上條、逆谷、藤川、宮澤、横原、山澤等の部落を含み、面積一・二九二方里にして、人口約二千八百人である。

大津は舊庄名にして、本村現區域はその一部である。

主要産物には米、藪、鶏卵、兎、木炭藪等あり、特に木炭は年産十五萬貫の多きに達してゐる。村農會では木炭のより一層の増産と茸の養殖に努力してゐる、産業組合は大津、大正の二組合あり、利用率多く、農業倉庫を兼營し、縣下優秀組合の一である。

小學校は大都尋高（六學級）、第一大津尋常（六學級）の二校あり、青年學校の設備もよく、昭和五年、成績良好なるた

め縣知事から表彰された。また私立蓮峰圖書館がある。

神社は村社氣比神社ほか無格社一、寺院は寛益寺、稱念寺、長樂寺、法華寺等あり、寛益寺は大字逆谷にあり當地方切つての名刹である。

### 黒川村

近世、吉河庄と呼ばれたところで、與板町の東南信濃川沿岸の農村にして、中田、南中、古津、葛都、成澤、古川新田の六大字より成り、西に黒川の小流あり村名はこゝに起因する。

面積〇・三一二方里、有租地三百三十三町歩餘あり、耕地は水田二百七十餘町歩、畑地約四十町歩にして、その他宅地十四町歩、原野六町歩があり、山林は一町歩に満たない。戸數百八十五、人口千百をかぞへ、住民の多くは農を以て生業となし、米は本村第一の重要産物にして年十萬圓を突破する。黒川産業組合は、近時その活動が活潑である。



與板町へ一里弱、バスの便あり、バスはまた長岡市へも通ずる。眞宗照覺寺は古い淨刹である。黒川小學校は五學級編成され、高等科を置く。

## 大河津村

郡の西部、信濃川の屈折する地にあたり、西川の一流はこゝより分れる。明治四十二年、東洋一の分水工事を起して以來、下流の水害は免れた。孰ヶ會根、馬越、岩方、仁ヶ村、外新田、田尻、町輕井ほか二十大字より成り、面積一・七三六方里を有す。

信濃川の氾濫を防ぐため、大河津に分水路を設けんとするの議は、明治三年以來の懸案にて、その間暴動起りしが、漸く明治四十二年に於て着手し、爾來十七ヶ年の歳月と、二千五百萬圓の工費とを費やし、大正十五年大河津より寺泊に向つて二里半の東洋一の新河路開鑿工事を完成した。この工事は越後の産業文化に大なる轉機を與へた。

長岡鐵道岩方町、輕井の二驛及び越後鐵道桐原驛、同大河津驛が置かれ、大河津驛は兩鐵道線の接續點をなす。寺泊町及び地藏堂町へはバスが通じ、交通の便良好である。

本村農家の經濟更生の第一歩は、肥料の自給自足による肥料代金節約を以て始められ、増産計畫の實施されてゐる農産物は米、麥、豆類にして、農家副業としては豚、兎、鶏の飼育が盛んである。各種産業はその種別により各々組合を設け消費と販賣の統制をとつてゐる。

小學校は五社、山ノ脇、五千石の三校あり、各校に青年學校を併設し、前二者には高等科が置かれる。教育費は各校按分式に分配せられ、精神統一、教育の向上、村内の融和を計る目的を以て學區制は廢されてゐる。更に女工保護組合、男女青年團、婦人會は各優秀なる指導者ありて資質の向上が圖られてゐる。

## 桐島村

社寺には村社宇奈具志神社、永念寺、妙德寺、妙滿寺、勝宗寺、正源寺、淨善寺、繁慶寺、法養寺、隆泉寺あり隆泉寺境内に僧良寛の墓あり、奇僧として知られ、天保年間、六十餘歳にて歿した。

## 島田村

桐島村の南に接し、西は山地にして日本海に面し、東方は丘陵連亘して與板町につらなる。中部には平地あり、島崎川が貫流する。

舊幕時代小島谷千石の地にして、稻葉氏の采邑であつた。戊辰の役に五月中旬より七月末頃まで兩軍轉戦の地である。大字村田の妙法寺は日蓮宗の名刹と傳へられる。その他寺院には安全坊、蓮念寺、金藏坊、西福寺、淨元寺、乘光寺、治曆寺、信盛坊、本行寺、大乘坊、泉藏坊、大榮寺、大光寺などがある。

梅田、小島谷、阿彌陀瀬、若野浦、下富岡、曲田ほか十部落より成り、面積は一・三一五方里、越後鐵道に沿ひ、小島

谷、妙法寺の二驛を置く。

農業は村農會が中心となつて村内を六部落農區に分ち、各區毎に採種圃を設置し、また堆肥獎勵には指導員の巡回を行ひ好成绩を擧げてゐる。現に副業としては養鶏、養豚、養蠶等の組合が組織せられ、その販賣は各組合が完全なる統制をとつて行つてゐる。農閑期を利用しての竹細工、藁製品、蔬菜栽培等が獎勵されてゐる。なほ島田産業組合は古き歴史と充實せる内容とを持つ點で、郡下でも第一位を占めてゐる。

明治三十四年に本村ほか二ヶ村が合併されし時、一村一校主義により島田尋高學校が設立され、昭和六年校舎を増築、現在十二學級に分れ、理想的郷土教育が施されてゐる。また青年學校は補習學校と稱してゐた時代、昭和九年、成績良好の故を以て縣知事より表彰された。

## 西越村

郡の西邊に位し、村内は丘陵山崗連亘

大河津村と丘陵を以て背後を接し、大字島崎の西に僅かの山地あれど、中央を島崎川が貫流し、土地概して平坦にして島崎川筋の大村として知られる。越後線の兩側を占め、明治三十四年五月、隣村を合併して村制が施行された。大字島崎は稍々市驛の狀をなす。

面積〇・六四方里。

農業は村農會が中心となり、十八部落の農區の水稻競作會、苗代品評會等を毎年行ひ、産米の増收を圖り、また種兎を無償配附して養兎を獎勵し、最近は更に養鶏に力が注がれてゐる。紫雲英、菜種、裸麥等の裏作は成績よく、副業としては蕪工品が多い。各部落の物資の融通は、月六回宛島崎部落に市場を開き、更に各區長は部落民の需要品目等を特に聴取して需要供給の圓滑を圖つてゐる。

教育は古くから一村一校主義を以て當り、分散的に設置されてゐるものよりも内容の充實を圖ることが出来て好成绩を擧げてゐる。

して刈羽郡との分水界をなし、島崎川及び別山川の水源地をなす。柿木、高畑、馬草、乙茂、藤巻、神條、吉川ほか二十七大字を含み、面積二〇・八二二方里の大村にして、出雲崎町に接し、越後鐵道による交通は便利である。

西越は舊庄名にして、古志郡の西邊なるよりこの名は由來した。村内社寺には無格社一社、圓德寺、延命寺、教念寺、多聞寺、正應寺ほか十二寺がある。

産業の概略を見るに、養鶏、養豚、養蠶は甚だ盛んにして、これが販賣は村農會及び産業組合が其勞を取り、就中、養鶏は本産業の重要地位を占める。更に製炭、苗木の栽培、養蠶も尠ならず、竹細工、漬物、堆肥は農會が中心となり各部落農區が競争的に努力しゐる。産業組合では果實、筵、繩、蕪工品の共同販賣に力を注ぎ一般によく利用せられ、業績頗る顯著である。

小學校は從來三校ありしが、先年これを二校とし、共に高等科を置き、西越校



は七學級、上西越校は十四學級に編成される。現時、一村一校主義が唱へられて

## 古志郡

三島郡の東信濃川の右岸にして、北魚沼郡の北である。南蒲原との境界は田野相接するところにある。

今の古志郡は古の古志郡の東部にて、その全域ではない。和名抄に五郷に分れてゐるが、今略推すべきは大家の一郷に過ぎない。大家は蓋し出雲崎に當り、海濱に面する。

按ずるに高志國、越後とて上代より名高きは、北陸出羽までの總號であるが、本來はこの古志郡の地を根として、遠く擴布したもの、やうである。國郡制置の際に、古志郡の名を立てられたのは、その根本を明示したに外ならない。國造本紀に

高志國造、志賀高穴穗朝御世、阿閉臣祖、屋主男心命三世孫、市入命定賜國造

るが、村内區域の大なる地理との關係により未だ實現を見ない。

とある高志國は即ちこの根本の地にあたる。延喜式本郡に伊奈具志神社と云ふは正しくこの國造の祖廟である。然るにこの祖廟の伊奈具志社も今は亡び、總じてこれらの古傳も土俗間に微見すべきもなく、僅かに妙見驛三宅社微ありて猶大彦命の裔孫三宅人の跡を傳ふるのみ。

北より東は南蒲原郡、南は北魚沼郡、西は三島郡に接する。地勢は、郡の中央を南北に走る鋸山一帯の山峰によつて郡を二分される。東は刈谷田川の上流なる柄尾谷で、西は信濃川の沿岸である。

郡内各所に油井あり、總稱して東山油田といひ、原油はこれを鐵管で長岡市に集め、柏崎製油所に送られる。信越線は郡の西部を通り上越線も本郡で分岐する。郡内柄尾町ほか二十八ヶ町村を含み、

人口九萬二千に近い。

## 柄尾町

東山山脈の東方に展開せる柄尾平野上にあり、刈谷田川流域の一都邑にして、綯織物の名産地である。柄尾、山田、一ノ渡戸の三大字より成り、面積〇・二四八方里を占める。

この町は戰國時代に春日山、三條市と共に越後三城下といはれ、今、二ヶ所に柄尾城址が残つてゐる。その一は町家の東なる一段高き丘にして、他は郊野にて今は畑と化した。即ち岩野原である。この原をば貞治年中野州宇都宮黨の芳賀禪司の居る跡と傳ひ、本庄美作守慶秀の據りしところである。上杉謙信十三歳の時、春日山の難を遁れて、柄尾へ下向し本庄慶秀を頼りて暫く世の形勢を窺ひたることあり、今因縁の地は三尺坊と稱し舊蹟として傳へられる。

町には柄尾鐵道柄尾驛あり、長岡市へ汽車及びバスの便が通ずる。縣道四方に

走り、人面原、赤谷へもバスは通ひ、交通至便である。官公署學校團體には柄尾警察署、縣柄尾作業所、長岡區裁判所出張所、柄尾郵便局、柄尾實科高女、平和記念柄尾圖書館、産業組合、織物同業組合などあり、柄尾銀行、長岡銀行支店を有し、商況頗る隆盛である。

社寺は無格社一、觀音寺、西嚴寺、常安寺等にして、常安寺は禪宗の古刹、北越軍記に

天文十一年、叛逆人起りし時、虎千代君を春日山林泉寺に隠し奉る、折節柄尾淨安寺の増門察來り、椽尾へ御伴申本庄美作守を頼まれ云々、十九年、景虎公門察和尚の介抱により、一命助りたりとて、常安寺建立云々

とあるのが當寺である。今もこの寺には謙信公置酒の畫幅を藏する。

## 上組村

東西一里餘、南北約二里、面積一・四一四方里あり、信濃川の東岸に位し、長

岡市の南に接續する。東南隅に大峯山の丘岡あり、他は皆平坦なる耕地である。太田川が村を南北に貫通し、灌漑の便を與へてゐる。

攝田屋、宮内、溝、今井、平島、大島水梨ほか二十部落より成る大村にして、上組とは川上の部落の俗稱より來たものであらうといはれる。大字鷺巢の定正院は上杉定正の居城の跡なりと傳へられるも、その次第は詳かでない。大字宮内には鐵道停車場あり、攝田屋は戊辰の役に長岡兵屯所の地であつた。明治二十二年四月村制施行、同二十四年十一月石坂、中通、宮内、前川の諸村を合併し、現今の上組村となつた。

信越線宮内驛は上越線との接續點にして、長岡市へはバスの便がある。村には攝田層郵便局、縣立上組農學校、隔離病舎、六十九銀行支店、上古志農業倉庫上組産業組合、養蠶組合、漁業組合、上組藪市場、石材産業組合、水害豫防組合二、上組市場、普通水利組合三、

曲新町副業組合、上組商工會、農家共榮組合、蠶工品組合、農業改良實行組合、耕地整理組合等がある。

社寺は村社高根彦神社、無格社三六、圓融寺、光徳寺、光福寺、勝覺寺、定正院ほか九ヶ寺を有し、定正院境内は鎌倉扇ヶ谷の管領上杉教朝の息、修理太夫定正の館跡にて、寺は僧曇英の開基なりと云ふ。圓融寺及び洞照寺は共に、西國三十三ヶ所の札所である。また名勝には湯澤鑛泉場が著名である。

## 十日町村

六日市村と上組村の中間に位する一小村落にして、十日町、高山、向島新田、中池、片田、小島古新田の六部落より成り、面積〇・三五七方里、人口約二千四百人をかぞへる。

戊辰の役に、七月二十九日、長岡兵が妙見口の來襲を拒がんとしたところで、今は上越本線及び縣道長岡街道が南北に並走し、宮内驛へ一里、バスの便あり、



交通状態良好である。

古志十日町郵便局、至誠産業組合を有し、寺院には正樂寺、善行寺、専福寺、臨西寺あり、いづれも浄土真宗の靈刹である。古くは志度野岐庄に屬し、二位大納言家領であつた。

耕地は田三百八十町歩、畑四十六町歩にして、米と藪を主要物産とする。

### 六日市村

本村は郡の西南隅に位し、南は北魚沼郡に界し、西は信濃川を距て、三島郡片貝村に相對す。東南に金倉山が聳える。六日市、蛇山、瀧谷、渡澤、犬茂島、黒田新田ほか七大字より成り、面積一・〇一八六方里である。戊辰の役に就き、維新史料の記述によれば

七月二十五日、曉八半に、長岡城賊兵乗取後、日夜迫合、廿九日妙見六日市より進撃草生津に打入、城下火掛候處、賊兵居兼、浦瀬村福井村へ引取申候。云々  
とあり、相當の苦戦地であつた。

大字妙見は古志郡の南端、信濃川右岸の小驛にして、三國通にあたり、長岡へ

二里半、北魚沼郡堀之内へ六里、小千谷へ二里である。妙見には三宅神社あり、俗に妙見社といふ。式内三宅神社二社とあるはこの神社である。榎峠は一に妙見山ともいひ、戊辰の役に、東軍が死守して官軍の來攻を支へたところである。東方金倉山、半藏金山に連り、長岡の屏障をなしてその要路に當る。

今、上越線越後瀧谷驛あり、交通の便比較的良好である。住民は殆ど農山林の業に従事し、氣風淳朴、米麥を主産物とし、産業組合、漁業組合が組織される。

### 石津村

信濃川に跨り、六日市村の西に接し、岩野、釜ヶ島の二部落より成り、大字釜ヶ島は信濃川の砂洲上に發達したる部落にして、岩野は川の左岸の田邑である。郡の西南に當り、北は十日町村に接し、西及び南は三島郡と境する。

### 上川西村

面積〇・二九九方里にして、人口千三百有餘を算し、水田八十町歩、畑七十餘町の耕地あり、未だ開拓されざる原野は二十數町歩残つてゐる。産物は米藪を以て主なるものとする。

釜ヶ島、岩野の二尋常小學校あり、學級は共に三學級、郷土の實情に立脚した各種施設に特色を發揮し、小さいながらも成績見るべきものがある。また村内には私立の石津村養成文庫が設置される。寺院は信光寺、光徳寺の二にして兩者とも眞宗に屬す。團體には産業組合、漁業組合その他がある。

本村は信濃川の西岸に位し、長岡市と相對する。村内一般に土地低平にして、沿岸には突堤を築く。本村及び下川西、福戸の三村は、往昔、川西と稱されたが後、分合行はれて各獨立の一村となり、本村は下柳、小澤、寺島、蓮湯、鼠島、宮脇、荻野、藤澤、三ツ郷屋、古正寺、

田屋、楨下、楨山、卷島、上野等の部落を含み、面積〇・七〇四方里である。

三千五百の住民は殆ど全部が農耕の業に従ひ、米と藪は本村重要物産にして殊に米は十八萬圓の年産がある。耕地は水田四百六十餘町歩、畑地二百十餘町歩である。原野は約二十町歩あり、漸次若人の手によつて開拓されてゐる。上川西信販購利組合は優良業績を示して郡内に名あり、利用者は年々増加の一方にある。村内寺院には敬光寺、寶國寺、蓮乘寺、長樂寺、雲外寺がめる。信越線長岡驛へ約一里を距つ。

數年前より金肥節約の堆肥生産を積極的に奨励し、現在殆ど百パーセントに普及してゐる。本村にては村農會と産業組合とは聯携して産業方面のみならず、生活の改善、勤勞奉仕、精神作興にも努力し、村納税成績は良好にして表彰されたこと一再ならず、農林省の役人や縣内務部長の稱揚を受けたことがある。

### 福戸村

東は上川西村に接し、西は三島郡と境する。全村平坦なる耕地に恵まれ、面積〇・三一六方里、片端、高野ほか五大字より成る。

往時は川西と稱されし地の一部にして明治二十二年獨立して町村制を施行された。長岡鐵道脇野町驛へ約半里、同西長岡驛へ二里、この間不定期自動車の便がある。寺院には光傳寺、淨秀寺、佛願寺があり、いづれも眞宗に屬す。

戸數僅か二百五十戸足らずの一小農村ではあるが、昭和七年、中小農家の内生困難と推定されるものには負債整理組合を組織して加入を奨励したが、該當者が殆ど無かつたといふ程、經濟状態は極めて良好である。

農業經營には常に改善が加へられ、養鶏、二毛作、紫雲英栽培は特に督勵されてゐる。小學校の奉安殿は規模の大なる點に於て縣下第一の稱がある。

### 下川西村

郡の西北端、信濃川の西岸に在り、西は三島郡黒川村と境を接する。全村平坦にして沃野開け、面積〇・七四方里、來傳、吹谷、松尾、寒澤、栗山澤の諸部落より成る。

往昔は上川西、福戸と共に川西と總稱されたところで、明治二十二年、町村制を施行して獨立の一村となつた。

柄尾町へ縣道にて二里、途中バスの便がある。村内寺院には圓福寺、明行寺、來光寺來迎寺等がある。

西は三島郡與板町に近く、東北は南浦原郡今町に遠からず、また信濃川を船で通航すれば長岡市にも幾里でもない。かく近隣に農産物の主要消費地を有するが故に、單に米麥藪等の主産業のみならず蔬菜その他もまた本村産物中の主なものである。實に地理的に恵まれた村といふことが出来る。



## 黒條村

長岡市の北方一里、信濃川の東岸に在り、北は南蒲原郡中之島村に境する。高見、下下條、黒津、川邊、天神、十二瀉等の部落より成り、面積〇・六四四方里に及び人口二千七百人に近い。

古の黒津と地にて、長岡より中之島今町を経て三條市に至る縣道は村内を過ぎ今町長岡間のバスも通る。信越線押驛へ十五町、同城岡驛へ二十町、交通至便で水田五百有餘町歩、畑地百六十餘町歩を有し、米の年産二十數萬圓、繭は一萬二三千圓を上下する。黒條信用組合をはじめ、各種産業團體の活動は近來頗る活況を呈し、本村産業經濟上に幾多の功績をもたらしてゐる。

寺院には願敬寺、西福寺、正嚴寺、淨林寺、遍照寺があり、全部眞宗に屬する古刹である。

## 山通村

長岡市の東南に位し、東半は丘陵連立して悠久山、三ノ峠山、南嶺山などが聳野の沃地に連る。宮内村の東にあたり、高畑、長倉、鉢伏、大町、町田、青木、山澤、柿の大字より成り、面積〇・八三七方里を占める。

大字鉢伏は、明應六年の越後檢地帳に合二萬二千九十期、鉢伏別當並衆徒中と載せられたところである。

戸數二百六十餘、人口八百七十餘を有し、土地は有租地八百六十餘町歩にして耕地は田二百九十六町歩、畑七十一町歩に分れ、山林は四百七十餘町歩の多きを占める。産物米を第一となし繭及び林産物がこれに次ぐ。栃尾鐵道長倉驛及び悠久山驛あり、汽車及びバスの便により長岡に近い。寺院は教徳寺、廣西寺、淨照寺、靈善寺、了元寺等あり、名勝に鉢ヶ峯の一本杉がある。

## 栖吉村

長岡市の郊外東南にして、土地丘陵に富み、悠久山が聳える。西片貝、栖吉、成願寺、野崎ほか五六字より成り、面積一・七二二方里、栖吉に普濟、善照の二禪院あり、長尾家の開基といふ。城寨の跡もあり、一説に謙信公の外祖父肥前守顯吉の有ならんといはれるが、他にも説あり、略風土記には

按に長尾の一族に古志氏ありて、古志景治の子氏景同景信等の名見ゆ、其城址を傳へず、此栖吉或は其跡か

とも考察されてゐる。

村内には縣社蒼柴神社、村社栖吉神社正圓寺、淨順寺、常福寺、専行寺、善照寺、通善寺、普濟寺、龍淵寺その他佛閣多く、蒼柴神社は悠久山公園内にあり、長岡城主牧野忠辰を祭神とし、事代主神を配祀する。悠久山公園は長岡市の經營にして、市の東方三軒、東西西縁を公園となし、境域廣大、古松老杉櫻樹多く、幽邃なる閑境である。しかもグラウンドやプールの設備もあり、冬はスキー場とも

なる近代的公園だ。この他名勝には成願寺温泉、吉永鑛泉がある。

村には栃尾鐵道通り、長岡市へ汽車及び自動車の便あり、交通状態良好、産物は米を主とし、一部には商業も盛んに行はれる。

## 山本村

長岡市の東北約二里、通稱東山の麓にあり、西方一帯に越後平野に面す。部落は一直線をなし一里五町、東部に東山油田がある。

源義家の奥州征伐當時すでに邑をなしてゐたといふ。宇浦瀬に高津谷八庵の城址あり、上杉、堀、牧野の諸氏の支配を受けた。戊辰の役には官賊兩軍轉戦の地となつた。今、本村は所謂八町沼の東なる丘陵を占め、明治十七年浦瀬村ほか七ヶ村の戸長役場を置き、同二十二年村制施行し山本村と稱した。浦瀬ほか七大字より成り、面積一・三七方里、栃尾鐵道浦瀬驛及び加津保驛を有し、交通の便に

恵まれてゐる。

東山油田とは浦瀬を中心とする古志郡一帯の油田の總稱である。浦瀬鑛泉、鬼小島彌太郎の墓、高津谷城址、血の峰城趾の名所舊蹟あり、八幡太郎渡橋の跡には、越路とは鬼住む里と思ひしに云々の碑がある。

本村は蜂谷柿、はつちん柿の本場だ。年額數百圓といつただけでは僅かだが、これが農村に於ける柿だけの賣上高と聞けば驚かざるを得ない。柿ばかりではない。製筍、養蠶、養鶏、養鯉等も隆盛である。

村内に三小學校あり、屢々合併問題が起つても實現しないが、青年學校は一枚に統一されてゐる。

## 富曾龜村

長岡市の東北に連り、全村一帯越後平野の平地にして豊沃なる耕田が多い。龜貝、富島ほか六大字より成り、面積〇・四七三方里である。信越線城岡驛及び栃

尾鐵道稻葉、小曾根、下新保の三驛を有し交通至便である。村内寺院には寺命寺妙音寺、教念寺、西福寺、龍源寺等あり共に古刹である。

米を主産物とし増收計畫より産額年毎に多く、副業としては製繩、養鶏、養蜂が各農家に自主的に行はれ、當局指導と相俟つて好成绩を示してゐる。

教育は小學校二校のほかに分教場があるが、分教場を廢止して二校の内容を充實させるの議が起つてゐる。現時、兒童出席率は縣内模範校の一にかぞへられ、青年學校が併設される。

従來學區間の對立は自立にまで影響して常に相争つたが數年前からその弊もななく、平和村の名を得てゐる。

## 新組村

郡の北端に位し、北谷村、山本村、富曾龜村及び黒條村に圍繞され、地勢一般に平坦である。

鐵道交通の便があるので、文化の程度



は他村に比してより發達してゐる。全村は下新町、漆山、百束、四ツ屋、福井ほか六大字に分れ、諸部落は概ね八町沼開田に在る。東西一里、南北一里、人口約三千人である。

米作を以て主要産業となし、畑作の大豆がこれに次ぐ。副業の第一は養蠶で、近時漸減の傾向にあるとはいへ、未だ相當の産額を有する。

村農會、産業組合の最近の活動は目覺しきものあり、これに加へて畜産組合、養蠶組合等の運動が、生産の逐年増加に與つて功が多い。

小學校は漆山、百束、新組の三校がある。在郷軍人分會、男女青年團、尙武會婦人會等では各々緊密なる連繫の下に、社會奉仕と社會教化に顯著なる實績を擧げてゐる。

村社その他の神社併せて十二社、天滿宮最も知られる。寺院また多い。舊蹟としては明治天皇行在所跡あり、聖跡を訪ねて杖を曳く者が多い。

## 北谷村

當村は郡の最北端に在り、北は刈谷田川を隔て、南蒲原郡見附町に對し、南は山本村に東は上北谷村に、西は新組村に接してゐる。南東部は丘陵の山地を形成して漸次、西北に向つて緩傾斜をなし、村の中央に突出してこれを南北に二分する。そしてこの丘陵部を圍んで村落と耕地とがあり、耕町は肥沃平坦にして灌漑排水して良好である。

當村の開発は相當古いものであつて、村内の處々に先住民族の使用した石器、土器類が散在し、村社小丹生神社は延喜式内社にて寺院中には大同年間の知紋にかゝるものさへある。往古古志郡高波の莊に屬し、中世に至つて城氏の支配するところとなり、後ち佐々木氏、新田氏、高氏、上杉氏、長尾氏、堀氏等の領するところとなつたが、元和四年長岡藩主牧野忠成の所領となり、明治維新に及んだのである。

廢藩置縣後、柏崎縣に屬したが、次で幾變遷かを累ねて同二十二年北谷村と改め、現在に至つたものである。廣袤東西二十九町、南北一里十町、面積一・七一四町餘、戸數約七百、人口約四千、農に従事するもの餘四百戸、工は百二十餘戸商は六十餘戸をかぞへる。

修養團體に青年會、南部婦女會、北部婦人會あり、産業團體に農會をはじめ農事實行組合、養蠶實行組合、織物組合、副業組合など設立されてゐる。神社に村社一、無格社七、寺院に九をかぞへる。

## 上北谷村

栃尾町の西方にあり、村内は山岳起伏して丘陵多く、刈谷田川は山間を縫つて北に流れる。十三大字より成り、面積は一・一七六方に及ぶ。村内には戊辰の役の舊跡少なからず、土谷、柄窪等はいづれもその地である。栃尾鐵道上北谷、上太田、本明の諸驛あり、栃尾町見附町間のバスも通り交通便利である。寺院に

は源昌寺、慈眼寺、東福寺、瑞雲寺等あり、村民の信仰をあつてゐる。

米及び繭を主産物とし、蔬菜園藝も盛んにして、村農會の後援の下に統制販賣をなし、長岡市、栃尾町、見附町方面に大なる販路を持つて居り、温床栽培が普及してゐる。製炭、養蠶、養豚の各組合組織され、家内工業も盛大である。産業組合では昭和九年農業倉庫を建設した。

小學校は一校にして分教場二あり、男女青年の季節教授は男子は夜間、女子は晝間これを行つてゐる。

## 下鹽谷村

栃尾町の北に連り、刈谷田川の本支流は本村の北部及び西部を流れ、西北隅に於て合し、西に向ふ。所々に丘陵の起伏を見、耕地と山地は相半する。

下檜出、楡原、岩野外新田、水澤、鴉ヶ島ほか十四部落を含み、面積一・七一二方に上る。村に岩野藏王堂あり、今金峰山と改稱する。社の傍に三條城主平

六俄景の墓と傳ふる古塚あり、長岡藏王はこの祀より分祀したといふことが諸書に見えてゐる。

栃尾鐵道楡原驛あり、人面原栃尾町間のバスも村内を走る。楡原は古くから開けたところで、明應檢地帳にもその名が見える。

村内には二日町郵便局、鹽谷産業組合無格社若宮社、曹洞宗善昌寺、眞言宗妙圓寺、眞宗正福寺がある。

## 上鹽谷村

郡の東北端に偏し、東北二面は南蒲原郡と境する。村内を丘陵蜿蜒し、鹽谷川の發源地をなす。舊鹽谷の一部にして、大字鹽中に鹽井ありしこと北越奇談に載せたるも、今日その事情は詳かでない。面積二・七六五方里、瀧ノ口、入鹽川ほか十部落より成り、栃尾町へ二里半、會津に通ずる街道がある。社寺は村社巢守神社、眞言宗遍照院、日蓮宗圓隆寺等有す。

## 東谷村

栃尾町の東南に接し、東は南蒲原郡と境する。村内山嶽丘陵蜿蜒し、刈谷田川の水源地をなし、東南には守門嶽の高峰を望む。守門嶽は眺望よく、

千重八百重ふりつむ雪の穴窓に  
煙立つたり古志のやまざと  
と詠まれたところで、南蒲原と北魚沼の郡界をなしてゐる。  
村はもと栃堀といはれ、今は泉、栃堀、菅島、赤谷、宮澤ほか四大字より成り、



面積三・一〇八方里を占める。村役場は大字泉に置き、こゝから栃尾鐵道栃尾驛までは一里、バスの便がある。

村内には産業組合、施業森林組合その他の公益團體ありて産業經濟並に社會文化の向上發展に努め、また社寺には村社巢守神社(二社)阿彌陀院、高德寺、長福寺、妙樂院、玉泉寺等がある。玉泉寺は栃尾町常安寺末にて繁國秀茂和尚を開基とする曹洞宗の古刹である。

### 入東谷村

本村は郡の東部に於て、東谷村と西谷村の中間に位し、西南は中野俣村に續いてゐる。北東には東谷村との村境をなす海拔五百五十尺の栃堀藥師山が長い山裾曳き、東南方は北魚沼郡と境界、藥師山に連つてゐる。土地一般に高燥、丘陵に富む。

明應六年の越後檢地帳に、本村大字吹谷、松尾、來傳等の地名が見える。今、五部落を以て一村となし、面積一・一八

三方里あり、長岡鐵道與板驛へ一里、自動車の便があり、また縣道栃尾小出線が村内を貫通する。

戸數約三百七十、人口二千弱を數へ、耕地は田百九十餘町歩、畑百七十町歩を有するに過ぎないが、山林は八百九十町歩に近い面積を持ち、従つて米藪のほかは殆ど林産物ばかりである。

### 荷頃村

栃尾町の西南に接し、南隅に五百山、鋸山が聳立し、村内は山嶽丘陵が重疊し西北に東山油田がある。

荷頃はまた逃入と書せしことあり、古書には濁と記載され、明應檢地帳にも濁と見える、明治三十四年十一月町村合併して現區域となり、面積一・六一六方里北荷頃、一之貝ほか四部落を含む。大字比禮の石油坑井は明治三十年頃より湧出したものである。こゝにも戊辰の役の戦蹟がある。役場は大字北荷頃に置き、こゝから栃尾鐵道栃尾驛まで一里である。

### 西谷村

女子青年團はヘチマコロンを作つて團服を制定作製し、男子青年團では實習試作地を有して實地研究をし、また兩青年團員を以て組織する軍樂隊式音樂團は縣下に有名である。しかも青年團も青年學校も縣及び文部省の表彰を受けてゐる。

荷頃村の背後にあり、四方を峻嶺に圍繞されたる山間の僻地である。半藏金と栃尾との間を改稱して西谷と名付けたといひ、所謂栃尾谷の一村である。

縣道沿線の地なるも山間にして交通は不便、栃尾町へ二里である。村は中、西野俣、森上、木山澤、田之口の五大字より成り、面積〇・六二三方里を占む。

産物は従來米と藪とを主なものとしたが、近年に至り、養鶏、養兔、果樹栽培に長足の發達が見られる。殊に柿栽培は各字に二名宛の接木技術員を村費を以て雇傭して繁殖を促せしことあり、現に大阪方面に販路を持つてゐる。また婦人會では銃後の警備、勇士の慰問のみならず自ら主體となつて蔬菜の栽培に努めて見るべきものあり、堆肥普及成績は縣下第一等と稱される。産業組合は明治四十年の設立。青年團は全國的に優秀なもので曩に文部省より表彰された。

### 中野俣村

西中野俣、東中野俣の二部落より成り面積〇・八二方里に及ぶ本村は北は、山嶺を以て北魚沼郡上條村と境し、地勢極めて高峻である。本村と西方半藏金との

間の一帯は古くから西谷と稱される。社寺には村社吉野神社、大榮寺、東光な寺どがある。

山嶽多きため、農耕よりも養蠶の方が盛大である。しかし最近では稍々衰微の徴を見せ、養鶏、養兔がこれに代ると共に、産米の増收、筍、うど、ぜんまいの加工、植林などが勢を得て來た。全村舉つて産業増進の謳歌に明朗な氣分が溢れ銃後の力強さを思はせる。

小學校は一校、諸施設に山村の特色を發揮して良成績を收め、青年學校は會て青年訓練所時代查閱官より賞讃の辭を受けた。青年團では道路改修、出征軍人遺家族への勤勞奉仕など盛んに活躍し、他の模範とされる。

### 半藏金村

五百山及び鋸山の東方山蔭にあり、四周高峰に圍まれたる山間の一小村にして面積〇・七三五方里、里道にて長岡市へ三里、バスが通つてゐる。

社寺には村社諏訪神社(二社)無格社四、雲帶寺、曹源寺、觀音寺あり、名勝に鳥帽子嶽の鬼穴、一之貝大池、建石、稚兒清水、鶴城山、陣ヶ峰峠、大平山及び熊坂長範の舊跡森立峠がある。

會ては養蠶村として榮えた村であるが時代と共に産業にも變遷あり、今では藪の代りに柿を産し、鶏が殖え、豚が鳴き兎が跳ね、池には鯉が、馬小屋には子馬が數を増した。

女子青年團はヘチマコロンを作つて團服を制定作製し、男子青年團では實習試作地を有して實地研究をし、また兩青年團員を以て組織する軍樂隊式音樂團は縣下に有名である。しかも青年團も青年學校も縣及び文部省の表彰を受けてゐる。

戊辰の役に七月二十五日官軍が長岡栃尾附近の合戦に敗れ、走つて河西へ退き能はざる輩は南走して一之貝及び半藏金の地に逃れたといふ。

山間僻地なる故、産業は従來養蠶を以て主要なものとしたが、先年の藪價暴落以來衰微を辿り、その後、産米の増收、養蠶以外の副業の積極的普及獎勵、肥料の自給自足等が叫ばれ、農業技術員の採用、堆肥増産獎勵、製炭講習會の開催等により産業文化に一新紀元を劃し、今や村農會、産業組合、村役場の三者が一丸となつて銃後の援護に邁進してゐる。

青年學校は昭和九年縣より指揮刀を贈つて表彰された優良校、在郷軍人分會は大正八年本部の表彰を受けた。

### 種芋原村

五百山連峯と北魚沼郡界の山岳との間に在る山間の一村にして、面積一・〇三七方里である。北魚沼郡廣瀬地方へ流れる和田川の水源地をなし、北は半藏金



西は風口峠、東は北魚沼郡上條村、南は大道路に至る諸道路も、古くは樵柚人の跡付けたる通路であらうが、村當局の熱心なる道路開發の意志と村民の協力とにより、今は山村としては道路よく開けたる部落として聞え、里道にて長岡市へ四里、交通機關には恵まれないが、道路の完備と相俟つて漸次交通状態も便益多からんとしてゐる。

米と繭は主要物産である。種芋原信用組合の活動見るべきものあり、本村經濟上に及ぼす影響は大きい。寺院には眞宗廣照寺がある。

## 大田村

郡の南方に位し、四面山岳に包まれ、中央に僅少の平地がある。蓬平、虫龜、濁澤、南平の四大字より成り、面積一・五〇六方里、太田川上流の山村にして、信越線宮内驛へ二里、大字濁澤から道路は北に伸びてゐる。村内寺院に慶覺寺、阿彌陀寺、永泉寺、念法寺がある。

前述の如く四面山岳なるため耕地に乏しく、米は自給自足の程度である。従來は養蠶が副業の主位にあつたが、今は衰へ、蜂谷柿、鯉等の栽培飼育がこれに代つた。養鯉組合があり、多數の鯉は京都大阪、名古屋をはじめ、東京、富山、山形、秋田方面にまで販路を持つてゐる。また狸の飼育が流行し、製炭も年五千俵に及んでゐる。

村内には五小學校あり、内二校は高等科を併置する。青年學校は成績特に良好で、教練に精神修養に辯論に青年層の活躍は目覺ましい。

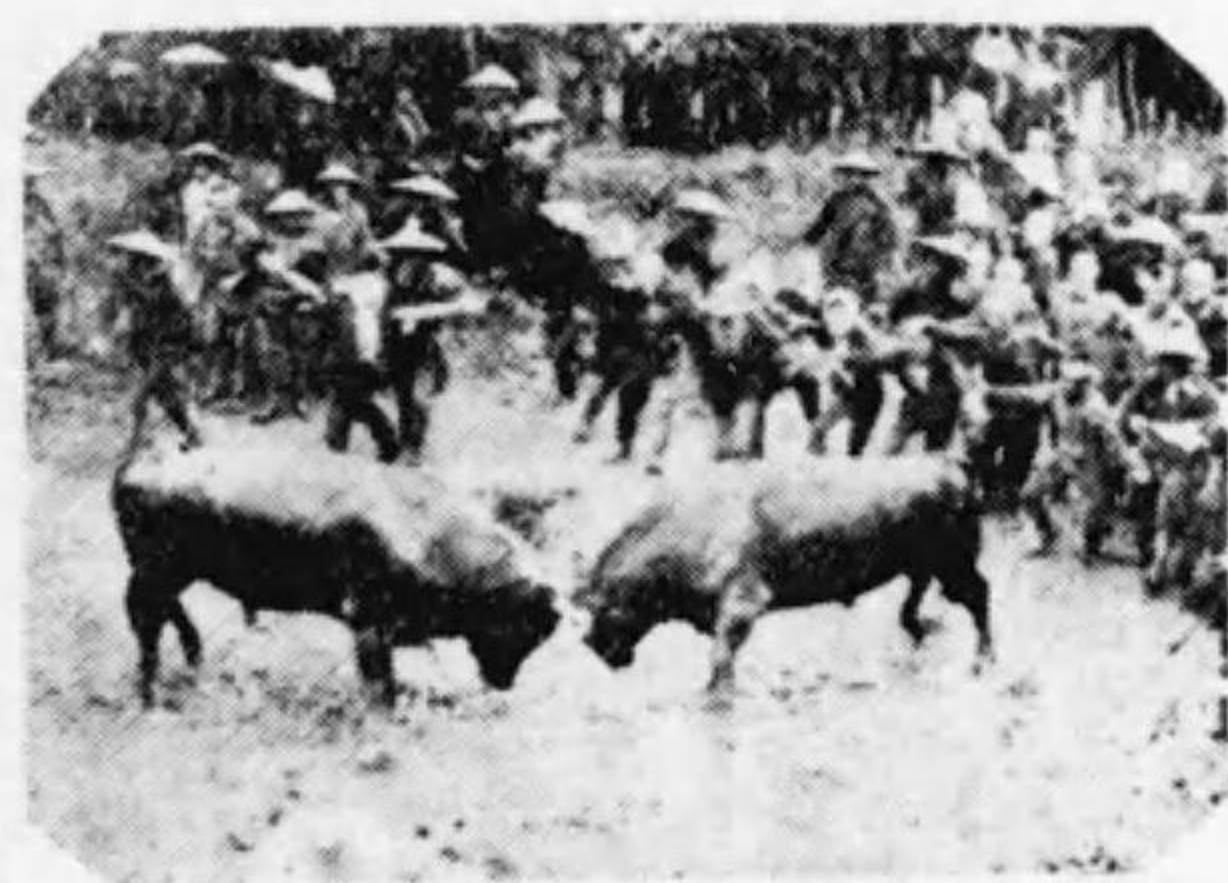
## 竹澤村

郡の南方に位する一山村にして、村内を流れる溪流は四走して信濃川に入る。明治二十六年、この山中に石油井を試掘せしことがあつた。

面積〇・三七六方里、人口千六百餘人を擁し、長岡區裁判所出張所、竹澤郵便局、竹澤信用組合等が村内にあり、村役

場より上越線小千谷驛まで二里半、交通の便に恵まれない。

村農會が中心に、部落毎に農業特勵委員が設置され、また採種組合を組織して品種の統一を計るなど、本村産米增收方



本村名物の牛

策は萬全を期されてゐる。従來副業は養蠶が主であつたが、最近はこれに代つて養兔が全村に普及し、皮は自家加工して陸軍省に納め、肉は罐詰にして賣出され

る。柿、栗、梅、花梨の栽培、綿羊の飼育も漸次多くなりつゝあり、また天然に恵まれた本村は、養鯉の盛んなところである。殊に三色鯉は二百餘年の歴史を有し、近時全国的に有名になり、注文殺到の状態である。

鬪牛は當地名物の第一であらう。當局ではこの行事を奨励の方針である。

小學校は一校である。青年學校は縣下屈指の優良校で、曾て青年訓練所時代に文部大臣の視察を受けたことがある。

## 東竹澤村

本郡の南端、北魚沼郡と郡界を限る山間の一農村にして、北は太田村、西は竹澤村につゞく。小松倉、梶金その他の部落より成り、芋川の東方なる小松倉を主部落とし、村名よりすれば竹澤村より新しく開拓されたやうである。

國道にて上越線小千谷驛並に越後川口驛へ三里、交通の便に恵まれずと雖も、近年、道路の發達頗る顯著にして、交通

状態も大いに改革を見んとしてゐる。

戸數二百三十餘、人口千二百有餘にして、面積〇・六八方里を有し、山林約三百五十町歩に及ぶも、耕地は僅かに田七十三町歩、畑七十町歩に過ぎず、米を主作物であつたが年産幾許ならず、却つて養蠶の如き副業に見るべきものあり、林産物も尠くない。

## 東山村

芋川の南岸の山村にして郡の最南部に在り、南に山脈走つて北魚沼郡との境界をなし、北に金倉山の高峰が聳える。南稻荷ほか三部落より成り、面積一・四五一方里、上越線川口驛へ二里、交通は便利と云ひ難い。社寺に無格社白山神社、福生寺、寶林寺、圓柳寺を有す。

山岳甚だ多くして、耕地面積少く、田畑の如き全面積の十分の二に過ぎない。故に従來米穀の不足には常に悩まされて來たが、近年、村農會が中心となり、各部農區をはじめ青年有力者の活動により

漸次增收を圖つて、今日では飯米は自給自足の域に達してゐる。副業も従來は不振状態にあつたが、蔬菜、園藝、果樹の栽培、鯉、兔、豚の飼養を奨励し、その他製炭業が普及し、山芋、山葵、百合の増殖に實績を挙げ、胡桃、無花實の栽培も多くなり、果實は京阪神に、山芋、山葵、百合等は長岡新潟方面に出荷する。

兎は主に小學校兒童に飼育せしめ、成兎は統制販賣をしてゐる。なほ、堆肥の増産は郡内屈指といはれ、産業組合は縣下有數の成績を擧げてゐる。

小學校は四校あり、いづれも青年學校を附設する。男女青年團及び婦人會等では精神教育の普及を圖り、銃後後援、貯蓄實行、勤勞奉仕に邁進してゐる。



# 北魚沼郡

古の千屋郷の地で、魚沼三郡の北偏にして、古志、三島の諸郡に接し、小出の邊は荆上郷の中あらう。

北は三島郡の一部、古志郡及び南蒲原郡の一部に隣り、東方一帯は福島縣南會津郡、南は群馬縣利根郡、南西は南魚沼郡及び中魚沼郡、西は刈羽郡と境す。郡の東境には深山連互し、また三國山脈は郡の東南部を横斷し、駒ヶ岳、槍ヶ嶽等の峻峰がある。その間に湯ノ谷ありて、温泉が湧出する、河川は魚野川が南魚沼郡より來りて、郡の西部に於て信濃川に合流して北流する。

鐵道は省線上越線が南魚沼郡より來り郡の西部を通つて古志郡に入り、信越線に合し、十日町線は川口より分岐して中魚沼郡に入り、魚沼線は信越線の來迎寺より起つて小千谷に至る。小千谷は越後船の産地として著聞する。

郡内に次の如く三町十三ヶ村があり、人口は八萬百餘をかぞへる。

町 小千谷、堀之内、小出  
村 城川、吉谷、山邊、千田、川井、田  
麥山、川口、湯ノ谷、藪神、廣瀬、須原  
上條、入廣瀬  
なほ現勢を統計的に見れば次の通りである。

生産總額	七、五二五、六九八圓
農産額	二、七七六、五三一圓
一戸當り生産額	五四六圓
農業倉庫棟數	四棟
學齡兒童	一六、三六一人
小學校數員	三一六人
民有有租地	二三、一五六町
面積	一、〇五〇・七七方杆

## 小千谷町

郡の西北部に位する一名邑にして、町

の東端を信濃川が北流し、これを境として小千谷、稗生の二大字が對立する。西は城川村に連り、南は山邊村に、北は城川村に隣接する。地勢平衍にして、町の南部に舟岡山あり、頂上に立てば遠く八海山、駒ヶ岳、銀山平の諸嶺を望み、近く信濃川の清流を俯瞰し、風光明媚にして常に遊覽の客を絶つたことがない。

また本町は越後絹布、小千谷縮の本場にして、機業地として北國屈指の生産を有し、全國的に有名である。  
もと郡役所の所在地であり、本郡文化の中心地として物貨の集散場となり、商況旺盛である。従つて交通運輸の係もよく、清水越の國道開鑿完成後は、群馬縣より長岡市に通ずる國道十號線が町の中央を縦貫し、町の東部には鐵道上越線が走り、信越本線來迎寺驛より分岐し、西小千谷驛を終點とする魚沼鐵道があり、また國道にはバスの便あり、信濃川を利用する水運と相俟つて交通至便を極め、産業文化と共に當地方に於ける交通の一

中心地をなしてゐる。

## 堀之内町

小出町の西に接し、魚野川の溪谷に跨る名邑である。附近は養蠶盛んにして、土地の風俗に屋臺はやしあり、郷土色豊かである。

古來三國驛路に當り、浦佐と川豐口の中間に位し、雪譜に、堀内八幡宮の花水祝の記事あり、古くから開けたところである。大正十五年四月一日、田川入村、堀之内村を合併し、同年十一月十日町制を施行、今日に及んだ。

新道島、星野新田、龍光、下島ほか十三部落より成り、東西一里、南北二里、面積四・四三九方里を有す。町には職業紹介所、郵便局、大正文庫、第六十九銀行、第四銀行各支店、産業組合二、郡農會、郡農業倉庫、郡蠶絲同業組合、苗木組合、郡畜産組合、漁業組合二があり、社寺は村社八幡宮、永林寺、弘誓寺、金剛院、寶藏寺ほか六ヶ寺をかぞへ、名勝

に下倉城址がある。交通は、上越線堀之内驛により至便、この鐵道に沿うて國道あり、また中魚沼郡へ縣道が通じる。

會て商三農七の環境の中に、獨立小學校七校をかぞへ、歴代村長はこれが合併を圖つたが失敗を重ね、昭和七年に至り十萬餘圓の經費を以て中央校の増築を機會に附近三校の合併が實現した。昭和十年よりは高等科を廢止し、三ヶ年制度の乙種農業學校程度の實業學校が設立され今日に至る。

## 小出町

郡の南部、魚野川の流域にあり、破間川、羽根川の二川を右にして、左に佐梨川あり、東北に廣瀬谷を控へ、地勢概ね平坦である。即ち破間、魚野の縦谷と、佐梨川の横谷とが作る十字谷の頭部を占め、東は會津の大高原を控へ、その交通の路頭に方り、また南魚沼郡への關門となつてゐる。交通は從來三國峠を越えて關本へ出る三國線が唯一の街道であつた

が、後、清水越の國道が開鑿されて一層の利便を與へられるに至つた。上越線小出驛がある。バスは湯澤町、枅尾又温泉須原、小千谷へ通ずる。

もと會津藩の領内にて、小出島には會津藩の役人居り、六十里越を以て若松城下へ通行した。されば明治辰の役には東軍に黨し、西軍とこゝに激戦を交へたのである。  
生糸、繭、米、木炭を主要物産とし、商工業が盛んである。町には警察署、縣木炭検査所支所、縣蠶業取締所支所、縣穀物検査所出張所、長岡區裁判所出張所郵便局、産業組合、農業倉庫、郡木炭同業組合等あり、社寺に村社清水河邊神社無格社一、觀音寺、正圓寺、林昌寺などがある。

## 城川村

郡の西端にあり、西は山陵を以て刈羽郡及び三島郡と境し、この山中に地嶽谷油田がある。東は小千谷町に連つて一般



に平坦、南は吉谷村に、北は千田村に隣接する。

魚沼線平河驛より、また村北部を千谷川山谷線、中央部を土川山田線の縣道が横斷し、蕨川時水街道も村を貫き、車馬の往來しげく、交通至便である。

明治三十四年十一月、城川村、千田村の中大字山谷櫻、町村を合併した。面積一・〇四九方里あり、住民の多くは農業及び養蠶業を主とし、織物、麻真田の製造が盛んである。果實の栽培や養鶏なども副業として營み、赤蕪は本村特産物として廣く知られてゐる。

縣社魚沼神社、村社伊米神社、寺院六ヶ寺あり、時水城址、穩回の橋、有明橋宇都宮明神等の名所舊蹟がある。

## 吉谷村

郡の西端に位し、南北に長く、東西に短く、東吉谷、西吉谷、四ツ子の三大字より成り、周圍一帶は山岳丘陵に依つてかこまれてゐるが、堂ノ笠山、雁堂山等

の支脈を除けば概ね平坦である。千谷川はその源を中條釜峰より發し、東岸に大字四ツ子を控へて北流し、宇勝田に於て大白川を併せ、更に北流して宇大柳に至つて城ノ入川に合流する。

村の西端に縣道小國線が開通してはゐるが、全村を擧げては此便に據ることを得ず、なほ甚だ不便の地も少くない。

東西は一里一町、南北は一里六町にして、面積一方里弱がある。

産物の主なるものは米で、副業の主位は養蠶である。農閑期を利用しての菓細工製品も多く、これは悉く村外に移出される。その他大小豆、稗、蕎麥、甘藷、馬鈴薯、大根、漬菜、茄子、瓜類等の農産物及び織物、木材、薪炭なども本村主要物産に擧げられる。

本村には未だ村社と稱すべきものなく各部落に無格社數社あり、その祭日は一定し、九月に例祭を行ふ。寺院には圓満寺がある。

## 山邊村

小千谷町の南に接續し、村内至るところ丘陵の連互するを見る。東に信濃川の巨流が北に向つて環行する。

山本、谷内、西中、片貝、池ヶ原、池中新田、鹽殿の七大字より成り、人口三千有餘、面積一・〇六四方里を占め、上越線小千谷驛へ三軒半、魚沼線西小千谷驛へ二軒である。

人心は質朴、勤勞を愛する精神に富み縣下優良十六ヶ町村中の一に加へられしことあり、自治に、産業に、教育に、非の打ち所を持つてゐない。

産業としては先づ養豚と桑苗とを第一に擧げなければなるまい。副業生産の半分はこの二者が占めてゐる豪勢さだ。之に次いで園藝、製筵、製繩、養鶏、養鯉等が盛んである。これら副業助成のために綜合副業組合が組織設立され、指導統制宜しきを得てゐる。又堆肥増産の實際は牛馬の飼育にありとし、殊に支那事

變による馬匹微發の影響を除去するためにも養畜農業が奨励される。

昭和七年以來、村當局では村税の軽減と村民美風の増長を二大施政方針として邁進し、青年團、青年學校、婦人會は郡下の模範である。最近、在郷軍人分會の活躍も顯著である。

## 千田村

本村は郡の西北隅に位する小村にして東は信濃川を隔て、古志郡及び小千谷町の一部に接し、西北は古志郡と三島郡との境界をなし、南は小千谷町及び城川村に接續する。地勢概して平衍にして、信濃川流域にあるため、地味肥沃豊穰にして農耕に適する。

元千田村及び三佛生村、鴻之谷村の三ヶ村を合して現在の千田村を作つたもので、元千田村は千谷、小栗田より成り、千谷は慶長檢地の時に千屋村と稱し、その後天和三年の檢地に千谷と改めた。貞享三年、千谷村の開墾地を分離して、市

右衛門新田、長兵衛新田と稱し、明治十八年皆復舊してその名稱を廢した。三佛生村の由來は、往時、村民信濃川に漁し阿彌陀、藥師、觀音の三佛像を得た爲めこれを村名としたと口碑に傳へる。また元鴻之谷村は、鴻之巢、坪野、三野の三ヶ村より成る。本村は以上の三ヶ村を明治三十四年に合併したのである。

村内小栗田尋常小學校は明治七年の創立開校、同十一年校舍新築、十八年より二十年まで小栗田小學校と稱し、同四十二年現在地に校舍新築して移轉すると共に現校名に改め、大正九年増築を行ひ、更に屋内運動場を新築した。

## 川井村

中魚沼郡岩澤村と堺し、信濃川右側の河岸段丘上にある農村で、地勢丘陵に富み、耕地は概ね桑園である。

古來河水氾濫のため災害を受けしこと屢々であつたが、河川工事完成後は、その難を完全に免れた。川井、川井新田の

二大字より成り、面積〇・六〇六方里、十日町鐵道内ヶ巻驛を有し、交通の便は悪くない。

明口明神は無格社なるも式内古社川合神社ならんと傳へられる。また駒形山妙高寺は正平七年の開基にして、慶長年間の再興なりといふ。

全村を分ちて四農區とし、農區毎に採種圃を經營し、富民協會、縣農會主催の競作會に加盟して賞を受けてゐる。蠶、鶏、豚、兔の飼育多く、兔皮加工も行はれ、また柿や栗の栽培多く、最近は胡桃も普及してゐる。

教育は一村一校主義にて進んでゐる。青年學校は、男子は通學制、女子は季節的で、查閱官より表彰されしこと數度に及んでゐる。勤勞愛好精神に充溢せること郡下の模範である。女子青年團は、女工としての出稼者が多いので團員は少いが、在郷諸嬢は良妻賢母滿養の素質に邁進し、「銃後の護りは女子の手で」、をモットーに活動目覺ましきものがある。



## 田麥山村

郡の西南部に位し、中魚沼郡下條村と境する。村内山林多く、耕地は田百五十餘町歩、畑百三十町歩の僅少なれど、概ね蠶桑園である。

町村制施行前より田麥山村として獨立の一村をなし、今も變化はない。國稅完納成績良好な村である。十日町線内ヶ巻驛へ近く、交通の便悪くない。

面積一・一八七方里、戸數二百四十餘の山間の一小村であるが、部落農民の採種圃經營、競作會、堆肥品評會等を行つて産米の増收を圖るなど、産業の發達に苦心し、見るべき成績を擧げてゐる。副業には百合、ぜんまいの栽培、製炭、製蕨、養鶏、養兔等あり、殊に百合は本村特産物の第一で年産千圓以上に達し、木炭は木炭組合の統制下に年五萬貫以上を出し、最近冬季家内工業の一として箕の製造が盛んである。

教育は一村一校主義を以て進み、小學

校は高等科を併置する。青年學校は成績良好で、査閲毎に査閲官より表彰を受けてゐる。女子補習教育は季節教授を行ひ青年團では公共事業奉仕、殊に銃後の勤勞奉仕に熱心にして、その他心身の鍛鍊農業講習、巡迴文庫等を行つてゐる。

## 川口村

信濃川及び魚野川の合流地點にあり、十一箇の大字より成り、諸部落は概ね眞野川に跨り、西岸段丘上に聚落する。大字西川の兩川の間岬角狀岸にある。面積一・七二方里。

往時の三國驛路の一渡航路にして、はじめ六部落を合併したる一自治區なりしが、昭和四年三月、元稗生村廢止につき大字相川ほか五部落を更に合併した。こゝは十日町線の分岐點である。また本村大字和南津は、古事記に見ゆる高志國和那美之水門なりといふ。この水門の舊址は小ヶ谷町の東南二里半にあり、垂仁天皇の御宇、皇子譽津別王、御年三十にし

て猶ほ言ふ事能はず、或時偶々鶴の空を過ぎるを見て語を發して何物ぞと問ひ給ふ、天皇、人をして鶴を追はしめ給ひしに、この地に網して、捕ふるを得たりといふ、故に和南津と號すと傳へる。また村内には鮭鱒所その他の名勝あり、社寺には村社川合神社、安養寺、西藏院林興庵、寶積社、萬覺寺がある。

鐵道上越線及び十日町線の分岐點にあり、越後川口驛を有し、交通至便、縣道また發達しバスの便がある。

## 湯ノ谷村

小出町より南東佐梨川に沿うて廻り、越後駒ヶ岳の北方分水嶺をなすところであり、枝折峠を越えれば北ノ又川となり奥日先に至る。本村南東部一帯の大高原地帯である。

古くは折立村とも云つた。大湯村より山中八里八町人跡なく、越奥の塚にして何國何郡の山と云ふこともなかつたが、湯ノ谷の折立村の人、彼の山奥阿賀川へ

魚を捕りに行き、これより會津領只見村と上田領湯ノ谷の出入りとなつたけれど江戸表に於ては、山は會津の地、支配は上田（六日町）と仰附られた。明治三十五年十月元八箇村及び元湯ノ谷村を合併し現在の湯ノ谷村が出来た。

大澤、井口新田、吉田、七日市、七日市新田ほか十六字を含み、面積二二・五四九方里の大村である。佐梨川に沿うて縣道は小出町に通じ、枋尾又温泉よりバスの便がある。

二又川と只見川の合流する地點に銀山平あり、千古斧鉞を加へざる密林で、奥日光まで連り一大仙境をなす。枋尾又温泉は古來子持湯として聞え、婦人病、胃腸病に効あり、佐梨川に沿ふ幽邃境で、避暑の好適地である。この他化石溪、大湯温泉などの名勝がある。

山又山に圍まれてゐるため、水田面積は極めて僅少で、従來、收穫は飯米にも足らず、移入米によつてこれを補ふ状態であつたが、昭和八年頃から産米の増收

を目標に産業改善に邁進し、今では自給自足してなほ餘裕を見るに至つた。副業の首位たる木炭は、木炭倉庫を建設して販賣を統制して居り、その他製紙、藁工品、木工品等の副業あり、殊に製紙は家内工業として縣下第一の産額を有し、品質も良好である。

## 藪神村

西は小出町に接し、南より東北面一帯は高原山脈に掩はれ、羽根川は本村東部に水源を發し、諸流をあつめて西走し、西方にある破間川と共に奥野川に入る。村に木葉石を産し、これを硯に製す。

新保、一日市、池平、池平新田ほか十三部落を含み、面積四・〇九九方里、上越線小出驛へ一里弱、バスがある。

藪神の村名は南魚沼郡にもある。明治三十四年、藪神、羽川島の一部を併せて一自治體組織され、同三十五年四月より町村制を實施した。村社大石神社、無格社六、安泉寺、永昌院、吉祥院、乘源寺

眞福寺、萬行寺、明王院の社寺がある。

従來本村の産物は米、木炭、ぜんまい程度で、産額も大したことはなかつたが近年に至り、産業の開發、豫算生活の實行が獎勵され、水稻採種圃一町六反歩の經營をはじめ、堆肥品評會を催ほして多産者に賞状を下附するなど、種々の獎勵方策を講じ、産業經濟の發展充實の跡顯著なるものがある。副業として木炭のほか、製蕨、箕、バナマ帽、麻裏草履等の増産も著るしく、製紙の改良、柿の接木胡桃の栽培普及、養鯉の隆盛など見るべき點は多々ある。

小學校は二校あり、分教場一を有す。補習教育は頗る優秀にて、昭和七年には縣より表彰を受けた。

## 廣瀬村

本村は破間川及び和田川流域の山林原野地帯を占め、入廣瀬村と共に、破間川谷を領し、古くは廣瀬郷と稱した地の一部である。



和田、東中、山口、泉澤新田、田尻、

並柳、連日、小庭名、小庭名新田、吉平  
ほか十四大字を含み、面積二・六三三方  
里、大字並柳は舊名を小田と稱し、ここ  
に須門大明神がある。即ち守門嶽の山神  
を祀り、下の宮といひ、廣瀬郷中の大社  
である。舊記に

廣瀬之内下之宮、須門大明神、高頭五  
斗、永代令寄進之候也

と見える。小出町へ一里、縣道通じ、バ  
スの便もある。

村内には四つの圖書館あり、小學校は  
内容殊に充實し、また社寺には前記村社  
須門神社のほか、村社巢守神社、無格社  
一、曹洞宗興珊寺、眞宗慈眼寺、同専明  
寺等がある。

### 須原村

須原、赤土、須川、三淵澤、大倉澤ほ  
か五大字より成り、面積四万里に亘る大  
山村にして、高原、越後の兩山脈に圍繞  
され、村の中央を破間川が貫流し、小平

地をつくつてゐる。

元西頸城郡糸魚川藩に屬し、町村制施  
行後、明治三十四年十一月現區域を以て  
一自治區をなした。村には三淵澤、樽淵  
大倉觀音堂、須川桂ヶ湖等の名勝あり、  
寺院に曹洞宗圓明寺、同普門院を有す。  
米、繭のほか林産物の産あり、村内官

公衛團體には長岡區裁判所出張所、須原  
郵便局、村立圖書館、大倉澤産業組合、  
須川、宇津野、上折立各森林組合、須原  
織物改良組合、第四銀行支店などあり、  
山間と雖も産業並に文化の發達著るしき  
ものあり、交通は破間川に平行して縣道  
あり、上越線小出驛へ三里、バスの利便  
がある。

### 上條村

郡の北端に位し、地形は蝙蝠の兩翼を  
擴げた様によく似てゐる。東隅に守門山  
あり、地勢高燥、破間川は東より延行し  
來り、本村南部に於て西南に方向を轉換  
し、魚野川に合流する。

西名、澁川、長島、上長島新田、東之

名等九部落より成り、面積四・〇〇七方  
里に及び、有耕地二千四百六十町歩餘を  
有するが、耕地は僅かに田二百七十餘町  
歩、畑百三十餘町歩に過ぎない。但し山  
林は千九百町歩に近く、原野も百四十五  
町歩にのぼる。

住民は農蠶業を兼營し、米繭の産が尠  
なくない。

小學校は上條尋高(四學級)高倉尋常  
(三學級)、福山尋常(二學級)の三校を  
有し、青年學校、上條村圖書館もあり、  
山村ながら教育施設は充實する。須原ま  
で徒歩により、ここから小出町へバスの  
便がある。

### 入廣瀬村

東には會津との分水嶺たる越後山脈が  
連走し、南は越後駒ヶ岳の東麓より北は  
守門山に亘る地域を占め、面積一七・七  
〇七方里、郡の東部の廣大なる高原地域  
を占め、その間、黒又川、末澤川が縦横

に貫流し、北部にて平石川に合流し、破  
間川となつて西南方に流れる。

平地少く、部落は概ね平石川に臨んで  
點在してゐる。

往時、廣瀬郷と稱した地の一部で、上  
越線小出驛へ約五里半、上條を経て途中  
須原よりバスの便がある。村内名勝に布  
引の瀧あり、守門岳麓にかゝり、縣内第  
一の名瀑布で、下流なる破間川に産する  
鮎は本郡の一名産である。

本村では約二十年前から毎年五石取競  
作會なるものを行つて産米の増收に努力  
し來り、伸び上らんとする努力の歴史は  
相當長い間續き、一段から一段へ、常に  
上昇の跡を遺して來た。村には一万町歩  
の林野があり、木材伐採及び製炭業が盛  
んである。白炭を主とし、村内五ヶ所に  
木炭倉庫を建設して統制販賣を行つてゐ  
る。最近は百合の栽培、家内工業として  
の製紙、木細工が盛んになり、柿、甘藍  
の普及を見てゐる。

小學校は二校あり、高等科を置き、昭

和八年、五千餘圓を以て室内運動場が建  
設された。青年學校は、青訓時代縣の表

彰を受け、指揮刀を授與された。

## 南魚沼郡

### 總説

本郡は越後國の南隅に位し、  
東西九里二十町、南北十三里十二町の廣  
里を有し、東南は群馬縣利根郡並に吾妻  
郡に境し、西は長野縣下高井郡及び中魚  
沼郡に接し、北東は北魚沼郡に隣する。

面積は六十三方里二四六である。  
四方は山嶽峻嶺を以て圍まれ、恰も屏  
風の中に在るやうである。西南清津川の  
左岸では苗場山最も高く、海拔二千四百  
十五メートル、その北方中魚沼郡境には  
神樂峰、雁ヶ峰がある。群馬縣境には三  
國山脈が連互する。西方には西山山脈あ  
りて樽山、榊形山、高山、柄原峠等があ  
る。平地は極めて少く、たゞ魚野川及び  
その支流沿岸に限られる。河川の大なる  
は魚野川及び清津川の二である。

### 沿革

魚沼郡の創始は史蹟の微すべ

きものがないが、人類の棲息したのは、  
遠く石器時代に初まり、當時の遺物が今  
も發見されることがある。

鎌倉時代には於田庄の名見え、越後二  
十四庄の一にして、院の御領備中前司信  
忠預る所とある。本郡に賦役の課せられ  
しは、建久四年夏、源頼朝が富士野に狩  
した時を以て嚆矢とする。

當時、上下各五郷に分れ、上五郷とは  
湯山、關、富實、早川、大木六を指し、  
下五郷とは大池、美佐島、大巻、八海、  
新堀の總稱である。鎌倉時代の末には、  
伊豆守長久の支配を受けた。

その後上杉氏、堀氏を経て徳川時代に  
至り、高田城主松平忠輝の領となり、長  
嶺城主、長岡城主の支配も受け、一部は  
幕府直轄地にもなつた。



**區劃** 現在全郡を分けて次の二町十六ヶ村とされ、總戸數一萬一千六百戸、人口六萬九千八百餘人である。

**町** 鹽澤、六日  
村 三國、三俣、神立、土樽、湯澤、石打、中之島、上田、五十澤、城内、大巻、藪神、浦佐、大崎、東、伊米崎

**産業** 生産年額は五百六十數萬圓に上り、農業最も盛んにして、養蠶製糸の業がこれに次ぐ。

農産	二、九二二、三〇一圓
蠶糸類	一、一九〇、九〇九圓
畜産	一六二、九五九圓
林産	四三三、六五九圓
水産	二七、三〇二圓
工業	九一七、九三九圓
鐵産	四、九一〇圓

**人情** 本郡の人情風俗は概して質素簡樸である。これ本郡が地勢交通の不便なりしたため、勢ひ都會の風潮に遠去かり従つて郡民一般が領主の命令を従順に服膺した結果であらう。

所支所、土木派遣所、木炭検査所支所、郵便局、その他縣立六日町中學校、六日町實科高女、六日町圖書館等の教育機關銀行支店、産業團體等がある。

舊時、このあたりは上杉家の領地にて坂戸城はその累代の居城であつた。謙信もこゝで病死した。その後、堀秀治の公臣、堀丹後守直寄が、坂戸城を賜はつたが、慶長十五年、直寄は信州飯山より長岡に移り、次で村松城主となるに及んで坂戸は廢城となつた。明治三十九年町村合併の時、町制が布かれた。

この町より岐れて東南群馬縣に通ずる清水街道は、今、鐵道開通のため荒廢の極に達し、昔日の面目はなくなつた。東に三國の峻嶺あり、西に越後山脈連走しその中間に展開する魚野川盆地の中心都市で、昔は信濃水上交通の上限とされ、川の左岸に位し、入舟を以て殷盛を見せた。長岡より水路十六里、人口七千餘、郡内産業文化の中心地である。

坂戸城址、八箇の紅葉、藤上野原及び

義理堅きは本郡人士特有の美點にして隨つて村政の纏りよく、組合の制、隣保の宜は最も美はしく行はれ、吉凶相扶け水利の工事、道路の普請、或は害虫の驅除、惡疫の豫防等、苟も一村の利害に關することゝいへば、各自己を捨て、誠實その事に盡すなど、賞すべき點が少くない。

### 鹽澤町

本町は郡の中央に位し、東は魚沼川を界として中之島川及び上田村に接し、西は一帶の山を以て中魚沼郡に境し、南は石打村、北は六日町に連り、自然の形勢により四圍の區劃をなし、西部一帶の高地より魚野川流域に至る間は自然の傾斜をなし、伊田川、樺野澤川、鎌倉澤川等により灌漑の便がある。

面積一・六方里、戸數千二百餘、人口約八千人あり、舊幕時代には富貴郷と稱された地で、郡區改正以前第十三區小三區富貴郷と呼び、自治制實施に際して

鹽澤、中目來田、富貴、柄窪、吉里、大富、上島の舊七ヶ村を合せて一村を形成し、明治三十三年に至り、町制を布いて鹽澤町と改めた。

最近數年間に於ける生活の改善、社會施設の充實は、郡下第一と稱せられ、縣下に於ても模範町村の一に擧げられてゐる。特に納税に就いては、町長はじめ村當局者が率先して各部落を説き廻り、成績最も良好である。

生産物中の主なるものは織物、酒類、蠶繭、生糸等で、總額約百萬餘圓に上つてゐる。清水トンネルをくゞり抜けた上越線は本町に鹽澤驛を置き、またこの鐵道に沿ふて縣道が南北に走り、交通の便良好である。

### 六日町

郡の中央に位し、魚野川の流域にのぞみ、旅客の往來、物貨の集散頻繁なる繁榮の市街にして、警察、稅務署、區裁判所、營林署、蠶業取締所支所、穀物検査

池野世ヶ原の鴈岡並に古墳、上田八幡宮（一名矢落宮）の名所舊蹟がある。

### 三國村

郡の南端にあり、三國山脈を以て群馬縣に連り、西は苗場連峰を障壁として長野縣と境する。地勢高峻清津川の水源をなし、地域甚だ廣く、面積八・七六一方里に及ぶも、戸口は稀少である。

明治二十二年自治制施行に際し、淺見二居の組合役場を置き、三十四年これを合併して三國村と稱した。苗場山麓には數ヶ所に温泉湧出し、諸病に効を奏して浴客の來り治するもの甚だ多い。本村淺見、二居は三俣村三俣と共に、所謂三國の三宿といはれ、信越線開通前の要驛にして、大雪の候には、三宿に數百の旅人滞在せりと傳へ、諸侯の參勤交代にもこの街道を通過した。

特殊の山村野菜を産し、養蠶を行ふものあるが、木製品の如き特産品の製作に従事するもの多く、産業状態は優良とい

ふことが出来る。

新潟市を距ること約四十里、群馬縣に通ずる縣道の通過地で、交通は比較的便利で、車馬の往來頻繁である。

三國峠は、三國街道が三國山系を横斷するところを云ひ、南は上州路にして、諸侯の參勤交代も當峠を以てなされ、今は上越線開通し清水街道は荒廢したが、當街道は現に上野國への通路として用ひられる。

### 三俣村

郡の南方、苗場連山の東北に位する山間溪谷の僻地にして、東西一里、南北二里、面積四・一〇五方里あり、古來三國三宿中、比較的人煙の多いところであつた。上越線越後湯澤驛へ一里半、交通状態良好と云ひ難い。

耕地少く、田十町餘、畑五十數町歩に過ぎず、村民の多くは林業または手工業に従事し、指物、箱類、杓子、木炭等が主産物となつてゐる。



村内は掛貝温泉場あり、浴客極めて多く、また諸病に効く。

大正七年の大雪江りのため、全村全滅の悲境に遭遇したことあつたが、村民の協力、鐵の如き更生の意氣は、よくこれを復活し、以て現今見るが如き平和なる優良村となるを得た。

### 神立村

三俣村及び土樽村の中間に位置し、他村は廣大なるに反し、本村は面積僅かに〇・九七四方に過ぎざるも、これは地理的關係に因るものである。四周は山嶽を以て圍繞され、村有林野八百町歩あり植林に見るべきものがある。東西一里、南北は十八町である。

舊十ヶ村を合併して成る一村にして、神立とは神社領の謂なるべしといはれ、式内神社の名に因んで神立村と稱したのである。新潟市を距ること約三十五里の地に位し、村の兩端に縣道が走り、上越線湯澤驛へ一里弱、バスの便あり、交通

は稍、便利である。

米、藪を主産物とするが、耕地は僅かに田八十三町歩、畑七十五町に過ぎない風俗は醇朴、納税成績極めて良好で、幾度か表彰を受けてゐる。社寺には村社魚沼神社、大教院、泰宗庵、寶珠庵等がある。

### 土樽村

郡の南方東部にあり、三國山脈を分水界として群馬縣に境し、魚野川の水源をなす山村である。昔から獨立の一村であるが、村名の由來は今に詳かでない。

戸數三百六十餘、人口二千三百人に近く、面積は八・一八五方里である。村内に私立土樽圖書館、土樽産業組合、村社兩山神社、曹洞宗瑞祥庵、天台宗本明院等がある。

上越線に沿うて中里驛を置き、有名な清水トンネルは、一方の出口を本村内に持つ。上州と越後の境に要害たりし清水峠も、昭和四年十二月、胴體を開鑿貫通

され、同六年遂に世界有數の難工事も竣工を見た。新潟より江戸へは、昔は三國街道が主道であつたが、時代はめぐつて上越線の開通となり、新潟上野間の距離五六十マイルも短縮されたのだ。

清水峠の西には大剣太山あり、本村内に聳立する山丘の主峰である。

### 湯澤村

魚野川の溪谷地にして、西に高津倉山聳え、曾ては三國街道の要驛點として榮えたことあるも、現在は上越線の一邑となつた。しかし附近に温泉あり、冬季はスキー客に殷賑を呈する。六日町及び小出町へはバスが通ふ。

古來獨立の一村にして、嘗て隣村神立土樽と合して石白郷と稱した。その後湯澤村戸長役場の管轄となり、明治二十二年自治制施行して今日に至つた。

村内には溪流多きが故に、これを利用して電氣事業を村營としてゐる。また湯澤温泉、新温泉等、温泉に富むを以て村

有温泉を漸次改良して現代的設備をほどこし、浴客誘致の途を講じてゐる。湯澤温泉は湯澤驛の西北半里、魚野川左岸丘上にあり、單純泉で、中風に效がある。

この附近は日本有數の降雪地で、しかも東京より僅か數時間にて達せられる故、將來性あるスキー地としてシーズン毎に頭角をあらはし、温泉附近なる布場の練習場は初心者によく、大峰山、飯土山スキー踏破は熟練者に興味あるところである。この他湯澤不動堂、諏訪神社等の名蹟に富み、また村内には郵便局、銀行支店、發電所、青年會、圖書館、各種團體等あり、寺院に天台宗大岳寺、同本城寺の古刹がある。

### 石打村

越後山脈の東陰に位置し、魚野川の西岸に臨み、田園廣漠として耕耘の利を納むるに適地である。されば農蠶業は本村の重要産業にして、米の年産十數萬圓に上り、田畑併せて約五百五十町歩の耕地

がある。また村有林野は八百町歩にわたる。村民は植林に精勵するところあり、富裕な一村である。

明治二十二年上關村ほか二ヶ村を分立せしも、同三十九年合併して村名を改稱し今日に至つた。下一日市、關、關山、上野、上一日市、宮野下、君澤、大澤、大窪、南田中の諸部落を含み、面積二・八二六方里である。

上越線に沿うて石打驛を村内に置き、國道も通じ、小出町へは毎日バスが往復し、交通の便良好である。村内寺院として關興寺、大光院、大智寺、法授寺、宗善寺、藥照寺などが擧げられる。

### 中之島村

鹽澤町と魚野川を挾んで相對し、大里川は東南より、登川は西南より、共に本村地内に於て魚野川に合流する。この二川が作る三角點近傍は平地をなし、南は丘陵つゞき、飯土山が聳立する。

西方魚野川、東方登川の兩川に取巻かれてゐるが故に、中之島なる村名は出來たものと考へられる。

中子新田、舞子、萬條新田、姥島新田ほか十一部落より成り、面積二・〇七二方里にして、山林六百六十町歩、耕地は畑百三十町歩、田七百町歩である。上越線鹽澤驛へ約半里、交通の便は稍々良好と云ひ得る。

村内社寺に、村社木六神社、同石上神社、無格社八龍神社、天台宗大正院、同大林寺、同來泉寺、同安樂寺、曹洞宗實林寺、同文殊院、同龍泉院、同楞嚴寺等がある。

### 上田村

東南面に三國山脈の高嶺を負ひ、その支脈は村の東側を西北に向つて連互し、全村殆ど山嶽に掩はれた一村で、登川は村の南隅に源を發し、支流をあつめて北進し、村の西北に於て魚野川に合し、この合流點附近は、所謂鹽澤盆地の一部に



して平坦である。

舊上田庄に屬し、明治三十九年四月、町村合併以來變遷なく、その後の自治發展上に見るべきものある模範村である。長崎、瀧谷、蟹澤新田、清水、姥澤新田一ノ浦、早川、三郎丸、枝吉、雲洞等の部落を包含し、面積六・四五方里、上越線六日町驛へ二里あり、バスが通ふ。本村婦人會は明治四十二年の創立して會員四百名を擁し、銃後婦人の責務を完ふして成績がよい。村農會、在郷軍人分會、男女青年團、産業組合等も一業績の發揚につとめてゐる。

### 五十澤村

東南は三國の主嶺を以て群馬縣と境を劃し、地形は東北に長く南西に短く、高峯峻嶽起伏重疊し、魚野川の支流たる三國、五十澤の兩川は、村の中央を流れ、西北隅に於て合流する。

明治三十四年、東西南五十澤を合併して村制を施行した。五十澤は八海山の南

谷で、村名これより起つた。

三國川は溪流の長さ六里ばかり、水源を中之俣山に發す。大同方に三國山藥、魚沼郡三國山人等之所傳方濕毒結毒、かのししのつの黒燒、きはだ、二味粉製、而温酒用とあるは、この三國川の山谷の村民の所傳である。また八海山は越後山系駒が嶽の西に並び、標高一千七百米、山頂に八海明神を祀り、万年堂といふ。

村は宮、津久野、津久野上新田ほか二十大字より成り、面積一〇・三六五方里に及ぶ。上越線六日町へ二里、縣道野中六日町線及び大崎宮ノ脇線が通り、車馬の便がある。

牛ヶ嶽、卷機山、才月山等の名勝多く社寺には無格社二、曹洞宗萬松寺、眞言宗養徳寺、眞宗正法等がある。米、藪、木炭を主産物となし、養蠶實行組合、森林組合その他各種團體の活動は全體主義的統制下に好績を擧げてゐる。

### 城内村

上越線五日町驛の東方につゞく農村にして、東北南の三方は三國山脈に屬する山嶺を以て圍繞され、西方のみ展けて魚野川盆地に連つてゐる。魚野川の對岸は大卷村である。

八海山の麓なる長森の地にして、古くは藪神庄城内郷と稱した。今は上原、上出浦、下出浦、上藥師堂、野際、妙音寺ほか十五部落を包含し、面積三・〇九方里である。

北越軍記に

永正七年六月、山内管領上杉顯定長尾爲景と椎屋合戦、無勢故上州へ被引取候、爲景の相圖にて高梨攝津守大軍にて出會、廿日妻有庄長森原にて又合戦、上杉方總敗軍に成顯定討死

と載せ、當村が古戰場たりしを傳へるが妻有庄といふは間違ひである。

大字田崎は長森の南にて三國川に近く古くは千屋郷の地で北魚沼郡に屬してゐ

たところである。

社寺には村社八海神社、無格社一社、龜福寺、西珠院、玉泉院、榮久院、長福寺、常樂院、大勝院、法音寺、萬願寺、眞淨寺、善照庵等を有し、法音寺は大字藤原にあり、俗説に藤原不比等の子麻呂政照の創立といひ、上杉氏中興の寺で、寺領百二十石を有つてゐる。

### 大卷村

越後山脈中、笠置山の東麓にあり、西半は山林原野に掩はれ、東半は魚野川盆地にして耕桑の地に富む。大字五日町は村の東北隅に位し、三國街道に沿ふて街衢をなす。五日町とは、南方の都邑六日町及び北方藪神村の九百町、伊米ヶ崎村の西部なる十日町部落と共に興味を喚起する地名なるも、その由来は明かにすることが出来ない。

村は四十日、奥、寺尾、大杉新田、北田中、宇津野新田、青木新田、野田、これに前記五日町を加へたる諸部落より成

### 藪神村

郡の西北部、浦任村の南に接し、地形稍々矩形状をなす。西は大部分山地丘陵にして、東方に魚野川盆地に屬する平地が僅かながら展開する。

城山新田、名木澤、今町、九日町、市野江、芹田の大字より成り、面積一・八一二方里にして、北魚沼郡にも同名の村がある。上越線浦佐驛へ一里、バスの便あり、交通は比較的便利である。

人口四千人に近く、殆ど全部が農蠶の業を以て生計を樹て、米と藪は本村の主要物産である。土地は有租地千二百二十餘町歩にして、耕地は水田三百十餘町歩

畑地三百六十餘町歩あり、山林は四百八十町歩の多きによる。

藪神尋常高等小學校は十一學級編成、青年學校を併設する。村にはまた村立圖書館を有す。社寺は村社若宮八幡宮、無格社一、圓通院、善應寺、大龍院、洞源寺、福嚴寺、南方院等である。

### 浦佐村

郡の西北端に位し、北魚沼郡と地を接し、魚野川西岸にあり、對岸伊米ヶ崎村と共に本郡北面の門戸を扼してゐる。六日町を去る水路四里、更に二里にして小出町へ出られる。

浦佐、五箇、蝦島の三大字より成り、面積一方里、上越線浦佐驛より、國道は村を南北に走り、バスの便がある。大字浦佐は背後に山嶽を負ひ、街道に臨み、小市街を形成する。

村内に普光寺あり、毘沙門堂と稱し、古文書を襲藏することの多き、縣下第一に推される。眞言宗にて、本堂は大同一



年の造營である。この行事なる眞堂押には、雪中も厭はず、十里二十里の遠くより男女來り集り、灯ともし頃に至つて寺内に入るや、衣服を脱棄て、男は眞裸になり、女も單衣に細帯一本をしめて堂内に入りて七押七踊する奇態なる祭りが行はれる。

## 大崎村

魚野川の東岸に位置して藪神村と相對し、東南は峰巒に圍繞せられ、中央に方谷山が起伏し、地勢高低一樣ならず、西北面は水無川の扇狀地形にして桑園が多い。大崎、柳古新田、今町新田、海士ヶ島新田、穴地、穴地新田、水尾、水尾新田等の部落より成り、面積一・一三五方里である。

足利末期の頃より上杉氏領にして、その後幾度か變遷あり、徳川幕府の譜代の諸侯をして交々これを治めしめた。明治維新には水原村の支配をうけ、柏崎縣となり、同六年新潟縣管轄に移り、同三十

四年水尾村を併せて大崎村と稱した。

上越線五日市驛へ一里、縣道通り、バスの便あり、交通不便でない。村社大前神社は式内古社として知られ、その他村社八海神社、無格社十二社、天臺宗三法院、曹洞宗龍谷寺、眞言宗胎藏寺等の社寺がある。

## 東村

郡の北端にあり、東に山嶽をめぐらし、北魚沼郡との障壁をなし、地勢高燥、西方は水無川の形成する扇狀形耕地にして蠶桑地が多い。

組織は茗荷澤、黒土、黒土新田、船ヶ澤新田、茗荷七新田、荒金、堂島新田、桐澤、荒山、山崎、大桑原、門前ほか五部落を合併して一村となし、面積四・五五方里にして、耕地は田三百三十餘町歩、畑三百二十町歩を有す。米と蠶は本村の主要物産である。六百戸の住民は殆ど全部が蠶蠶に従事する。小學校は赤石、三田の二校を有し、共

に高等科の設置ありて七學級に編制される。私立赤石圖書館がある。縣道の通過地にあたり、小出町及び五日町へバスの便あり、交通状態は比較的良好である。村内社寺には村社坂本神社、無格社二、成就院、寶明院、來寶院、淨光寺がある。

## 伊米ヶ崎村

本村は浦佐村と共に郡の北端を占め、北魚沼郡小出町と相對する。東は鳴藏山の山脚に壓され、東南には笠倉山の餘脈があり、共に北魚沼との郡界をなす。西方は魚野川盆地にして、小出町から六日町に至る縣道の通路にあたる。また南は東村に接壤する。

虫野、十日町、岡新田、大浦新田、大浦、千溝、板木、原虫野新田、伊勢島新田等より成り、部落名が示す通り、新田の多い村である。面積一・三五方里に及び、上越本線小出驛へ一里、バスの便もあるも、東半は交通不便である。

村内八色原は水仙の名産地として知られる。村社諏訪神社、無格社一、曹洞宗西福寺、同寶泉寺、同林泉庵、眞言宗遍

照寺、同頼寶院、同大京院等の社寺を有し、村風醇朴、信仰の念に富み、且つ愛郷精神の徹底した村である。

## 中魚沼郡

地志 郡の地形は恰も木の葉のごとく、信濃川が中央を貫くは葉の脈線に似て北流して岩澤橋を過ぐる間、諸溪川の集注するは支脈に類し、稍々廣溢して郡界を去る葉柄の如くである。

川の東を河東郷と稱し、西を河西郷といふ。山峯蜿蜒として郡界を限り、東は中城、湯澤、高石の諸嶺を以て南魚沼郡と境し、南は苗場、小松原及び高倉山嶺の連脈を以て信濃國に接し、西は山伏山の雁ヶ嶺等の諸山脈を以て東頸城郡につらなり、北は榎峠を以て刈羽郡に、雪嶺及び十八澤川の溪流を以て北魚沼郡と相隣りする。

郡内は即ち葉の支脈のごとく、東より信濃川に注ぐは志久見川、中津川、清津

名が出た。長尾記によれば、

長尾信濃守能景府内城に治す、長男太郎房景をして上田城に居らしめ、波多岐莊を併有す。

とあり、郡に存在する古器の銘及び古書に波多岐莊の名明記し、能景の名もまた出てゐる。

蓋し魚沼郡は古來越後七郡の一にして、舊史に伊乎乃、または宇乎乃麻と稱し、上古は信濃川流域に屬する沼澤地であつたといふ。

産業 山に倚り水に臨みたる地形なれば、東西より傾斜し、平坦の地も少なからずと雖も、耕地の面積は山林原野の五分の二を越えない。水田六千餘町歩、畑地七千餘町歩であるが、五穀豊かにして要用に剩り、蠶また風土に適し、木材に富み、淡水産の漁魚多く、越後南方の寶庫といふも敢て誇稱でない。生産總額は二千八百八十餘萬圓に上り、新潟縣四市十六郡中第六位にあり、これを産業別に分れば次の通りである。



農産	四、〇五六、八三九圓
蠶糸類	六五〇、〇〇三圓
畜産	一四六、二五〇圓
林産	五六七、八七三圓
水産	二八、一二〇圓
工業	五、六〇一、一七〇圓
礦産	一六二、三八六圓

農業技術の研究及び奨励をはじめとし農事教育の普及、農事道德の涵養等、農事改良には郡村農會及び産業組合等に於て常に努力を怠らない。養蠶は天明四甲辰年、外丸村に於て従事せしを本郡の嚆矢とする。十日町は機業、殊に麻布織、絹織の盛んな地だ。

**區劃** 郡内を分ちて二町二十ヶ村とし、町村名は左の如し。

**町** 十日、千手  
**村** 中條、下條、岩澤、眞人、橋、仙田、上野、吉田、貝野、外丸、上郷、若ヶ崎、中深見、下船渡、倉俣、田澤、水澤、六箇、川治、秋成

而して戸口の最も多いのは十日町で、

六千三百人を越え、少いのは六箇村の七百餘人である。郡内總戸數は一萬五千六百四十戸、總人口は九萬五千五百人弱である。また郡の面積は六二・五九三方呎にして周圍一四六呎である。面積に於ては十六郡中第七位を占める。

**名勝** 中深見村にある七釜の瀧は、瀑水が數級に分れ、懸崖を落下する奇觀と壁立の岩名また攝理甚だ神巧にして國內屈指の景勝、また同村の小出鑛泉、上郷村の宮野原鑛泉、秋成村の結束鑛泉も知られる。

### 十日町

郡の中央、信濃川右岸に臨み、東は山岳を以て南魚沼郡と境する。本縣南部山間の大邑にして人口一萬を算し、明石縮の産を以て名高く、本郡商工業の中心地である。

往昔、南北朝時代は、南朝新田家の所領に屬し、後、上杉氏これに代り、會津領となり、近隣諸村を統べて十日町組と

稱した。徳川時代には諸侯の交代常ならず、以て明治維新に及び、明治六年新潟管轄となつたのである。上越北線より岐れたる十日町線通じ、南方飯山鐵道と連絡する。縣道並に國道十號線通じ、東頸城郡松代、三島郡來迎寺及び長野縣飯山へはバスが通ふ。

娘ざかりをなじよして暮す  
 雪にうもれてまた仕事  
 花の咲くまで小半年

と十日町小唄にあるやうに、本町名物は雪と一千餘年の歴史を有する織物であらう。古來この地方は縮布の原料たる野生の苧麻を多量に産し、空氣は常に濕潤でよくその取扱に適し、これを晒白するには雪晒しにするなど、少からず自然の恩恵に浴してゐる。また積雪期間も約五ヶ月の長きにわたり、その間碌々徒食せねばならぬ農家にとつては副業の尤なるものとして自然の發達を促し、寛文の頃には縞または緋を織り出す方法が發見され劃期的發展を遂げた。文政の末には縮縮

を産し、次で輕快優雅な透綾織を産する等、種々變遷を経て今日に至つた。現に明石、絹織、意匠白生地、御召、御代喜銘仙等が織り出される。町には郡を單位とする織物同業組合の事務所が置かれる

### 千手町

信濃川を挟んで十日町と相對し、東に田圃あり、西半は丘陵をなす。水口澤、中屋敷、東善寺、上新井、山野田、沖立鶴吉ほか七大字より成り、面積一・〇〇八方里、十日町へバスの便がある。榮行寺、淨雲寺、長福寺、不動寺等の寺院あり、千手觀音堂は越後第十番の札所である。

古くは千手郷といひ、その驛市を中屋敷と呼んだ。明治維新の際柏崎縣に屬し同二十二年町村制實施にあつて接續町村の分合行はれ、大正十一年舊千手町村と中野村とを合併して千手村を置き、その後、人口逐年増加し、鐵道省信濃川發電所、六日町區裁判所出張所、六十九銀

支店等が設立され、商取引は活潑となり金融狀態良好を極め、商工業は年毎にその規模を擴張した。殊に鐵道省發電所はその設備最も進歩せる近代的且つ國家的工作にして、當地も茲に於て、昭和九年八月遂に町制實施の運びとなつた。

本町は右の如き幾何級數的發展を招來し、商工業盛なりと雖も、なほ住民の多くは農業にして、町當局では數年前より部落農區の助成、部落採種組合の助成紫雲英の栽培奨励、各種試驗副業の奨励などに努め、商工業及び交通の發達と並行的に、本町は全般的躍進の一途を辿つてゐる。

### 中條村

本村は相當古くより開けたところで、妻有郷大井田郷と稱し、七百三十餘年には木會義仲の領地であつた。後、新田氏の支領となり、更に大井田氏の領有に歸し、天正年間には、上杉家に屬し、幕政の頃は徳川家直領にて、代官所の支配を

うけた。かくて町村制實施の際、中條、尾崎、四日市、四日市新田、新庄を以て中條村と稱し今日に至つた。

住民の八割は農業に従事し、米藁の産が多い。また絹織物、竹細工、木製品の産は各々二萬圓以上の年産がある。副業としての百合及び紫雲英の栽培は郡内の嚆矢をなした。

學校及び官衙團體としては、飛渡第一飛渡第二、新庄、中條、大井田の五小學校並に郵便局、停車場、巡察駐在所、傳染病院、信用組合三、その他組合四があり、交通の便よく、村は常に活氣に溢れてゐる。

### 下條村

郡の北端に位し、東方は山脈を以て北魚沼郡と境し、西方は信濃川に臨み、南は中條村、北は岩澤村に隣接する。

地勢は村内東方三分の二は山岳地帯にして漸次西方に低く、平坦なる耕地は村の中央を流れる貝野川兩岸と、信濃川の



流域並に南北の村境を洗ふ檜澤、飛渡兩川の沿岸にある。

生産物の主なるものは、米を主位に、蠶繭、桑葉、蔬菜、苗木等である。産業組合は全村を區域とし、農業倉庫一棟を有し、組合員約五百七十人である。

教育機關としては下條尋常高等小學校及び青年學校がある。

上組、上新田、寺澤新田、村山新田、東下組、下組、中新田等の部落より成り大字上組には村役場及び無集配三等郵便局がある。交通は鐵道及びバスの便ありて良好である。

### 岩澤村

本村は東西一里十町、南北三十町あり郡東北部の關門にして、信濃川に臨み、川に沿うて國道が貫通する。南に下條村あり、東南は山岳迫り、分水嶺を以て北魚沼郡と堺する。

戸數四百餘、人口二千三百を越え、住民の多くは蠶蠶業を營み、米、桐材、木

炭、繭、醬油の産がある。村民は勤儉精勵、自治體の完備見るべきものあり、殊に田畑の開墾事業は他の範とせられる。

建武元年、新田義貞の臣栗田左近頭が本村地内に築城せしことあり、その後、幾多桑畑の變あつたが、往昔より岩澤村と稱してゐたことには變りがない。明治二十二年町村制實施の時、下條村のうち豊久新田を割き加へて十四部落を以て一村とし今日に至つた。

### 眞人村

信濃川の西岸に位し、岩澤村と共に本郡の北門を扼するところで、西北二面には山岳を負ひ、刈羽郡及び北魚沼郡と境界を接する。

昔時より獨立の一村にして、町村制施行後も分立併合等のことなく、北魚沼郡界雪峠の傍にある山村である。

面積一・四九八方里にして、産物は米、麥、繭及び木炭を主とし、いづれも相當の額に達してゐる。縣道は村内を通り、

十日町線越後岩澤驛へは僅かに二十町、交通の便は悪くない。

小學校は眞人尋高（七學級）若柄、北山各尋常（共に二學級）の三校を存し、分教場を二ヶ所に置き、教育施設は宜しきを得、青年團、在郷軍人分會等團體と相提携して村教育の充實向上が計られ、成績良好である。大字芋坂の雪峠は戊辰の役の古戰場である。

### 橋村

眞人村の南に接し、東は信濃川の巨流をのぞみ、東半は地勢平坦にして耕地桑園となるも、西半には丘陵起伏する。仁田、野口、木落、寺ヶ崎、長井新田、上村新田を含み、面積〇・七八九方里、南は上野村に、西は仙田村に、東は下條村につゞく。

准后道興回國雜記に、柏崎より出て魚沼郡を横ぎり上州揚原に至る紀行あり、中に本村大字木落の名が見える。長井新田は與治右衛門氏、上村新田は上村藤右

衛門氏の開拓といはる。縣道は村を縦貫し、小千谷町、十日町へはバスが通ひ、交通の便良好である。

産業方面では産米品種の統一を行ひ、販賣を統制して良成績を収めてゐる。更に有畜農業も普及せられ、養豚は殊に盛んである。また紫雲英の栽培は郡下第一の稱がある。その他百合の栽培、薬工品の製産が、近時その産額を頗る増大しつつある。

小學校は橋尋常高等小學校たゞ一校である。農業青年學校を併設する。在郷軍人分會、男女青年團、婦人會等では、進んで村民の指導誘掖に當ると共に、率先銃後の援護に精進努力してゐる。

また村内社寺には諏訪神社、薬師堂、観音堂がある。

### 仙田村

郡の西北部にありて千手町の西につゞき、村の西は刈羽郡、南は東頸城郡との境界をなす。宇高倉、霧谷の二部落は桑

名藩御預に屬したことあり、その東南は山地である。他の諸部落は悉く徳川の直轄地であつた。

東西一里十町、南北三里二十町、面積二・六〇五方里あり、古來村治優秀、模範村として知られ、十二ヶ條から成る村訓がある。修養團體にも少年の學友會、青年の青年團、壯年の農友會、戸主ばかりの新年會、老人の行座會等がある。村農會、在郷軍人分會、婦人會の活動も盛大である。

村社新潟海川本神社は祭神建御名方尊で、境内百二十坪、祭日は八月二十六七の兩日である。相國寺は松林山と號し長安寺六世量室存應和尚の開山、境内千五百五十坪に及ぶ。その他木股地藏、枳形城址等がある。

### 上野村

本村は往昔新田義貞築城の地にして、後、上杉氏の臣上野中務大輔長安これを繼ぎ、白川領に屬した。明治維新後、一

時柏崎縣に入り、次で新潟縣管轄に變じ同二十二年、自治制實施と共に上野村と稱し今日に至つた。面積〇・五四方里あり、縣道は村の中央を走り、東頸城郡に通じてゐる。

産業は、山岳地帯は植林よく行はれ、信濃川沿岸には田畑よく拓け、地味肥沃で農産に富む。農家の指導は村農會が主體となり、部落農區を六區に分ち、品種の統一、販賣の統制など頗る好成績を示し、各農區活動も良好である。更に農會では農會時報を發行し、指導機關としてゐる。副業には養豚及び蠶製製品が多く、副業經營の合理的な研究等も着々進められてゐる。

村内長徳寺は郡下第一の名刹にして參詣者が多い。

### 吉田村

本村は、明治三十五年四月、舊吉田村、鑑島村、眞田村の三村を合併して成り、十一部落を含む。舊吉田村は稻葉、山谷



小泉、樽澤の四部落より成り、舊鏡島村は北鏡坂、南鏡坂、高島の三部落、舊眞田村は眞田、鉢中平、中平、名ヶ山の四部落より成る。地積二千九百八十町歩、人口約三人を算す。

主要産物は米、大豆、小豆、粟、稗、藪等の農産物である。部落農区は十二に分ち、従来の金肥が殆ど自給肥料に代つたことは本村農業の特記さるべきものである。副業としての竹工品、柿栗等の産が多い。吉田、鏡島、眞田、名山に小學校を置き、各校に青年學校が併設され、児童及び青年男女の教育状態は他村に比して向上の域にある。

### 貝野村

建久年間の記録によれば、本村以北千手町に至るまでを總稱して貝野郷と呼んだといふ。明治五年七月、區制施行の際馬場村と共に第九大區小七區に編入せられ、同十二年、區制廢止と共に貝野村と呼ぶに至つた。郷名から出た名である。

### 外丸村

往古、姿内地に毛地と呼ぶ一部落あり、今日の孟地であるといふ。嘗て島とも稱し、宮中より姿に至るまでの沿岸一帯の平地に數十町歩の良田があつたが、文久の頃安養寺島を、慶應三年に堀の内島をいづれも洪水のため流失し、往時の面影を存するは僅かに中島あるのみである。面積二方里に及び、人口二千五百人かをぞへる。

産物の主なるものは米、木炭、藪、鯉等で、副業に養蠶が最も盛んである。教育機關及び官衙としては貝野尋常高等小學校、青年學校、役場、巡查駐在所等がある。

### 上郷村

沿革を按ずるに、往昔、南北朝時代には南朝の忠臣新田氏に屬し、當地城峰の豪族里見氏の麾下にあつた。後、上杉氏の所領となり、明治維新に及んで、小千谷民政局支配柏崎縣に編入され、同六年新潟縣管轄に移り、二十二年自治制を施行して今日に及んだ。

社寺には村社矢放神社、曹洞宗久昌寺同善玖院がある。

産物は木材、米、藪、下駄等にして、農産物の増産、開田開墾等には當局者が常に留意してゐるが、本村は地勢一般に高く、山林地帯多きため、林野産物の向上策が殊に重視され、製紙の發達に意を注がれてゐる。また最近の家畜の飼育、肥料の自給が奨励され、この方面にも相當の成績を擧げてゐる。すでに昭和九年農業倉庫も完成し、當局の指導と村民の自覺は産業に劃期的發展を齎した。

小學校は三校あり、各校に青年學校を併置する。官公衙には村役場、郵便局、營林署出張所等あり、また銀行支店も置かれてゐる。

### 蘆ヶ崎村

本村は郡内第一の高原地帯を占め、信濃川水面より八百尺高く、海拔一千三百五十尺である。毎年秋十一月より翌年五月までは降雪期のため、交通は至つて不便といふべく、自轉車が交通機關の最たるものである。面積一・五〇四方里、人

口約三千六百人をかぞへる。

徳川時代には松平光長の領地たりしところで、寛文三年高田領となり、明治維新後、町村制實施に際し谷内、芦ヶ崎、赤澤を以て芦ヶ崎村とした。

産物の主なるものは米及び蔬菜にして最近に養蠶、養畜の業も相當發達して來た。昭和七年に更生指定村となり、當時樹立せる計畫は殆ど實行されて最初の目的に近い實績を擧げた。殊に産業道路の開通と青年教育の刷新に見るべき點が多い。教育の重視は、實に、本村の傳統的村是である。ために小學校、青年學校の成績の良好なることは郡下にも有數と稱される。

なほ團體としては産業組合、村農會、養蠶組合、在郷軍人分會、消防組、青年團、婦人會その他があつて産業の發展、教化の徹底、社會奉仕の實踐にあつてゐる。

### 秋成村

郡の南端に位して長野縣と堺し、中津川の急流に沿ひ、地勢高峻、峻崖高峰屹立する。秋成、結束、大赤澤、穴藤分の四大字より成り、面積三・九一七方里に及び、飯山鐵道外丸驛へ一里半、自動車の便を有す。

壽永二年の昔、源氏に追はれた平家の一族が逃れてこの地に住居して以來部落をなすに至つたもので、その後、天和二年及び寶曆七年の二回に互つて檢地のことあり、昔時は御天領にして金納地であつた。多年にわたる幾變遷を経て後、明治の御一新に至り、同二十二年、自治制を施行した。

### 中深見村

米、木材、蔬菜を主なる産物とし、年産總額は約二十萬圓に上る。また村内には結束鑛泉、馬龍、猿飛、不動堂等の名勝があり、杖を曳く者の數も多い。

東西は一里十町、南北は三十五町の本



村は、背面は苗場山脈の連峯によつて自然の丘陵がつくられ、地は漸次傾斜し、部落の所在は嶮岨相半ばしてゐる。

地勢の關係上、産業の發達は遅々たるものであつたが、村民の一致努力精勵の結果は、近來、面目大いに改まり、殖産上の進歩動もすれば、隣邑を凌駕せんとする形勢を示すに至り、桐材、透綾織の産多く、産業組合、蔬菜組合等の組織あり、相聯携して産業の發達に一層の拍車を加へてゐる。また嘗て納税成績優良村として表彰されたことがある。

天文年間、上杉謙信の所領であつたが後、幾變遷を経て明治維新に至り、新潟縣の管轄となり、同二十二年村制を實施して今日に及んだ。

村内には龍源寺、大龍院の名刹、小出鑛泉、田代の七ツ釜瀧の名勝がある。

### 下船渡村

土地概して平坦なるも、南には丘陵起伏し、西方一帯は信濃川に臨み、牛津、

清津の二川がこの間に介在する。これより北方數里は中之島の稱がある。國道は村の中央を貫通し、大割野區は人家稠密して小市街をなす。郡中屈指の物産の集散地たると共に、東洋著名の發電所ありて活氣を呈す。新潟市へ二十九里、飯山鐵道外丸驛へ一里、十日町、飯山へはバスの便がある。

鎌倉時には城氏と佐々木氏が交々領主となり、その後室町時代には上杉輝虎、同景勝が相次で領すること二十餘年、爾後變遷を繰返して明治維新に至り、小千谷民政局柏崎縣支配より新潟縣管轄に移つた。大字大割戸は郡内有數の農産物集散地である。

東西一里十一町、南北三十三町、面積〇・八〇四方里あり、村には官公署、銀行支店、産業團體の數が多い。

### 倉俣村

本村は縣道を以て小出温泉に通じ、猶清津川沿岸、深見名の名勝七ツ釜に至る

里道の關門に當り、飯山鐵道田澤驛へは一里半である。東北は清津川の溪流に沿ひ、中央を釜川が北流し、沿岸の耕地から獲れる米穀は品質佳良を以て聞え、また本村は織物の産地である。

往古の倉俣郷本幹にして、和銅年間の開發なりといふも詳かでない。倉俣城址があるが、城主は不明。明治二十二年、下船渡の一部小出新田を割いて十一部落を合併し倉俣村と稱した。現區域は東西二十七町、南北二里七町、面積四・七一三方里である。

村内小松原山の半腹には七ツ釜の瀧の奇勝がある。直下三十丈ばかり、瀑布數層に分れ級をなして落下する。兩岸は巉岩削れるが如く、苔滑かに松は緑にして風景絶佳、實に縣内屈指の名瀑である。下流は釜川となる。

### 田澤村

信濃川の東岸に沿ひ、西南は清津川の溪谷にのぞみ、東に當間山及び高津倉山

の嶮嶺を負うて西北に傾斜面を作る。地勢概ね山地なるも、信濃川沿岸に二百餘町歩に五つて耕地整理されたる田圃連り住民は農業を主とし、萆蔴、木炭の副業も盛んである。

村内に桂城址あり、清水采女がこれに據つたといはれる。舊幕時代は徳川氏直領にして、明治六年六月より新潟縣管轄となり、同十二年に至り二十三部落を合併して田澤村と稱し、自治制自施の際、これを引繼いで今日に至つた。

東西は一里十六町、南北は二里十町、面積二・五七方里あり、交通は縣道が村の中央を貫通して十日町へバスが往復する。また飯山鐵道沿線にして田澤驛を有し、交通至便である。

### 水澤村

本村の東は六箇村及び南魚沼郡石打村に接し、西は貝野村、吉田村に、南は田澤村に連り、北は川治村に界する。面積二方里、人口六千七百人である。

産業は農業最も盛んにして、農産總額二十五萬圓に達し、そのうち米が第一位を占め、甘藷、蕎麥、大豆等がこれに次ぐ。副業の筆頭は蠶繭である。その他木工品、藪工品、清酒の産も尠くない。産業組合は、最近に至り業績頗る顯著なるものあり、殊に信用部に於ける貯金の増加は著しい。

教育機關としては尋常高等小學校、尋常小學校、分教場二、實業青年學校等があり、就學率、出席率は近郷に見ない好成绩を示してゐる。

村内の天然記念物及び名勝としては、猫石、古城址、黒澤躑躅原等がある。猫石は隣村石打村に面する當間山の中腹にありて、格恰も猫に似たるがために此の名がある。古城址は馬場の北隅にあり、約一千坪の境域にて墮跡なほ存し、口碑に北大井殿の居城であつたと傳へられてゐる。

### 六箇村

信濃川の右岸にありて十日町の南に接

### 川治村

郡の東端に位して、山嶺を以て東は南魚沼郡鹽澤村に連接する僻地の小村にして、西南は水澤村に隣接する。

昔、建武年間、新田義貞の臣が當地に築城したと傳へられる。後、羽根川形部長尾義景これを繼ぎ、以來羽根川郷に屬し、六部落を合して六箇村と稱し、明治維新に至つた。面積一・〇〇九方里にして、有租地八百町歩に餘り、耕地は水田約百五十町歩、畑地約百町歩あり、山林は五百三十町歩弱である。米と藪を主要産物とする。村には曹洞宗祇園庵、二ツ屋池、謙信通路の遺跡たる秋葉山城址等の名所舊蹟がある。

十日町驛へ二里、本村は、往昔より關東へ出づる三國峠と稱する要路に當れるを以て、當時より人馬の往來頗る頻繁を極め、道路大いに開墾せられた。依つて交通は至便である。



壤し、十日町と共に透綾織の名産地として著聞する。東には山嶽連互して原野山林が多い。川治川は八箇川とも云ひ、羽根川と相並行して信濃川へ入り、この邊を通俗に羽川郷と私稱する。

土地は有租地千四百五十町歩にして、耕地は田二百八十餘町歩、畑二百四十町歩弱であるが、山林は多く八百九十町歩に近い。産物には前記透綾織と共に米繭がある。

〔南北朝時代〕 越後守新田義顯南朝の命により赴任せしより、貞治三年、越後守護上杉憲顯まで六世。  
〔足利時代〕 越後守憲榮より上杉景勝まで六世。  
〔豊臣氏時代〕 堀秀治、同忠俊。  
〔徳川時代〕 松平忠輝をはじめとし桑名城主越中守定敬に至る十八世。  
幕末頃は幕府領並に椎谷藩本管、桑名與板、上之山諸藩の支管及び旗下の士の知行所であつたが、明治維新後柏崎縣及び椎谷縣の二管轄に分れたが、明治六年新潟縣となり今日に至つた。

## 刈羽郡

**地勢** 西北一帯は海に臨み、東は三島郡、南頸城、魚沼の諸郡に境し、西南東は山嶽相連り、自ら一區劃をなし、中央以北の地は、鯖石川、別山川等の流域にして平野多く、土地稍々膏腴、農七商工漁各一の割合である。

**沿革** 上代の事は記するに由ないが、こゝに王朝時代よりの領主沿革、降つて明治維新後、管轄沿革を略記すれば、  
〔齊明の朝〕 阿部比羅夫  
〔文武の朝〕 威奈大村を始として中世以後、平維茂の裔城資長、長茂、共に越後守となる。

〔鎌倉時代〕 右大將源頼朝天下を一統するや越後守安田義賢より元徳二年越後守北條仲時に至る十四世。

地理學上、中下越の西南部に位し、不規則なる矩形をなすを本郡の地勢とす。縦凡そ七里半、横凡そ六里、その面積二十二方里五分である。

〔鎌倉時代〕 右大將源頼朝天下を一統するや越後守安田義賢より元徳二年越後守北條仲時に至る十四世。

〔南北朝時代〕 越後守新田義顯南朝の命により赴任せしより、貞治三年、越後守護上杉憲顯まで六世。  
〔足利時代〕 越後守憲榮より上杉景勝まで六世。  
〔豊臣氏時代〕 堀秀治、同忠俊。  
〔徳川時代〕 松平忠輝をはじめとし桑名城主越中守定敬に至る十八世。  
幕末頃は幕府領並に椎谷藩本管、桑名與板、上之山諸藩の支管及び旗下の士の知行所であつたが、明治維新後柏崎縣及び椎谷縣の二管轄に分れたが、明治六年新潟縣となり今日に至つた。

石、北條、田尻、北鯖石、西中通、中通刈羽、二田、内郷、荒濱。

移入貨物の主たるは外米、肥料、太小麦、茶、綿、砂糖等である。

日本海沿岸に位する本郡の首邑にして長岡市と共に中越の名邑である。日本石油の大製油所あり、新津、長岡とともに石油都市としても名高い。

**産業** 生産總額は二千八百十數萬圓に上り、郡市別の第七位にある。そのうち鑛産額が三分の一以上を占め、農業がこれに次で六百二十餘萬圓に達する。作付反別は開墾または耕地の整理によつて年々増加の傾向を示してゐる。

水産は五万三千圓、林産二万八千圓の年産で云ふに足りない。

近世、桑名松平氏が陣屋を置いたところ、その邑六萬石と幕府公領五萬石を兼治した。天保六年には上州館林の浪人生田萬の門弟を糾合して陣屋を襲ひたる騒動あり、その所爲は大鹽平八郎の亂に似てゐる。號して柏崎騒動といふ。明治戊辰の役には、桑名藩主松平定敬が伏見に破れてこの地に走り、會津と連携して東軍に抗したるも敢なく敗れた。後、この地に柏崎縣廳置かれ、更にその後五年にして新潟縣となり、郡役所が設置された。舊柏崎町を中心として、大正十三年には大洲、下宿の兩村を、大正十五年には比角村を、昭和三年枇杷島村を併せ、大柏崎建設は徐々に進められた。

鑛業生産は石油の採掘精製を以てその最たるものとする。産地は二田、内郷、刈羽、高濱の町村一帯にて、總稱して西山油田といふ。工業生産品としては織物銅鐵器、漆器、木工品、瓦、玻璃、紙類等その種類少なからざるも、産額は六百二十萬圓にして農産物と殆ど差がない。

その他社寺名所として柏崎神社、飯桶山香積寺、金沙山閣魔堂、大洲村の極樂寺、豊洲濱、番神岬、下宿浦、小松島、縣社三島神社、茨目の肩賀理松、中鯖石の不動瀧、上小國の大塔塚、横澤の瑞音院及び春日神社、中里の日吉神社、七日町村の古塚、比角の羽森神社、團子山の桃林、西中通の土合拘留孫佛、刈羽村の桃林、二田物部神社、内郷村峠の藥師、青山稻荷神社、椎谷觀音、石地の懸橋寺

など有名である。

商業關係は、往時柏崎港を中樞とし、殆ど勢力を此一ヶ處に集中せし觀があつたが、北越鐵道及び越後鐵道開通以來形成一變し、海運の便と相俟つて縣外諸地方と密接なる取引關係をなすに至つた。

而して移出貨物は米、石油、大小豆、織物、果實、鮮魚をその主なるものとし、

大柏崎建設は徐々に進められた。

## 柏崎町



北面には滄溟の日本海を隔て、遙かに佐渡と相對し、面積〇・六九方里あり、越後の柏崎として一時は縣廳の所在地にまで殷賑を唱へられた本町も、數回に亘り全町を嘗めつくした火災のため、遂に長岡に擯んでられ、高田に先んぜられ、三條に後れてしまつた。最近、町民熱誠の努力と共に急速發展の緒につき、有名商店等競つて新様式の増築に着手し、街衢の面目一新した。

菓子類を筆頭に、工業は斷然物凄き隆盛を見せ、絹及び絹織物、清酒、製糸等いづれも十萬乃至數十萬圓の年産あり醬油、味噌、うどん、麻真田等がこれに次ぐ。また原油の産あり、揮發油、燈油、輕油等の産も多い。

行在所址、柏崎港、海水浴場、劔野山團子山桃林、天然水族館等は名勝として有名である。

### 石地町

郡の北端三島郡界に位し、柏崎町を距

る五里、古來北國街道の一驛なりしが、近年鐵道敷設されて以來、交通の中心が移動し、反つて衰微の狀にある。

石地、尾町、大津、大崎、甲田、濱忠等の大字を含み、面積〇・九三三方里にし東西三十町、南北一里二十七町あり、鐵道越後線石地驛を置くも、市街からは一里も離れてゐる。

戊辰の役、五月十五日に摺谷と共に官軍に取られたところで、明治二十四年町制を施行し、同三十四年太田村を合併して今日に至つた。

町には銀行支店、製糸場及び尋常高等小學校二、尋常小學校一があり、米、海産物、生糸の産が多い。

名勝には海水浴場、綱目ノ波、長岩の神跡、弘法大師自彫地藏等あり、社寺には三島石部神社、高善寺、大聖寺ほか一社六ヶ寺がある。

### 高濱村

背面三方は青山に掩はれ、前面は日本

海にのぞんで砂汀相續き、附近海岸は海水浴に適し、觀音崎の勝景がある。越後鐵道開通前は、北國街道筋なりしも、今は寂寥として通行少く、大字椎谷は觀音馬市ありて、各國より馬匹を索き來り、群集來往し、數千頭の賣買あり殷賑繁華を極めたといふけれど、今は馬市はあるが僅かに昔時の名残りを止めるに過ぎず繁華の夢を戻すすもがない。附近には西山油田がある。

近世、堀氏の陣屋のあつたところで、明治二十三年宮川町と稱したが、同三十六年これに椎谷、大湊の二村を合併して高濱村と稱した。面積〇・三八方里、越後鐵道西山驛へ一里あり、バスが通ひ、交通の便良好である。

町には警察署、區裁判所出張所、郵便局、高濱圖書館、銀行支店、郷社宮川神社などがある。

### 鯨波村

米山北麓の海岸にあつて、郡の西端に

位し、地勢は南に長く、米山の山脚は、海に突出して塔ヶ原等の佳景を生み、砂汀彎曲、海水浴に適し、夏季は浴場が設けられる。海蝕の段丘崖にして、或は岩礁として海中に點在し、稀に見る景勝地である。信越本線鯨波驛あり、なほ柏崎町よりはバスが通ずる。

回國雜記に

柏崎を過ぎるに秋風いと烈しく吹ければ

おしなべて秋風吹けばかしは崎  
いかゞ葉もりの神は住むらん

あふみ川かさ島など打過て鯨波といへる濱を行けるに、折節鯨の潮吹きけるを見て

わきてこの浦の名にたつ鯨波  
くもる潮を風も吹くなり

云々と出てゐる。名勝には、明治天皇北陸御巡幸の際の御駐蹕址たる御野立所がある。

往時は米山峠の宿場として榮えた。鯨波妙智寺觀音堂は、當國巡禮第四番の札

所である。戊辰の亂に、桑名藩兵の官軍を拒んだところだ。面積〇・九五方里、海産物の産が多い。村にはまた郵便局、産業組合、漁業組合、長昌寺、瀧泉寺などがある。

### 高田村

郡の西部、鯨波村の東南に位し、信越

線柏崎驛より南へ約二十五町、西南に米山の山勢迫り、南端は上條平野に續き、村の中央を鶴川が貫流し、その流域に耕地が拓けてゐる。下方、上方、横山、藤橋、堀、南下ほか四大字より成り、東西一里十五町、南北一里十町、面積一・〇四六方里を有し、明治三十四年、日高、豊田の兩村を合併して出來た村で、村内に黒瀧城址あり、府中の上杉、上條の上杉と並び稱せられたる上杉氏の居城にて天正の末頃廢城となつた。社寺には村社鶴川神社二、無格社二、三諦寺、長泉寺、摩尼珠院、滿願寺、龍雲寺等あり、摩尼珠院は越後國七番の札所である。縣道縦

横に貫通し、柏崎町へ一里、バスが通ひ交通至便である。

世帯數六百六十餘、住民の大部分は農業に従事し、五段未滿を耕作するもの百餘戸、一町未滿二百二十戸、二町未滿二百七十戸である。米、園藝物、繭、鶏卵大豆、割木、ポイ、味噌等の産殊に多く、落葉拾集に依る利益も五千圓を突破する。

また米は年産一萬四千餘石で、銀坊主中生が最も多い。薬工品と野菜類は共同販賣され、他は個人販賣である。

高田尋常高等小學校は學級十二、分教場を有す。學校の組織設備の改善充實は近來頗る良好である。一般公民教育としては國民精神の振興、協同精神の徹底等が主眼とされる。家政更生相談所、農産物品評會、方面事業助成會などは本村が有する特殊施設である。また農村保健の合理化等の社會施設も當を得てゐる。村民は豫算生活を勵行し、時間を嚴守醇風美俗の發揚に努めてゐる。



## 上條村

高田村の南に隣り、西に米山聳え、鶴川は村の中央を貫流する。佐水、宮窪、上篠、山口、古町、ほか五大字より成り面積一・六二二方里、縣道あり、柏崎町へは二里にして達す。

古くは上條谷の中心地にして、上條上杉氏の本領であつた。上杉定貫まで當地に居住し、二七四萬石高と傳へられる。北川原の地は家中屋敷にて番城となつてゐたが、百姓一撥の時、城は破却されたといふ。

村内社寺には村社熊神社、同物部神社、同熊野神社、無格社一、泉藏院、大光寺、普傳院、不動院があり、合性寺は相州藤守遊行寺末、慶尾寺は越後第八番の札所として有名である。

米の生産年一萬餘石を筆頭に、里芋、馬鈴薯、桑葉、大根、繭、鶏卵、薪を主要産物とする。産業組合では數年前から紡織を保證責任に政め、金融疎通の改善

米穀の統制販賣、肥料配給の統制等を行つて居り、目下、貯蓄の奨励と無駄の廢除に大童である。この他に郷軍人分會、消防組、男女青年團、産組青年聯盟、女工保護組合、尙武會、教育會、婦人會等では有能の士を揃へて活動し、各種施設も宜敷を得てゐる。また昭和七年秋冬の候、所謂匡救土木事業として、農村振興

六大土木事業を村直營を以て起工し、上乘の成果を收めて竣工したことは特記すべきことがらである。

## 野田村

米山の東部に位し、鶴川は木村の東部を掠めて上條村に入る。中部は平坦にして、部落はこゝに蒐る。野田、田屋、宮川新田、木津の四大字を含み、面積一・一九四方里である。村内には村社鶴川神社、覺照寺、願龍寺、稱名寺その他の社寺あり、柏崎町へは二里餘、バスにより交通稍々良好である。

米を主産物とし、産米增收の方法とし

て八部落農區が、共同で採種圃を經營するほか、競作會、堆肥増産奨励などによつて實績をあげてゐる。養鶏、養兔、養豚は相當盛んにして、約十年前より組合組織のもとに盛大に飼養しつゝあり、殊に鯉は年額一千貫目以上を他に移出するといふ隆盛を示してゐる。柿、栗等は山間に野生のものを共同で採取し、また共同で販賣し、収入をあげてゐる。藪工品としての製繩は相當さかんで、これも組合を設けて確固たる經營である。

昭和八年には四萬圓餘の工費を投じて小學校舎を増築した。青年學校の成績は補習學校時代からその優秀を謳はれたほどで、本村の教育は縣下の誇りである。青年團、婦人會等各種團體は名實共に郡下の範である。村内に政黨色全くなく、圓滿平和な村である。

## 鶴川村

本村は女谷、市野新田、清水谷、谷川新田、折居の五部落を合併して形成せる

農村にして、四圍山嶽に掩はれ、鶴川は東方黒姫山麓に發し、大字清水谷を経て北に下り、野田村に入る。古くは女谷村及び折居村の二ヶ村を併せて單に鶴川と稱してゐた。大字女谷及び市野新田のみは平地にある。

面積二・二六方里、戸數四百九十、人口二千九百をかぞへ、米の産額が最も多く、これに次では副業としての繭及び林産物である。

村内を縣道通じ、柏崎町へ三里半、途中バスの便あり、車馬の往來も頻繁で、交通は比較的便利である。警察は柏崎署管内に屬し、村内には郵便局、圖書館、産業組合、森林組合があり、寺院には淨圓寺、専徳寺、大慈庵を有し、小學校は一校、兒童の學業成績及び健康状態は極めて良好である。

## 石黒村

郡の南端に位し、東頸城郡との境界をなし、黒姫山、鷲巢山に抱かれたる山村

にして、鯖石川の水源地である。明治二十二年、町村制實施以來區劃に何等の變更なく今日に至る。

面積〇・八五一方里。上杉謙信の見張所たりし城山の舊址を有し、こゝからの眺望はすぐれてゐる。柏崎驛よりは六里半、安田驛よりは七里、頸城鐵道浦川原驛よりは五里、いづれも途中よりバスの便がある。

四面高山に掩はれた交通不便の地であるため、従來産業の奨励發達を幾度か企劃しても牛歩遅々として進まざる状態であつた。しかるに昭和九年、産業改善の大綱決定と同時に全村民の協力を強調して以來、漸次向上の曙光を見、殊に部落農區の活動旺盛にして、採種圃の經營、堆肥の増産、柿及び栗の栽培、鯉の養殖等に顯著な成績を示して來た。全村民の約九割は産業組合に加入し、組合精神の普及徹底せること郡下第一の評がある。

教育は一村一校主義を以て進み、高等科の三年制創始は縣下の嚆矢である。青

年學校が併設される。青年團では智徳體の三育のほか辯論に重きを置き、女子青年團では進んで畑作に従事し、勤勞奉仕に精勵してゐる。

## 高柳村

各村は明治三十四年十一月一日、元岡田、岡野町、高尾、漆島、荻ノ島、門出柄ヶ原、山中の八ヶ村を合して高柳村と稱し、今日に至つたもので、高柳は古くからこの郷の名である。

村は郡の最南端に位し、縣道松代柏崎線に沿ひ、鯖石川村の中央を貫流する。西黒姫山、男山を負ひ、東城山抱き、谷間に介在し、平地は狭少である。柏崎町を距る約一五七軒、北は大字岡田により南鯖石村に接し、西黒姫山脈を分水とし、北より順次上條、野田、鶴川、石黒の各村と境し、東は八石山の餘脈により中魚沼郡仙田村に、南は鯖石川を隔て、その水源地たる東頸城郡松代村、山平村に接する。東西八軒餘、南北最長九・三



料、面積一三方軒である。  
最近示すところの戸数は一千六百餘、  
人口八千五百餘、その一千五百餘戸は農  
業による生計者である。

### 南鯖石村

本村は郡の南方、鯖石郷の中部に位す  
る、面積二千二百一十町歩餘、中央を鯖  
石川が貫流する。柏崎町を距る一七・五  
五軒、安田驛より九、七五軒、北は森近  
笹崎部落によつて中鯖石村に接し、南部  
は大澤を境に高柳村に連り、東部は八石  
山の餘脈を隔て、小國郷、魚沼郡仙田村  
に接し、西部は黒姫山脈によつて上條郷  
に境する。

本村は明治三十四年十一月一日元森近  
石曾根、山室、大澤の四ヶ村が合併して  
南鯖石村と稱し、今日に及んでゐる。縣  
道は柏崎松代線と石曾根小千谷線との二  
線あり、前者は安田驛より高柳村を経て  
東頸城郡松代村及び松ノ山温泉に至り、  
後者は上越線小千谷驛に達する。

戸數九百餘戸、人口四千八百餘人、小  
學校の外に公立青年學校南鯖石専修農學  
校の設けあり、村社一、無格社八、寺院  
五がある。

### 上小國村

郡の東南端に位し、東西南の三方は山  
嶽に圍まれ、中央に僅かに平野を有する  
のみで、昔の小國郷の一部である。澁海  
川は村を南北に貫流し、川を挟んで十二  
部落が点在し、西に八石山の峰巒走り、  
面積二・三四四方里である。

明治三十四年、増田、森光、結城、法  
末の舊四ヶ村を合併して上小國村と稱し  
たもので、信越線塚山驛へ二里、縣道四  
方に通じ、塚山驛及び小千谷村へはバス  
の便がある。

神社は無格社四社を有し、寺院には長  
福寺、眞光寺、眞福寺、清照院等あり、  
眞福寺は地方の名刹として聞え、仁王尊  
は木喰五行上人の作である。

産業は農業を以て第一となし、商工業

### 中里村

上谷内新田、新町、相ノ原、二本柳、  
法坂、桐澤の六大字より成り、澁海川の  
東に位し、その東南の山峯は北魚沼郡と  
の境界をなす。

古くは小國郷の一部に含まれてゐた。  
小國郷とは即ち本郡東部なる澁海川の  
流兩岸に亘る郷域にして、小國谷と呼ば  
れたところである。昔、この谷に豪族小  
國氏あり、また大國にもつくり、當國の

名家なりしといふ。

面積〇・八八七方里。信越線塚山驛へ  
一里半、小千谷町へ二里、いづれも縣道  
を通じ、バスの便がある。

村農會が中心となり、六大字別に設け  
られる部落農區を指導して堆肥競争、品  
評會を行ひ、また部落農區では各別に採  
種圃を持つてゐる。副業には鶏、兎、鯉  
の飼養、柿、栗の栽培、蕨の製造などが  
行はれ、養鶏組合、養兎組合等が組織さ  
れてゐる。農事智識普及のためには農業  
講習會や映畫會が時々催はされる。

産業組合では信用貸付及び日用品購入  
を主たる事業とし、貸付金回収不能のこ  
ときは皆無である。最近貯金の増加が  
目に立つて著るしい。

青年學校は昭和八年縣から表彰を受け  
た。青年團は公共事業に奉仕し、農業視  
察や心身鍛錬に重きを置いてゐる。

### 七日町村

本村は大字を合併せざる一部落一村の

自治區にして、澁海川の東にあり、中里  
村の北につらなる。古くは小國郷に屬し  
た地域だが、村名七日町の由來は詳か  
でない。信越線塚山驛へ一里餘、バスが通  
じてゐる。社寺には諏訪神社、金剛院、  
寶珠院、養智院等あり、面積は〇・二八  
二方里に及ぶ。

戸數二百戸に満たない小村で、耕地は  
水田が多く、畑地が少い。主要物産は繭  
と米である。大正八年、水量機を設備し  
て用水を開いてから、産米の増収見るべ  
きものあり、また村農會技術員指導の下  
に採種圃を經營し、堆肥苗代の競作品評  
會を開き、更に紫雲英を栽培して自給肥  
料の實を擧げてゐる。

一方、蔬菜栽培が奨励されて自給自足  
の域に達し、最近では更にこれを村外に  
まで移出せんとしてゐる。また綜合副業  
組合のもとに、養兎、養鶏が隆盛を極め  
柿、栗の増殖等も見られるものがある。  
産内工業として製紙も行はれる。  
産業組合では信用事業に重點を置き、

貯金は相當巨額にのぼる。  
小學校は一枚、七日町尋常小學校と稱  
する。青年學校は入所率滿點である。青  
年團、婦人會、女工保護組合、いづれも  
公共に盡してゐる。

### 千谷澤村

所謂小國谷または小國郷と稱される地  
方の最北端に位し、明治二十二年自治制  
施行され、數ヶ村分合の後、現區域とな  
つたもので、現在、千谷澤、澤新田、下  
新田の三大字を含み、面積〇・八六方里  
である。小國郷の入口ともいふべき要路  
にあたり、三島郡塚山村と接續し、東南  
より丘陵蜿蜒起伏して村南を走り、北方  
澁海川に沿うて平地が開けてゐる。信越  
線塚山驛へ一里、上越線小千谷驛へ二里  
縣道通じ、バスの便がある。部落はこの  
縣道に沿うて發達した。

自治行政圓滿に行はれ、村治上政黨の  
確執なく、質實淳朴、各種事業の進歩改  
善は著しく、兵役納税等成績良好なるた



め幾度か表彰を受けてゐる。

千谷澤尋常高等小學校は、分教場一を有し、九學級編成である。青年學校は會て成績見るべきものあるを以て表彰の榮に浴し、その他修養園、婦人會、男女青年團の活動旺盛である。

主要産物は米、藪、木炭、鶏卵で、この他養豚、養兔による収入も多く、冬季に於ける出稼者が村に持ち歸る金高も莫大である。産業組合は大正六年の創立、組合員三百二十餘名を擁す。

### 武石村

東は澁海川にのぞみ、西は八石山の連峰を負ふて武石峠あり、北條村に通じてゐる。

舊小國郷に屬し、押切部落と共に獨立の一村であつたが、明治十七年より二十二年まで、地理人情風俗等の關係より横澤、山横澤の兩村と組合を組織したが、同二十二年自治制施行と共に組合を解除し、舊の如く獨立の一村に復した。

戸數百八十餘、人口千五百十を算し、面積〇・四五七方里にして、有租地三百六十餘町歩あり、耕地は田八十五町歩、畑三十二町歩で、山林は二百四十町歩餘である。謂はゞ農山村にして、住民は半農半林で、米の年産は三、四萬圓程度に過ぎない。産業組合の組織がある。

信越線塚山驛より一里十町、バスの便はあるが、冬季積雪の候はそれも杜絶之澁海川の舟楫の便による。

### 横澤村

郡の東南方に位し、澁海川を挟んで中里村と相對し、土地高坦相半する。明治十八年八月、武石、山横澤の二村と共に組合村を形成したが、同二十二年町村制實施に際し、遠隔不便のため、各村分離し、爾來獨立の一自治區として今日に至つた。

面積〇・四二方里。無格社八幡神社、瑞音院の社寺あり、名勝には山口家庭園がある。富豪山口權三郎氏、金融界の大

立物山口誠太郎氏は本村の人である。

米、藪、生糸を主産物とし、供藪組合をはじめ、産業方面の諸施設は模範的といはれる。信越本線塚山驛へは二里にして遠し、自動車の便がある。交通は比較的便利である。

人情風俗は淳朴を以て鳴り、毎年紀元節には戸主會を開き、風俗改善その他に就いて協議し、これを實行するため、生活様式の刷新顯著である。

### 山横澤村

横澤村の西方に接續し、周圍は八石山の青濤に包圍され、土地高燥である。舊小國郷の内にして、會ては横澤村の一部であつたが、交通の關係上、獨立の自活區を形成したもので、村内の小國郷と南横澤村とを連絡する縣道が通じ、信越線安田驛へ二里半、途中バスの便があつて、交通状態は悪くない。面積〇・六七方里である。

住民の多くは農林業に従ひ、山岳地帯

なるが故を以て畜牛による産業打開の途を講ぜられ、豫期以上の好結果を得て、先年縣當局から表彰された。しかも畜牛の將來は大いに有望である。養鶏も最近頗る激増し、養鶏組合がある。百合の栽培も相當多く、郡農會の斡旋により主に關西方面に出荷し好評噴々たるものがある。養兔をなすものもあり、製皮して陸軍省へ納めてゐる。

産米増收に關しては、十數年來、村農會を中心に部落農區を設立し、採種圃を經營したり、苗代、堆肥の競作をしたり品評會を催ほしたり、農民の志氣を鼓舞することにつとめてゐる。

山横津小學校は四學級編成、併設の青年學校は、小國郷七ヶ村中第一の優良校といはれる。

### 中鯖石村

柏崎町の東南方、郡の中央に位する農村にして、東は山嶽に掩はれ、西に向つて緩傾斜をなし、鯖石川右岸は耕地山林

相半し、治川の平坦地に聚落がある。所謂鯖石谷の中にありて、與坂、宮平、善根、加納の四部落より成り、大字善根はまた善言にも作り、毛利某氏の要害たりし遺跡がある。

面積〇・八九四方里。周廣院、淫廣寺、長福寺、寶泉寺、光賢寺等の寺院あり、八石山中の十二神は名勝として聞える。交通は信越線北條驛へ一里、同安田驛へ一里半、縣道四通し、バスの便がある。

米藪を主要産物とし、殊に米は本縣民の以て立つ生活の根據をなしてゐる。従つて産米の改良増收等に就いては、村農會を中心に當局者の苦心努力の的であり野外堆肥その他の自給肥料を増産して金肥を節し、共同販賣によつて利益を収めてゐる。養蠶は副業の主位を占め、次で繩、炭俵の製造がある。

學校は中鯖石尋常高等小學校一校で、學級數十一あり、職員一同熱心なる訓導により、兒童の學業成績は優秀にして體育は特に良好である。

### 北條村

當村は明治三十四年十一月一日川條、北條、山間、廣田、長島の五ヶ村の合併によつて生れた村で、南條、本條、北條、東條、小島、山間、舊廣田、大廣田、西長島、東長島の十ヶ大字二十二區に區劃して現在に至つたのである。

郡の南東部に位し、面積二、八三〇方里、東西二里弱、南北三里餘に亘り、郡内の主要地柏崎町を距る約三里、南に八谷、梢や東に金倉の丘陵聳立、且つ概して小丘陵起伏し、長島川の東方より村の中央部を、小支流をあつめて西南方に貫流し、鯖石川に注入してゐるが、その沿岸地は第三紀層及び沖積層にして、田圃の多くはこの流域に開けてゐる。そして南東は山横澤、武石、千谷澤、三島部塚山村に接し、東北は三島郡内中通村に連り、西南は田尻、中鯖石村に接し、西北は北鯖石川に境してゐる。

戸數約一千五百、人口四千二百餘、う



ち農に従ふもの一千百餘戸、工七十餘戸、商六十餘戸、生柿及び葡萄の産地として有名である。

縣道柏崎千谷線は、西方北鯖石村、當村大字山潤、西長島を経て東方三島郡塚山村に通じ、柏崎廣田線は田尻村より大字東條、北條小島、東條、舊廣田を経て大廣田に於て廣田關原線に接続し、大字西長島、東長島を経て東北方中通村に至り、柏崎長岡線に聯絡する。また村道は各大小字に通じ、且つ國有鐵道信越線は西南より東北に、村の中央部を縦貫し、南に北條、中央に越後廣田の二驛ありて交通極めて便利である。

## 田尻村

當村は郡の中央に位してゐる。安田、平井、田尻、鏡里の諸村の合併より成つた自治體で、各村の創始年代等は不明であるが、少なくとも一千又は餘年は經てゐるものと傳へられてゐる。

徳川氏の治世に在つては輕井川、佐藤

池新田の二ヶ字は天領に屬し、茨目、兩田尻、下田尻、上田尻、安田の五ヶ字は桑名藩の治下にあり、平井は旗本安藤内藏之助によつて支配された。明治の維新後は各村柏崎縣の管轄となり、同六年柏崎縣を廢して新潟縣を置かるゝや、また新潟縣の所管となり、今日に及んでゐるのである。

各村は東に北條村、西に柏崎町、南に中鯖石村、高田村、上條村、北に北鯖石村に接続し、東西五〇一八米、南北五四五四米の流域を有する、戸數約一千戸、人口五千四百、農業に就くもの實に八百五十餘戸、商業を営むもの實に八百てゐる。主要なる農産物には米、甘藷、馬鈴薯、柿などである。

當村産業團體には田尻製糸會社、昭和信用組合、鯖石産業組合、山忠製糸工場鳥越信用組合などがある。

## 北鯖石村

當村の創始年代などは不明であるが、

豊臣氏時代を経て後ち上杉氏の所領となり、徳川氏の治世に在つては新田畑は元領に屬し、田塚は旗本安藤内藏之助の支配するところ、長濱、藤井、中田、畔屋與三、上大新田は桑名越後中將の治下に在つて中田、與三、畔屋、上大新田は畔屋郷として鯖石川の東に位し、長濱、新田畑、田塚、藤井は鯖石川の西に在つて共に鏡郷と呼んだ。明治元年柏崎縣所管となり、後ち柏崎縣の廢止と共に新潟縣所管となり、同二十三年四月町村制實施に際し、畔屋郷を旭村とし、鏡郷を藤井村と改稱した。同二十四年旭、藤井の兩村が合併して今の北鯖石村を生んだのである。

村は郡の中央に位し、東は中通、北條の兩村、西は柏崎、南は田尻村、北は西中通村に隣接してゐる。地勢は東は山を繞せども村の中央を鯖石川曲折後流し、その流域内にあり、土壤沖積し、平野を形勢してゐる。しかも耕地は水利の便によく、農耕の成績は頗るよい。

戸數は五百九十餘戸、人口三千五百餘人をかぞへ、地主農が三〇餘、自作農が二〇餘、自作農二八〇餘、小作農一八〇餘戸で、農業を営むものは實に五〇〇〇餘戸であり、そして主要物産は米であるが、年に一萬二千五百餘石を産する。小學校の外に農業補習學校があり、また青年訓練所があり、その成績は頗る良好である。

## 西中通に

本村は郡の最南端に位置し、東北は中通、刈羽、荒濱の三村に接し、西は荒濱村の一部と柏崎町に連り、南は北鯖石村に境し、鯖石川は南北に全村の中央を貫通し、地味豊饒にして耕地が多い。

明治四年の廢藩置縣後柏崎縣に屬し、同六年柏崎縣の廢止となるに及んで、新潟縣に合せられ、同二十二年町村制施行の時、日吉、横原の二ヶ村と成り、同三十四年兩村を合併して西中通村と改稱して今日に至つたのである。

現在面積は一、三一九町歩餘、その戸數は九百餘戸、人口五千餘人を有し、農業を以て生計の本位となしてゐる。生産物の主とするものは米で、副業としての養鶏は殊に旺んでゐる。

## 中通村

本村は東西二百二〇町、南北一里二五町を有し、戸數約九百、人口五千餘人、その殆んど農を本業となしてゐる。

本村は明治三十四年十一月元井村、會地村、東城村、油田村の四ヶ村を合併して中通村と稱し、現在に至つてゐる。全村を、矢田、元井、會地、花田、會地新村、飯塚、赤田町方、赤田北方、小黒須五十土、成澤、黒川、油田の十三大字に分け、役場を大字會地に置く。

本村名所の主なるものは御野立所、赤田城址、吉井白塚、會地古城などで、その名を知られてゐる、謂はゆる會地峠の險は古くから有名である。

## 刈羽に

本村は刈羽、割町新田、上高町、下高町、正明寺ほか九大字より成り、荒濱川の東に接し、別山川に跨つた村である。義經記に「三十三里のかりわ濱と曰へるは荒濱より石地までの沙汀を指す」とあり、國邑志には「刈羽村は郡名の基づくところにして、方俗刈和とも書し古來の名邑たり」と出て居り、また治亂記を見るに、

天文十八年五月本庄美作寺刈羽の城へ押寄せ、一日一夜にして攻略し皆撫切にぞしたりける。

と載つてゐる。越後刈羽驛あり、交通も便利である。

別山川に跨る平和な村で、交通は至便にて、村は醇風になびいてそよとの波もたない。

米と蕎麥を第一の産物とするが、最近副業方面に力を致し、養鶏、養豚が多く、大抵の家には五六十羽の鶏が餌をあさつ



てゐる。高畑方面には桃の栽培が多く、長野方面のものと較べて外觀は悪いが、味は較べものにならないほど上等である。大正三年頃から桃の加工品が出てゐる。野菜は西中通方面に多い。また西瓜、落花生の名産がある。

## 二田村

當二田村は、古への二田の里の地域内にあつて、三島郡多太郷に屬し、天和權地の頃は原田保、長橋庄などに屬してゐたのである。

明治四年柏崎縣に、後ち同六年新潟縣に合したもので、町村制の施行に際しては町村分合行はれ、その結果長谷村、二田村、長原村、妙法寺村の四ヶ村が合併したが、同三十二年長谷村を廢し、二田村に合し、同三十四年十一月二田、長原妙法寺の三ヶ村を合し、坂田、二田、黒部、鬼王、長嶺、後谷、和田、新保、五日市、井岡、内方、大坪、北野、妙法寺の十四ヶ字を以て、今の二田村を組織し

たのである。

當村は郡の東北部に位し、東經百三十八度四十分、北緯三十七度三十分のところにあつて、面積は一七八九・二〇〇方米、東西四四七三米、南北四〇〇米、戸數九百餘戸、人口五千餘を有する農村である。

## 内郷村

面積二二、六二四方軒、世帯數八百餘戸、人口四千百餘をかぞへ、うち農家戸數として自作農一一七、自作兼小作農二九四、小作農二〇四、合計六一五を示す。當内郷村は、郡の最北端に位置を占め、東北は三島郡宮本村及び西越村に境し、西は石地町、高濱町に接し、南は二田村に連り、別山川は南北に全村の中央を貫流し、地は豊饒ではあるが、山間部が多くして耕地は比較的に少ない。

本村は舊幕時代は與板伊井氏、椎谷堀氏の所領及び幕府直轄の三分に分れ、十一ヶ村に區分されてゐたが、明治四年廢

藩置縣と共に柏崎縣に屬し、同六年柏崎縣廢されてからは新潟縣に管せられ、同二十二年市町村制實施にあたり、中川及び別山の二ヶ村に合併され、同三十四年兩村を併合して内郷村と改稱、今日に至つてゐる。

## 荒濱村

東に沙丘を負ひ、西北は海岸に臨んで位置する。田園豊かなりとは云ひ難きも三千百餘の村民は漁獵に従事し、また製網、操舟の業に勤み、經濟的に裕福な村で、富家が多い。

面積〇・五一方里。耕地は田畑合せて六十二町歩に満たず、記すべきほどのことはない。しかし山林は約五百町歩にのぼる。越後線に沿ひ、村内に荒濱驛を置いて交通は便利だ。また村には法華寺、聖徳寺等の寺院があり、政治家牧口義矩牧口義方を生んだところだ。

## 東頸城郡

概説 東南は中魚沼郡及び長野縣下水内郡に界し、西北は中頸城、刈羽の二郡に續き、山脈概ね南より北に走り、中央鼻毛小豆の山嶺を以て自ら地勢を兩斷し、東を松之山郡といひ、西を山五十公郷といふ。郡中峻嶺高丘なしと雖もまた殆んど平地なく、殊に東南の境界近くは峻嶺を極める山岳は菱ヶ嶽を以て群中第一の高山となす。

河川の主なものは保倉川、澁海川、小黒川、飯田川、鯖石川である。保倉川は菱ヶ嶽の東麓及び大島村大字菖蒲の山中より發源し、郡の中間を北流し、保倉村に至り、左折西奔して中頸城郡に入る。小黒川はその源を菱ヶ嶽の西麓に發し、北流して下保倉村に於て保倉川に合流する。澁海川は浦田村に發し、奴奈川に於て左折して東に流れ、天水川、東川等をあつめて中魚沼郡に注ぐ。また飯田川は牧

村に發源して中頸城郡に入り、鯖石川は山平村に發して刈羽郡に入る。以上の諸川あるも、常に水量少く、舟楫の利がない従つて水害もまた稀だ。

田圃は山腹または谿谷の間に散在し、雙眸の間、百畝の田なく、村落またその間に隱見する。面積二七・八方里、戸數九千七百五十にして人口は約五萬六千人である。東蒲原郡を除けば、市郡中の最少戸口の地である。

沿革 大寶二年三月越中の四郡を割いて越後國に併せたもので、舊事紀には久比岐につくり、延喜式以降に頸城と書してある。和名抄には沼川、都宇、栗原、枚倉、厚木、高津、物部、五公、夷守、左味等の郷名が出てゐる。

明治維新前は、幕府領にして、川浦代、更所百四十ヶ村、高田藩領三十三ヶ村、

桑名藩領一ヶ村であつた。明治元年、川浦民政局管轄となり、同四年柏崎縣に入り、大小區制時代は、頸城郡の内松之山郡、山五十公郷百三十八ヶ村を以て第六大區と稱した。明治六年柏崎縣廢止と共に新潟縣に入り、同年秋、頸城郡第八大區のうち三十四ヶ村及び刈羽郡のうち嶺村を加へ、村數百六十八ヶ村を以て第十一大區と稱した。

しかしこれまでは、現在の東、中、西の三頸城郡を一緒にして頸城郡と呼んでゐた時代で明治十二年五月に至り、頸城が三郡に分立する時、第十一大區を以て東頸城郡となし、郡衙は安塚村に置かれた。明治廿一年の自治制施行に際し中頸城郡のうち上牧、府殿、宇津俣、倉下、原、下昆子、上昆子、下湯子、東松之木、荒井の十ヶ村を本郡に、また本郡のうち大蒲生田村を中頸城郡に編入された。その後幾度か村の分置廢合行はれて現在の十四ヶ村となつた。

安塚、下保倉、保倉、旭、山平、松代、松



之山、浦田、奴奈川、大島、菱里、小黒、牧、沖見

の諸村が即ちそれである。

産業 産業は農を以て第一とし、生産総額の八割弱は農業生産品によつて占められ、米は年産十萬四千石に及ぶ。今各産業別にその生産額を示せば

農産	三、〇八四、二四八圓
蠶糸類	九五、〇〇〇圓
畜産	六一、五三七圓
林産	二九一、五三〇圓
水産	四、七四一圓
工業	五三五、〇一二圓
礦産	九〇、九一九圓

となり、總額は四百十六萬圓である。而してこれが一戸當りは約四百三十圓、一人當りは七十四圓である。

名所舊蹟 松之山村の管領塚及び鏡ヶ池、安塚村の直峯城、松代村の松代城及び大伏城、奴奈川の空野城松之山村の橋詰城等あり、松平神社の櫻、蟲川の杉、顯聖寺の二代杉、綱山の杉、諏訪社の

大杉、浦田の枝垂櫻、花立の松、塚本の松、見通しの杉、十二番橋等は、名樹として著はれてゐる。

### 安塚村

保倉川の左岸に位し、北には越後山脈が連亘し、霧ヶ岳、唐野山がある。村内概ね高燥、保倉川の二支流が走り、本村北方に於て合流する。高田市の東六里、十日町の西七里にあたる山間の一小邑である。安塚、上方、下方、石橋、牧野、松崎ほか十六大字より成り、面積二・九八四方に及ぶ。

安塚直峰城は風間氏の舊居にて、風間信濃守といふ越後武士で、その名は太平記にも見える管内横澄には貝介の化石が出る。同三十四年安塚、月影、中川、中保倉の四ヶ村を合併して安塚村と稱したものと郡役所々在地である。

頸城鐵道浦川驛より一里餘、自動車の便がある。

米、藪を主産物とし、村には土木派遣所、警察署、區裁判所出張所、郵便局、村役場等の官公署の外、安塚銀行、安塚自動車會社、頸城織物會社などあり、商工業も旺んでゐる。

また學校には村立安塚高女、縣立安塚農學校、安塚、中川、月影、中保倉各小學校等あり、村立圖書館の施設及び男女青年團、婦人會、在郷軍人分會等の活動と相俟つて、教育の實績は大いに見えるべきものがある。

賞泉寺は曹洞宗の名刹として有名だ。

### 下保倉村

安塚村の北に於たり、四圍に山嶽をめぐらし、中央を保倉川が貫流して西に下り、その沿岸に平地がある。顯聖寺、下柿野、大柄山、東俣、杉坪、櫻島、岩室、印内、山印内新田、飯室ほか十四大字を含み、面積一・三五四方里である。花崎の東一里にして、顯聖寺は曹洞宗の古刹にて、今も地名にも残つてゐる。

明治三十四年下保倉末廣の二村を合併成した村で、村内に頸城鐵道浦川原驛及び下保倉驛、飯室驛等あり、本郡の關門にあたり、交通至便である。高田市より五里、直江津より三里半、いづれもバスの便があり、また十日町、柿崎、信濃坂へもバスで連絡する。

縣穀物検査出張所、郵便局、産業組合郡農業倉庫等あり、銀行支店、保倉電氣會社、龜谷酒造會社等も存し、社寺には村社劍神社無格社二〇、圓重寺、休止院鞍馬寺、日光寺、顯聖寺、放覺寺ほか六ヶ寺をかぞへ、八坂神社、劍神社、顯聖寺、圓重寺、日光寺、鞍馬寺、唐野山、荒城は名勝としても知らる。

米、薪炭、用材を生産物とする。小學校に末廣尋常(三學級)、下保倉尋常高等(九學級)の二校あり、他に黄葉學院を有し、曩に今上陛下御大典記念事業として二校舎を改築せるほか、植樹造林、納稅組合設立等をなし、納稅に就いては名古屋稅務監督局より表彰を受け

てゐる。なほ各種團體及び組合には男女青年團、禁酒會、農民座、郡農業倉庫、信購販組合、女工保護組合、酒造研究會等がある。

### 保倉村

安塚村の東につらなり、越後山脈に隸屬する丘岡蜿蜒し、南方信濃國境に水源を發したる保倉川は村内を貫流し字大平に於て方向を西に轉じて安塚村に流入す。河に並行して縣道通じ、太平、上達下達、岡の諸部落は、縣道に沿ふて聚落をなし、またこの縣道には頸城鐵道浦川原驛へのバスが通つてゐる。直江津と十日町の丁度真ん中にあたる。

面積二・〇三方里を占め、有租地約九百九十町歩に上るも、耕地は田二百町歩畑百九十餘町歩に過ぎず、山林は五百八十餘町歩である。二千有餘の住民は農産の業に従事し、米、藪は本村の主要物産である。

村には郵便局、圖書館、信用組合など

が置かれ、寺院には大安寺、了慧寺、觀音寺、城鎮寺があり、いづれも曹洞宗に屬する。

### 旭村

郡の最北端に位し、北部に山岳を負ふて原野山林多く、鯖石川は源をこゝに發する、稱して鷲ノ巢山と呼び、刈羽郡との境界にあたる。

村内を柏崎に至る通路走り、頸城鐵道浦川原驛へ二里半、途中よりバスの便がある。本村は謂はゞ分水嶺上の村だ。昔は妻有庄の北偏であつた。

面積一・二九四方里。有租地九百九十餘町歩にして、田二百餘町歩、畑百七十餘町歩、山林六百町歩餘を有し、住民の生業は農耕または山林の業で、多くはこれを兼業し、米、藪を主産物とする。

戸數二百九十餘、人口は千七百五十三をかぞへる。村内には郵便局、圖書館、産業組合などあり、寺院に眞宗京徳寺、同照源寺、曹洞宗竹林寺がある。なほ本



村大字は田麥、坂山、嶺の三にして、村役場は田麥に置く。

### 山平村

本村は郡の北端に位し、刈羽郡との境をなし、田野倉、蒲平、名平、儀明、田代、仙納、小池、筋平の八部落より成る山村にして、平地の見るべきものがない。舊松之山郷に属した地で、鯖石川の水源にして、川は北へ向つて流れる。

六百有餘の戸數と、三千八百を越える人口を有し、面積一・三四方里にして有租地約九百町歩あり、田は三百三十餘町歩、畑は二百四十六町歩、山林は約三百町歩である。

米と藪を主産物とし、林産も少なからず、住民は純朴にして勤勉、質實勤儉の精神に富む。頸城鐵道浦川原驛へ四里、バスの便がある。

小學校は北山尋常(二學級)、蒲生尋常高等(六學級)の二校を有し、圖書館の施設もあり、寺院には曹洞宗松泉寺が有

### 松代村

東西一里十七町、南北二里、面積三・二八方里あれど、平地は僅かに全面積の二分に過ぎず、土壌は肥瘦相半し、耕作の努力は容易ならざるものがある。

所謂妻有郷往來といふことあり、即ち安塚大島より蒲生、松代を経て大伏に至り、薬師峠を論え、中魚沼郡へ達する往來である。本村は即ちその中間に位し、大字小荒戸の油井は、明治初年の頃、噴湧盛んなりしが、近年含油は漸く遠くなつた。自治制發布後暫らくは松代村ほか六ヶ村組合を作つてゐたが、明治三十四年町村合併して一自治區となつた。民情素朴にして、風俗醇良、勤儉の念殊に旺盛である。且つ村政に従事する者は、いづれも勤続多年に及び、よく民情に通じ百般の施設機宜に適し、自治の成績大いに擧つてゐる。

縣道四方に通じ、十日町浦川原間、松

之山鯖石間のバスの往來あり、また村内には區裁判所出張所、警部補派出所、郵便局、圖書館、松代銀行、松代信購販組合、松代繭絲販利組合等あり、神社は無格社二社、寺院には廣徳寺、長命寺、少林寺がある。

### 松之山村

郡中著名の大村にして、丘陵起伏し平野少く、道路四通するも地勢上傾斜が多い。しかも交通は頻繁で、物貨の集散地である。

松之山とは舊郷名である。松之山家とも云ひ、頸城魚沼の間に一別區をなし、澁海川の源頭であつた。昔は松山六十六ヶ村の諺あり、また謡曲に松山鏡あり、松の山に母に別れし少女亡き母を慕ひてその形見の鏡を取出しては己が姿の映るを見て母上をなつかしがりて暮し、母は地獄にありたれど娘の弔によつて極樂往生するといふ筋である。村は明治三十四年三ヶ村二十八字を合併せるもので、面

積三・八八方里、東西二里二十町、南北二里である長唄に

直江津のあまの子が七つか八つ目饅まで、うむや綱芋のつな手とは戀の心をこめ山の、當季浮氣で逢ふ縁も何に糸魚川いと魚の、もつれもつる、草生津の、あぶら漆と交りて、末松山の白布の縮みは肌のどこやらが、見へすく國の風流を、うつし太鼓や笛の音も、引いてうたふや子獅の曲

とうたはれる地で、鏡ヶ池、管領塚、松之山温泉の名勝あり、松之山温泉の開湯は古く、後村上天皇の御代といふ。古來風俗醇朴にして敢て俗化せず、四方より來遊するものが多い。勸業、兵事、納稅教育等ことごとく優良なるを以て曩に表彰せられたる郡の模範村である。頸城鐵道浦川原驛及び中魚沼郡芦ヶ崎村へはバスの便がある。また村内には區裁判所出張所、郵便局二、松代銀行支店、産業組合農業倉庫、郡染物組合等あり、お寺には觀音寺、正法寺、陽廣寺、松陰寺等の名

利が多い。

### 浦田村

信越國境天山水山の北麓にある一部落にして三一坂峠を中心として山岳多く、平地は北面に向つて開けてゐる。即ち澁海川の源の地にして、その奥の天山水山は越信の分水嶺をなし、四面峯巒に圍繞され中間溪流の沿岸に僅かに平地がある。しかし灌溉水利の便はよく、田畝よく整ひ米産地としては郡中の雄と稱せられる。なほ本村は冬季半歳の間、積雪深きため農事に従ふこと能はず、この間に於て少壯の徒は遠く他府縣に出稼ぎし、相當勞銀を蓄積して歸郷するのが常だ。爲に愛郷の念殊に深く、勸業、兵事、教育、納稅の成績悉く優良にして郡内の模範村と評される。

明治二十二年自治制實施の際、隣接黒倉村と合併して現區域となつた。大字は浦田黒倉の二、面積一・七二一方里にして、戸數五百を有し、農業盛んにして米

豆類、芋類、大根、百合根等を主産物とし、副業には養蠶、養鶏がある。村農會の農事改良運動は他村に比し著るしきものあり、村立樹苗養成所のごときは本村獨特の施設で、共同作業所の設備も最新式で評判がよい。

### 奴奈川村

室野へ一里、それより十日町へ五里、頸城鐵道浦川原驛へ四里、バスが通つてゐる。村社松芋神社、眞宗大嚴寺、岩見堂の奇巖等の社寺名勝がある。

郡の中部にあり、村内山岳連亘し、土地一般に高峻であるが、耕地に乏しからず、水田は三百五十町歩弱、畑百九十餘町歩を有し、古くは松之山郷に属し、今は室野、福島、峠、木和田原新田を併せて一自治區とし、面積一・三二四方里である。農山村ともいふべき村で、住民は農耕並に山林の業に従ひ、耕地は前記の通り、山林は五百町歩を占める。戸數は五百二十戸、人口は二千六百七



十餘を算し、米、繭、林産物の産多く、住民は概して質朴勤勉にして精神作興等見るべき成績を収め、自治は圓滑に行はれてゐる。  
縣道は村を東西に走り、十日町及び頸城鐵道浦川原驛へバスの便がある。また村内には空野郵便局、奴奈川信用組合、洞泉寺等がある。

### 大島村

地形狭長なる山村にして、南に聳ゆる菱ヶ岳と稱し、保倉川は村内を縦貫して北に流れる。

安塚村の東一里餘、妻有郷に通ずる山路にあたる。保倉川の水源は、大字大島の南なる菱ヶ岳に發し、故にこの邊一帯を保倉谷とも稱す。

仁上、大島、棚岡、中野、葛蒲、牛ヶ鼻の六部落を以て一村を形成し、戸數五百八十餘、人口三千五百を算し、廣袤東西一里、南北三里にして、面積二・一二七方里である。耕地は水田五百町歩、畑

地三百町歩あり、山林は千百町歩弱の廣きに上る。産物は米を以て第一となし、農業經營には常に進歩的改善が加へられ成績良好である。頸城鐵道浦川原驛へ二里半、バスの便がある。  
村には郵便局及び郵便取扱所、青年團圖書館、銀行支店、郡牛馬商組合等があり、寺院四ヶ寺を有す。

### 菱里村

郡の南部に位し、信越國境に峻立する菱ヶ岳の山陰にして、中山峯の西麓にあたる。地勢概して丘岡多く、保倉川は南方山中に源を發し、北流する。

舊須川、眞荻平、船倉、二本木の諸村を合同し、菱ヶ嶽の里なる意味で菱村と稱し今日に至つた。大字に信濃阪、上船倉、下船倉、二本木、高澤、樽田、圓平坊、眞荻平、須川等あり、面積二・三三三方里、頸城鐵道浦川原驛へ十三軒半にて達し、バスが通つてゐる。  
水田五百八十餘町歩、畑地三百五十町

### 小黒村

保倉川の南岸に位し、川を隔て、安塚と相對する。村南の藥師嶽は海拔六百六十一メートル、中央部の長倉山は六百十メートル、本村はかく山嶽に掩はれてゐる山村にして、小黒、切越、戸澤、芹田

大原、朴ノ木、菅沼、行野、和田の諸部落は、これら山嶽の西方に連り、面積は一・〇三九三方里あり、戸數四百七十、人口三千人弱をかぞへる。  
耕地は、田三百二十餘町歩、畑百七十町歩弱にして、山林は三百四十町歩を越える。頸城鐵道浦川原驛へ二里、バスの便がある。

村内社寺は村社菱神社、眞宗稱念寺、同能念寺、同教願寺、同光圓寺、同専教寺あり、庶民の信仰多い。また村には郵便局、小黒圖書館、産業組合等あり、小學校は和田、沼木、行野の三校を有し、和田校は高等科を併置する。

### 牧村

郡の最西南部を占め、西は中頸城郡と山岳を以て接し、南に分水嶺ありて長野縣下水内郡と相連る。飯田川は本村に起つて北流し、部落はその沿岸にあり、本村には頸城油がある。  
大字小川をはじめ、棚廣、棚廣新田、

櫻瀧、田島、宇津俣、上牧、府殿、下湯谷、倉下、高谷、功光、今清水、泉、原上、日比子、下日比子、東松ノ木、荒井國川、櫻谷、山口、宮口、岩神、高尾の大字を含み、面積三・一〇七方里、高田市へ四里半、途中自動車の便がある。  
村には郵便局、圖書館、銀行支店あり各種團體はいづれも活動活潑にして日本未曾有の非常を深く認識して努力精進してゐる。また寺院には正善寺、福樂寺、明願寺、一念寺、西念寺があり、全部眞宗に屬する。

### 沖見村

西は中頸城郡上杉村、南は本郡牧村に隣接し、地勢高低相半する。郡の最西部

## 中頸城郡

北は日本海に面し、東は刈羽郡及び東頸城郡に、東南は長野縣下水内郡に、南は同上水内郡に、西は同北安曇郡及び本

にあたり、明治三十二年現地區を以て町村制を布き、大正七年本縣模範村に指定され、特に納稅成績の優良なること縣下に冠たるものがある。  
神谷、大月、川井澤、池船、七森、吉坪、片町、平山、平方、坪山等の大字を含み、面積〇・八七九方里にして、有耕地七百六十町歩餘、水田三百三十五町歩畑地百三十町歩弱である。縣道山口浦川原停車場線が東西に通じ、同驛へ二里、山口の自動車通路まで一里である。  
戸數約二百九十、人口は千九百有餘をかぞへ、沖見尋常高等小學校は七學級編成、村立御慶事記念沖見圖書館もあり、また寺院は通願寺、林鳳寺の二を有し、共に眞宗の古刹である。

縣西頸城郡に接續し、荒川水原の平野にして、いはゆる上越後の中心にあたる。郡の西南部に妙高山がそびえ、その餘勢



は北に走つて海に盡きる。信越國境にもまた山崎峙ち、その間に平野を抱き、荒川が北に向つて流れる。海岸は平滑で、良錨地がない。

荒川平野は地味膏腴にして、越後屈指の米産地である。またこの地方は頸城油田に属し、石油の産が多い。生産總額は約二千八百六十萬圓で、これを産業別に見ると左の通りである。

農産	一二、四八六、〇五一圓
蠶糸業	四六八、四三六圓
畜産	三二〇、〇五三圓
林産	七六二、三六三圓
水産	九四、七〇三圓
工業	一四、四五一、七三五圓
鐵産	四九、四九八圓

鐵道信越本線は、信濃より來り、荒川に沿つて直江津に至り、海岸を東北に進み、北陸本線は西方海岸に沿つて來り、直江津を終點とする。頸城鐵道線は信越線の黒井驛より起つて東頸城郡に入る。交通は概して便利である。

### 柿崎町

本町は郡の東北端にあり、刈羽郡柏崎町と本郡直江津町との中間に位し、各五里を隔てる。西北一帯は日本海に面し、佐渡島を遠く望む。古來、北陸街道の要衝にして、現在鐵道信越線柿崎驛あり、縣道新潟富山線は町の中央を横斷し、自動車の發達と共に交通の要位を占め物資の集散、社交生活の中心地となり今日の町勢を示すに至つた。戸數千二百二十餘人口約六千五百をかぞへる。

明治三十四年、舊岸濱村及び下黒川村のうち大字馬正面を合併し、更に同四十四年舊七ヶ村を合せ、新に柿崎村を設置

### 新井町

本町は郡の南部に位し、頸南地方の中心都邑にして、北日本の靈峯妙高山の麓にあり、頸城平野の遙々として開けた山紫水明の地である。市街を貫通する北國街道は、今、國道第十一號線に属し、町の中央を横切つて柿崎町に去り、同地方交通の幹線をなしてゐる。

地勢は、東方信越國境に松倉、里倉、關田等の峯巒が聳立し、澁江川は辻屋橋下で片見川に合し、新井驛の東を流れ、和田村に於て關川に合流する。その源は茶臼嶽と神奈山で、俗に香江と稱し清冽

掬すべきものがある。

村鑑によれば、本町は貞治五年より慶長二年まで上杉家の支配を受け、天和元年以後は幕府の直轄地であつた。明治維新後は柏崎縣に編入せられ、更に新潟縣の所管となり、明治二十五年、新井村は新井町と改稱、同三十四年に小川雲、大出雲の二ヶ村を合せ、同四十年に至り更に參賀村を加へて現新井村となつた。按ずるに、本町は、往昔、北國より江戸に往還する唯一の街道で、信越の門戸を扼して商權を掌握し、最近は文化の向上と産業の進歩に加ふるに町民の勤儉力行によつて頗るその面目を一新した。

産業は別に誇るに足るものはないが、煙草、米、石材、蔬菜、清酒、薪炭、果實、薬工品は主なる産物である。名勝としては加茂神社、經塚山、小出電坂、白山神社、陣場、鬼小島館址、新井別院、菅原神社等がある。

### 直江津町

本町は頸城平野につらなり、日本海にのぞみ、古來水陸交通の要津にして、頸城三郡産物の集散地で、信濃全國の米鹽肥料、海産物供給の要地である。

直江津アといとこ、  
港を見やれ  
出船、入船、泊り船

と語はれるごとく、北陸二大港の一として知られ、信越線、北陸線の交叉點にあたり、またおけさの國佐渡小木港へ海路僅かに三時間餘の位置を占める。關川河口には港灣が修築され、裏日本の要津、商業地として躍進してゐる。

以上の如く、天然の良港と近代的な商業都市としての本町は、また歴史的宗教的な舊蹟のかずくが旅人に懷舊追慕の念を起さしめ、佐渡への遊覧客はこの地に足を止めるものが多い。

永保三年、源義家は東征の途次、砦を春日山に築き、しばらく當地に留まつたと傳へられる。保元平治の頃は源賴政、城資長、木曾義仲等の所領となり、足利

### 上米山村

本村は谷根、小杉、吉尾の三大字より成り、面積一・六一七方里、米山の北西麓、青海川の上流に位し、東は米山の山麓を以て刈羽郡と境する。

戸數約百八十、人口千餘人をかぞへ産



物の第一は木炭にして、米、藪もまた尠くない。有耕地千町歩、耕地は水田九十餘町歩、畑地三十餘町歩で、山林は八百六十町歩を越える。

村内に米山水電會社あり、鐵道信越線の沿線にして、鯨波驛、青海川驛へはいづれも一里、バスの便あり、交通は極めて便利である。

ぬしのためなら米山さまへ  
はだし参りも 厭やせぬ  
頸城見なさめ 米山三里  
峠越えれば かしわ崎

の米山は本村地内に跨り、その他村内には龜割坂等傳説の地が多い。

## 米山村

本村は北陸線中の一驛にして、湯町村を去ること七哩、半東南に米山山脈を負ひ、その山道入口にあつてゐる。地勢西方に傾斜して山勢は日本海にせまり、海岸線は屈曲に富み、奇巖景勝の地が多い。柏崎の東北にあたり、郡の北西隅を

占める。鉢崎、大平、小萱、大清水ほか四大字を含み、廣袤東西三里二十町、南北一里、面積一・七六二方里である。

行こか参らんしよか米山の薬師  
一つア身のため 主のため

の米山甚句で名高い米山薬師は本村にあり、寺は刈羽郡との境に跨る米山の山頂に位置し、山は消火山にして、海岸に近く圓錐狀に屹立し、海拔三千二百二十尺、五箇の支脈はほゞ外輪山たるの形跡を存するが、その活動せしは有史以前の遠い時代に屬し、今は噴火當時の状況を想像するにも足りない。本尊薬師如来は泰澄の作、源義家の守本尊であつた。冬季は山麓の米山寺に安置し、毎年四月八日にこれを山頂の堂宇に移すを常とし、地方人士の登山参詣するものが多い。登路の半に女人堂あり、往時は婦女はこゝより内に入ることを禁ぜられた。山腹にある七塘ノ池は、屢々相重つて常に水を湛へ、早魃には雨乞ひの祈禱があげられる習慣がある。また村内の大泉寺は大清

## 湯町村

直江津町の東北二里、日本海に面し、土地平坦、樹林が多い。東方には藤の名所朝日池がある。

信越本線湯町驛あり、原ノ町、泉谷へバスが通じる。海岸に沿つて北陸街道走り、直江津、柿崎へもまたバスの便がある。湯町、湯田、湯守新田ほか二十大字を含み、部落は多く、海濱砂丘に布留する。柿崎より本村を経て黒井までの間、四里ばかりを犀ノ濱と稱し、往古、親鸞聖人はこの海濱にて雪中苦行をしたと傳

へられる。

さむくとも袖につまん西の風

彌陀の國より吹くとおもへば  
主なる産物には米、海産物がある。縣穀物検査所、高田區裁判所出張所、郵便局村役場の官公衙、銀行支店、湯町運送會社等を有し、産業組合には湯町村信販購利組合、湯町協信社の二あり、漁業組合も組織されてゐる。産業の開発は村當局の常に留意努力しつゝあるところで、村民も一致協力してゐる。  
社寺は村社神明宮、惠光寺、圓藏寺、養性寺、養寶寺、照專寺ほか九ヶ寺を有し、長峰城址、丸山公園あり、長峰城址は湯町驛の東北二十町、犀ヶ池と阪田池の中間なる丘陵上にあり、元和の昔、牧野右馬允の築きしものといふ。

## 八千浦村

西北面は日本海にのぞみ、地形は細長く、下荒濱、黒井、石橋新田、上荒濱、海光寺濱、夷濱、夷濱新田、西ヶ窪濱の

八部落を以て成り、面積〇・二六二方里各部落は悉く海濱に散在する。大字黒井は荒川河口右岸にあり、直江津港と相對し、またこゝには信越本黒井驛あり、頸城鐵道の分岐點をなす。柿崎及び直江津へはバスの便がある。

黒井濱より米山の下に至るまで六里ばかりは海岸直線をなし、汀に沿つて砂丘がある。故にその内陸は卑濕低窪にして往時は一大沼澤を成してゐたものと考へられる。夷濱は、その名稱よりして、古代浮囚などを置かれた所であらう。道興准后の歌に

行末に道をおもへば長濱の  
眞砂の旅のうき敷にして

とあり、砂濱行旅に惱む狀、想ふだに餘りある。

海岸沿線なるも漁業は振はず、村民の大部分は農業に従事してゐるが、水田も多くはない。副業としては養鶏、西瓜栽培が一部に行はれる。小作に出る者や直江津邊に職を求めて生活の糧とするもの

が多い。曾ては郡下屈指の養蠶地として知られたが、今は振はない。

## 大濱村

郡の北部に位し、百間町新田、下柳町新田、大谷内新田、柳町新田、寺田新田ほか五十部落より成り、殆ど新田ばかりである。面積一・三四七方里にして、この附近八千浦村黒井より米山の下に至るまで六里の間、海岸は一直線をなし、汀に沿つて砂丘あり、その東南一帯の地は二條の低濕地にして、保倉川がその中間を流れる。

現地域の三分の一が上杉定憲と長尾爲景との古戰場である。信越線黒井驛より浦川原に至る頸城鐵道が村の南を貫通し百間町、北四谷の停留場がある。

地勢一般に平坦、耕地よく拓けて、農業が盛んである。村民は研究心に富み、米の産額は年を追つて増加し、村農會が中心となつて部落農區の活動よく行はれる。副業は養鶏並に柿栗の栽培が多い。



堆肥の産は郡下第一といはれ、紫雲英の栽培は年々四十町歩以上に及んでゐる。産業組合は約六百名の組合員を有し、肥料の粉碎配合等に動力を用ひ、利用部事業は隆盛である。小學校は三校をかぞへ、中央校には高等の代りに乙種農學校を設け、農業、養蠶を教育し、女子部の設けもあり、近郷よりの入學者も多い。

### 明治村

東に越後山脈の丘岡あり、北部及び西部は低平なる耕地にして、字増田附近はむしろ濕潤といつた方がいゝ位である。南は保倉川を以て保倉村に、西は大湊村と境し、二十部落を含み、面積一・一五七方里あり、字花崎は、寛正六年、堯惠法師紀行に、花笠と見ゆる所、

鶯、聲も聞えぬ秋の雨に

しほぞきぬる花笠の里

の歌がある。頸城鐵道明治村停留場より信越線黒井驛へ約二里、バスの便り、交

通状態は悪くない。

産米増収は縣下第一の稱あり、反當り收穫二石八斗餘の成績を示し、統制販賣を行ひ、時價相場聴取のためラヂオを据付けてゐる。また全村を十五部落農區に分ち、各區別に水田部、裏作部、副業部、畜産部、家禽部、薬工品部、社會部を置き、部落によつては特に蔬菜部を設け、完全な組織と統制のもとに實果を收めてゐる。産業組合では利用購買に於ては特に縣下屈指の活動を見せてゐる。

教育に於ては思想統一、國民精神の作興に全力を集中し、消費節約に基く生活改善も徹底し、男子青年團には消費組合の組織がある。小學校は明治尋高、脩齊脩進兩尋常の三校がある。また村營の職業紹介所を有し、名古屋方面からの申込が常に輻輳してゐる。

### 旭村

本村は大字梶、大瀨新田、神田町新田長澤新田ほか十五部落を併せて成り、面

積〇・八六五方里、大字町田は村の東南端に位し、その西は一面の沼澤にして、現水面は凡そ八十町、旭池、鶴池の二池にわかれる。

治亂記に、爲景佐渡落の時「藏人景忠は猶も、米山田尻、町田の人数を催し粉骨を盡し、晝夜の軍隙もなし」とあるはこの地である。

信越線湯町驛へ一里餘、縣道縱横に通じ、湯町、高田、柿崎へバスが通ふ。

村内は見渡すかぎりの平地で、水田が多く、農業が盛んである。數年前、五百町歩餘の耕地整理と百餘町歩の用水池築造が完成し、産業上に一新生面を開き、爾來副業も隆盛になつた。

### 下黒川村

郡の西北隅、吉川の東岸に位置し、角取、阿彌陀瀬、下小野、柳ヶ崎、高寺ほか十三部落を含み、面積〇・九三四方里である。川田、小野は米山山麓中にあり西部及南部は平地にして、黒岩村及び源

村に水源を發したる黒川及び吉川の二流は、村内を灌漑し、大字角取附近に於て一となり、黒川と稱し、柿崎を経て日本海に注ぐ。

舊庄名黒川庄とは鉢崎、柿崎等も廣く含んだもので、今の下黒川村は、柿崎驛の南、青海川のあたりを指す。黒川とは青海川の別名である。

徳川時代は高田藩神原領下に屬したが明治維新となり廢藩置縣の令により柏崎縣に所屬、後、更に新潟縣行政區域となつた。明治六年第七大區に編入され、中頸城郡に屬した。同二十二年には角取ほか十八ヶ字を以て下黒川村を組織し、三十四年廢置分合の令により大字馬正面を柿崎町に併せ、十八ヶ大字となり以來今日に及んだ。

小學校は一校、青年學校では縣より表彰されること二回、女子青年團では服裝を統一し、男子青年團は村の中堅となつて銃後に活躍してゐる。

村農會では種子の頒布、競作、養鶏の

奨励をなし、また上越酒造研究會を組織して技術員を養成し、優良技術者は農閑期五十圓から百圓の給料をとるといふ。

### 吉川村

本村は郡の北西部に位置し、吉川は村の中央を流れ、灌漑の便良好である。土地は一般に低平にして肥沃なるため農作物に適す。四隣は黒川村、角取村、旭村源村等に接し、地積大凡二千六百町歩に上る。

米産多く、郡内第一の産額を有し、副業としては椎茸の栽培及び柿の生産が頗る盛んである。最近はまだ養蠶事業も發達し、將來を期待されてゐる。信用組合は會て二組合を有したが、現在はこれを合併し、全村を區域とする一組合が新に設立され、經營の堅實なること郡内屈指といはれてゐる。村農會では柿、椎茸の統制販賣に努力してゐる。

小學校は五校あり、その他吉川農林學校ありて女子部をも併置し、農家の子弟

の教育に當り、農業青年學校も同校を中心とする教育が行はれてゐる。

### 源村

郡の東北部に位し、東は鷲巢山、兜巾山の連峯を以て刈羽郡鶴川村に境する。全村山地多く、吉川の水は東方山岳地に發し、西に下り、屈折して西北に轉じ吉川村に入る。山直海、岩澤、大賀、山中、米山、尾神ほか六大字より成り、面積一・七三八方里である。

明治三十四年町村合併の事あり、大正六年村是を設定された。昔は長峰の城下町たりし地である。信越線湯町驛へ三里半途中吉川村泉谷よりバスの便がある。

全面の約八割が山岳によつて占められるため耕地は僅か二割に滿たず、農業は集約的に行はれ、増收計畫實績は郡下第一等の成績を示してゐる。柿、栗、養蠶、養鶏、養豚も盛んにして、柿は品質良好、富有柿として有名で、統制販賣により京都、名古屋、大阪方面に出荷し、



養兎は兎皮加工までしてゐる。竹細工、薬工品、木炭の産も少くない。

## 黒川村

本村は郡の北方、米山脈の西南に位置し、東南北の三方は山丘にかこまれ、西部のみが僅かに平地に恵まれてゐる。交通は従来不便であつたが、近年、バスが開通し、柿崎まで二里の間、車馬の往來頻繁を極めるに至つた。黒川は本村唯一の水路にして、水田の多くはその沿岸に擴つてゐる。面積〇・七方里あり、戸數五百四十、人口四千五百を數へる。

明治維新前は高田藩領に屬したところで、廢藩置縣の際には柏崎縣に編入せられ、後、新潟縣となつた。明治二十二年町村制實施の時、猿毛、上中山、米山寺、松留、水野、下牧、平澤、芋島、下灰庭新田、岩野、高畑、岩手、城腰を以て組織された。

産業は殆ど農業にして、農區を五區に分ち、採種圃の經營、堆肥の増産、産米

の増收、養蠶、果實栽培の普及等が計られ、いづれも近時優秀なる成績を擧げてゐる。

教育は一村一校主義により、曾て獨立せる三校を廢して一本村二分教場とし、青年學校は昭和九年度春開校の際、表彰を受けた優良校である。また婦人會、修養會、青年團などありて修養會、講習會等を開いて智識の向上と國民精神の作興を圖ると共に、勤勞奉仕、社會奉仕に活動してゐる。

## 黒岩村

米山々彙のうちなる尾神嶽の西方斜面にあたる一小山邑にして、黒岩、狸平、東横山の三部落より成り、面積一・〇九五方里である。東北山地より起る黒川は大字黒岩を貫流して黒川村に入る。東方は刈羽郡に境する。

戸數二百有餘、人口千二百を越え、住民の多くは林業或は農業に従事し、産物は林産關係のものが多く、特に木炭は本

村主要産物の第一である。米、繭の産も尠くない。黒岩村信購販組合、狸平森林組合がある。また寺院には曹洞宗觀音寺同東光寺、眞宗石仙寺を有し、村民は宗教的信仰の念に厚く、風俗醇良、質實勤勞を愛する風がある。

鐵道信越線柏崎驛へは約三里を有し、途中黒川村より乗合自動車通じ、交通比較的便利である。また村内には縣道が走つてゐる。

## 和田村

郡の中央より稍や西寄りに位し、荒川の沿岸を占める農村である。地勢一般に平坦にして、信越線の便及び道路よく發達して交通は至便である。

區制時代には小六區に屬し九番組を組織した。即ち舊二十六ヶ村を一區域となし、後、これを二分して戸長役場を設置し、明治二十二年村制實施の際、自治區を四分して下板倉村、國明村、大倉村、大和村の四ヶ村としたが、同三十四年に

至り町村廢置分合のことあり、この四ヶ村を併合統一して現和田村を組織した。戸數千有餘、人口八千六百を越える大村で、面積〇・八六方里である。

主要生産物は米の四十餘萬圓を筆頭に蔬菜類、麻眞田、飲食物、薬工品、竹製品、大豆等である。

名所舊蹟としては、明治天皇御駐蹕碑あり、明治十一年の秋、明治天皇北陸御巡行の際、當村石澤字二ノ宮に御小休あらせられた聖蹟である。

## 鳥坂村

新井町の南に接続し、關川の西岸に位する。中央に鳥坂山が聳立し、姫川原、中宿の二字はその北麓にある。西には舟岡山の丘陵横たはり、東部に片貝川あり北に向つて貫流する。除戸、上堀之内の二部落は鳥坂山の背後にある。西に高所山の山岳を負ひ、除戸は長野縣との境をなし、飯山街道の一小驛站である。全村五大字より成り、面積〇・五三六

方里、村内城山は三百四十八米突、高所山は五百二十八米突、新井町より長野縣飯山町に通ずる街道筋に當る。

高田區裁判所出張所、鳥坂郵便局、村役場、中央電氣鳥坂發電所のほか、上堀之内尋常(三學級)、姫川原尋高(七學級)の二小學校あり、社寺には村社八幡宮、菓成寺、正念寺、證念寺、誓願寺等を有し、村勢活氣に溢れてゐる。

鳥坂城址は、その形狀鶏冠に似たるを特色とする。往昔、勇婦板額がその宗家の嫡子城資成を擁して據守せる城址なりとの傳説あるも、魚沼郡にも北蒲原郡にも鳥坂なる地あり、板額の籠つたのはこの鳥坂か瞭かでない。

信越線新井驛へ約一里、バスの便を有し、交通は悪くない。

## 原通村

郡の中央、新井町の南部に位置して關川の左岸にあり、西に高所山、花房山を負ひ、地勢概ね高燥である。小原新田、

大原新田、北田屋、坂下、寺尾、今府ほか十五部落を合して成り、面積〇・八二六方里に及び、信越本線新井驛より二里縣道通じ、バスの便がある。

水田二百數十町歩、畑、山林いづれも二百餘町歩を有する農村で、昭和八年には經濟更生村に指定され、翌十年から實行に着手し、今や計畫の大半は遂行された。米の増收、採種圃の經營、堆肥の増産などにへびをかけ、また紫雲英栽培に於ては品評會で二回入賞し、米も縣主催の産米改良協會聯合品評會に於て入賞するなど、成績は縣下屈指である。その他煙草の栽培、養鶏、養蠶も行はれ、蔬菜、葡萄の産もある。

小學校は二校あり、一は高等科が併置される。

## 名香山村

本縣の南端に位し、長野縣と境する本村は、上越の名峰妙高山の西麓に當り、原野山林多く、中央には、川が溪谷を作



つて北に流れてゐる。田口は關山と共に信越線に於ける雪の難所にして、毎年旅客の悩むところである。

スキー地赤倉、妙高山、關川は何れも本村の管内に屬し、大字田口は信越本線の一驛にして池の平温泉も近くにある。元龜三年十月、武田上杉兩氏相争の地で或は妙高山古名越の中山と云ひ、中山を名香山と書し、これを音讀してミヤウカウと唱へ、佛典に見ゆる妙高に附會し、山頂に佛宇を置いたものであらうと云はれる。面積二・〇六二方里である。

村内に久通宮家御別邸ありて毎年御來山の榮に浴し、更に大正十二年關東大震災の時は、皇后陛下が當地に御避難遊ばされた地である。海拔八百メートルの地に湧出する赤倉温泉、妙高温泉スキー場等あり、風致閑雅、盛夏なほ輕寒を覺え絶好の避暑地である。されば別邸、旅館軒を並べて夏時避暑客を以て賑ひ、村民は主としてこれら遊覽客を中心として生活なし、生産的な産業は少い。

都會人との接觸多きためか、教育普及の程度は驚くべきほど高く、小學校、青年學校の成績實に良好である。

### 矢代村

本村は郡の中央より稍々水南に位し、四隣は新井町、烏坂村、中郷村に取圍まれ、一部は西頸城郡と接壤する。自治行政區劃は菅沼、東志、西菅沼新田、窪松原、上中、西福田新田、三本木新田、西野谷新田、西野谷、兩善寺、岡澤、志村等にわかれ、役場は大字菅沼に置く。戸數七百弱、人口四千三百を越える。

生産年總額は約四十萬圓に達し、米の三十萬圓弱が最も多く、林野産物の五萬圓、蠶繭二萬數千圓がこれに次ぎ、その他食用農産物、園藝農産物も尠くない。官公農學校及び諸團體としては、役場村農會、在郷軍人分會、男女青年團、圖書館、尙武會、消防組、婦人會、産業組合、養蠶組合、教育會、青年學校、矢代尋常高等小學校等がある。

經濟狀態は良好、農村振興土木事業その他村營各種事業の成績もよい。

### 中郷村

郡の中央や、南寄りに位する妙高山麓の地にして、新井町、烏坂村、關山村、矢代村、原通村の町村に隣接し、東は丘陵を負ひ、西は矢代川に沿ひ、南方は原野山林多く、藤澤、板橋附近に耕地がある。義經記に、

出羽の國に聞ゆるせんとう(山盜)の大將に由利太郎と申すもの、越後の國に名を得たる頸城の郷の住人藤澤の入道と申すもの二人かたらひ信濃國へ越して其の勢七十八つれ、云々

とあるは大字藤澤の住人である。字二本木は北越軍記に、織田の謀將森長可と上杉景勝の相争つた地である。

村には訪日ツエツベリン號に水素ガスを供給した日本曹達二本木工場がある。また信越線二本木驛を有す。二本木、松崎、板橋新田、市屋、坂本

新田、藤澤、江口新田、片貝、福崎新田、西四ツ屋新田、稻荷山新田、宮の原、岡川、八斗蒔等の部落より成り、面積一・四八六方里である。比較的山岳が多く、従前は米は自給程度であつたが、數年前から増收計畫が實施され、今日ではすでに移出するまでに至つた。しかし曾て副業の王座を占めた養蠶は漸次衰へて、煙草の栽培がこれに代らんとしてゐる。大正七年、陸軍省主體の曹達會社が設立され、村民は工場の人夫となつて農閑期を過すものが多い。

### 關山村

縣の南端に位し、上越國境の名峰妙高山の東北麓一帯の原野山林地帯を占める本村は、土地概ね高燥なれど、東部にはやゝ火山灰質土壤の耕地あり、關山、大谷、桶海、坂口新田等の大字より成り、村内を縣道通じ、部落は概ねその沿線に聚る。また信越本線關山驛を有し、驛前より關温泉、燕温泉へ、七月より九月ま

で、乗合自動車が行復する。信越線田口關山といへば雪の名所で知られる。

源平盛衰記に、越後と信濃の境なる關の山路を廣く指したものである。北越軍記には關之山と載つてゐる。明治二十三年四月自治制施行、同三十四年十一月原通村の一部桶海、大谷の各大字を合併して今日に至つた。東西五里、南北三里、面積六・一五二方里に及ぶ。

關温泉は鹽類泉で、關山驛の西南七キロにあり、冬季はスキー客で滿員になり弘法大師の發見と傳へられる。燕温泉は硫黄泉で、關温泉より二軒隔たり、こゝより妙高山頂まで八軒、明治六年、關山村の人、岡本勝太郎氏の發見といひ、山間素朴なる温泉郷にて、冬季はスキーの好適地となる。關山神社は毎年七月を例祭とし、大いに殷賑を呈する。料理飲食店七軒、藝妓八名あり、旅館は十數軒をかぞへ、宿泊料は一圓五十錢から二圓五十錢程度である。

なほ村には高田區裁判所出張所、關山陸軍廠舎、高田營林署關山保護擔當區、穀物検査所出張所、郵便局、青年會圖書館等あり、寺院には慈雲寺、淨嚴寺、寶海寺、開稱寺、興善寺、眞海寺がある。

### 杉之澤村

本縣の最南端に位し、長野縣と國境を接する本村は、四圍を戸隠連峯、妙高、黒姫の諸高山にかこまれ、原野山林多くの中央に笹ヶ峰牧場がある。關川上流の地域にして部落はその沿岸にあつまり面積六・一五六に及ぶ大村であるが、人口は僅かに千三百數十名をかぞへるに過ぎない。關山驛より一里ばかり山奥へ入つた村で、交通は便利といふことが出来ない。しかし飲食料理店や藝妓置屋もあり、山村ながら文化も娛樂も一通りは揃つてゐる。

笹ヶ峰牧場は妙高山麓なる廣大翠延の地にして、清湖あり、夏季のキャンプに適する。苗名瀧は關川の水源をなし、高



さ凡そ十八丈、幅一丈餘、附近一帶は白砂雪を敷き、稀に見る勝地である。

眞宗である。

信越線新井驛、脇野田驛へは共に一里

## 斐太村

南葉山の東麓にあたり、西半は山地、東半は頸城平野の平坦なる沃地である。東は矢代川を挟んで和町村と境し、東南に新井町がある。

籠町、五日市、上四ツ屋、谷内林新田ほか二十大字より成り、面積二・一三五方里を有す。大字中に飛田及び飛田新田あり、國音の相通するところより斐太の村名が起つたものであらうといはれる。村内斐太の森に斐太神社あり、また大字籠町に屬する鮫井(一名鮫尾)は天正七年上杉景虎敗死の地である。

斐太、西郷兩尋常高等小學校あり、前者は八學級、後者は七學級に編成され、學業成績良好である。また私立青年團圖書館がある。寺院は唯念寺、常圓寺、勝福寺、慶尼王寺、本澄寺ほか九ヶ寺あり慶尼王寺が曹洞宗に屬するほかは、全部

## 金谷村

本村は郡の西部に位置して斐太村、和田村、春日村、桑取村、高田市等により四隣を接し、東部は高田市に面するため交通の便良好であるが、他の三方は山岳に掩はれるため不便である。戸數九百九十餘、人口六千五百をかぞへる。

藩政代時には神原領に屬してゐたが、明治維新後、北大崎村及び下郷村の二に分れ、同三十三年十月、この二ヶ村を併合統一して現在の金谷村となつた。享保十五年、村内に東本願寺掛所を置かれしことあり、本願寺第十七世眞如上人が開基である。寛保三年に至り、神原侯が當城主として入御間もなく高田別院となつた。今も大字大貫にあり、村民の信仰をあつめてゐる。

村は下記の二十二大字に分れる。即ち門前、朝日、小瀧、下馬場、黒田、地頭

方、灰塚、青木、上中田、下中田、鹽荷谷、京田、向橋、儀明、五湯谷、後谷、大貫、飯瀧寺、下正善寺、宇津尼、上綱子、中ノ俣がそれである。

産物の主なるものは米、薪炭、大根、里芋、漬菜、馬鈴薯、鶏卵、繭、薬工品等である。

尋常高等小學校三校、尋常小學校一校を有し、青年學校は三校あり、神社は三十二社、寺院十四ヶ寺をかぞへる。

## 春日村

郡の西端、直津町の東にあり、北方は日本海に面し、他は高田市、有田村、金谷村、谷濱村、新道村等と相交はり、荒川の東岸に位する要驛地で、地勢概して平坦、交通の便は極めてよく、鐵道信越本線春日山驛、北陸本線郷津驛を設けてゐる。藤新田、土橋、塚田新田、藤巻ほか二十一大字より成り、面積一・六〇四方里に及ぶ。

村のほと中央部に有名なる上杉謙信、

同景勝等の春日山城址がある。中世、越後文化の中心地として、その大都邑を誇つたものであつたが、堀氏によつてこの文化は福島小平野城下にうつされ、間もなく高田が松平忠輝の居城として築かれるに至り、この城址はたゞ舊蹟としてその名残を止めるに過ぎない。大字愛宕には愛宕権現の舊址あり、大字小場小丸山には眞宗の高祖眞大師の遺跡ありと傳へる。春日山は一名鉢ヶ峰と稱し、上杉氏府城のあとで、規模雄大、まことに要害の地にして往時の壯圖を偲ばしむるものがある。山腹には縣社春日神社ありて謙信公を祀る。また村には五知國分寺があり、天台宗寺院にして、天平年間、僧行基が聖武天皇の勅を奉じて草創せる古刹、大日、多寶、寶生、藥師、阿彌陀の五如來を安置し、本尊大日如來は國寶に指定されてゐる。

ふて直江津町に隣り、南は日本海にのぞみ、海岸線は單調であるが、遠淺なる故海水浴に適する。地勢高燥にして山勢は海濱に迫つてゐる。

もと長濱といつたところで、海岸中、越の長濱と呼ばれるところは、親不知と共に難所と稱せられ、昔、加賀前田氏の通行の時は、村々の壯丁五十人が出て海の渚に立塞がり、波の寄せ来るを防ぐを例とした。その壯丁を杖衝といつた。最も景越に富み、四海波の奇は人の賞するところ、東遊記に

又名立の次に長濱といふ濱あり

たそがれにゆき、の人の跡絶へて

道はかどらぬ越のながはま

などいへる古歌もありと聞けり、誠に此あたりは都遠くよろづ心細き土地なりき

とあるはこの地である。有間川、長原、丹原、鍋ヶ浦、吉浦、上宇山、下宇山分ほか十五大字より成り、面積一・八八一方里に及ぶ。北陸本線に沿ひ、谷濱驛を

有し交通の便はよい。

郷社阿比多神社、村社日吉神社、無格社二、曹洞宗悅翁寺、同長昌寺、同洞泉寺、同龍興寺、眞宗西榮寺、同流泉寺等の社寺がある。

## 桑取村

西は山岳を以て西頸城郡と堺し、有馬山の山谷にあたり、南に南葉山、重倉山の高峰がそびえ、大淵、横畑、皆口、西谷口、北谷、土口、増澤、東吉尾、西吉尾等の大字より成り、諸部落は概ね有馬川の沿岸にある。面積二・二八九方里あり、田百四十町歩、畑百町歩、山林五百數十町歩で、米、繭の産が多い。北國太平記に

景勝あやめも知らぬ暗き山路を忍び通り、善光寺後歛取といふところを廻りて五更の頃北城彌五郎が陣に押寄せ

云々とあり、歛取は即ち今の桑取のことである。北陸線谷濱驛へ二里、縣道は通ずるも交通はあまり便利でない。

## 谷濱村

西は西頸城郡に境し、東は春日山を負



神社は無格社のみ三社、寺院には東林寺、龍雲寺、林光寺、靈雲寺あり、いづれも曹洞宗に屬する。

表彰をうけたことがある。村社一、無格社四、蓬龍寺等の社寺がある。

た村内には私立の樽本青年團圖書館を持つてゐる。

## 大鹿村

高田市を去ること南へ五里餘、南北に長く、東西に稍狭き地形をつくる本村は、いはゆる有名なる大鹿煙草の産地である。煙草に次では米が多く、副業では木炭製造が主位を占めてゐる。村更生のための諸計畫は、村民一致協力してこれが達成を期し、堆肥増産その他の生産關係方面に於ても、生活改善、風俗改善等の方面に於ても、頗る良好なる成績を見せてゐる。

諸團體には自制館、村農會、尙武會、在郷軍人分會、消防組、青年團、養蠶組合、戸主會、火災豫防組合、犯罪豫防組合、煙草耕作組合、衛生組合、麥作組合等があり、學校は一村一校主義を以て臨み、農業青年學校は男女共に成績良好、出席率も百パーセントにして、會て度々

## 豐葦村

本村は信越國境に近き山村にして、大鹿村より長野縣飯山町に通ずる一路はこゝを通過する。また信越線關山驛へ二里新井町へは三里半、途中バスの便あり、交通の便は悪くない。

土路川の水源をなすところで、袴岳、萬坂峠、斑尾山、毛無山等にかこまれ、村の東南部に沼澤地あり、豐葦の名は或ひはこの沼澤に因んで起つたものであらうとも云はれる。

土路、樽本の二大字より成り、村役場は土路に置く。面積一・五六六方里を有し、有租地四百八十町歩を越える。米藪を主産物とし、千餘の村民は殆ど全部が農耕に従ひ、耕地は水田七十五町歩、畑地百十五町歩である。豐葦村信用組合は經營の基礎頗る堅實である。

寺院に眞宗淨光寺、同眞宗寺あり、ま

## 上郷村

本村は關川の上流、郡の東南隅に位置し、四隣は大鹿村、關山村、原通村、水原村、泉村、平丸村等の諸村に圍繞せられ、松倉山の山麓たるをもつて地勢概して山岳、荒川の東岸に幾分の平地を有してゐる。飯山街道は村を南北に通じ、猿橋より信越線新井驛へバスが通じ、交通は頗る良好である。戸數四百餘、人口二千五百を越える。

主産物は米、大豆、小豆、藪、煙草等で、その他薬工品、木炭等の副業的産物がある。堆肥増産のためには堆肥競技會を毎年一回宛舉行してゐる。

官公署諸團體としては村役場、郵便局、村農會、在郷軍人分會、男女青年團、青年學校、小學校等があり、青年學校の出席率は百パーセントに近く、數回にわたつて表彰を受け、縣下有數の優良校として知られる。

て知られる。

## 水上村

新井町の東方に在り吉木、北條、西條上新保、川上、光明寺新田、吉木新田の七部落を併せた村で、關川を隔て、新井町に對し、東は板倉村につらなる。地勢南方は山地にして北方に傾斜し漸次平坦である。

面積〇・五九五方里。新井町との間にバスの便あり、交通至便である。

耕地は水田多くして畑地少く、主要産物は米である。金肥節約、肥料の自給自足を計畫し、紫雲英作付反別は百二十町歩に及んでゐる。

村内に八十餘町歩の原野あり、大正八九年頃よりこれが開墾に着手し、今やその半分を開墾した。副業は薬工品、養蠶、養蠶が多く、最近は葡萄の栽培も盛んになつて來た。

小學校は一校にして、青年學校が併設される。女子教育に於ては、明治四十一

年婦徳修養の目的を以て佛教婦人會が組織され、現在には二百數十名、四十歳前後の婦人を會員に持つてゐる。該婦人會は會て縣下隨一を謳はれたことがある。

なほ村内社寺には村社日吉神社、慶樂寺、西岸寺、勝徳寺、宗顯寺、善性寺、長泉寺、専念寺、徳専寺等がある。

## 板倉村

本村は四十一箇の部落を合併したる大村にして、荒川の東岸に位し、黒倉、松倉の兩連山は屹立し、その餘脈は村の中央部にまで及ぶ。北部は頸城平野の平坦なる沃地にして耕圃よく拓けてゐる。面積三・一八二方里を古む。

針村は本村の主邑で、北國治亂記に天文荒川針村の名が見える。針村の南なる大字山部には箕冠城址がある。天和元年以後、幕府の領にして、寛保元年まで六十年間は高田御豫所の支配を受け、同年榊原氏の高田に轉封されるや翌二年幕府は川浦に代官所を置いて、當地を支配

した。

信越線新井驛より針村へ一里半、別所へ二里、いづれもバスの便がある。しかし和田村に通ずる縣道沿線の地が交通至便なだけで、山岳地帯は未だ道路開けず人馬の往來に不便を感じてゐる。

## 泉村

關川の東岸に位し、その支流たる濁川の流域を占め、下濁川、上濁川、卷淵、和屋、中横山、木成、大具、大下、上馬場、小局、東菅沼の十一部落を併せて成り、面積〇・八一一方里である。猿橋村の北なる一溪を取巻く地で、全村山岳連互し、平地の見るべきものはない。従つて耕地は水田百八十町歩、畑地百六十町歩に過ぎず、山林は三百八十町歩にのぼる。産物は米、藪のほかに林産物のあることを見逃すことは出来ない。

信越線新井驛へは一里にて達するを得、途中からバスが通ひ、交通の便は些して悪くない。寺院には専了寺、開稱寺



養性寺等あり、いづれも眞宗に属する古刹である。  
因に村内戸数は三百二十五にして人口は二千餘である。

### 平丸村

本村は郡の東南部に位して松倉山の西麓にあり、地勢、東は松倉山の麓たるを以て山岳多く、南北また丘陵に充たされて、僅かに西部上郷村の方面に平地を有するに過ぎない。本村の名を現はせる平丸川は村内唯一の水路である。隣接町村は上郷村、泉村、水原村、豊葦村、長野縣下水内郡太田村、同外様村等にして、下平丸、上平丸の二大字より成り、面積一・〇六八方里である。

信越線新井驛へ三里半、途中バスの便ありと雖も、交通至便とはいひ難い。東南には長野縣に入る縣道がある。

村に小規模なる炭坑あり、また米、繭等の農産物がある。副業の蓑帽子製造は本村の特産物で、その他莫座、蓑製品、

木炭等がある。村農會では醤油の自家醸造の指導奨励をはじめ、生活改善と消費節約のため種々の方策を講じてゐる。

### 寺野村

信越の國境なる黒倉山の西北麓に位する村で、地勢高燥を極める。久々野、猿供養寺、東山寺、大池新田、機織の五大字を含み、面積一・一〇二方里である。村内猿供養寺は笠冠の東南山中にあり、俗に山寺ともいひ、古刹である。元享釋書に、越後守紀躬高三島郡乙寺に猿猴寫經供養の事を録せるは、この山寺の縁起を彼處へ錯亂せるものといふ。また大池勝景地は、頸城平野を一時の中に修め、風景絶佳である。

信越線新井驛より二里十六町、自動車の便がある。

戸數約三百八十、人口二千三百を數へ住民は農林の業に従ひ、寺野村信購販組合その他各種團體の活躍旺んにして、寺院に眞宗福恩寺あり、小學校は寺野尋常

高等小學校一校、七學級編成である。

### 水原村

郡の西南隅なる信越國境の一山村にして、西北は耕地、南は山林地である。東方佛ヶ峰より西方小濁に達する細長い村で、西北にはヨシ八池がある。

上小澤、大濁、小濁、坪山の四部落を併せて成り、面積一・三一一方里にして、戸數三百三十餘、人口二千二百三十をかぞへる。

有租地は六百三十餘町歩あり、耕地は水田二百十五町歩、畑地二百二十五町歩にして、山林原林百七十八町歩に及び、米を以て村内第一の産物となす。水原村信用組合は、設立以來常に良好な成績を以て發展し來つた。

信越線新井驛へ三里半、途中よりバスが通じてゐる。交通は稍々良といふ状態である。寺院に圓光寺、了願寺、善妙寺の三あり、共に眞宗に属す。小學校は高等科を併置し七學級編成である。

### 菅原村

郡の中央稍々南部に位し、明治十年以降油井大いに起り、爾後益々盛んになつたところで、尤も二百年前、すでに臭水を採り燃油に供したといふ歴史もある。東は櫛池村に、西は三郷村に、北は高士村につゞき、南は別所川を以て板倉村に連つてゐる。東南は山を負ひ、稍々西北方に傾斜をつくつて耕地拓け、上江、坊ヶ池、櫛池川、別所川、雁平川等は灌漑の便良好である。

交通は三郷線、西柿崎線、飯田線、乙石澤線、本線、乙根越線、今會根線、大石線等の諸道路あるを以て至便である。自動車の便にも恵まれる。

戸數五百有餘人、口約三千を擁し、純然たる農村にして、その生産物も、米、麥、甘藷、大根等の農産物を主とし、鶏卵、竹材、葎、萱、杉皮などの農家副業物がこれに次ぐ。

官公署團體としては、村役場、信用組

合、地主會、消防組、尙武會、在郷軍人分會、男女青年團、幼年團、村農會、村是實行組合などあり、小學校は菅原尋常高等小學校一校のみ、青年學校には女子部の設けがある。

社寺としては菅原神社、稻荷社、諏訪社、龍覺寺、西巖寺、明道寺、大徳寺、福淨寺、高禪寺、普泉寺、專福寺、無量寺、淨通寺、了賢寺、妙土寺などが擧げられる。

### 高士村

郡の東方に位し、頸城平野の一部を占め、村内概ね耕地にして、水田六百五十町歩、畑地四百三十餘町歩を有し、米の産出が多い。村には廣大なる葡萄園あり岩鼻葡萄園と稱し、村の南方、高田驛より三里の地にあたり、第三紀丘陵を利用して二十餘町歩に三百五十種、七萬餘株を栽培し、高田名物葡萄酒醸造の原料とされる。

古くは高津庄武士郷と稱したが、自治

制施行の際高士村と名づけられた。本高田、松塚、妙賀、油田、森田、十二之木ほか十六大字より成り、面積〇・五九三方里である。信越線高田驛へは約三里、バスの便がある。

村には區裁判所出張所、郵便局、信購組合等あり、寺院は曹洞宗最光寺、同藥師院、眞宗淨福寺、同正法寺、同勝樂寺、同明照寺、同隆滿寺、同蓮光寺等が擧げられる。

### 櫛池村

郡の東南隅に位する山村にして、西は菅原村に接し、東は東頸城郡と交はり、南は長野縣に界する。

棚田、北野、梨平、赤池、青柳、鶯澤上中條、鈴倉、寺之脇、東戸野、水草等の十二部落より成り、面積一・五〇四方里。櫛池川は本村に源を發し、西北流して荒川に入る。高田市へ三里、縣道通じ途中よりバスの便がある。

地勢東南に高く、西北に低く、石油の



産あり、産物中の第一となす。しかし住民の大部分は農業に従事する。最近、各種農産物の増産を計つて結果よく、殊に生産費低下のための堆肥増産は頗る好成績を示し、金肥も使用されてはゐるが、個人購買は禁じられ、産業組合を通じて一手に廉價に仕入れてゐる。副業には藁工品と木炭があり、木炭は年産五萬石に及び、本村の特産物である。

### 里五十公野村

本村は郡の中央新井町より東北方に位置し、西南は高士村に接し、信越國境に水源を發したる飯田川はその境界を北に向つて流れる。東南は東頸城郡と接壤する。地勢は概ね平坦である。高田市に通ずる縣道に沿ひ、大字下中にて他の縣道と十字に交叉し、高田市へ二里半、バスの便あり、交通状態良好である。

近世、山五十公、里五十公の二郷に分れてゐた。大字川浦は古來名邑にて、徳川幕府は陣屋をここに置き、代官を派し

て公領五萬石を支配せしめた。大字法花寺は國分尼寺の遺址にあらすやと傳へられる。殊に法花寺の地名の殘つてゐるのは、國分尼寺または京の法華寺の何れかに關係してゐたに由るとの説もある。生産物の主なるものは米、木材、双物類、履物等である。また村には小學校、男女青年團、在郷軍人分會、産業組合あり、成績良好である。

學校は楠池尋常高等小學校(九學級)、青柳尋常小學校(三學級)があり、青年學校も設けられ、補習教育の充實大いに見るべきものあり、殊に青年學校の入学率と出席率は良好である。

警察は高田署、郵便は飯田局管内で、村にはまた頸城電氣會社がある。

### 上杉村

東は丘陵連亘して東頸城郡と境し、西は頸城平野に接し、土地平坦である。今保、所山田、岡田、島倉、北代、下新保、大、下田島、三村新田、浮島、桑會

根、掃澤、山高津、井ノ口等十四大字より成り、面積一・〇二方里あり、高田驛へ三里半、バスが通つてゐる。大字所山田の五十公山に五十公神社あり、物部五十公氏の廟がある。また岡田の風卷神社は地方庶民の崇敬あつく

さく花に神も心やなごむらん

春日のどけき風卷の森

と泉久澄の歌にあり、天曆二年の創始と傳へられる。この他寺院には阿彌陀寺、延壽寺、蓮淨寺、長樂寺、入光寺、常光寺、覺願寺、本善寺、禪長院、欣淨寺、正覺寺、長圓寺、領勝寺等あり、禪長院が曹洞宗であるほかは、全部眞宗に屬してゐる。なほ本村主要産物は米を第一とし、副業に養蠶が行はれる。

### 美守村

保倉村の南につき、土地低平にして沼澤地が多く、直江津、高田の兩驛へ何れも二里半、縣道通じ、バスの便あり、交通は幾分良好である。

美守はヒタノモリと訓じ、夷守即ちヒナモリの誤つて傳へられたものといふ。

大字本郷は夷守の本郷であつた。

錦村、柳林、上廣田、岡木、米子、廣井、下廣田、本郷、沖柳、越柳、神田、塔之輪、山腰新田、末野、末野新田、猿俣新田などの部落より成り、面積〇・七五方里に及ぶ。

戸數四百六十戸弱、人口は三千人を越え、耕地は田四百七十餘町歩、畑百三十餘町歩を有し、村民は殆ど農耕に従事して生計の資としてゐる。産業組合は四種兼營である。

寺院には眞宗玄宗寺、同光覺寺、同西勝寺、天台宗慈圓寺、日蓮宗法徳寺、同蓮華寺ほか五ヶ寺がある。

### 諏訪村

頸城平野の中心を占める本村は、舊くは夷守郷に屬したところで、諏訪はまた諏方につくつた。面積〇・八二四方里、田七百餘町歩、畑百十町歩を有す。

郡の西北方に位し、東は美守村、西は有田村につき、南は津有村、西南は里五十公野村に接し、北は保倉村に連つてゐる。地勢概して平坦、村の中央を飯田川が流れ、耕地多く、農業盛んである。

自治行政区劃は上眞砂、北田中、杉野袋飯塚、鶴町東原、荻野、下掘之内、南新保、高森、横會根、横會根古新田、北新保、米岡、中眞砂、川端、東中島、上千原、下眞砂、福橋の二十ヶ字にして、村役場は眞砂に置く。

産業は米の生産を以てその主なるものとするが、その他藁工品、果實等の農家副産物も多い。小學校は二校、神社十八社、寺院十三ヶ寺を有す。

### 保倉村

郡の中央に位し、保倉川の流域にして土地平坦、美守村の北につき、駒林、上名柄、下百々、小泉長岡新田、長岡ほか十三大字より成り、面積〇・八一五方里である。

飯田川右岸地方にして、保倉川は東頸城郡菱ヶ嶽に源を發するも、本郡に入れば、地勢低平なるを以てその北岸に沼澤を多く見る。村名は東頸城郡にある保倉谷より出たと説く者がある。

直江津驛へ約一里二十町、高田驛へ二里十五町、共にバスの便がある。耕地多く、農業盛んにして、村農會の活動よろしきを得て、近年、生産は著るしき發達を遂げ、殊に採種、柿の栽培、竹細工等に力が入られる。

村にはまた村役場、在郷軍人分會、男女青年團、消防組、上吉野小泉各尋常高等小學校、青年學校、水利組合がある。

### 有田村

荒川の右岸に位して直江津町の東に接し、大字春田新田は保倉川、荒川二水の合流地にして、西に一橋を隔て、直江津驛に通ずる。また春田新田には應化橋址あり、淨瑠璃木に逢岐橋といへる所で、所謂安壽津志王物語に關する古跡である



春田新田の北には福島城址あり、堀左衛門督忠俊、徳川忠輝等の居城であつたが慶長十九年、福島に水災多きため高田に築城され、福島は廢墟となつた。安江、小猿屋、小猿屋新田、三田、三田新田、三ノ橋、三ツ橋、福田、三屋、上源八、松村、佐内、春田新田、鹽屋新田の大字より成り、面積〇・六〇七方里に及ぶ。

### 三郷村

荒川の東岸にあり、北は津有村、西は高田市に接し、南北に荒川の支流を有し土地比較的平坦である。元の物部郷の地で、天野原新田、本長者原新田、新長者原、長尾新田、藪野、本長者原、今池、下四ツ屋、西松野木、東稻塚、下稻塚等の部落より成り、全村

### 津有村

本村元高津郷の地にして、高田市の東に接する農村である。四ヶ所、戸野目古

### 新道村

高田市の北方、荒川の右岸に位する一村で、東は津有村に境し、民家の多くは荒川の沿岸に散在し、大字稲田は高田市に接し、街衢をなせる部分は同市に屬し

すべて耕地、面積〇・三二七方里にして高田市へ縣道通じ、交通の便開ける。即ち縣道梨平高田線、新井柿崎線のほか、稻増上稲田線、玄蔭寺高田線、西松野木戸野田線等あり、その他多數の里道により物貨の集散に大なる利便を與へてゐる。都の中央なる沃野を占め、菅原村、和田村、板倉村、高士村、新道村にかこまれ、村内を十一農區に分つてゐる。松野木部落農區はその施設及び實績に於て縣下の模範と稱され、各方面より表彰を受けしこと數回にわたり、他府縣より見學に来る者も非常に多い。この部落は實行機關を畑作部、養豚部、副業部、婦人部社會部にわかち、各部が競争的に事業の向上と充實に勵んでゐる。産物の主なるものは米穀、蔬菜、果實、薬工品などである。

新田、門田、市野江、桐原、本道、下野田、戸野目、藤塚、下新町、池、熊塚、上富川、熊留新田のほか二十四部落を併せて成り、面積一・一七九方里あり、戸數千二十、人口六千三百弱をかぞへる。住民の多くは農業に従ひ、重要産物は米で、その年産數十萬圓にのぼる。耕地は水田千二百五十町歩、畑地約九十町歩で全村殆ど水田である。村には池島郵便局、通俗圖書館あり、高田市に接するが故に交通至便である。また村内寺院には願立寺、源長寺、西方寺、流源寺、明安寺、法福寺、淨願寺、西養寺、淨雲寺、淨林寺、本覺坊、蓮休寺、臨行寺、本淨寺、眞宗寺、淨音寺があり、全部眞宗に屬する。

その他田家の部分は本村に含まれる。上稲田、種場、子安、子安新田、鴨島ほか十四大字より成り、面積〇・一二方里、北越雜記に

慶長十七年高田築城の折今池、種場、鴨島、上稲田、上島等いふ村里の地を幅三十五間堀割りて新川とす。とあり、新川はアラカハと呼び、後、荒

## 西頸城郡

位置・地勢 西頸城郡は越後の最西端に位し、東中頸城郡、西は富山縣下新川郡、南は長野縣北安曇郡と境し、北は日本海に面してゐる。

東西十二里十六町、南北六里二十八町面積八十二方里にして、本縣全面積の約十一分の一を占める。

東南西の三方は殆ど山岳を以て掩はれ獨り北方のみ日本海に臨み、且つ地勢南方より北方に向つて次第に傾斜せるを以て、河川は自ら北流して日本海に注ぐ。

しかも山勢高峻にして、海濱との距離短きが故に、河川は大概短くして急流をなし、早川の如きその最も著るしきものである。隨つて河川流域と雖も大平野なく僅かに姫川河口糸魚川附近に少許の平野を存するのみである。

名勝舊蹟 郡内の名勝舊蹟のことは、各町村にも縣勢に於ても記述しあれば、茲には單に便宜上その名稱だけを擧げよう。

(一) 親不知、子不知、駒返、橋立金山

不動瀧、黒姫山、月不見池、中山公園、駒ヶ岳、鉾ヶ岳、燒山

(二) 堺川、布川、青海川、姫川、田海川、大和川、海川、早川、能生川、名立川

(三) 蓮華温泉、梶山湯、平岩湯、柵口温泉、笠倉温泉、蒲原湯

(四) 不動山城、勝山城、根小屋城、清崎城、金山城、徳合城

(五) 鬼伏城、市振關、虫川番所

(六) 奴奈川神社、江野神社、佐多神社、青海神社、白山神社、丸田神社

(七) 宍道寺、靈源寺、千手院、水保觀音堂、雲台寺、西性寺、日光寺、名立寺

(八) 明治天皇北陸御巡幸遺跡

(九) 磯部村夫妻松、蓮華山高山植物

農業 本郡水稻の種類は百數十に上るが、愛國及び白坊主が最も多い。山間地では早坊主、龜の尾などがある。陸稻は明治三十四年頃からの栽培で大正三年頃より急激に栽培反別の増加を見た。柿は本郡の氣候風土に適するが、販賣用に供せられるものは尠く、自家用の域をい



くも出てゐない。梅は非常に多く、葡萄もまず／＼増嵩の一路を辿つてゐる。農家副業に菅笠、疊表、和紙、麻布の製造があり、養蠶も多い。

**林業** 林野面積は郡全面積の八割六分を占め、これら林野より年々生産する林産物の額は平均三十萬圓内外を算し、移出十萬圓内外に達す。殊に木炭の産は最も多く、大正九年には郡木炭同業組合も組織された。蠶箔、桑箱、箆等の竹製品も少くない。

**水産業** 漁獲の主なるものは鯛、鮪、烏賊、鰻、鮪、鰈等で、遠海漁業の開拓に關しては、郡水産組合が夙にこれを奨励してゐる。能生、間脇、中濱など良漁港に恵まれ、魚族の蕃殖保護のごときも良好である。

**工業** 工業の主なるものは清酒、醬油、絹織物、染物、車輛製造、瓦、肥料、製茶等である。根知村附近の綿織物や、小瀧村、今井村、能生谷村、名立村等の麻織物も有名である。家内工業としては木

竹工品、薬工品である。

**鑛業** 小瀧村の金、銀、銅、鉛、水鉛、石炭、青海村の石灰、金、銀、銅、鉛、亜鉛、砂金、今井村の金、銀、銅、石炭、能生谷、名立兩村の石油、海岸地方の砂鐵の如きは其の尤なるものである。

**商業** 徳川時代に於ける本郡と他郡との主なる商取引は信州との通商及び海運による他地方との商業であつたが、微々たるを免れなかつた。交通通信機關の發達した今日と雖も、縣の西邊、僻地なるため、また良港に乏しきが故に、商業は不振状態にある。

**人情・風俗** 山間部落の住民は人情概ね樸直であるが、敏捷を缺き、且つ各自割據的の氣風が強い。随つて一般に祖先を崇み、神佛を敬ふの念厚きも、社交的ではない。

國道筋の部落住民は概して浮華の點は免れない。近時教育の普及と各種交通機關の完備とは、上下各階級に大なる刺戟を與へて、舊來の陋習は打破せられた。

根知谷邊の山村にては、老若男女共に帯を力めて強くしめる風俗あり、これ往古は帯の締め方の強さを以て越後ものと識別されたる遺風なりといふ。

本郡は本願寺派浄土真宗の感化力驚くべく強大なるがためか、概して宗教的迷信は少いやうで、思想一般に諳觀的で、反抗心に乏しいのは喜ぶべきであるが、卑屈に失するの嫌ひあるは憂ふべきことである。

## 名立町

糸魚川町の東六里八町、名立河口にあり、延喜式には鶉石と水門との中間にありと出てゐる。後に山を負ひ、前に海を抱き、住民は農漁業に従するものが多いが、古來著名なる工匠を出して居り、現在も大工の多きことは他町村にその比を見ず、また養蠶を奨励するあり、商業も漸次發達して近傍部落の需要を満たしてゐる。即ち本町は初め農漁業地として起り、中頃、加賀侯參勤交替の節の宿驛と

して非常の發達を遂げたが、明治維新後次第に衰境に入り、石油により少しは芽生えやうとしてまた乏しくなり、鐵道開通後一層の打撃をうけ、目下開墾漁業及び養蠶により町勢の發達を圖つてゐる。名物にはタリタ落雁、味噌煎餅、黒海苔あり、大己貫命が當國を經營し給ひし時鳥帽子武といふもの、大字大瀧に潜伏して服せず、當地に陣してこれを征し給ふ時に賦貢米を納れ謝罪したといふ傳説がある。

社寺舊蹟では江野神社、日前神社、諏訪神社、淨福寺、王光寺、名立寺、宗齡寺、武内宿禰舊蹟、長者ヶ原、明治天皇御駐蹕地等が知られる。名立寺は明治十一年九月二十五日、明治天皇御行在所として、また徳川時代には加賀侯參勤の途次の旅舎として著名である。

## 能生町

能生川注口と權現山の間にあり、糸魚川町の東三里十町、糸魚川町に次ぐ郡内

の名邑で、南に物産豊かな能生谷を控へてゐる。權現山の西には小泊といふ良灣があり、漁業の利に富んでゐる。

小泊、能生の二大字より成り、戸數七百五十餘、人口三千八百五十人である。町役場は大字能生に置き、その他能生警察署、糸魚川區裁判所出張所、能生築港事務所、縣立能生水産學校、能生尋常高等小學校、能生漁業組合、小泊漁業組合、郷社白山神社、大泉寺、金剛院がある。郷社白山神社が遠く王朝時代より著名なことは、遺跡並に寶物什器等によつて明らかで、海岸權現山といふ磯山に鎮座し、泰澄大師作の聖觀音の木像（國寶）をつたへ。社領五十石を有した地方の名祠である。祭禮は毎月四月二十四、二十五日の兩日に行はれ、小泊まで神輿の巡幸するを常である。境内の櫻に釣れる小鐘は潮路の鐘と稱し、潮の満ち來らんとする時は人觸れずして響き渡ること、一里四方なりといふ。

本町發達の経路は判明しないが、中古

慶長以後に現在の市街をなし、主に海産物によつて生計を營んで來た。商業頗る活潑で、毎年一月二十日、二十四日、八月十日、十三日を以て市場を開き、非常の賑ひをなす。特産として鯛の地曳がもつとも盛んである。

## 糸魚川町

本町は姫川河口の東に在り、直江津の西四十一里、新潟市を距ること四十二里二十四町である。北陸線の一驛で、郡の中央にあたり、郡の首邑である。

戸數千八百、人口九千八百を越え、水産物、木産、繭、米穀類、蔬菜、清酒を主産物とし、名物に柚餅子がある。町には町役場、郵便局、警察署、税務署、區裁判所、小學校、縣立中學校、縣立高等女學校、在郷軍人分會、男女青年團、婦人會、銀行會社多數、郷社天津神社、村社水前神社ほか七社、善導寺、正覺寺、圓照寺ほか九ヶ寺がある。世の中はいかにありけいといひ川



いとひし身さへ行方知られず  
と堯恵が歌ひ、竹外も

糸魚川水糸魚躍 知汝吟骸埋停河  
従比繡簾銀燭衣 聽歌不聽越獅歌

と吟じた。糸魚川の名稱の起源は不明であるが、或は弘法大師が管に糸を巻きて川に投ぜしに忽ち魚となりしにより名づくこと云ひ、或はこの地に兩軍挑み合ひしを以て挑み川と稱せしより起つたともいはれる。詩人は脈川と書く。

城址は龜岡城または清崎城といふ。初め上杉氏の臣、丸田伊豆守がこゝに居り天正七年江州の浪士荻田主馬が謙信公より當城を賜はり一萬石を領した。慶長三年堀秀治が春日山城主となつて當城を管理し、その後高田城主松平忠輝の臣松原信勝が當城主として二萬石を賜はつた。次で溝口宜成の在藩時代、高田城主酒井家次の支配を経て、天正二年松平忠昌の臣荻田主馬の子隼人がこの城に入つて一萬四千石を食む。延寶九年の越後騒動の際、主馬は八丈島に流され、貞享二年城

廓を破毀した。然るに享保二年松平直之は糸魚川一萬石の領主となり、陣屋を置いて支配し、以て明治維新に及んだ。

### 青海町

縣社青海神社のあるところで、青海首はその開發者といはれる。田海の福來口は奴奈川姫の神蹟にして、媼ケ懐と稱する洞穴は上古人民穴居の跡なりと云ひ傳へる。後世に至るに及んで、池の平、船庭、本土等の各所に村落をなしたが、人智の開くるに隨つて、平坦の地を均し、漸次現今のところに移轉したといふ。昭和三年十月、町制を施行した。面積三万三千里、戸數千四百餘、人口約七千人をかぞへる。

主要産物は石灰原石、硝石灰、生石灰、硫酸アンモニア、石灰窒素、炭化石灰、酸性白土、木炭、木材、薪材、酒醬油類である。

町内には町役場、青海、田海各尋常高等小學校、橋立尋常小學校、實業青年學

校三校、郵便局、糸魚川警察署青海駐在所、聯合青年團、婦人會、在郷軍人分會、教育會、電氣化學會社工場、青海合同運送會社、青海軌道商會、青海製材會社、青海石灰製造會社、その他銀行會社多く神社は縣社青海神社、村社山添神社ほか十一社、寺院は清願寺、西蓮寺ほか七ヶ寺である。また、勝山城址、福來口等の舊蹟がある。

### 名立村

東西一里、南北五里の長大なる山村にして名立川流域に延亘する。東は中頸城郡と隣接し、南には頸城アルプスの高峰が連立する。森、大蒼、谷口、車路、體畑、杉野瀬、田野上、折居、丸田、池田ほか十大字より成るが、諸部落は皆名立川にのぞんで散在する。戸數五百六十餘人口三千六百を越え、面積三・八〇一方里に及ぶ。

明治二十三年町村制施行、同三十四年

上名立、下名立の二村を合併して名立村と稱し今日に至つた。郡内に同名の名立町がある。大字東嬉山及び瀬戸に油田がある。北陸本線名立驛より二里、バスの便を有す。

名勝に巖橋の藤あり、花季の賑ひはまた格別である。神社は無格社二社のみ、寺院には岩昌寺、昌禪寺、善興寺、宗龍寺、名立寺、徳常寺、明源のほか十ヶ寺をかぞへる。

### 磯部村

石立町と能生町の中間に介在し、日本海に面する村で、明治三十四年十二月、四ヶ所、川崎の與二ヶ村を合併して磯部村となつたもので、越後雜誌に、其地域最も狭く白波常に軒場を洗ひ断崖は屋梁を壓しまさに崩れんとすとあるは、この地の状況を叙したもので昔は領主より幕府へ進献の眞鱈は、皆この濱を本場と稱したといふ。

筒石、徳合、仙納、空熊新田、百川、藤崎大洞の部落を含み、面積一・二五四

方里、戸數は六百五十である。北陸本線筒石驛を村内に置き、名立町及び能生町へはバスが通ひ、交通の便悪くない。

村には藤崎齋藤家の夫婦松、筒石の千東島の名勝あり、村社水鳥磯部神社、同白山神社、無格社二、雲龍寺、應満寺、長澤寺、寶昌寺の社寺を有す。

### 能生谷村

能生谷とは妙高山の北なる火打山に發源し長さ六里に及ぶ能生川の溪谷をいひ能生谷の奥、火打山の下には棚口温泉がある。

東西十二里、南北五里の廣大なる山村にして、大澤、鷲尾、大道寺、大王、柱道、指盛ほか二十大字より成り、能生町の南に接し、面積七・九七一方里である。大字鶉石は能生川の西岸に、棚口は能生谷の南端にそびゆる火打山麓にあり、諸部落はみな能生川の溪谷にあつまり、

他は高峰峻崖屹立の地である。

戸數千四百餘、人口八千二百を算し、米藪及び林産物に富み、村には郵便局、通俗文庫、銀行支店、産業組合などあり北陸本線能生驛へ二里半、縣道通じバスの便がある。また神社は村社神明神社、同金山神社、同熊野大神宮、同大神社ほか無格社二社あり、寺院は吉祥寺ほか十ヶ寺をかぞへる。

### 木浦村

本村は木浦、鬼舞の二大字より成り、能生町の西南に接して海濱に位置し、大字木浦は能生谷川河口の西岸にして、東岸の能生町と相對してゐる。北越軍記に大正十三年、秀吉城中へ田馬と聞き、景勝は名達木浦鬼伏へかかり、上方道二十里を二日に推して、鹽水城の本丸田伊豆守が居城厭川に着給ふ。と載せ、或る説に、木浦は昔浦木とも云つたといふ。面積〇・八八二方里あり、漁業が多く



農耕及び養蠶による産物も少くない。木浦信購組合、鬼舞漁業組合、濱木濱漁業組合があり産業の発展を圖ると共に村民の福祉の増進につとめてゐる。

村内寺院には西弘寺、西性寺、西安寺、正願寺長福寺、東陽寺、海岸寺等がある。

### 浦本村

本村は三方を山岳で掩はれ、西北面のみが開いても日本海にのぞんでゐる。山嶺は海濱に迫れるを以て部落はみな北陸道沿線に位置してゐる。中濱、間脇、中宿、鬼鬼四大字より成り、面積〇・八一三万、早里の河口の東の中宿より鬼伏に至る海濱一帯を管内とし、北國太平記に、景勝天正十年越中へ發向名達浦本に押出し、鬼伏へ懸て親不知子不知を妻手に見て山路を傳ふ。

と、當地のことが出てゐる。北陸本線梶屋敷線へは僅か三キロにして、自動車の便あり、交通状態比較的良好である。

戸數四百十、人口二千六百を算し、農

耕或は漁業に従事するもの多く、本村漁業組合は夙にその基礎の堅實なるを以て聞える。なほ村内には村立御成婚記念圖書館、禪雄寺などがある。

### 下早川村

東南に頸城連峰を望み、山岳地帯にして、上早川村と共に早川の溪谷に沿ひ、北部に平地がある。日光寺、田屋、道明ほか十五大字を併せて成り、面積一・六七七方里、早川は大和川の東に並行し、長さ六里、源を兩飾山、焼山に發し、梶屋敷、中宿の間に至り海に入る。

本村はもと上早川村と共に早川谷と呼ばれたところで、大字井手には月不見池がある。これは梶屋敷驛より南へ一里、碧潭巖間に澄んで奇泉絶妙の勝地である。田四百五十町歩、畑二百町歩餘を有しこの地方の段丘米田の開發は、附近の景觀に特異性を帯びさせるに充分である。米の年産は十數萬圓にのぼる。

村には郵便局、銀行支店、信用組合、

水道利用組合、農業倉庫等あり、神社は一、寺院は十二をかぞへる。

### 上早川村

頸城の峻峰たる火打山及び焼山連峰の山麓にあり、村内至るところ嶮岳峻壁多く、早川はその間を深狭なる溪谷をつくりつゝ北流する。土鹽、越、宮平、中野、中林、坪野、猿倉、吹原、砂場、北山、角田、大平、土倉、中川原新田等の部落をあつめ、面積五・一七方里、戸數八百七十餘、人口四千四百餘である。

大字宮平に佐多神社あり、その山を鉾峰といふ。佐多神社は出雲の佐陀社と同じで、當地方が相當古くから出雲文化の流れに浴したことを物語る有力な資料である。

出雲本線梶屋敷驛へ三里半、途中からバスの便がある。村内笹倉温泉は單純泉で、享保年間、文左衛門なるものが宗林寺に安置する薬師如來の靈告によつて發見したと傳へられ、地は早川の上流遠

く焼山の雄姿を眺め、一方遙かに日本海の碧波を望んで風光絶佳である。

### 大和川村

本村は早川と海川の間の海濱を占め、大和川、田伏、竹ヶ花、厚田、梶屋敷の五大字より成り、面積〇・三二方里、大字梶屋敷は早川の河口西岸にあり、北陸道の小驛として街衢をなす。

古くは久比岐國造の一族に大和直ありその人々の居たところを傳へ

漕舟のさほの山邊は遠けれど  
名に流れたる大和川かな

と詠まれたところだ。戸數五百三十、人口三千三百を有し、水田二百餘町歩あり米作多きも、住民の大半は漁業に従事し漁業組合は三をかぞへる。

北陸本線梶屋敷驛を有して交通の便よく、村には郵便局、大和川圖書館、銀行支店、産業組合等あり、社寺には郷社奴奈川神社、村立壁神社、教念寺、大雲寺、誓願寺、萬徳寺、禪林、明通寺等が

ある。

### 西海村

北は海川の河口より南は信越國境の焼山、天狗原山の山麓に至るまでの廣大な地域を占むる本村は、村内山岳重疊し、一條の海川が貫流するのみである。平牛、羽生、成澤、眞光寺、田中、川島、道平ほか六大字を含み、面積四・三二方里あり、戸數六百二十、人口三千九百をかぞへる。

西海川の山中を改號して西海といひ往昔の西海谷の地で、西濱七谷の一である。糸魚川に近い方面は交通の便に恵まれるが、他は山間なるため交通不便の状態をまぬかれない。

有租地千六百五十町歩に近く、耕地は僅かに二百五十町歩に過ぎない。従つて米麥の産も大村の割合には少く、山林業の方面で稍々愁眉を開いてゐる。なほ村内社寺は無格社二社、雲台寺、唯蓮寺、願成寺、耕文寺、西光寺、專徳寺、通託

寺満長寺等である。

### 大野村

姫川の東岸にあり、根知谷口の根知村と相並んで糸魚川町の南に接する本村は戸數二百二十餘、人口千四百五十にして面積〇・五六方里を占め、北陸線糸魚川驛まで八キロの間バスが通ひ、交通の便悪くない。

いはゆる根知谷とは、姫川の東岸に亘る山谷一帯の總稱で、兩節大網峠を以て千國小谷と相限る。舊藩政の頃にはこゝに番所を置いて四隣を支配した。即ち本村は根知村と共に根知谷の一部を占めてゐるのである。

有租地四百八十町歩餘にして、耕地は田百七十數町歩、畑七十町歩弱あり、山林は二百二十餘町歩である。住民の多くは農耕養蠶の業に従ひ、副業的に山林關係の仕事に携はるものが多い。米の年産七萬圓餘。大野村信販購利組合の組織あり産業經濟の發展は着々として實果を收



めてゐる。

### 根知村

本村は郡の南部、長野縣と接する山間部を占め、南は長野縣北安曇郡小谷村、東は西海村、北は西海村及び大野村とに接し、西は姫川を隔て、今井、小瀧に對する。西海村及び北小谷村と境するあたり約ヶ嶽、鬼ヶ向山、鋸嶽、雨飾山などの山岳重疊し、こゝに源を發して西北に本村を貫流する根知川の流域一帯は、本村の重要耕地をなすも、流域が狭少であり、且つ水源が浅いため夏期河水涸渇することしばしばで、従つて灌漑にあまり便しない。

本村は町村制實施にあたり上根知村、中根知村、下根知村の三ヶ村に區劃されたが、明治三十四年十一月一日この三ヶ村が合併して今の根知村を生み出したのである。廣袤東西一・六軒、南北六・九軒、面積五〇八〇〇アールを占め、名譽職村長一、助役一、區長二二、學務

委員九、土木委員三、傳染病豫防委員九、林野委員三、有給吏員収入役一、書記七によつて村行政が圓滑に運轉されてゐる。戸數は七百六十餘、人口四千餘で、農業に従ふものは五百五十餘戸をかぞへる。交通は縣道糸魚川松本線に糸魚山小谷線、それに上町屋糸魚川線があつて、頗る便である。

なほ本村の名勝舊蹟としては雨飾山登山、梶川温泉新湯、姫川スキー場、根小屋城址、山に番所などがある。

### 小瀧村

本村は雲倉岳の東麓にして郡の西南端に位置し、小瀧、山之坊、大所の三部落を含み、戸數三百七十、人口二千四百十を算し、主要農産物は米、大豆、小豆、粟、稗、蕎麥、生柿、蜂蜜、麻織物、漆器、木炭、材木、繭等である。

大字小瀧の開發年度は不詳なれど、文化六年には榊原氏の領地となり、以來明治維新の改革に至つた。大字大所の開發

年代も詳かでないが、織田氏の部將富山城主佐々成政の臣山岸豊後守がその開祖なりといはれ、「正保四年亥天」「山岸豊後守塔」の石碑が残つてゐる。

村内には村役場(大字小瀧)、小瀧、山之坊各小學校、農業青年學校、信用組合在郷軍人分會、教育會、男女青年團、婦人會、少年團、村社諏訪神社ほか無格社二社、願正寺等あり、電氣化學會社の發電所も村内にある。

人々はこれを大屋様と呼んでゐる。天和檢地には他へ轉じて戸數の中へ入らず古檢の書類更に存せず、たゞ口碑に傳ふるのみである。

大字川本は尻掛村といつた。小字に上新田あり、該地は萬治元年戊戌中本郡下澤村横川某の開發なりといふ。

### 今井村

今井は小瀧村と共に姫川西岸の通路として發達したとて、大字須澤は明治二十年町村制實施後の村名にして舊二ヶ瀨

を合せたものである。須澤開發の年代は詳かならざるも、可なり古きことは田海西蓮寺の川越名號の傳説がこれを證明する。即ち親鸞上人が越後遠島の途次、須澤の渡しに來り、川越夫に興へられしものといふ。當時、本田、新田の二村なりしが寶曆九卯年の満水のため、新田の居村五十戸餘を流し、逃れて本田の居村に加はり現今の位置をなした。その土地は姫川の流砂と西風とによつて出來た洲の譯である。

大字岩木の開祖も誰であるかは詳かでないが、當時その中央を大屋坪と稱し、これは五郎作なる大盡のこゝに住居せしが故なりと傳へ、今なほその墓を存してゐる。

### 歌外波村

本村は舊歌村と外波村の二村を併せたもので、親不知の東にあたり、黒岩、駒返しなどあり、回馬岩の名も今に存す。戸數百八十餘、人口千百に近く、硯石の

特産あり、また海藻の化石を挾存し、俗に外波石と呼ばれてゐる。聖德太子假名傳に越後國蒲原郡の浦にて詠まる

萬代と波は立ちきて洗へども  
かはらぬものは水蒸のあと

の一首あり、今も村内に歌濱といふところあり、蒲原郡は間違ひにて、頸城郡宇田濱は古くは寒原郡といつたから、その錯誤ならんと説かれる。

寒原は親不知の舊名である。大日本地名辭書をひくと、  
名寄云盛衰記に越後越中の境界寒原といふと、太子傳には神原東鑑には蒲原に作る、と出てゐる。

### 市振村

郡の西端に位し、富山縣下新川郡と境川を隔て、相對する。藩政時代には市振の驛と稱してこゝに關あり、今は北陸本線の一線となつてゐる。歌外村波との間に親不知の難所あり、一朝出水に際會

すれば、通行甚だ困難を極めたところで堀川百首に

舟もなく岩浪高き堺川  
水増りなば水も通はじ

の歌がある。親不知の嶮は竹ヶ花と先ヶ鼻の間にあり、越後路の難をかこつ者の常に語つた歴史的の難所で、下層部はラデオラクヤ硅石及び粘板岩からなり、上層部は粘板岩である。今は國道や鐵道も通じてはゐるが、冬季は常に惱まされる交通路として有名である。村には北陸線市振驛がある。

面積〇・九一六方里、戸數百七十餘、人口千に満たざる小村で、耕地も少い。

### 上路村

親不知の上、蓮華山脈の盡頭にある一小村落にして、西は富山縣に接する。往昔、山姥が住んで山谷を上下し、人々を訛かしたといふ上路山姥の舊蹟地で、今も山姥の洞といふものあり、謡曲山姥は



稍波立つ汐越の安宅の松の夕煙、消へぬ憂き身の罪を切る彌陀の劍の砥石山露路うながす三越路の國の末なる里間へばいとど都は遠さかる、境川にも着きにけり、境川にも着きにけり、御急ぎ候程にははや越後越中の境川に御着きにて候、暫く是に御駕候ひて猶々

## 岩 船 郡

道の様態をも御尋ねあらうするにて候けにや常に廻る西方の淨土は十萬億土とかや、是又彌陀來迎の直路なれば上路の山とやらんに参り候べしと誦はれ、今、村内に山姥神社が祀られてゐる。北陸線市振驛へ一里六町。村面積は〇・八〇五方里である。

氏の知行に屬したことが載つてゐる。延喜式和名抄に、或は磐船、或は石船につくり、伊波布稱と註し、中世、改めて瀬波郡といつた。名寄に「荒川は飼附村のセバの渡より平林を過ぎ」とあり、飼附は今の保内村貝附で、關谷の峡口にあたり、溪身峽窄して最もその名に相應しく、瀬波郡といふもこの峽名より轉じたものであらうといはれる。

**地理** 東北は山形縣に界し、南は北蒲原郡に接し、西は日本海に面し、東西七里三十町餘、南北十二里二町餘、面積七十三方里九二である。岩船港より西北二十五里にある粟崎は本郡に屬する。郡の約六分の五は殆ど山地にして、殘餘僅かに平地を見るに過ぎない。荒川下流沿岸、門前川沿岸、小揚川下流以西に於ける三面川左岸及び岩船瀉一帯の地が即ち僅かな平地である。

山があり、名のある河川には荒川、三面川、石川、葡萄酒川、勝木川、大川あり、三面川が最も流長十里である。**沿革** 日本書紀に「大化四年磐舟の柵を治め以て蝦夷に備ふ遂に信濃の民を選み始めて柵戸を置く」とあり、これが磐舟の文字の史上に見ゆる初めである。又文武天皇の條に「二年越後國をして石船の柵を修理せしめ、四年越後佐渡二國をして石船の柵を修營せしむ」と見える。莊園の盛んなる頃、本郡の大部は小泉莊と稱した。東鑑に、文治の頃は中御門

上杉輝虎時代には、數人の部將駐在して本郡を統治し、爾來、村上氏、堀氏、本多氏、松平氏、榊原氏、松平氏、間部氏、内藤氏の諸侯が相ついで領有した。徳川幕政の間は、數藩の所領錯雜し、以て明治に至つた。明治四年、村上縣となり、同年これを廢して、新潟縣に合併された。**區劃・戸口・交通** 越後國の北隅を占め、行政上全郡を區劃して次の四町二十ヶ村とする。

町 岩船、瀬波、村上、村上本

**村** 關谷、保内、金屋、女川、平林、神納、西神納、山邊里、館腰、三面、高根、猿澤、鹽野町、黒川俣、八幡、大川谷、中俣、下海府、上海府、粟島浦

**林産** 一、一七六、四二四圓  
**蠶糸類** 一、〇八五、〇六三圓

の中央に立つて、本町市街の北部浦田耕地の間を貫流して岩船港にそゞぐ三條石川と稱する小河は、源を神納村桃川山に發し、往時は現今の浦田耕地の大部分たる琵琶瀉と稱する湖沼に注いだもので、この琵琶瀉は元和當時、堀領主岩船七港兩村の野方を開發せしめ、田地となさしめた記録に徴するも、この頃の琵琶瀉は既に河瀬が自然河川と變じて海に注いだものゝやうに考へられる。

總戸數は一萬四千四百戸に近く、人口は八萬七千人をかぞへる。戸口の最も多いのは村上町で、關谷村がこれに次ぎ、以下平林村、神納村、岩船町、保内村の順序で、最も少いのは粟島浦村を除けば中俣村である。

本町の名稱は、産土神岩船神社に由来したもので、その建置もまた産土神の天岩船に乗りて天降り給へる頃なるべく、縣下にありても最も古き歴史を有する郷土であり、岩船なる郡名も、これに基因せるものとされてゐる。

戸數は八百餘戸、人口四千六百餘人、二百二十餘戸の漁業、二百戸の産業、百餘戸の工業、九十餘戸の農業の順で、住民は生計を立てゝゐる。

鐵道は省線羽越本線及び米坂西線の便がある。また港灣の主なるものに岩船、瀬波、荒川、脇川、相尾、粟島浦等があり、概して海岸地帯は交通機關に富むが山岳方面に至つて不便である。

幕政當時は上杉侯の家屋本社、越前、出羽等の所領より村上、周防、堀、本田、松平、榊原、本田、間部、内藤の諸侯の領地だったが、明治維新後新潟に屬し、同二十二年、町村制が實施されて今日に及んでゐる。

本町は郡の中央西北部に位置を占め、東は村上町、南は岩船町、神納村、北東は猿澤村、北は上海府村に連接し、南西北は日本海に臨み、總面積〇・五一六方里に跨つてゐる。

**生産額** 生産は多い方でない、年總額約九百七十萬圓にして、一戸當り六百七十餘圓、一人當り百十餘圓である。重要なもののみを各別にあげると左の通りである。

町は郡の西南に位置し、西方は一帯に海に面し、東は西神納村、南は平林村、北は瀬波町に連り、西北一里二町、東西十七町三十間、面積大凡そ一方里を算へる。大字岩船、三日市、八日市の三部落に分れ、町役場を大字岩船に置き、全町

本町の紀元はいづれの頃か、詳かでない。

**農産** 四、四三三、〇五八圓  
**工業** 一、八二五、四三七圓

本町の紀元はいづれの頃か、詳かでない。



い、延喜和名抄に

前略中正改めて瀬波郡と言ふ、其の時  
代明かならず、本莊氏系圖に秩父行長  
建長七年（北條時頼執權時代）越後國  
阿加北地頭職となり、武藏國秩父郡よ  
り越後瀬波郡小泉莊本莊に下向し此の  
地に城を築き居り本莊氏を稱す  
とある。以て當時すでに瀬波郡と稱して  
ゐたことが分る。

幕政の末、全町村上藩領に屬し、明治  
四年七月廢藩置縣となり、同年十一月村  
上縣を廢して大小區制を布き、本町は第  
二十五大區小九區に屬した。同十二年初  
めて岩船郡役所を置き、當時より役場を  
大字瀬波に置き、爾來自治制を布き、同  
二十二年四月以來大字瀬波、濱新田、松  
山、十渡、羽下ヶ淵の五大字を以て瀬波  
町と稱して今日に及んでゐる。

現在戸數四百三十餘、人口四百餘、町  
會議員一二、家屋稅調査委員五、方面委  
員五、學務委員六、區長七あり、産業機  
關に瀬波町農會、瀧波養蠶實行組合、羽

下ヶ淵養蠶實行組合、瀬波漁業協同組合  
などがある。

また官公衙學校には瀬波町役場、瀬波  
郵便局、瀬波駐在所、瀬波尋常高等小學  
校、新潟縣水産試驗場三面川第一及第二  
鮭人工孵化場等がある。

### 村上町

本町は郡の中央部に位し、三面川の左  
岸河口を距る二十町のところに在り、東  
は遠く鷲の巢の雄峰を望み、西は渺茫た  
る日本海に近く、謂ゆる山紫水明の勝地  
で、戸數約二千戸、人口一萬五百餘人、  
郡内唯一の都會である。

町はもと舊藩地にして享保六年内藤豊  
前守式信の封ぜられてより以來、父子累  
世相繼ぎ、明治二年に至つたが、この間  
百四十九年下越の雄藩として重きをなし  
てゐた。廢藩置縣後は部の樞要地として  
政治、經濟、教育、交通及び各種産業の  
中心をなしたが、大正十三年八月羽越線  
開設以來、東北並に關西地方との聯絡成

ると共に各地方との交通ます／＼頻繁を  
加へ、重工業の發達著しく、羽越線中の  
主要驛として一層その名を知らるゝに至  
つた。

縣立村上中學校、縣立村上高等女學校  
あり、村上警察署、村上郵便局、村上區  
裁判所、村上稅務署、村上町役場その他  
會社、工場、新聞社、種々の團體などの  
設けがある。

本町の特産物として最も有名なるは茶  
と漆器で、現在に於ける茶園總反別は附  
近の瀬波町を合せ約百三十町歩にして、  
その製産高は一ヶ年實に十數萬圓に上つ  
てゐる。また本町の漆器は高尚優美、且  
つ堅牢にして實用に適するところから、  
近時頻りと聲價を増し、最近一ヶ年の産  
額は約十萬圓に達する。

縣社に西奈彌羽黒神社、無格社一四、  
寺院三二をかぞへる。

### 村上本町

工と産との極めて旺んな當町は、東經

一三九度三〇、北緯三八度一〇のところ  
に在り、東に山邊里村、西南北に村上町  
に隣接し、東西一・一八軒、南北一・三  
二軒、面積一三三平方軒を占めてゐる。  
そして現在の戸數は六百六十餘、人口二  
千八百、工を首位に商、農業に従事して  
ゐる。

當町は舊村上藩主内藤家の家屋七百三  
十五戸の居住したところで、明治維新後  
漸次變遷し、以て今日に至つたもので、  
この他部落の創始は不明であるが、二ノ  
町（舊稱二ノ丸）より新町に通ずる舊城  
門（下渡門）の址より古代土器の幾多の  
破片又は石斧のやうなもの、掘り出され  
たるより考へると、アイヌ種族の住した  
ことが追思される。

縣立中學校、縣立高等女學校、村上本  
町青年學校をはじめ官衙には村上區裁判  
所、村上營林署、村上土木派遣所、村上  
稅務署、蠶業取締所、村上本町役場、岩  
船郡農會等がある。

縣社藤基神社は村上藩祖を祀つたもの

で、古松古杉鬱蒼として境内畫尙暗い、  
崇巖、自ら襟を正さしめるものがある。

また臥手山は舊城址にして、一に城山と  
稱する。頂上に秋葉神社、舞鶴城址碑が  
あり、四邊の眺望絶佳、登臨の遊客者極  
めて多い。

當時の北方下渡山麓を流るゝ三面川は  
水量豊かにして魚族の繁殖に適する。秋  
冬の鮭魚、春夏の候の鱒鮎が殊に多いの  
で有名である。

### 關谷村

當村は東西五里、南北三里、面積一  
・二方里を有し、戸數千餘戸、人口六千  
百餘人で、七百餘戸の農を第一位に、七  
十餘戸の商業、五十餘戸の工業などを主  
として生計を立てゝゐる。

當村は關谷村と稱し、大字下關に村役  
場を置く。明治三十四年舊關村、七ヶ谷  
九ヶ谷の三ヶ村の合併より成り、舊關村  
に屬するもの一二、七ヶ谷に屬するもの  
七、九ヶ谷に屬するもの九、計二十八ヶ大

字より成る。

村長はじめ吏員は一二名、村會議員は  
一八名、學務委員は八名、區長二十五名  
方面委員五名をかぞへる。

官公署には下關郵便局、村上區裁判所  
下關出張所、村上營林署關谷擔當區官舎  
下關巡查部長派出所、下關巡查駐在所、  
下川口巡查駐在所、その他に團體、銀行  
及び會社等の設けがある。

### 保内村

本村は荒川の左岸にあり、南に山岳を  
負ひ、北方は平地にして概ね水田桑地で  
ある。關谷の峽谷にあたり、俗に瀬波嵐  
といつて、毎朝峽口より風吹き出で、午  
刻に至つては止む。村は羽ヶ榎、佐々木  
切田、坂田、山口、藤澤ほか七大字より  
成り、面積一・三〇二方里、羽越線坂町  
驛あり、縣道四方に通じ、關谷村より羽  
前今泉町へバスの便がある。

元祿年中の舊記に、上保内、下保内の  
二區ありしといふも、一説にはこれは瀬



波の保内であらうといはれる。幕政の末坂町功田は水原支配所領、下鍛冶屋ほか四部落は若松藩領、他は天領であつた。後年、切田、坂町、山口、羽ヶ榎、藤澤佐々木を中保内村、他を上保内村と稱したが、合して今の保内村となつた。

荒島宇南山の下に村社出羽神社あり、社傳によれば、大同元年の創立にして、從來荒川神社と稱し、式内社であつた。村内飼附川、花立、佐々木は古戦場である。

主なる物産は木炭、木材、茶、生糸等で茶は玉露、煎茶、番茶、共品質良好である。曾て大正十一年本村豫約開墾地整理組合に於ては國有林拂下を受け、拔根機を使用して約三十六町歩餘の開田開畑を完成したことは特筆に價する。

### 金屋村

荒川の南岸に位し、西神納村と共にその河口を扼してゐる。全村概ね平坦にして、金屋、中倉、鳥屋、荒屋、荒川縁新

田ほか七大字より成り、面積〇・八八四方里である。

大字金屋は、近世保内郷のうちで、幕府が一橋家の食邑を定めた時、ここに一萬石の陣屋を置き、史治をなしたところである。當時新光寺、南新保、中倉、渡邊三新田は水原支配所領、他は天領であつた。往年渡邊三新田中野、名割、新光寺、南新保の五大字を南保内村と稱し、金屋、鳥屋、荒屋、中倉、荒川縁新田を金屋村と稱し、大津及び海老江は獨立村であつた。以上四ヶ村を合して今の金屋村となり、役場は大字金屋に置く。

村には郵便局、三徳圖書館、漁業組合等あり、神社は村社八幡宮のほか無格二を有し、寺院には大雄寺、本法寺、延命寺等がある。羽越線坂町驛へ一里弱、バスの便がある。

村内主産物は茶、鮭、鱒、生糸である。昭和七年以來耕地整理事業を施行して來たが、その後一時小作人對地主の對立があつて支障を來たし、稍々遅延はした

が、圓滿なる解決と共に再び施工せられ産米増加及び生産方法の改善に與へた影響は頗る大きい。また村内三ヶ所に於て開田事業が行はれ、荒川米の産地としての將來はます／＼明朗な光りに輝きわたつてゐる。また自給肥料の奨励につとめて成績よく、副業として養蠶、養鶏、養豚等が多く、耕作用牛馬も飼育される。産業の振興開發の諸計畫並にその實行に關しては村農會が中心となり、これに村内十六農區が参加活動して、顯著な成績を示してゐることは特筆に價する。

### 女川村

荒川の右岸に位し、東は山岳を以て羽前小國郷と境する。地勢概ね高峻にして湯澤、瀧原、上野山、小見、小見前、高田等の七字は荒川沿岸に他の十字は女川流域にある。面積七・二九五方里、村名女川は湯澤西北なる女川谷より取つた。羽越線坂町驛へ二里半、交通便利とはいひ難いが縣道が通じてゐる。

幕政の頃は、村上藩及び若松藩に分領されてゐたところで、往年、荒川沿岸湯澤より桂までの八大字を川北村と稱し、他を女川村と稱した。後、合して現女川村となつた。

村内蛇喰に浄土宗の古刹弘長寺あり、本尊阿彌陀如來は、毘首羯摩天の作で、頼朝が鎌倉にゐた當時の持佛であつた。また湯澤には松岳寺があり、垂水左衛門尉の館址もある。湯澤温泉は痛風、リウマチス、皮膚病、胃弱、月經不調、糖尿

病等に特効がある。鷹瀬温泉は一名雲母温泉と稱し、便秘、胃病、中風、神經痛脚氣、子宮病に効がある。また大字中東には千尋の瀧あり、高さ五十丈、その下流は女川である。

本村耕地整理組合に於ては、大正十年カークリット火藤拔根機を使用して山林原野を開墾し、開拓事業に一つの特徴を發揮し好成績を収めた。

### 平林村

南は荒川を以て金屋保内の兩村と相對し、西北は平野にして鹽屋濱と隣りし、東に朴坂要害に丘陵が連五する。面積一・五二六方里を有し、戸數八百四十、人口五千三百餘をかぞへる。

大字平林は色部氏の舊邑であつたといふ、北越軍記に、平林内藏助といふ人あり、色部氏の一族といはれる。また小内岩は往昔の渡津である。里諺に

新保長松 貉の穴よ  
入日見よとて 鹽谷まで走る  
と高唱されし程、鬱茂せる松林丘裡にあり、徳川幕府の末頃は若松、村上、水原の三藩に分領されてゐた。往年、牛屋以西五大字は鹽谷村と呼び、他を平林村と稱した。

村社荒川神社は小岩内字川端にあり、大同四年九月の創立といふ。寺院には大智院、圓福寺、高泉寺、法徳寺、應庵寺、千眼寺、行徳院、醫王院、不知庵がある。また村内には色部修理亮の館址、戊辰の亂の古戰場等の舊蹟もある。

### 神納村

本村は總て十六字より成り、米、茶、藪の産地として知られ、特に荒川米の名を以て呼ばれる米は、本村の特産で、品質の優良なるを誇りとしてゐる。羽越線沿線の地にして、國道通過し、交通は比較的便利である。小學校は三校を有す。

東方は大平山の丘陵連互し、西は平坦にして西神納村及び岩船町に續く。有明松澤、岩野澤、山田、飯岡、桃川、河内小出、殿岡ほか八大字を含み、面積三・三四一方里、羽越線岩船町へ半里、バスが通ひ、交通の便良好である。

神納は加納の訛りである。小泉庄加納田より出で分化して加納庄といひ、今は神納と西神納の二村となつた。岩船諸上寺の説には、この寺昔感應寺と號し、庄號はこの感應より轉訛したといふ。幕政の末頃は若松、村上の二藩で分領した。名寄に「有明村ありて光淨寺に愛たき清水出づ風景絶佳」とあるは大字有明の



ことで、夫木集爲實の歌に

浪の色に有明の浪の末見えて

とあり、更に古歌にも

有明の里の清水のみわたる  
水底にきよき秋の夜の月

と詠まれてゐる。式内村社桃川神社は、桃川字住吉にあり、仁安二年の修理遷宮といふ。七甲山には式内湊神社あり、往昔、琵琶瀉はこの邊にまで水を湛へてゐたと傳へ、七湊の地名もそれより起つた。その他神社に八王子神社、八幡宮、八坂神社あり、名勝舊蹟に七甲山、姫塚、山王山、大瀑布がある。

### 西神納村

昔の加納庄の一部にして、四方たゞ水田を以て圍まれる。神納村と隣りし、荒川の北岸に位し、金屋村と共に河口を扼してゐる。西北に海岸丘陵を負ふのほか概ね平坦にして、牧の目、新飯田、小口川、高御堂、大塚、瀉端、今宿、九日市

南田中の大字を含み、面積〇・四〇九方里である。

幕政時代は水原支配所、村上藩、天領等に分属してゐた。

米のほか物産として數ふべきものなく耕地は田五百十數町歩に上るが、畑は僅か十町にも満たない。西神納信購販利組合、同農業倉庫がある。

寺院には曹洞宗福嚴寺、眞言宗密藏院がある。

羽越線の地で、村内に停車場はないが岩船驛に近く、且つ村内を國道が走り、交通は至便である。

自治方面は至極圓滿にして政黨的色彩に淡く、教育もまた充實し、學校の諸設備公共團體の諸事業に見るべきものが多し。衛生状態も良好で、衛生に關する迷信のごときは全然見られず、農村ではあるが村民一般の衛生知識の向上は驚くべきものがある。

### 山邊里村

村上町の東にして、三面川と門前川の中間に在る。

岩船の波打際に出で、見よ  
きたみの境何國なるらん

の作者傑堂能勝和尚は耕雲寺の開基である。近年失欠せしも、附近の當國第一と稱される杉の良材を以て採修した。また山邊里の光徳寺は雲ノ上佐一郎菩提のために建立したもので、同じく山邊里の村社船魂十二所神社も雲ノ上佐一郎の勸請に係るといふ。右のほか鑑窓寺、常榮庵、金源寺の寺院がある。

産物は木炭、木材、茶、生糸、織物を主とし、殊に絹織物に新機軸を出したところで、山邊里織の名は有名である。

西興屋ほか七大字より成り、面積は四・五八三方里を占める。舊幕時代には全村村上藩の采配を受け、門前谷村、山邊里村の二に分れてゐたのを、後年、合して今の山邊里村となつたのである。大字山邊里は佐伯郷の佐伯里にて、その遺稱である。大字上相川及び下相川は、元

は一に相川と稱し、また鮎川に作つた。北越軍記に「鮎川攝津守は本莊が一族にて云々」と當地の豪族を叙してゐる。村には郵便取扱所、造林森林組合などあり、村上町に近接し交通至便である。

### 館腰村

三面川の左岸、山邊里村の北に接し、東部羽前國境には鷹ヶ巢、鷲ヶ巢などの高山が屹立し、長津川は村の中央を西北に貫流して三面川に入る。大場澤、古渡路、十川、小川、下新保、笹平、釜杭、小揚、柳生戸の九箇、大字は概ね西方沿岸平地に聚落する。面積は三・六二方里に及ぶ。

昔、鮎川氏の館が大場澤にあり、その近傍を館の腰と云つたところから、後世稱して村名となした。幕政の末、全村村上藩領にして、獨り釜杭は米津藩に屬した。明治維新後長津、館腰の二村を合せ今日に至つた。

村社諏訪神社は、十川字高屋敷にあり

初め八幡神社と稱した、源頼義が奥州征討の歸途弊帛を捧げ、矢一千を納めた、これ社寶として今も保存される。村社雷神社は山邊里城の下にあり、源義綱が山城國賀茂神社の分靈を招請したものと云ふ。また普濟寺は鮎川信濃守清長の建立である。

村の主要産物は木炭、生糸、漆液等で耕地は田四百三十町歩、畑百七十數町歩がある。村上驛へ一里半、縣道通じ、バスを有す。

### 三面村

本村は三面川流域の山岳地にして、東は羽越の國境を劃し、三面谷は三面川の源流にして方四、五里の山谷をいふ。布部新屋、堀野、上中島、石住、中新保、石栗新田、岩崩、莖太、三面、千繩、猿田の十川部落は、概ね西方の平地または三面川の沿岸に散在する。面積は二・三・三八方里に及ぶ大村である。

三面川はまた野寺川といひ、その鮭漁

は、近世村上城主の掟によつて盛大を致し、謂はゆる種川の法をとつてゐる。宇新屋の東なる鷲ヶ巢山は標高一二五〇メートル、三面川の發源地三面谷の山家は平氏殘黨の落所なりと傳へられる。幕政の末には、米澤藩領、村上藩領の二に分れてゐた。

村社鷲麻神社は曾て鷲ヶ巢大權現と呼ばれ、至徳二年（南朝の元中二年）當村城ヶ平の城主市川氏が鷲ヶ巢山頂より合祀したものである。布部には同城址がある。また白瀧、大洞窟等の名勝及び龍音寺、妙童寺、龍泉寺等の寺院あり、大洞窟は布部より北方約五里の山中に在り、數十人を入れるに足る廣さで、昔狸々小僧と稱する山賊が住居し、近郷を荒したが、劍客福見小三太のためにこゝに殺されたといふ口碑が傳へられる。

木炭、生糸、漆液を主なる物産とし、村内には郵便局、森林組合、漁業組合があり、村上町へ三里、交通は餘り便利である。



## 高根村

本村は鹽野町村の東に隣接し、高根川一帯の原野山林地を占める。高根川は北方大鳥屋岳に源を發し、本村中央部を貫通し西南隅に於て三面川に入る。この合流三角地域に平地あり、部落が聚まつてゐる。なほ本村が村營を以て原野二百町歩を開墾したるは世に紹介すべき價値がある。

舊幕時代には全村米澤藩に屬した。明治二十二年町村制實施の際、岩澤村及び高根村の二村が生れ、同三十四年十月これを合併して現今の高根村となつた。

中原桑園は面積約二十町歩、その廣大郡内に比なしといはれる。高根全山は第三期の砂岩及び凝灰岩の累層にして、これに黄金及び黄鐵礦の含むを見、その厚さ十餘尺に達する箇所ありと雖も含金量は豊富でない。村の主産物は木炭、牛乳生絲、漆、米等で、黒川信購組合、岩澤信購組合、黒川森林組合、關口森林組合

等が組織されてゐる。

村内社寺には村社諏訪神社、曹洞宗徳藏庵、同龍山寺、同醫泉寺、同關泉寺日蓮宗本門寺などあり、名勝眞津の瀧は日倉山中にあり、高さ五十丈、下流は高根川となる。また鈴瀧、樽谷、本門寺の舊蹟等の名所あり、交通は村上驛まで三里の間バスが通つてゐる。

## 猿澤村

村上町の北方に位し、西に葡萄酒系に屬する三額山、虚空藏山連走して東に傾斜し、三面川の支流が村内に溪谷をつくつてゐる。猿澤、川端、檜原、板屋越ほか五大字より成り、面積一・六二五方里往昔は北陸道の一驛であつた。村上驛より三里餘、國道通じ、バスの便もある。

古くは猿澤村及び鶴渡路村の二村に分れてゐた。舊幕時代の末には米澤藩の支配に屬した。宮の下字上山に雲ノ上佐一郎の靈を祀るといふ村社川内神社あり、俗間一の宮と稱し、崇敬祈願多く、

川口様よく聴き分けて

二度と頼まぬ サ、一度

と村上甚句にも語はれる。檜原字屋敷添には村社伊須流岐比古神社あり、虚空藏山には虚空藏堂あり、天正年中僧行基が一刀三拜して彫刻した虚空藏菩薩を山上巖窟に安置する。下中島の觀月、板屋越の瀑布は名勝として知られ、福立山の城本莊繁長の館等の舊跡もある。宮の下の小川橋は郡下第一の長橋で、遠くより望めば長い虹のやうで、

場所た場所だよ 宮の下場所だ

新潟勝りの橋かゝる

と俚語にあり、大字猿澤は昔は驛場にして大部落であつた。

いやな猿澤村計り長ふて  
主と寝る夜の短かさよ

と里人に消えやすい悦びを嘆かせたところだ。村の主産物は米、木炭、茶、牛乳生絲、漆液等で、村にはまた村上區裁判所出張所、郵便局、産業組合、漁業組合などがある。

## 鹽野町

葡萄酒系中に蟠居せる一村にして、中央の分水嶺によつて地形自ら二分され、南須戸川流域に鹽野町、小須戸の部落あり、北方葡萄酒流域に葡萄、中小屋の部落がある。北陸街道が村を南北に通じ、村上町へ四里、バスが通つてゐる。この道が黒川侯村へ入る山道を葡萄峠といひ鹽野町は會ての小驛である。七大字より成り、面積三・九六九方里だ。

幕末には、全村米澤藩領であつた。義經記に「あらかは、岩船と云ふ所につきて、すとうのみちは、ゆきしろ水に、山河まさりて、かなふまじ」とあるすとうは村内大須戸小須戸をいふのである。鹽野町は、近世、米澤藩主上杉氏が陣屋を置き、公領一萬三千石の田邑を支配したところである。葡萄酒中に式内漆山神社あり、源義家が征奥の戦勝を當社に祈願し、凱旋の際、矢を以て殿屋を葺きたることあり、故に矢葺明神の名がある。ま

た村社白山神社、無格社一、觀行院、龍門寺、行福寺、松光寺、常林寺等の社寺がある。

村内主要物産は米、木炭、生糸、漆液等である。

## 黒川侯村

本村の世帯数は三百五十餘戸、人口約一千人をかぞへる。その全世帯数のうちの三百三十戸が農に従事してゐるといふ農村で、商工業等は微々として振はない。本村は郡の北端に在り東南は中侯村、高根村に接し、西は鹽野町村、下海府府北は八幡村、大川谷村に連り、東西二里南北一里三十餘町、面積六千餘町歩を擁してゐる。

四方山岳に圍まれ、従つて平地地少なく、南方に向つて自然に傾斜し、海拔四〇米より一〇〇米の間に存し、南に螺山吉祥岳、東に陣ヶ峰が聳えてゐる。また河川には著名なるものなく、たゞ大毎地内螺山より發する大毎川、濁川、北中阿

南澤より發する北中川と合して勝木川の上流となり、八幡村寢屋港に注ぐ。

## 八幡村

當村三方山にして、北面の一門が海に開き、寒風に積雪の量多く、年々植林の雪害夥しく、春の融雪がまた遅いため、農耕上に支障を生じ、秋は早冷により結實の不良を致してゐる。

冬季間の交通は深雪と吹雪とのために杜絶することが往々ある。小學校では冬期派出教場を設くるは勿論のこと、暑中休業の期間一週間を、特に冬期に廻して休業するといふ状態で、積雪最高一二尺最低が二尺である。

當村は東に黒川侯村、西に日本海、南に下海府村、北に大川谷村に接し、東西一里三十町、南北一里十町を占め、戸數三百五十餘、人口二千餘人、農業に従事するもの最も多く、次は漁業、第三は産糸を示してゐる。

小學校の外に村立八幡青年學校、八幡



村立圖書館がある。なほ官公署に、村役場郵便局、駐在所、村上區裁判所八幡出張所、勝木停車場がある。

## 大川谷村

當大川谷村の雪は、高田地方ほどではないが、それでも冬期三ヶ月間は雪に何も彼もが閉される。地は東西一里十五町南北一里二十二町、外周六里十六町を有し、東は中俣村に接し、西は日本海に臨み、南は八幡、黒川俣の二村につらなり北は山形縣念珠關村に隣接してゐる。

當村は江戸幕府時代に於て村上藩と庄内藩の中間に介在して、御領若くは天領と稱せられた幕府の所領であつた。そして米澤の委任支配に屬し、鹽野町代官の命をうけたものであつた。明治維新後、村上藩に歸し、同四年廢藩の結果、村上縣に屬し、同九年新潟縣の管轄となつて今日に至つたのである。

大字は府屋、岩崎、中濱、堀ノ内、大谷澤、温出、杉平、遅郷、若石、塔ノ下、

荒川口、朴平の十二に分れ、戸數約六百戸、人口四百餘人をかぞへる。

官衙公署には府屋警察署、大川谷郵便局、大川谷村役場、新潟縣立鮭卵孵化場があり、團體には村農會、在郷軍人分會、青年團、國防婦人會、信用組合、教育會、養蠶實行組合、職工組合、漁業組合、苗木組合、綜合副業組合、販賣利用組合などがあり、その他種々の會社並に工場の設立がある。

## 中俣村

本郡の地勢は凹凸甚だしく、山岳に富み、平野少なく、東は大鳥嶺山の餘脈に連り小俣、中繼の二川何れも源をこゝに發し、蜿蜒西流して大川谷村に至り、やがて日本海に注ぐ。

地は縣の最北隅に位し、東北は山形縣東田川郡及び西田川郡とに接し、西南は黒川俣村、西は大川谷村に接する。東西は四里、南北は一里二十二町、面積五・八三一方里、戸數二百二十、人口一千七

## 下海府村

當下海府村は郡の北部に位置し、新潟市の東北約一〇四軒、村上町北方約二・八軒の地點に在る。東は黒川俣村、東南は鹽野町村、西南は上海府村、東北は八幡村に隣接し、西方一帯は日本海に面しまた東方一帯は山岳を負ひ、東西一里十八町、南北三里十八町、面積約五方里を有する。

當村は西南より東北に亘つて狭長な地勢を呈し、大字濱新保、桑川、笹川、板貝、今川、脇川、寒川、越澤、芦谷の九

部落より成つてゐる。今、羽越線開通して交通至便となり、沿岸を通ずる道路は、府屋瀬波線として縣道に編入され、近時救農事業によつて年々改修せられつゝ、はあるが、岩石海岸に迫り、工事頗る困難を極める。一方海上の航海自由にして、海運に便すること著大なるものがある。

戸數四百三十餘戸、人口二千三百、うち農に従ふもの二三四戸、水産業は五一戸、工は三一戸、商は二四戸を示してゐる。そして農産に於ては何といつても米と麥で、米は一、八〇〇石、麥は一五〇石、林産としては木炭の二六四、〇〇〇貫、用材の二四、〇〇〇石、工産にあつては双物類で年産八〇〇圓等の成績を擧げてゐる。

産業團體には農會、青年團、漁業組合などが設けられてゐる。

## 粟島浦村

本村は對岸岩船港を去ること、西北二十五里で、岩船からは内浦まで、漁用を

主とする定期航路が開けてゐる。全くの一孤島で、暮末の頃までは米澤藩に屬してゐた。

粟島は一名粟生島といひ、海府浦よりもつとも接近して見え、遠望すると楢形をなすので、楢島ともいふ。

島の西岸の景觀は、天下の一奇觀である。屹立せる島や立岩の礁上に群棲せる白鷺の大群が殊に壯観である。またこの附近には鷗や鶉が群棲する絶海の孤島で船も近づけないあたりで、飛沫くだける岩床を蔽つて、亂れ飛ぶ海鳥の群の美しさは、譬ふべき言葉に窮する。

島の名物に麥打ちがある。老若男女十數人が圓陣をつくつて、藁の上におかれた藁付きの大麥の穂先を、約二メートルの棒切れで打つのである。麥打ちは七月の末に、數日に亘り朝の三時頃から六時頃まで行はれる、賑やかなゆかしいこの島獨特のシーンである。この人口八百三十餘名、そのうち女が四十名多いのも島らしく、またかうした行事にいそ／＼

百餘人、農を唯一の生業となす純農村である。

隣村大川谷村より本村大字小俣、大代雷を経て山形縣福榮村に通ずる縣道及び大川谷村より大字中繼に至る間の縣道は車馬の往來に便し、小俣より山形縣念珠關村及び中繼を経て黒川俣村に通ずる村道は急なる峠を控へ、且つ道が狭く、人馬を通ずるに過ぎない。

と働く女のさまがめざましい。この島には醫者も居なければ、駐在所もなく、昭和の諒闇も知らずに大正十六年の元旦を祝つたといふ眞の平和境である。

島は竹の名産地で、年々一萬數千圓の内地移出がある。その他魚介類、乾鮑、生鮑、乾海苔、海藻類の産多く、殊に、鮑は美味である。村には鮑を主とする名物粟島料理があり、素朴な味はひは獨得の風味をもつて人をそよる。

## 上海府村

往古より海府浦と稱して日本海に臨める北陸道の一驛にして、義經記に「いはひが崎にかゝりてオチムツカサルねんじわの關へ通る」とあり、いはひが崎は今の岩崎、オチムツカサルは海府浦であらうといはれる。

瀬波の海岸、三面川の注ぐ所岩ヶ崎より北は山形縣境鼠ヶ關に至る延長十餘里の海岸一帯の景勝地の海府浦と稱し、本村及び下海府村がその中に含まれ、山色



水光絶佳の地である。

村は柏尾、間島、吉浦、早川、馬下、野方、大月、岩ヶ崎より成り、面積三・二七七方里にして、羽越線越後早川驛及び間島驛を有し、交通の便よく、村には郵便局、信用組合、漁業組合あり、社には村社八幡神社、無格社一、永徳寺、潜龍寺、早川寺、柏樹寺、雲沖寺、ほか一箇寺等がある。

海岸の大洞門は長さ五十米、支洞五及び鐘乳石あり、地蔵洞は酸化鐵華の鐘乳石で、石筍がある。暮末の頃、村上、米澤の兩藩に分領されてゐた。口碑に源義經奥州潜行の際、この地に達し前途險難のため、馬を下り舟によつて進んだと傳へ、今、馬下の地名が残つてゐる。また附近に君還り岩あり、險難のため踵を回らしたに因り名づけたといふ。

本村は海岸漁村であるから、本來の業務は水産だが、それでも所々に田畑があり、この耕田は殆ど女護ヶ島の仕事の如く悉く婦女子によつて耕やされ、しかも

それが婦女子の本業ではなく副業で、水田六十數町歩、畑九十町歩が婦女子の副業として耕作されることは、本郡には他

## 佐 渡 郡

### 自然的景觀

北は大佐渡、南は小佐渡

中の國中 米どころ

簡單ではあるが、佐渡の地形を彷彿たらしめる格好な名句である。この島は、東西五一キロ、南北一〇二キロ、周圍凡そ二一キロ、面積八九六方科で、大佐渡なる北の地壘と小佐渡なる南の地壘から成立つてをり、その中間に、國中と呼ぶ平野を挟んでゐる。南北の地壘は何れも臺地狀に擴がり、よく見るとこの臺地は一段二段三段五段と階段を作つて海に落ちてゐる。

佐渡の自然的景觀の特徴は、この段丘地形を描いては求められない。大佐渡にも小佐渡にも、その周縁には大棧敷を幾

に例がない。本業は何かといへば、矢張り水産——海藻採種である。

重にもかさねたやうな、比較的新しい段丘が、實に見事に展開して、その海岸あたりは怒濤岩に激し、畫にも文にも盡し難い絶景を藏してゐる。

だが、この段丘は或は米田、或は牧場として利用され、かなり著るしい統制をうけてゐる島の經濟を發見する。

戸口・區劃 孤島の佐渡は、帆船交通の時代から既に自給自足の經濟を確立した。本籍人口は年に約六百乃至一千人づつ増加するに拘らず、現住人口の總和に大した變化のないのが佐渡の現状である。大正十二年には一一二、一六七人、同十四年一〇六、六三八人、昭和五年一〇六二六二人、同十年一〇九、三五一一人、これが佐渡の現住人口だ、これは明かに、

經濟的意義のある人口統制が行はれてゐることを物語るものである。

而して全島の面積八五七方科二四、これを五町二十ヶ村に區劃する。

町 相川、澤根、河原田、小木、兩津  
村 二見、八幡、二宮、金澤、吉井、新穂、畑野、眞野、西三川、羽茂、赤泊、松ヶ崎、岩首、水津、河崎、加茂、内海府、外海府、高千、金泉

産業・經濟 佐渡の總生産額千五百九十萬圓のうち六百七十餘萬圓が農産物であるから、殆ど二分の一に近く農業に依頼してゐるわけだ。これに較べると水産は百三十餘萬圓で、農業の四分の一にも満たない。環海の孤島に水産業の振はなれないことも面白い現象だ。金鑛山で徳川三百年の壽命を繋いだといふ相川は、現在總産出高は農産の二分の一には達するが昔の面影はない。鑛山文明の末路も哀れだ。

これに反し海洋的風土と暖流の關係で島は比較的暖い。年毎の乾燥には水の缺

乏に苦しめられる佐渡人でありながら、特殊の用水路をつくつて、段丘上に水を引き、米、麥、甘藷、いづれも成績がよい。南部地方では枇杷、無花果もよく育ち、蜜柑の出来ることも北國としては珍らしい。柿、葡萄も産する。蔬菜の供給地は眞野灣頭の八幡村と、兩津灣頭の河崎村である。佐渡牛は年三、四百頭づつ繁殖し、越後で使役する牛の大半は佐渡牛で、小形であるが従順でよく働く。

流人の島 流人の文學と金山の文明、絶海の孤島の段丘を舞臺として生れた佐渡の人文上には、幾多のロマンチックな物語が残されてゐる。荒海に隔てられたこの島は、古來對岸越後より直接に文化の輸入を見ること少く、神龜年間遠流の地と定められて以來流人相つき、しかも流人と稱せられるものは當時の新人であつて、時の世に容れられなかつた者も多し。島の人々は當然それらの人々によつて指導された。それは島人の人情風俗を始め、その言語に至るまで、對岸越後と

は全く異なり、むしろ關西方面に似てゐることは、島を訪れたもの誰も肯くところである。

まことに佐渡の地は、承久二年御傷はしくも、順徳上皇の遷幸を始めとし、日蓮上人、日資中納言資朝、小倉大納言、冷泉院大納言爲郷、觀世元清等の配流されたところで、それらの人々の感化は種種な方面に現はれ、特に日蓮による宗教の感化は著しく、また、現世による佐渡の謡曲は今日なほ盛んであるなど、その一端を窺ふことができる。そしてこれらの流人の由緒深い遺跡は、島の隅々に至るまで分布し、景勝と重ねて近代人の旅情をそよる多くのものがある。

### 相川町

兩津町より六里、島内の首邑にして、佐渡支廳の所在地である。島の西海岸に位し、古より人口に膾炙せる佐渡金山を背景として發達した鑛山町で、金鑛は本町の東北なる北澤川の溪間にある。海岸



は外海府につらなり、春日崎・富崎の奇勝があり、小倉大納言實起公墓、鎮目市左衛門惟明墓、圓山溟北墓、佐渡奉行所跡、その他舊蹟も多い。

面積一・一一二方里。本島の關門たる兩津港へ自動車の便あり、また澤根港へ二里、その他沿海線縣道通過し、各地に交通の便良好である。

佐渡の名が普く知られたのは金を産出したからである。慶長六年始めて金鑛の露出を發見したと傳へられ、爾來徳川三百有餘年間、幕府唯一の寶庫として佐渡は天領であつた。一時は年産金銀六千貫或はその二倍もが相川から小木港へ、それが寺泊に着き、信濃を経て江戸へ運ばれた。相川はこの金銀の偉力で著しい發展を遂げ、最盛期は元和から寛永の頃で一時は人口十萬を算へたといふ。今では既に昔の佛を止めないが、佐渡の金山は誰知らぬ者なく有名である。この鑛山華やかなりし頃の相川に忘れらぬものに相川音頭がある。

かすむ相川 夕陽に染めて  
浪のあやなる 春日崎

哀話と華さから生れ、地獄の底に目の目も見ずに金掘りに疲れた流人達の、坑から坑への唄は、エキゾチックな響きさへ持つてゐる。

佐渡支廳をはじめ諸官衙の所在地で、今も昔と同様佐渡の中心都邑として榮えてゐる。町に名物無名異焼の産あり、玉石の細工ものも多い。

### 澤根町

奇岩と荒波の外浦を南西に向つて行けば二見の漁港に出で、眞野灣に入る。海水の灣入すること四哩、濶さ約三哩半、灣の中央は水深二〇尋に達する。本灣唯一の良港たる澤根港は、兩津灣の夷港に對し、大佐渡北面の水陸兩路の門戸にあたり、相川町の前衛をなし、背後に大位波の山岳を受け、東は展けて國中平野に連る。五大字を含み、面積〇・六七四方里である。

### 河原田町

眞野灣の奥なる本町は、澤根町の東に接し、背後に廣潤なる國中平野を控へ、遙かに金北山の雄姿を仰ぎ見る位置を占

め、丁字形の小市街に展開し、國中平野の物資の集散地にして、また交通の衝にあつてゐる。

舊北佐渡殿の城下町にして、江戸幕府は慶長六年これを收めて金山奉行をここに置いた。嘉吉年間、觀世世阿彌流罪となり、玄孫元忠は天文年中當地に猿樂を催はしたことがある。

本町は政治教育金融等の中心地として將來ますます發展すべき立場にあり、相川、兩津幹線の中心をなし、商工業頗る繁榮し、郡の教育産業の重要機關の多くはここにあつまり、やがては佐渡第一の都會となるであらう。

産業は工業が盛んで、酒、味噌、醤油の醸造及び水産加工品が多く、その他では米、木炭がある。主なる會社には佐渡電燈、佐渡合同自動車、佐渡産業などあり、銀行支店も所在する。

教育機關としては縣立高等女學校、小學校、幼稚園、圖書館があり、青年學校の成績の優秀なことは、郡下でも五指の

うちに算へられる。

越の松原、妙經寺の勝地古蹟のほか、郷社諏訪神社、光福寺、常念寺、善宗寺、専念寺、普賢寺、龍鳳寺の社寺がある。

### 小木町

郡の西南端にあり、南は海に面し、その中間に城山の小岬ありて灣を兩分し、内濶、外濶とする。浪靜穩にして碇舶に便である。

往時、和船交通時代には佐渡隨一の良港として殷盛を極めた土地で、今は往時の面影はないが、なほ地方の一中心にして對岸直江津と三十五哩間に定期航路を開いてゐる。

近傍の風景賞すべく、四圍翠巒、竹林奇島の美あり、順徳上皇の御史、蹟城山公園、隆起海濱、箭島、經島、御所櫻、蓮華峯寺、安隆寺等を有し、殊に箭島經島の美しさ、宿根木、深浦の奇、竹林や椿の茂み、大佐渡の海岸美と全く景趣を異にし、南國に遊ぶがごとき感あり、名勝

地に指定されてゐる。この國の詩人丸岡南陵は

此邊好馬頭 荻浦推第一 東西南北舟  
斯内碇泊必 昨日千帆入 今日千帆出  
と詠じたが、近國無比の天然の良港として殷盛を極めた小木港爛熟期の情調であり、また小木風景の簡潔な素描である。東西二里、南北一里、面積一・七二七方里に及び、最近、定期航路の出入頻繁となつたために、昔日の繁榮を招來する日も近い將來であらう。

住民は漁業に従事するものもあるが、大體が商工業者で、工業も手工業が多く新潟縣竹製品の首位佐渡策の約七割はここでつくられる。漁業は魚場に恵まれ乍ら、漁撈も加工も振はない。農業は水田の開拓に乏しく、三百餘町歩の畑作の集約的經營が圖られ、園藝方面に頭角を現はして來た。

### 兩津町

本町は湊、夷の兩町を併せて成り、面



稿〇・〇四万里 兩町は加茂湖の吐口に架せる兩津橋によつて結ばれる。由來新潟港の繫船場として發展せるこの町は、殊に冬季避難港として近海これに及ぶものなく、佐渡の表支關としてます／＼繁榮の途上にあり、昭和二年の大火は町の大半を烏有に歸せしめたが、今は倍舊の復興振りを示してゐる。

新潟より汽船で三時間半を要し、内務省指定港灣にして、佐渡の關門たる地位を占め、通信交通産業の中心地である。

島内各地への縣道の起點にも當る。實に「來いと云ふ人あれ島は涼しげ也」と紅葉が吟じた日本海の萊蓬島佐渡ヶ島の玄關、それが兩津である。

産業は水産業と工業がその大部を占めて七十餘萬圓に達してゐるが、遊覽客の來遊による収益は、本島の咽喉に位するだけに大きなものがある。町には劇場、映畫館、其他の娛樂機關も備はり、兩津築港事務所、兩津警察署、縣穀物検査所支所、縣立兩津治療院、相川區裁判所出張

所、專賣局派出所、郵便局、圖書館、銀行支店、各種團體多數がある。

しかし本町を語る上に忘れられざるものは勝景の地加茂湖である。二十五景の筆頭に位し、南國風景そのまゝの明朗な景趣、雄大なる風景は心憎いまでに強い魅力を持つてゐる。その他金北山、海府の景観、兩津橋、村雨の松、鏡岡公園、妙法寺郷社諏訪神社などがある。

## 二見村

澤根町の西に連り、大佐渡の西端に位の、眞野灣口を扼してゐる。北に大佐渡山脈の末端丘陵を負ひ、海岸線は單調を缺き、殊に西濱は長手崎の岬角を占め、白島その他の諸島が點在する。二見灣は一に眞野の入江といひ、また戀が浦とも呼ぶ。澤根町に接して各所へ自動車の便あり、大字二見から山形縣酒田港への航路もある。

橋、大浦、高瀬、稻鯨、米郷、二見の部落を含み、面積〇・七〇九万里、産業

は農を以て第一とし、水産これに次ぐ、他は微々たるものである。團體には二見村信購販組合、大浦漁業組合、二見漁業組合のほか米郷、高瀬、橋、稻鯨にもそれ／＼業漁組合が組織されてゐる。

社寺に村社三宮神社、同尾平神社、郷社二見神社、安養寺、定福寺、龍吟寺などあり、相川より西方海岸傳ひの縣道に橋の正福寺、辨天岩、二股岩、順徳上皇御手植八房の梅、月さゝすの池及び、里人稱して伊勢二見に優るといふ二見の夕照等の名稱あり、この邊一帯を西濱海岸と稱する。なほ二見の龍吟寺には國寶金明聖觀音が安置される。

## 八幡村

東南は眞野村に、西北は河原田町につづき、眞野灣にのぞみ、國中平野を灌溉せる國府、石田の二川は、村を貫通して眞野灣に注ぐ。土地坦々として豐沃、蔬菜の産が多い。河原田町につらなる海岸一帯は「雪の高濱」と稱し、白砂青松相

續く景勝の地である。

八幡、八幡新町、八幡町の三大字より成り、面積〇・二六二万里にして、戸數三百六十五、人口千八百餘をかぞへ、村内鎮座の八幡宮に郷社と村社の二社あり諸州の例より推すに所謂府中八幡であらうといはれる。古跡考に、順徳院がこの里にて

啼けば聞く聞けば都の戀しきに

この里すぎよ山ほととぎす

と歌詠み給ふと説き、續風土記に、八幡里に順徳院の御宮跡があるといつてゐるが確かなことは詳かでない。村にはなほ曹洞宗に屬する寶鏡寺あり、名勝としては越の松原、八幡御所跡があげられる。兩津町へ四里、縣道通じ、石田、國府の二川によつて舟楫の便もあり、水陸共に交通の便良好である。

## 二宮村

大佐渡の西南部たる金北山連峰の東南麓に延亘し、眞野灣に迫り、國中平野の

平坦なる沃地を占め、中央に石田川が流れてゐる。石田、中原、上長木、下長木

ほか七大字より成り、面積一・八三六万里、相川町へ二里半、兩津町へ三里半、いづれもバスの便がある。

佐渡志によれば、二宮は順徳院第二皇女忠子姫を崇むる所なりといひ、今、皇女の御墓所は二宮神社の背後にある。日蓮上人に由緒深き妙照寺及び實相寺もこの附近にあり、妙照寺は文永九年上人が塚原よりこゝに移され、同十一年三月まで配居の地である。當地上人の監守たりし近藤伊豫守清久の族、日靜なる者、深く上人に歸依しこの寺を開いたといふ。

大字石田なる本福城址は、その跡に今縣立佐渡中學校が建てられ、金北山と眞野灣との景勝を恣にしてゐる。この他社寺には郷社二宮神社、村社金北山神社、同高濱神社、同羽黒神社、同中原神社、同若宮神社、同諏訪神社、圓満坊、玉泉寺、西光寺、照覺寺、常信寺、青柳寺、妙經寺ほか六ヶ寺あり、順徳帝第二皇女の御

歌に

またも見む賤がいほ機おりはしの

おりな忘れそ山吹のさと

とあり、めぐる歴史の哀傷がこめられてゐる。佐渡觀光の客のこの地に足を止めざるはない。

村は明治三十四年野田、二宮の二村を合併したもので、産業は農耕が最も盛んで、總生産額五十萬圓のうち二分の一餘は農産物が占め、農産物では米がその大部分だ。これに次では工業、林産があり漁業は少い。

## 金澤村

本村は千種、平清水、泉、中興、新保貝塚等の部落より成り、金北山麓の平野に位し、その溝瀆を新保川と稱し、國府川に入る。河原田町を経て相川町に至る縣道と、吉井加茂兩村を経て兩津町に至る縣道とが通じ、交通至便で、産物には米、麥、繭が多く、面積は二・八〇一方里に及ぶ。



村内泉には順徳院の黒木御所と傳ふる廢墟あり、一説には古墳といはれる。續風土記には「和泉村に上皇の御料地ありて、御幸の假宮もありたり、云々」と出てゐる。大字中興は應永十四年の文書にすでにその名見え、爾來北佐渡の大邑であつた。同地に發見される石器時代の遺跡も多い。思ふに海水の國中地方を貫流せし時代には、當地が人類生活上最適の地であつたのだらう。

村には縣農事試驗場佐渡分場、縣穀物検査所出張所、郵便局、組合立佐渡高等女學校、村立圖書館、郡農會事務所などあり、神社郷社八幡宮二社、村社中興神社二社、同白山神社、同熊野神社等あり、寺院は觀正寺、願正寺ほか十八ヶ寺をかぞへる。名勝舊蹟には黒木御所、千種の里、明治記念堂、往古の國造大荒直治所址がある。

### 吉井村

本村は舊幕時代には藍原大和守の管領

するところで、當時は吉井本郷、舟津、中島、間場、横谷、水渡田、三瀬川、細屋、青龍寺、安養寺、立野、上横山、下横山、湯端、青木、石花を吉井十六郷と稱した。

明治九年の地租改正、同十二年の郡區改正の際に小部落を合併して十五ヶ村となり、同二十二年自治制施行の時、町村の合併があつて吉井、秋津、長江の三村に區分された。同三十四年この三村を合併して吉井村と稱し、大和、吉井本郷、安養寺、立野、吉井、三瀬川、水渡田、旭、湯端、下横山、上横山、秋津、長江の十三大字を置く。

本村は佐渡の中央より稍や東部に位し東は鴨湖（越の湖ともいふ）を隔て、兩津村に對し、西は金澤村に接し、南は新穂村に隣り、東北は加茂村に、北の一部は高千村に境する。東西凡そ一里、南北凡そ三里、その面積一、九一六方里にわたつてゐる。

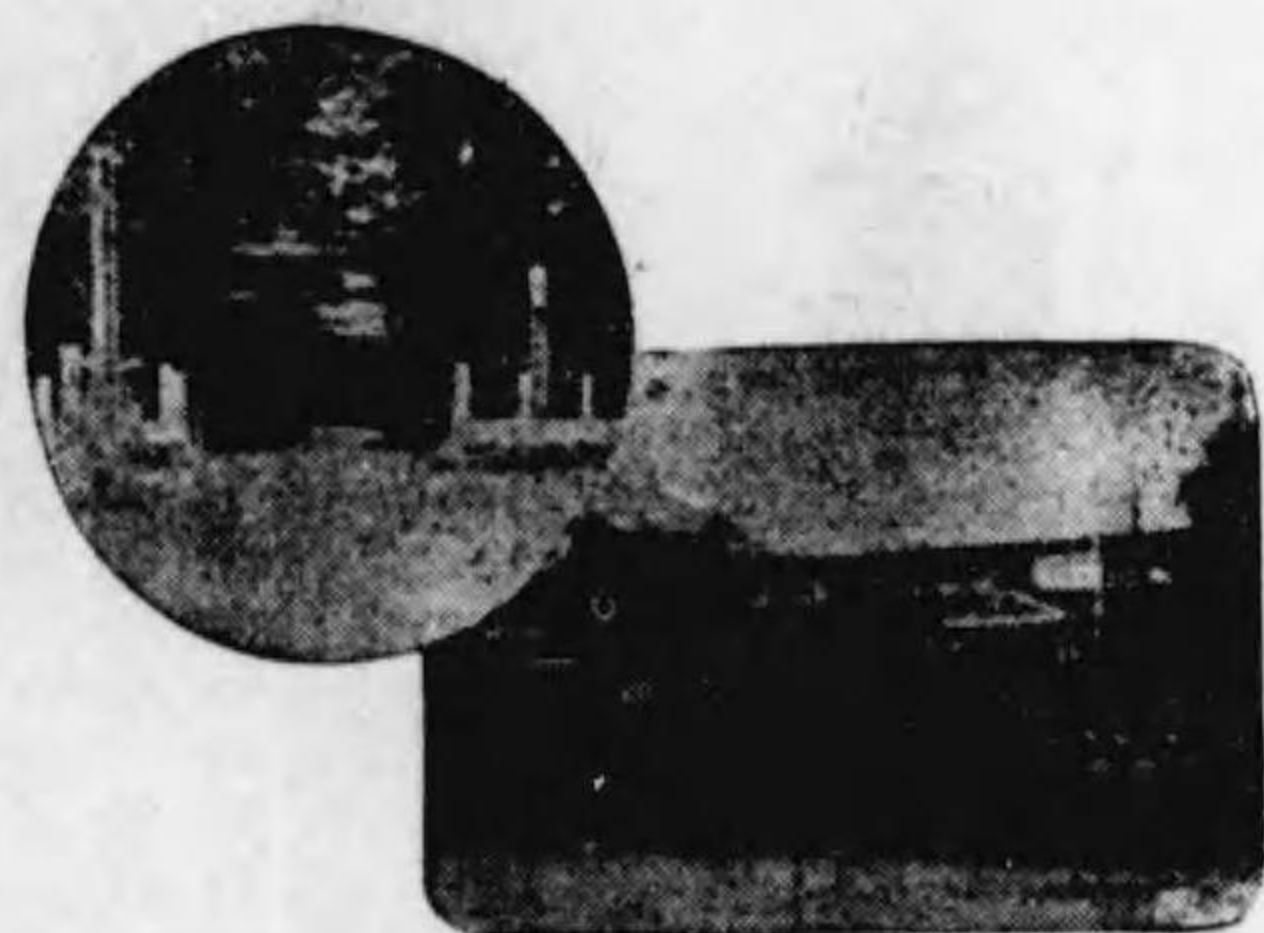
本村の形は略ぼ方形に北方柄をつけた

### 新穂村

新穂村は郡内町村中面積第一位を占めてゐる。東西約三里、南北約二里、面積約五方里をかぞへ、北は加茂湖及び吉井村に、西北は金澤村に、西南は畑野村、東は河崎村、南は小佐渡山脈を距て、岩首村に接してゐる。

東南は一帯山脈連り山岳重疊し、國見

山は海拔二、〇三二尺、村第一の高山である。村内の一部は丘陵起伏するところあるが、併し中央は平坦にして大野、新穂の二川は村の略ぼ中央を貫流し、地味肥沃、水利の便多く田圃また開けてゐる



る。人口は七千餘人。

明治三十四年十一月一日町村分合實施に際し新穂村（七ヶ大字）、大野村（二ヶ大字）、長畝、舟下、皆川、澤上、田野

澤、正明寺を併合し、現在十五ヶ大字により新保村の成立を見たのである。この十五大字中、大野は和名抄の所載が床郡大野郷にて、その起源は最も古く、徳川幕府の直轄するところとなつてからは、佐渡一國二百六十ヶ村を大野、夷、羽田、小木の四組に分つたが、大野組は四十九ヶ町村を算し、本村は概ね大野郷に屬してゐたものである。

名所舊蹟としては日光神社、牛尾神社、根本寺、清水寺、神宮寺の鐘、湖鏡庵、湯の澤鑛泉などが知られてゐる。

### 畑野村

眞野村と新穂村の中間に介在し、南に經塚山、飯豊山連峰の翠巒を負ひ、北部は國中平野の耕田穰々として開け、部落は縣道に沿ふて散在する。兩津港より三里半自動車の便がある。

明治三十四年十一月、町村の廢置分合に際し、畑方、畑本郷、寺田、安國、河内、後山、宮浦、三宮、大久保、畷田、

小倉、猿八、長谷、栗野江、坊ヶ浦、目黒町の十六字を合併し、今日の畑野村を組織した。面積三・三二九方里、戸數千四百餘、人口七千四百を越え、村民は質朴にして進取の氣象に富む。

産業は、農業その大部分を占め、産額も五十萬圓に近く、これに次では工産、林産、畜産の順である。最近は副業が奨励されるので、副業關係の工産物及び林産物が多くなりつゝある。産業組合はよく利用され、成績良好である。小學校は三校、青年學校は一校である。

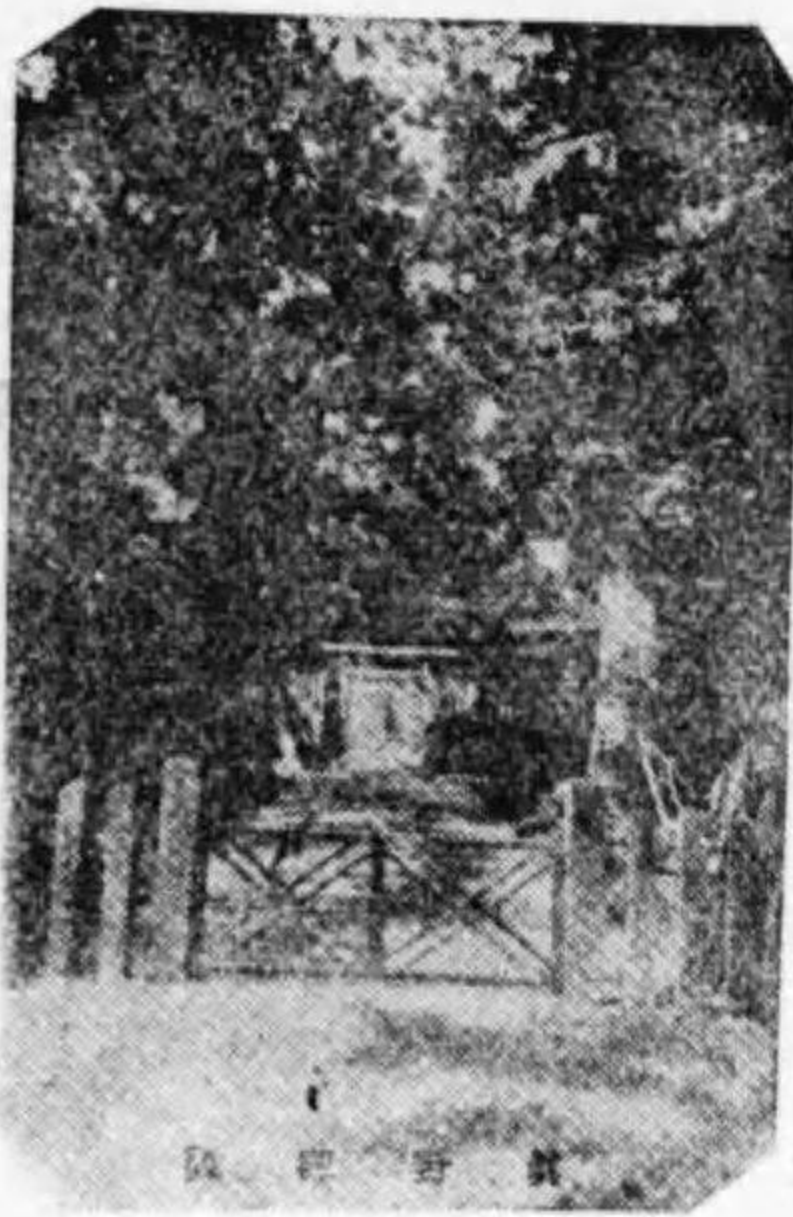
神社十八社、寺院二十四ヶ寺を算し、舊蹟には順徳帝第一皇女の墓所たる一宮御墓所、同じく第三皇女の墓所たる三宮御墓所をはじめ、文覺上人の遺跡、星降の梅、日蓮上人救宥の遺蹟、國寶觀世音靈盛法印の墓等がある。

### 眞野村

本村には石器時代の遺跡及び古墳の散在せるありて、その開發の甚だ古きを思



はしめる。大化新制後、雑太國府及び雑多郡衙を置かれ、豊臣氏が治府を鶴子に移せしまで實に九百六十餘年間、一國の首府なりしと共に、また實に文化の中心地であつた。天正十三年には國分寺が建立せられ、その後妙宣寺、世尊寺、太蓮寺等の他村より移り來れる等併せて信仰



上の中心地でもあつた。順徳上皇が當地に遷幸し、御在島二十二年に及び、本村の御遺跡の多いのは、こゝに守護所が置かれたからである。治府が相川に移されてからも、越後に至る公道たる小木、赤泊に通ずるの故を以て戸口却つて増加するの結果を生んだ。名所舊蹟も縣社眞野

宮、石抱の梅、石眞野山火葬塚、堂所御所址、戀ヶ浦、佐渡國分寺跡、阿佛坊妙宣寺、日野資朝卿墓、阿新隠れ松、雑太城址、世尊寺等頗る多く、戀ヶ浦は、順徳上皇が

いざさらば磯うつ浪に言問は

おきのかたには何事かある  
と、御鳥羽上皇の隠岐の行在所を偲ばせ給ふたところである。

佐渡の西部に位し、所謂國中の一部を占め、郡の最大川たる國府川は村の北端を流れる。地形南北に長く東西に短く、面積二・九六方里である。

生産金額は六十數萬圓に上るが、工産と農産でその八割を占め、主なるものは米、木炭、竹材、竹工品で、植林は郡内第一の模範村である。近年、紫雲英の栽培が多く、自給肥料の徹底が叫ばれてゐる。信用組合は八百餘名の組合員を有し農業倉庫を兼營する。

### 西三川村

昔より砂金の産地として、宇治拾遺その他の記録に傳へられる。現時、西三川大小、大倉谷、田切須、小泊、椿尾、龜脇、村山等の部落より成り、面積二・〇九二方里にして、村數五百三十、人口三千百をかぞへる。  
産物は農産物にして、林産これに次ぎ以下水産、工産、鑛産の順である。村には郵便局を有し、産業組合、土工森林組合、漁業組合もある。  
社寺には郷社小布施神社、村山白山媛神社、同白山神社、同諏訪神社、同氣比神社、同白山神社、醫王寺、圓照寺、香傳坊、智光坊、如意輪寺があり、名勝としては椿尾鶴懸、西三川の雄瀑、笹川の順徳上皇第三皇子彦成親王の御墳墓など

が廣く知られてゐる。

小木港より三里半、自動車の便あり、交通は悪くない。

### 羽茂村

全戸數約一千戸、その八割は農耕によつて生業となしてゐる當村は、郡の南端に位置し、東は赤泊村に境し、西は小木町及び西三川村に接し、北は眞野村、南は一帯海に面してゐる。東西凡そ一里、南北凡そ二里、面積は二方里六分餘に及んでゐる。

地勢は北より南に傾斜し、東南北の三面は村菅山、鞍骨山脈を以て圍繞し、いづれも分水嶺を以て境し、殆んど藥研形をなし、羽茂川の中央を貫流して北から南に流れ大石灣に注ぐ。

當村はもと一郷十一ヶ村に分れてゐたが、明治九年、同十七年、同二十三年の數回の變遷によつて分合をなし、更に同三十四年の新潟縣町村分合の時、羽茂本郷村、大橋村、千手村の三ヶ村を併合し

羽茂村と改稱し、現在に至つてゐるが、その大字は羽茂本郷、飯岡、上山田、大橋、大石、三瀬、大崎、瀧平の八部落に分れてゐる。

小學校の外に青年學校、農學校、圖書館の設けがあり、育英のことにはなかなか熱心である。

當村の名勝舊蹟としては五十猛命を祀る國幣小社度津神社をはじめ妹背山、郷社菅原神社、村社草刈神社、新倉山弘仁寺、天澤山大蓮寺、羽茂城址、義民善兵衛の墓、羽茂川の鮎などが算へられる。

### 赤泊村

本島南海岸に沿ひ、越佐間の最も接近せる地點にして、對岸寺泊へ三十一哩、晴天の日は髭髯として望見し得られる。後方に前佐渡山脈を負ひ、山間に耕地あり、簡味豊饒、海濱にのぞんで部落は點在し、住民は概し農耕漁撈に従事してゐる。佐渡雜志に、

小木、赤泊兩湊よりは越後の今町柏崎、出

崎、雲寺泊、新潟へは、夏季日々の渡船あり、冬は田雲崎、寺泊へのみ渡海す、大下りの暴風には赤泊北方松ヶ崎へ向け馳返る、走泊の淵には四方風當らず、只淺くして狭きため小船のみ集る

とある。村内禪長寺毘沙門堂は永仁六年大納言爲兼卿が流されて七年の間寓居したところである。

當地方は本島でも可なり早く開けた地で、本村は十二字を以て組織され、上述の如く海と山に挟まれた風光絶佳の地に於て、東西二里三町、南北三里十町、面積三・四一二方里に及び、戸數千、人口約六千、村民の志操堅實なる平穩な土地である。明治二十二年町村制實施の際には羽茂村區域の三ヶ村を離して川茂村と稱し、同三十四年十一月眞浦、赤泊ほか三ヶ村を合併して今日に至つた。

住民は農七、商三の割合となり、主たる産物としては米、繩、竹材等があげられる。最近美術籬の製作が隆盛で、本村の名産物となつて來た。



小學校は一校にし分教場四あり、青年學校が併設される。

### 松ヶ崎村

多田、丸山、河内、松ヶ崎の四部落より成り、松ヶ崎は前佐渡海岸の中心にあたり、西浦原郡角田岬と相望み、約十八哩、越後との最短距離にある。松ヶ崎の本嶺一頭山は、前佐渡山脈の第一峰にして、義經記に見ゆる松陰が浦は、松ヶ崎が浦を誤つたものである。

位置は前濱の東部にあたり、東南は海に沿ひ、西北は山脈を以て掩はれ、男神女神の二山が聳え、山勢直に海にせまつてゐる。河内川は源をこの山間に發して南流する。平坦の地少なく、村内到るところ森林が繁茂してゐる。面積一・〇一三二方里、戸數三百三十、人口千七百七十を算し、佐渡の首邑相川を去ること八里餘、越後寺泊に至る二十哩、新潟港に凡そ三十九哩、海陸交通機關備はり、便利である。

住民の約半數は農に従事し、約三割は水産業に、他は工業、商業を営み、産額も農産が主位で、水産、工産、林産の順をなし、副業では菓子工、竹細工、養鶏養蠶が多い。小學校は一校、青年學校が併置される。名蹟には日蓮上人の御着岸所たる本行寺をはじめ、當地開發の祖を祀る男神山及び女神山、多田城址、經田などがある。

### 岩首村

本村は小佐渡山脈なる飯豊山の東麓に抱懷される僻村にして、東は海洋にのぞみ、豊岡、岩首の他の部落は概ね沿海の一線上に點綴し、村民の大方は漁撈を事とする。この邊はいはゆる前佐渡にして、姫崎(水津)、澤崎(三岬)に至る一帯の高嶺を脊にするが故に、前濱と呼び前佐渡の稱が起つた。大略一頭山脈を前佐渡とし、金北山の大佐渡に對する意味である。

豊岡、岩首、東鶴島、柿野浦、立間、

赤玉、鮑浦等の大字より成り、面積一・二〇四方里に及ぶ。曾て明治四十二年、納稅成績本郡中の第一位を占め、三十年來完納の故を以て表彰された。

前佐渡の海岸より多く竹木を伐出して越後に移出し、竹を主とし、大良材はなぐたゞ稀に樵の巨幹を出すことがある。また海濱より採る石は、赤玉と稱する血色の大塊で、庭園に安置して雅致に富み、赤玉濱をこの石の本場とする。延喜式大嘗祭供神雜物の中に「佐渡鯉四合合別納一斤」とあり、また大膳式平野祭給料の中に「佐渡鯉十四斤」とあり、今も當國名産の一で、本村を本場とする。岩首の養老瀧、豊岡の辨財天、立間の白杵岩などの名所舊蹟あり、神社寺院の數も多い。

### 水津村

岩首村の北東につらなり、目布施、東立島、東強清水、野浦、片野尾、水津の六大字より成り、大字水津は椎泊の東で

前佐渡山脈の東北端に位する。附近に姫崎燈臺あり、燈臺下には高さ六十餘尺に達する龍王と呼ぶ一岩石が屹立する。姫崎燈臺は、岬上水面を距る一三六呎に點

火し、光達距離十海里、夷灣の南角に位置せるを以て、東方新潟より進航する船舶はこれを望んで港灣に入泊する。

戸數約二百五十、人口千五百有餘を擁し、面積は一・〇七二方里である。耕地少なけれども農業は本村第一の産業にして、林産及水産がこれに次ぐ。産業團體には水津村産業組合、野浦施業森林組合村漁組合、その他が組織され、産業經濟の發展に竭すところが多い。兩津町へは縣道通じ、海路定期發動汽船の往復もあり、交通状態良好、また郵便局の設けもある。

社寺には村社白山神社、同野浦大神宮觀音寺、地藏院、誓願寺、萬福寺、慶藏院、淨願寺がある。海濱東浦は、岩石の奇怪、緑の深壁、水色の透徹、顧色混然として融和し、一幅の繪畫を見るがごと

く、景勝地として名高い。

### 河崎村

海波靜穩なる兩津灣の南岸に沿ひ、背後は飯豊連峰にて水津村と村界を劃し、西南は新穂村につゞき、西は吉井村と清麗鏡のごとき加茂湖を擁し、その岬角先端は兩津町に隣接する。

河崎、大川、羽二生、兩尾、椎泊、下久知、久知川内、城腰、住吉、原黒、吾湯等の部落を含み、大字椎泊の山中には柯樹繁茂し、その實を椎子といひ、兒童がこれを好んで炊食するのも當地異風景の一つである。字久知は和名抄に賀茂郡動知と知されたところである。全村の面積二・九〇三方里、戸數千を越え、人口五千百人を擁し、兩津町に近く交通の便良好である。

生産年總額は三十數萬圓にのぼり、内農産物が二十八萬圓を占め、米だけで既に二十數萬圓の産額がある。その他では林産及び工産に稍々見るべきものあり、

他は微々たるものである。村には郵便局、姫崎燈臺、河崎圖書館、河崎村信販購利組合、加茂湖漁業組合聯合會、吾湯漁業組合などがあり、社寺も多く、神社は郷社白山神社、同八幡宮、村社磯部神社、同住吉神社、同兩尾神社、同八幡若宮神社、同水尾神社のほか無格社一社あり、寺院は願誓寺、晃照寺、來迎寺、和光院のほか十五ヶ寺をかぞへ、長安寺は天長八年に開基されたる古刹にして、梵鐘は異國より渡來せるもので、本尊阿彌陀如来と共に國寶に指定されてゐる。また運慶の作に係る金剛力士の像がある。

### 加茂村

本村は梅津、加茂歌代、白瀬ほか十三箇大字を併せて成り、面積五・四九一方里にして、戸數千有餘、人口約五千八百人である。

舊加茂郡の郡名の起つたところで、和名には賀茂郡賀茂郷と記される。大字海津の眞法院に岩梅といふ異種あり、順徳



院御手植の老木である。木喰五行上人の遺跡たる木喰堂も村内にあり、郷社羽黒神社は寶龜元年の創建にて、往古二十ヶ村の總産土神であつた。この神社寺院は頗る多い。

海に沿ふて縣道が通過し、兩津町に近く、交通は便利である。村内を金北、五月雨、羽黒、金剛、檀特、高塚、歌見、刀根の諸峰相連つて蜿亘し、高千村及び外海府村との分界をなし、東方は海洋に面してゐる。

産物は天與の魚介に恵まれ、海産物豊富にして、近時、これが加工行はれて産額の増加を來し、山岳地方に於ては木炭の製造あり、農産として米、麥のほか、蔬菜、果實の産漸次増加を見てゐる。物資の搬出には沿海を通過する縣道を利用し、兩津驛も近く、便利である。

小學校は三校に分れる。青年學校は農閑期が利用され、昭和八年から女子部が設けられた。

### 内海府村

北小浦、鷺崎、黒姫、虫崎、見立の五部落より成り、面積一・七八七方里、西方外海府村との境に笠取山、大頭山が聳えてゐる。鷺崎は郡の最北端あたり、漁船の碇泊に適し、虫崎は奇巖奇勝を以て知られる。

内海府とは本來外海府に對し、彈崎より羽黒海岸までの總稱にして、鷺崎は外海府との交響をなしてゐる。こゝは指定名勝地で、奇巖の碧波に映ずるところ、斷崖の直に水にのぞむところ、その間に砂濱を求めて營む漁家もあり、眺めの飽くを覺えず、繪にも筆にも盡し難い景勝である。

村には縣道が通つて交通の便あり、彈崎燈臺、郵便局、産業組合、漁業組合を有し、寺院には眞言宗觀音寺、同藥師寺曹洞宗西光寺等がある。

### 外海府村

大佐渡の西北端に位し、内海府村と背接し、大佐渡山脈の山勢は直に海に没し波濤岩にくだけて壯觀を呈する。佐渡事略に

此國西北の海に附たる方を外海府と云ふ、海中に岩多く赤松など根ざして島臺と云ふ様の者幾所もあり、大なる岩や不思議なる窟など種々にて始には目を驚かすも後には厭ふ心地す、都て唐繪の山水を見る心地す云々

と出て居り、近時、海岸の景勝を賞するもの、夏時來遊する者が多い。この邊一帯は指定名勝地で、相川を去る北九里は海金剛の名あり、海の宏大と山の雄姿と樹木の風致と岩石洞窟の奇觀とは、日本三景も及ばざるべく、最も男性的なる天然の大公園として、造化の偉力は、文人墨客の嘆賞措かざるところがある。また大野龜、三ツ龜の勝地あり、潮満つれば島となり、退けば砂嘴が現はれて陸続きになるといふ。

村は岩谷口、願、北鶴島、眞更川ほか

五大字を含み、面積三・九八七方里あり相川へ約十里、兩津へ九里、海岸に沿ふて縣道が走つてゐる。産業は農業が最も盛んで、林業水産業がこれに次ぐ。

### 高千村

北は外海府村に接し、東南は金光山に蔽はれ、村内に山岳重疊して平地の見るべきものなく、北立島、石名、小野見、北田野浦、高千、入川、北川内、石花、後尾、北片邊、南片邊の十一部落は概ね西北面の海岸沿線上に點綴し、面積五・四一三方里にして、戸數八百八十餘、人口五千有餘をかぞへる。

もと高木、千本の二浦に分れてゐたのを、近年になつて合併したもので、大字石名の東南には檀特山あり、字石花は外海府に屬した古村にして、北佐渡殿の幕下石花將監といふものが、外海府の領主であつたといふ。

生産は一ヶ年約四十萬圓に達し、内二分の一近くは農産が占め、これに次で鱈

産十五萬圓、林産五萬圓がある。耕地は田が約四百町歩、畑が約八十七町歩である。交通は海濱に縣道が通じてゐるだけで、便利とはいひ難い。

村には郵便局二、高千圖書館、高千信購販利組合、南片邊森林組合、村漁業組合等あり、社寺として村社八幡神社、同御禮知神社、正福寺、藥泉寺、地藏寺、水上坊が擧げられ、名勝に金北山及び海府の勝がある。

### 金泉村

郡の西部にありて東は金北山脈を以て金澤村、二宮村を限り、西は日本海に臨み、南は相川町、北は高千村に連る。東西の延長三里、高峯峻崖あり。大字戸地北狄に發電所を有し、大字姫津は海洋に突出せる岬角により港灣となる。

もと雜太郡に屬し、幕府時代は達者、小川、姫津、北狄、戸中、戸地の現大字はそれ／＼獨立して一村をなし、各々名主が置かれた。明治九年相川ほか四ヶ村

組合となり、同三十三年町村合併の際、下相川を相川町に分割し、更に戸地戸中兩村を合併して今の金泉村となつた。面積三方里である。兩津港より海路發動汽船、陸路自動車の便がある。

大佐渡の西海岸を外浦といひ、本村は奇嶽と荒波の景に富む外浦の中央に位し陸からは、米、木炭、木材を、海からは鱈、鯛、鯖、鮑、若布、荒布を、即ち山海の幸に恵まれた村である。

社寺多く、村社熊野神社、同羽黒神社同金北山神社、同戸宮神社、同白山神社極樂寺、多聞院、萬福寺、胎藏寺などあり、また名勝としては小川塗笠山、達者鑛山、濡佛、北狄生拔觀音、祭主塚、戸地の白瀧、戸中平根化石などが夙に著はれてゐる。

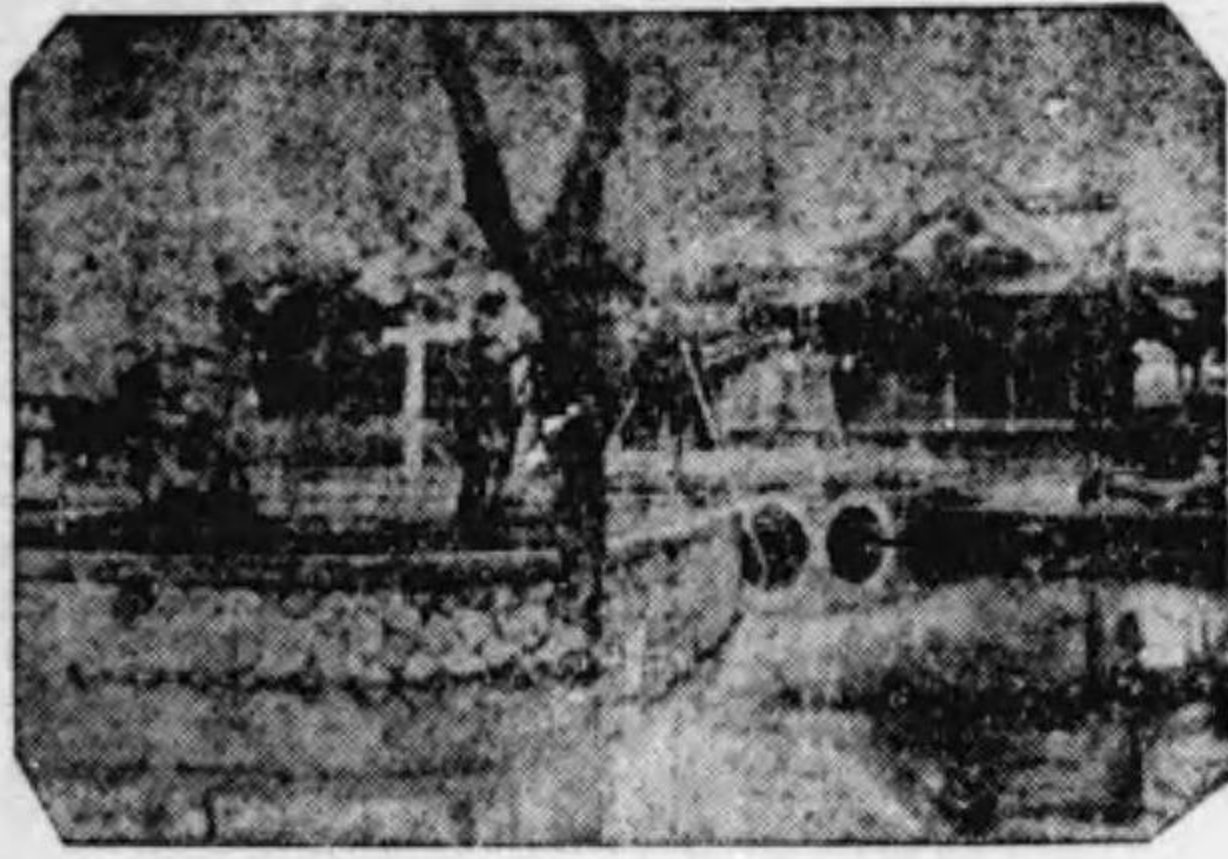


# 市 部

## 三條市八幡小路

### 郷社 八幡宮

本宮は、仁和元年三月十五日、京都石清水八幡宮を勧請して鎮め給ふたもの、當市、古くは大槻の庄といつた所から、



八幡宮全景

大槻 境内は三千五百六十餘坪、本殿をはじめ幣殿、拜殿建ち並んで莊嚴を極めてゐる。寶物として中山大納言筆の八幡宮額、熱田八劍の一信國作の五尺一寸の太刀、直徑一尺二寸文明三年作の鰐口、華山筆の繪馬額などが秘藏されてゐる。毎年五月十五日を大祭日として神輿渡御の式があり、その他入退兵の祈願祭、入學祈願祭を執行する。

社領より 社司は茂崎閑彦氏で、總代に廣川長八、内山勇吉、源川萬吉、高橋茂資諸氏現任中である。茂崎社司は三條中學を経て國

はること數回に及んでゐる。明治五年村社に列し、大正九年郷社に昇格、今日に及んでゐる。祭神は譽田別尊外七柱で、古來武の神として領主の尊崇極めて篤かつた。菅原神社、春日神社、稻荷神社、嚴島神社、金刀比羅神社の攝末社がある。

學院大學に學んで卒業、目下三條商工學校に教鞭を執りつゝある。

### 長岡市觀光院町

### 長岡實科高等女學校

本校は、明治四十五年四月の創立といふ古き歴史を有し、本科一部、二部とし一部は四ヶ年、二部は二ヶ年としてゐる尙その外別に、専攻科を設置し、専攻科は一ヶ年となつてゐる。

現在職員は二十九名で、生徒數は五三六名を數え、創立以來卒業者を送り出すこと二、四二六名に上つてゐる。

本校の教育方針宜しきを得、逐年入學者の數増加し、爲に新に校舍増築の計畫中で、既に着々その準備を進めてゐる。

### 校長

### 山田 武雄

多年辯護士として法曹界に令名を馳せた氏は、また曩に市會議員として、市政の刷新にも功績頗る顯著なるものを殘してゐる。温厚なる紳士で、人情味豊かなる氏は



高邁なる識見と、豊富なる手腕力量をもつて本校長に就任以來、その卓抜なる手腕と時流を抜く識見は、國策の線に沿つて健全なる國民精神を培養した學校經營の業績に上つてゐる。氏の圓滿高潔なる人格は、市教育界その他一般よりの信望絶大なるものである。

#### 高田市西城町二丁目

### 高田高等裁縫女學校

本校は眞の日本の婦道に立つて理想的女子教育を普及徹底せしむる目的を以て創立され、敷地二千坪、校舍三百五十餘坪あり、位置は高田市内に於ける最も健康的な地帯を占めてゐる。實業學校令に據るもので、第一本科修業年限四ヶ年、第二本科修業年限二ヶ年、専攻科及び専修科各修業年限一ヶ年にして、本校卒業生が官公立女子高等専門學校へ入學の場合に公立高等女學校卒業と同等の資格を與へられ、小學校へ就職の場合、本科正教員は教育、音楽、地歴、理科だけの檢

定で免許状を得られ、裁縫科専科正教員の場合は教育の檢定だけで免許される特點がある。學費は至極低廉である。聖旨を奉體し、人格陶冶を圖り、特に公明溫雅貞淑の婦徳を養ふを以て教育の第一方針となし、職員は校長をはじめ、いづれも愛と熱とに燃ゆる人格者ばかりである。創立は明治四十一年。現在生徒数は第一本科二百餘名、専攻科四十餘名、専修科三十名である。昭和十三年度より商業、農業科を加設し、農村女子には農業教育を、町家の婦女には商業的教育を施すことになつた。

#### 校長

#### 中村 精三

氏は、明治十五年十二月の出生にして中村鎌助氏の長男、嚴父は新潟師範を出て、東頸城郡内に教鞭を執り、父子揃つての教育功勞者である。氏は高田師範の出身である。東頸城郡松之山村浦田口小學校に前後二十七年間勤務し、次で安塚實科女學校に榮轉、四ヶ年の後、昭和十年本校々長に



長 校 藤 齋 と 門 正

本校は文部大臣認可の甲種職業學校で明治三十三年八月十二

懇望され今日に至つた。名教育家として令聲普く、讀書を愛し、神社佛閣詣でを趣味としてゐる。五男五女を有し、長男俊男氏は新潟醫科大學に研究中、長女貞子さんは新潟女醫を出て開業隆盛を呈してゐる。

#### 長岡市東神田町

### 長岡高等家政女學校

り、現に校長としてすべて采配を振つてゐる。

#### 長岡市坂ノ上町

### 長岡市役所

當市役所は、驛から直路四三〇メートル、坂ノ上町二丁目十字路角にあり、大正十一年の建築にかゝり、屋上にはサイレン塔があつて、日々市民に正午を告げてゐる。

抑も本市は、明治維新の兵燹にかゝつて全市焦土と化したか、しかもその荒廢の中から人士の養成に奮起し、「食へぬが故に學校を建てる」といふ意氣を以て全力を産業に集中し、行商の長岡として慘苦奮闘すること二十ヶ年を閲して、漸く商戰の基礎を築いたもので、たゞ明治二十一年石油事業の勃興に遭遇して同三十年より四十年に至る石油全盛時代を通じて、本市の産業は一躍して全國に認めらるゝに至つたのである。今や本市は表裏日本の連絡線たる上越

線も全通し、日滿兩國都を繋ぐ最捷路線の咽喉部を扼し、裏日本の中心都市として今後の發展を期待せられてゐる。

#### 長岡市櫻町

### カトリック 櫻町幼稚園

櫻町幼稚園は、カトリック教會の經營にかゝれるもので、昭和五年の四月に創設された。その保育課目は遊戯、唱歌、手技、觀察、談話などで、保育年限を三ヶ年となし、創立未だ日は浅いが、世の父兄の希望に副ふところ大なるものがあり、逐年に榮えを増して今日の隆昌を示してゐる。

現在の児童数は男女合計三十五名で、これを二組に分ち、保母二名が擔當の任に就いてゐる。

當教會の主任司祭兼園長はホンナツケル氏であるが、昭和十二年十二月、前教會主任の後を襲うて秋田縣下より赴任したもので、非常なる親日家、渡日以来十幾年間を、只管に傳道布教に従事し來つ



校内の一部と校旗

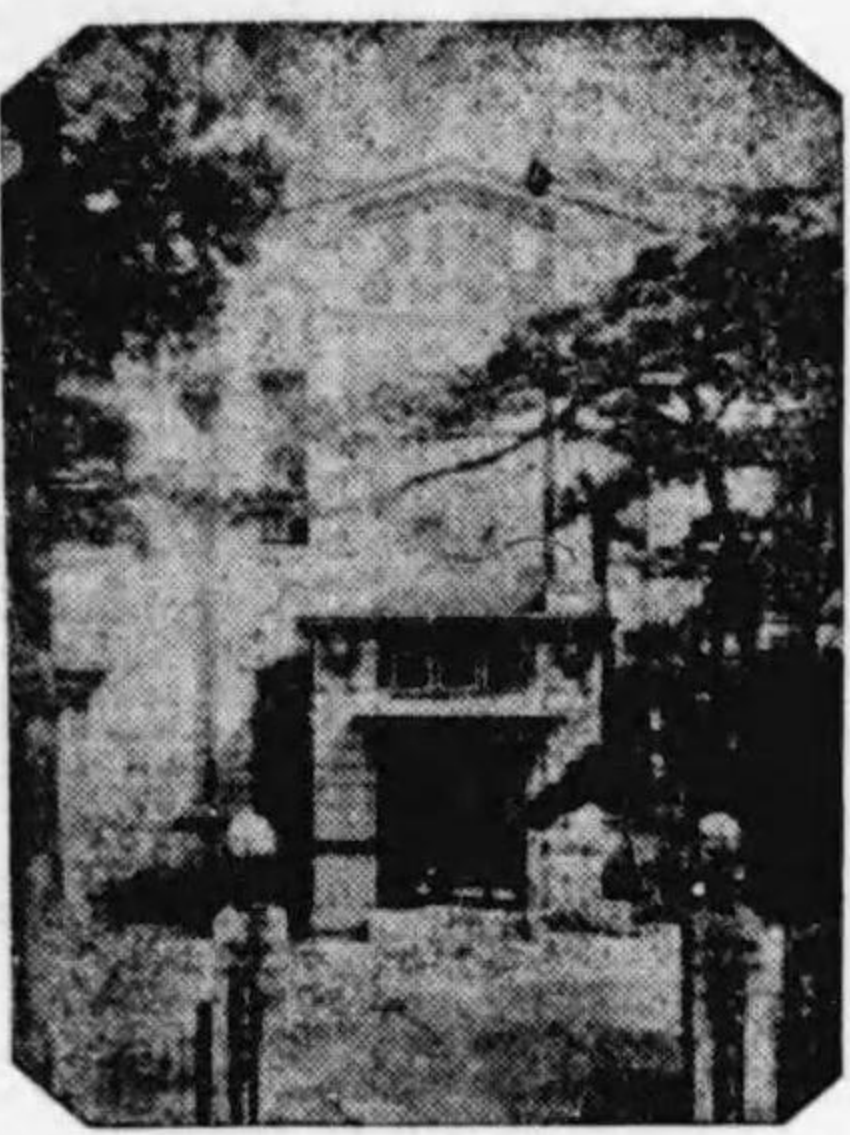
副ふべく孜々營々努力しつゝある。修業年限は本科四ヶ年、専修科二ヶ年、専攻科を一ヶ年となし、定員四百名、八學級に分けてゐる。本校設立者は齋藤由松氏で、創立以來の苦心努力は眞に言語に絶するものであ



たもので、信徒間に極めて信望が高い。

### 長岡市東坂ノ上町一丁目 大正記念 互尊文庫 長岡市立

常館は野本恭八郎氏が 大正天皇御即



位の記念として創設費及び維持資金十三萬圓を寄附して大正四年十月十一日之が經營の申請を長岡市を経て提出し、五年六月十四日縣知事より認可され、七年六月八日開館し、昭和十年二月十一日文部省の選奨を受けた。館名は野本氏の所説の獨尊即互尊の徳に因めるものである。敷地一、四七一坪、建物一〇九坪、本館

は二階建てにて、特別、普通、婦人、児童及び新聞の各閲覧室を始め、貴賓室、休憩室、事務室、宿直室等あり、書庫は三階建二十四坪である。基本財産極めて豊富、館員は館長關威雄氏の下に、司書南雲精二氏、書記吉田義近氏、荒井三次郎氏、雇一人、出納手三人、使丁二人が精勤してゐる。藏書数は六二、四九六冊に上つてゐるが、毎年二、三五〇圓づつ購入して追加してゐる。また一般優秀雑誌數十種、代表新聞二十餘種を備へつけてゐて、一日五百數十人當りの、閲覧數である。

館内閲覧は無料であつて、館外携出閲覧は料金額五十錢、移動圖書館閲覧は月額二十錢である。公共團體には無料貸出を行つてゐるが、これ等のすべてが好評を博してゐる。

講習會、讀者懇談會、講演會、兒童お話會、美術家作品展覽會等の催しがあるし、讀者相談を營んで研學講究の便に資してゐる。

### 寄附者 野本 恭八郎

氏は長岡市觀光院町の人である。互尊翁と稱す。



『我人獨尊、皆互尊』即ち千教萬學を兼備したる大道至教を唱道し

本體は獨尊であり、活動は互尊であり、獨尊はまた互尊であると説破してゐる。

大正天皇御即位の大禮に際し、皇運の隆昌を賀し奉り、至誠を以て三大活寶、即ち皇室、大明、富巖の三大活恩に答へその實效を期せんことを誓ひ、斯教の心身發現を策勵すべき進修、考究の書齋として、大正記念互尊文庫の創建を立案企畫するに至つた。長岡市は野本氏の寄附金十三萬圓を受けて、市立圖書館互尊會文庫を設立經營の件を市會の全致を以て認諾し、つひに今日の開館經營を見るに至つた。野本氏は人爵を捨て、天爵に生

きるの明哲賢士であつた。昭和十一年十一月四日を以て永眠、昇天せられた。

### 財團法人 日本互尊社

當社は社會教化事業の財團法人にして、長岡市觀光

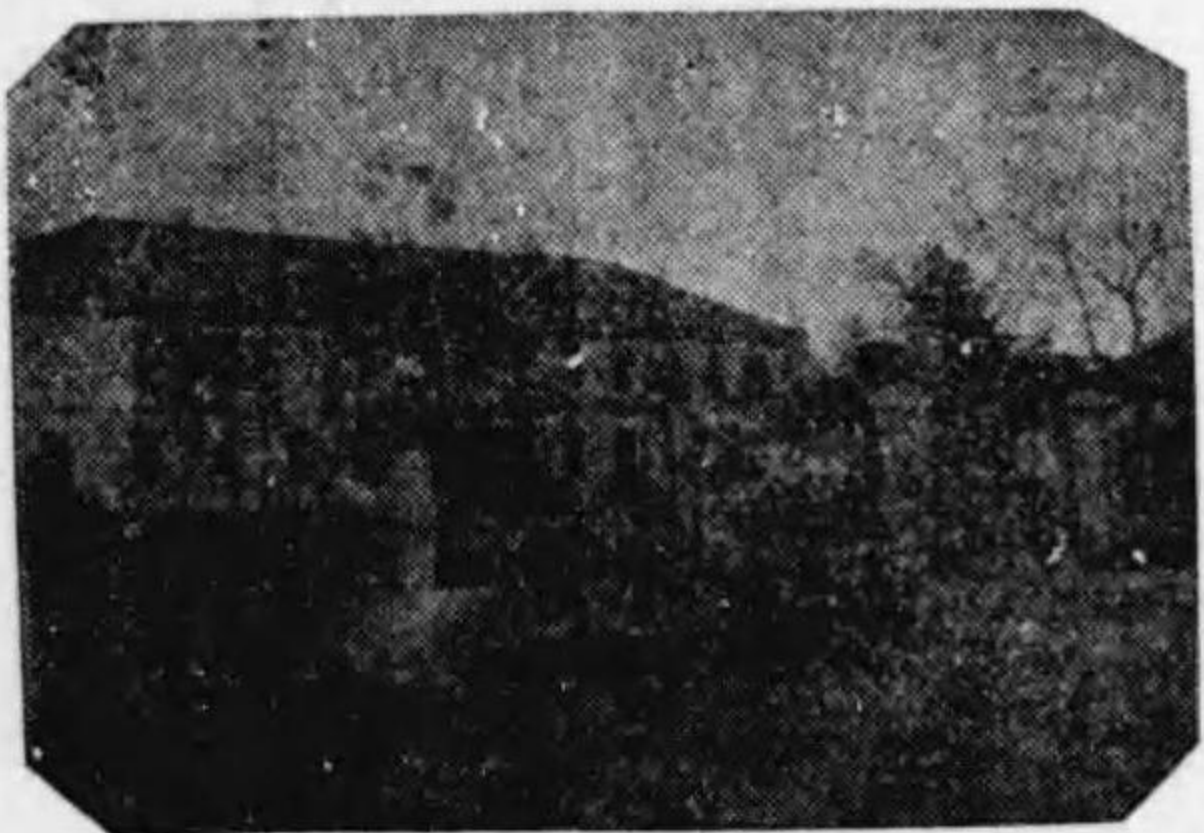
院町甲九七五番地に設立せられ、野本氏の唱道に係れる『我人獨尊、皆互尊』獨尊即互尊の大道至教を、廣く日本及び所謂日本即ち日本大世界に宣揚して、大いに社會を指導するを以て目的としてゐる昭和九年野本氏は十萬四千圓を寄附してその目的達成に資するところがあつた。即ち十萬圓を以て永代基金とし、四千圓を以て經常費に充て、さらに不動産十萬圓を以て基本財産としてゐる。

### 高田 市

### 財團法人 高田病院

中頸城郡病院 高田病院  
明治七年五月、舊高田藩醫藤林玄仙、金子良意はこの地方に病院を創立するの必要あるを唱導し、遂に地方の有志を動かし其の同意を得て新潟縣廳に設立を要

請し、新潟病院の名を以て設立され、岩



永養齋を院長となし、同十二年醫學士の養成を廢止し、次で同十五年中頸城病院と改名、爾來井上平造氏、木村武十郎氏等相襲いで院長となつた。同二十七年眼科を置き、産婦人科を置き、鈴木豐治氏、吉澤正雄氏、華岡青洋氏、仁田秀治郎氏、山内習氏等院長に就任、同四月耳鼻咽喉科を新設し、四十四年佐久間泰治氏院長となる。大正三年中頸城郡依託患者診斷所囑託となり、同八年澁川通氏、相澤愿氏、風間美顯氏等院長となり、十四年創立五十周年記念に一萬八千三百圓の工費を以て病舎一棟を新築した。昭和二年澤野哲三氏院長に、中本完二氏その後を襲ひ、昭和六年創立五十七年財團法人に組織を變更して今日に至つてゐる。

同年、岩永醫長に代つて副醫長福島豐策氏醫長に就任、病舎を新築した。翌九年、縣廳の囑託に依つて管内醫衛開業試

以て病院となし、始めて高田病院を創設したものである。

驗を本院内に於て施行、直ちに醫師を免許した。同十年新潟病院副當直醫武者春道氏醫長となり、當院附屬產婆看護婦養成所の基礎を作り、同十一年高田町醫事會を創立して、武者院長その會長となる同十二年醫學士の養成を廢止し、次で同十五年中頸城病院と改名、爾來井上平造氏、木村武十郎氏等相襲いで院長となつた。同二十七年眼科を置き、産婦人科を置き、鈴木豐治氏、吉澤正雄氏、華岡青洋氏、仁田秀治郎氏、山内習氏等院長に就任、同四月耳鼻咽喉科を新設し、四十四年佐久間泰治氏院長となる。大正三年中頸城郡依託患者診斷所囑託となり、同八年澁川通氏、相澤愿氏、風間美顯氏等院長となり、十四年創立五十周年記念に一萬八千三百圓の工費を以て病舎一棟を新築した。昭和二年澤野哲三氏院長に、中本完二氏その後を襲ひ、昭和六年創立五十七年財團法人に組織を變更して今日に至つてゐる。

當病院の敷地面積は四千三百坪にして



建物總坪千七百坪に及び、患者收容員數二百五十名、醫師十四名の内博士七名に及び、事務員十人、看護婦四十人、藥局四人。生徒五十名(産婆看護婦生徒)あり、内科、外科、耳鼻咽喉科、婦人科小兒科、皮膚科、レントゲン科、その他綜合病院としてレントゲン設備ラヂウム療法、ブナトリウム、日光線室、その他の設備等至れり盡せりの完全振りで縣下に於ける有數の大病院として、噴々たる聲名を馳せ、逐年發展繁昌しつゝある。

### 三條市

三條市長 栗山 英資

氏はなか／＼の人望家、曾ては町制當時の町會議員、町長等に推され、市制實施にあつては、眞に目覚ましき活動貢獻をなし、市會議員に擧げられ、現在市長として當市今後へと挺身努力を敢てなしてゐるが、氏の高潔なる、公明正大なる、たゞ期して待つべしである。

### 三條市

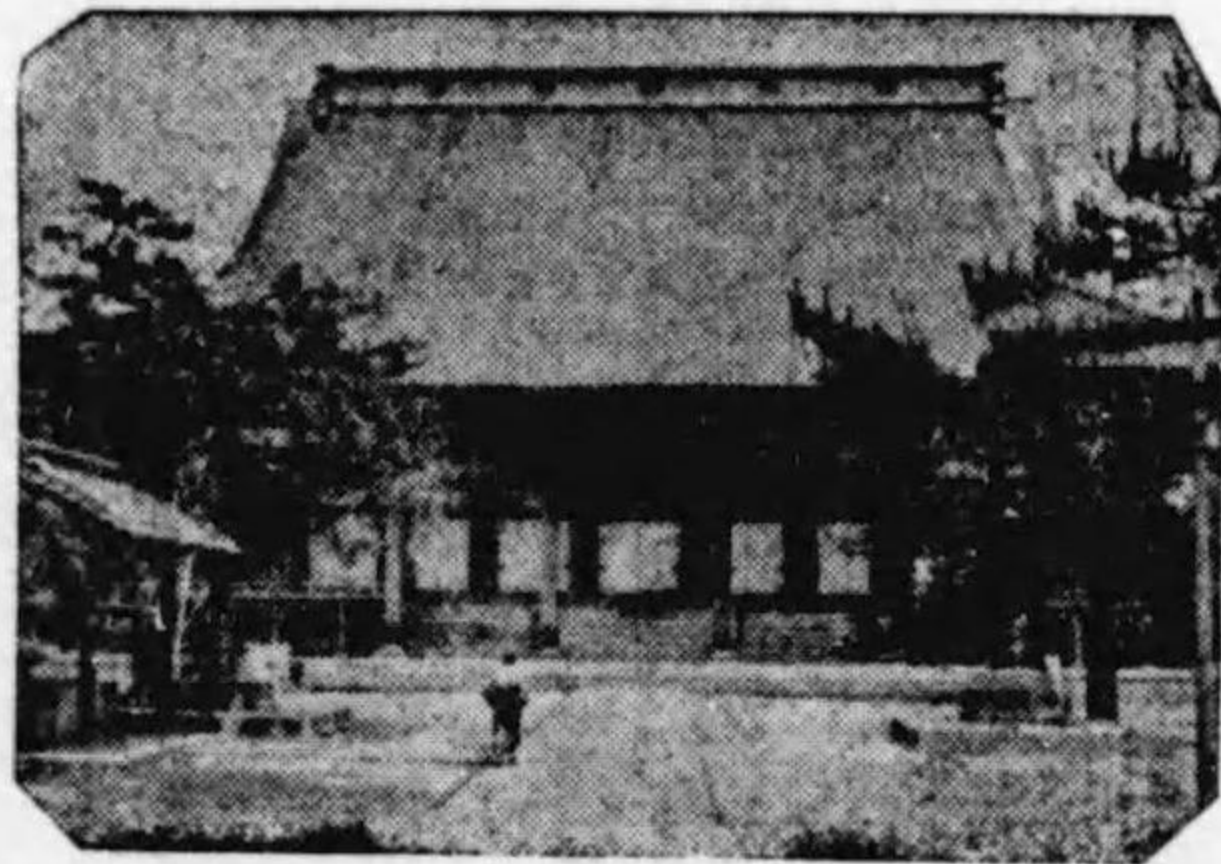
當市は信濃、五十嵐の二川を控へて水運の便によく加ふるに十字の鐵路を利し、縣下商業の中心地をなし、三條商人の名は遠く近江商人と東西相呼應し、業界を風靡したものだつたが、昭和二年市制が敷かれてからは、いよ／＼工業の一大飛躍を見、商業の三條は今や工業の三條として面目を一新した。

とりわけ金工、染織及び足袋は三條の三大工業として、本邦の斯業界に於て嶄然たるをなしてゐる。殊に輓近縣立の金工及び染織の二大試験場が設置されて以來逐年生産品は改良發達を見、いよ／＼天下に雄飛し、ます／＼本邦の斯業界に一大光彩を放つてゐる。

### 三條市大町

眞宗 本願寺三條別院

當山は元祿三年の創建で、阿彌陀如來を本尊とする。大谷派東本願寺十六世の



本堂

三條市大町 眞宗 本願寺三條別院 餘ヶ寺の轉派をなした従つて宗意安心の必要

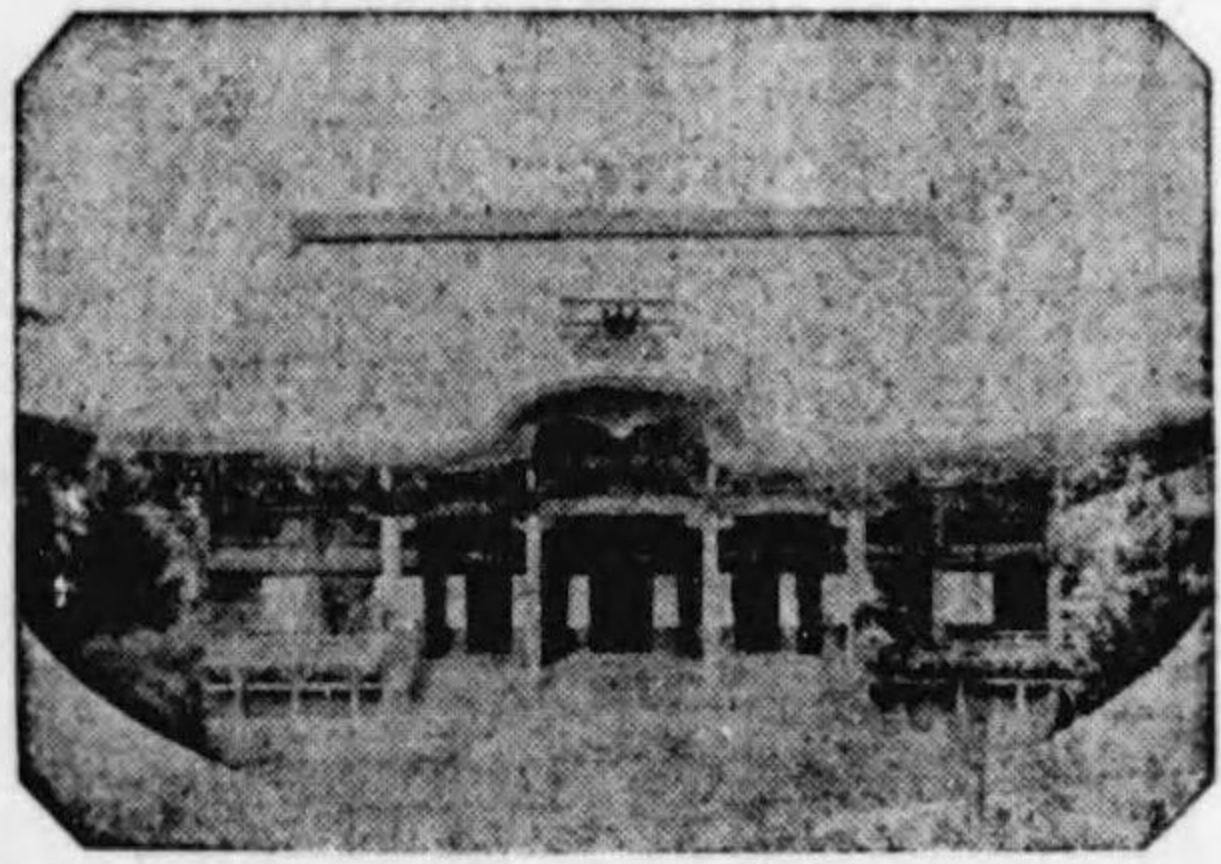
上から掛所として創立されたものだといひ傳へられてゐた。  
この由緒ある當山も、文政及び明治十三年の火災のために全焼し、數ある寶物も全部烏有に歸してしまつた。現在の本堂は明治三十九年六月二十五日の竣工にかゝり、十八間四面の廣大なもの、行在

所は鈴木大將閣下の肝煎によつて再建したもので、四間四面と註せられ、境内は一町二反歩の地坪を占めてゐる。  
同十一年 明治天皇北陸御巡幸の砌り親しく鳳輦を駐めさせ、御假泊所にあてさせ給ふた。九月二十一日 明治大帝御駐營記念式を執行し、また十一月三日より八日までを、宗祖聖人の報恩講引上會等を行事となしてゐる。  
檀家は頸城三郡を除く三市十三郡に互つて末寺五百二十ヶ寺、門徒約六萬人を算へてゐる。小丸善雄師が現在輪番として奔走貢獻してゐる。

### 三條市西本成寺

法華宗 本成寺 總本山

當山の開祖を日印上人とする。上人は文永元年越後國三島郡寺泊に生れた人で同八年宗祖日蓮聖人佐渡遠流の途、寺泊の地に一夜を明かしたが、その夜の夢に摩訶止觀第一卷を踏むと見て、目が醒めた。と、傍に少童が臥せつてゐた。宗祖



本成寺本堂

後の日印上人で、長じて同郡石瀬村の天台宗青龍寺の智觀法橋に師事し、研修群を抜き、夙に聲譽遠近に振ふところがあつた。

その三十一歳の時、笈を鎌倉に負ひ、ます／＼研鑽に努め、遂に舊宗をすて、法華宗に轉じ、故國に歸つて蒲原郡大藻莊薄曾村(今の本成村)に一字を造營し所願に副ひ青蓮寺と稱したが、これ實に

永仁二年のことである。幾くもなくして領主完明、上人の教化に法して大旦那となり、嗣子長久、境内地伽藍寺領若干を寄せたが、爾來法幢をこゝに樹て、法基をこゝに鎮め、大に法鼓を遠近に轟かし化益四方に洽ねく、群庶の潤に趣くこと恰も水の低きに就くが如くで、今や末寺全國に及び、その數四百數十寺に上つてゐる。

境内三萬坪、本堂、客殿、書院、庫裡二重堂、鐘樓、千佛堂、守護祭堂、眞骨堂、山門、太鼓門、黒門、寶藏倉庫及び塔頭十ヶ院が儼然として聳えてゐる。寶物に日蓮聖人、日明、日印上人の各本尊大覺大僧正細字法華經、御編旨、御令旨御宸筆(後小松天皇)などを藏してゐる。  
なほ四月二十日より祠堂法會(三日間)、千部法會(これは七日間であるが、五ヶ年目毎に行ふ)、六月二十一日陣師法會、十一月十二、十三日宗祖御會式を執行する  
現管長は横山日雪師、總代服部乙吉、加藤又次郎、内山勇吉の諸氏現任中である。

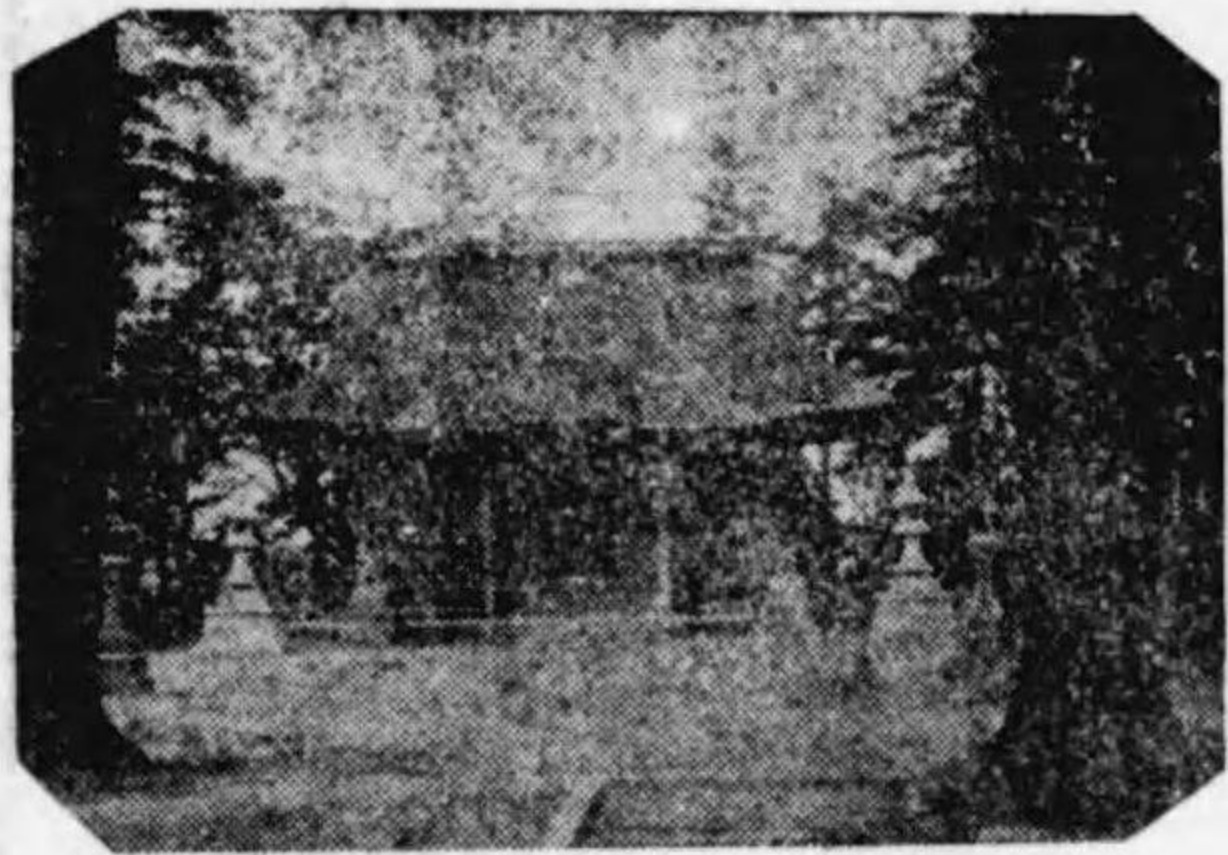


# 北蒲原郡

## 中條町

### 熊野若宮神社

饒速日命、事解男命、速玉男命の三柱を祭神とする當社は、その由緒はなほだ



若宮神社

深く創建は寛永十八年七月十八日ありて同六

## 中條町

### 縣立中條農學校

明治四十三年四月開校し、同四十四年四月二十四日校舍落成式を舉行せしにより、同日を以て創立記念日となす本校はすでに二十數年の歴史を有し、その間大



その校舎

正十一年三月一日に縣に移管して現稱の縣立中條農學校と改め、その條件として北蒲原郡より寄宿舍一棟、理科實驗室一室、中條町より

### 吉田 尾雄



八日の出生にて、その謹嚴なる風姿は氏子一同が悉く敬慕するところである。因に當社初代神職は吉田吉長氏と稱する人にて、當代尾雄氏は實に十三代目。

今、當社の神職として奉仕する氏は溫柔にして敦厚なる資性を有し、清廉高潔なる人格者である。明治三十四年二月二十

七百坪の敷地を寄附せられ、昭和に至つ、三年四月女子部を加設、と共に四萬貳百九圓を中條町より、四千貳百圓は金塚、築地、乙、黒川の四ヶ村より寄附せられた。同四年五月女子部校舍落成式を舉行、翌年創立二十周年記念式を舉行した

修業年限は男女共に三年にして、現在の在校生徒数は男子一八五、女子一一四今や中村校長の下に十數名の職員一致協力して、専心農村中堅人物の養成に邁進してゐる。卒業者はすでに一千二百餘を出し、各地に於て活躍中、校名ますます上るばかりである。

### 校長 中村 壹三



本校初代の校長として盡瘁せるは小林次二郎氏、二代丸山忠次郎氏にしてその二氏の後を受け、今一身を挺して執掌し

つゝあるは正六位高等官四等待遇の中村壹三氏である。

氏は明治二十一年の出生にて、神奈川縣横濱の人、幼時より頭腦明敏を以て聞え、秀才の名高く、學業成績すこぶる優秀、北海道帝國大學農學部農藝化學科出身である。氏は天性溫良にして清廉高潔なる人格の持主、日蓮宗の歸依者、生徒よりは慈父の如く慕はれ、職員間及び一般庶民からは多大の信望を寄せられ、彼の人ならばの評が高い。

### 南濱村

#### 南濱村役場

本村は海岸の一村落ではあるが、近來漁業は至つて振はず、住民の多くは農を本業となし、傍ら蠶桑及び養豚、養鶏を營んでゐる。尤も一時石油發動機船を使用して盛んに漁撈に従事したこともあつたが、大概は失敗に歸し、鱒、鱒建網漁業は、他村人の經營するところとなり、僅かに餘暇に刺網、手操網、地曳網に従事

するに過ぎない。

明治二十二年町制施行せられ、その八月、金田保三氏初代村長に推され、爾後南半之助、有田孫太郎、吉田義孝、南三次郎、此村六藏、南義二郎の諸氏を経て、現村長吉田正一氏に及んでゐる。本村役場は初め金田吉一郎氏の宅を借りたるも、後に順慶寺の奥座敷を買収してこれに移り、大正四年火災のために焼失、それより金田忠太郎氏の宅に移り、同十年現在の役場を新築し、同年十月移轉、以て今日に至つてゐる。

### 村長 吉田 正一



氏の生家はなかなかの舊家で、古くは水口家に入し、また代々庄屋を勤めたほどの名ある家柄であつた。父君義孝氏は事業家で、





夙に當地方に令名をたゞへられてゐた。氏は明治二十二年一月の生れ、傳統の名門の血統を繼いで早くも村内公共のことに進出、一身を挺して活躍貢獻する甚大なるものがあり、従つて人望は年と共に大を加へ、前村長の満期退職となるや

村民の輿望を一身に擔ふて村長に就任、爾來營々活動奔走、正しく

強く、明るき村たらしむべく、双手に力癩を入れてゐる。趣味はスポーツである

### 乙 村 役 場

當乙村に乙村外五ヶ村の戸長役場を置かれたのは明治十七年のことで、次で同二十二年町村制の實施さるゝに及んで乙村外五ヶ村を乙村、地本村外十一ヶ村を横田村と改稱し、降つて同三十四年十一

月の町村合併を行はるゝに及んで兩村を合併、現在の乙村を生み出した。

現在役場吏員は三十八名あつて村全般のことに對處し、乙村農會、乙村養蠶實行組合、乙村信用購買販賣組合、その他桃崎濱、荒井濱、胎内川等の各漁業組合など、何れも旺盛せる活躍を以て所期の目的に向つて進んでゐる。

なほ職業の上から見た本村は、農を第一に、水産、産業、工業などの順序に分けることが出来る。現村長は井上東太郎氏で、合併以來實に十八代目である。

### 村 長

#### 井上 東太郎

井上家は豊臣家の殘黨、三百年來の舊家であり、古くは二刀流の指南役を勤め、また代々庄屋の家柄である。先代才藏氏は村自治に功績を遺してゐる。

當主は明治二十年一月五日、その長男に生れ、新發田中學校卒業後、北越醸造株式會社に入り、遂に社長に昇進して十餘年間在任、三年前に退職して自ら醬油

醸造業を営んでゐる。今、二期目の村長であるの外、村會議員、消防組頭、養蠶實行組合長等を兼ねて盡瘁、曾ては役場廳舎の新築並に學校の改築等には特に多大の功勞を謳はれてゐる。

内助の譽れ高きみね子夫人との間に、長男保君、次男實君、三男隆君の外に三女子がある。

### 新發田町馬場町

#### 町 立 新發田 圖書館

新發田町の出身なる坪川恒平氏は、昭和三年五月御大典を記念し、本館を建設して新發田町に寄附したのである。同年十月三日竣工し、同四年一月一日愛國婦人會本縣支部主事原常一郎氏の兼任館長を始め職員が任命があつた。町教育會より圖書五千四百三十九冊、次にまた新發田尋常高等小學校同窓會より三百五十一冊の寄贈あり、また開館記念圖書購入のことあり、同年四月十四日開館式を挙げ同十五日より公開して閱覽を開始したの

である。

昭和七年、鐵筋コンクリート三階建書庫を増築し、閱覽室の擴張改造等のことがあり、八年外装を改めて今の美觀を呈するに至つた。坪川氏は毎年三千圓内外の館費を寄附支辨することを繼續してゐる。昭和九年二月十一日文部省より選奨せられた。今や閱覽人員は一年間五萬五千七百餘人に達してゐる。

現在の館長は佐藤久吉氏であつて、職員を督勵して精勤してゐる。

### 南濱村 太郎代濱

#### 太郎代濱郵便局

當郵便局は昭和五年四月六日に開局されたもので、開局當初は郵便取扱所であつたが、同十一年七月十一日三等局に昇格して今日に及んでゐる。

當郵便局に於ける最近の事務の狀況を見るに、郵便取扱数は一ヶ月一八〇件、内外電信取扱数は同二〇件、航空郵便取扱数は同一件であり、なほ各種の保險年

金加入成績等は極めて良好を示してゐる。以て今後の當郵便局を卜知するに難くない。

現局長は南善藏氏であり、その配下に事務員たちは懸命の努力をなしてゐる。

### 局 長

#### 南 善 藏

南家は七代を累ねた舊家で、代々農を本業となして今日に至つてゐる。



氏は先代善吉氏の長男で、明治二十五年十月二十六日を以て、この世に呱呱の聲をあげた人である。

幼少時より才、群に勝れまた稀に見る手腕とは遂に氏が今日の存在を重からしめたもので、青年團副團長、區長などに推されて功勞を讃へられてゐる。現在は更に青年團長に選ばれて、村青年の指導扶掖に任じ、また銃後會副會長を兼ねて

銃後の護りに意義あらしむべく努力をづけてゐる。

令閨との間に長男善作、次男善之助の兩君あり、共に局の事務員として通信報國に鋭意貢獻しつゝある。

### 赤谷村上赤谷

#### 赤谷郵便局

當局は明治五年七月一日開局された三等集配局にして、開局當時より集配事務を取扱つて來た。而して初のは郵便取扱所であつたが、明治十九年昇格して赤谷郵便局となり、同三十二年十一月より内外爲替事務を開始し、翌三十三年二月には小包その他特殊郵便物の取扱ひをはじめ、降つて昭和十二年十二月より内外電信並に電話事務を開始した。

現在郵便取扱数は一ヶ月六百五十通に上り、内外電信一ヶ月十二通、航空郵便一ヶ月十五通をかぞへ、各種保險年金の加入成績は頗る良好である。従業員八名現局長井上金三郎氏は、明治二十年九



月二十八日の出生、先代莊吉氏の養子にして井上家十五代目に當り、村會議員四期目を現任し、從七位勳八等に叙されてゐる。

菅谷村菅谷

菅谷郵便局

當局は初代局長齋藤善右衛門氏が明治七年十二月に創立するところ、菅谷村一



菅谷郵便局

圓を區域とし、同時に集配事務を開始したる特別三等郵便局

である。局の舎屋は建坪三十坪にて施設一切は十分に整備せられてゐる。明治三十年五月一日に通常爲替を、三十二年四月一日には電報爲替を、昭和五年二月一日には電話事務を、九年二月一日には電信事務を開始して今日に及んでゐる。今や郵便取扱数は九萬二千八百二十四箇に達してゐる。昭和七年度より執務成績優秀にして數回にわたつて表彰を受けた。事務員三人、集配手三人、電信手一人、遞送手一人、保険係一人の全局員は武者局長の下に一致協力して精勵しつゝある

葛塚町太田古屋

太田古屋信用販賣組合

その人望高大にして全村の推獎敬仰して措かざるところである。昭和十一年、拔群の優良成績により、個人として東京遞信局保険課長より表彰せられた。

當局は保證責任にして北蒲原郡葛塚町太田古屋にある。明治四十二年に創立せられ、太田古屋、上古屋、則清新田の各字にわたつて取扱區域とし、組合員三十四人、出資金一〇一〇圓、出資總額一、五八〇圓、貸付總額三九、五〇九圓貯金四七、四〇五圓、購買價額一萬五千圓、販賣價額一萬圓である。財産は資産七、三一六圓、負債四七、四六一圓、差引純財産二三、八五三圓である。中央金庫出資金四〇、四百圓、縣信用組合聯合會出資四〇、千二百圓、新聯合會出資一〇、五百圓である。損益は利益四、二二四圓、損失二、九八〇圓、差引純益一、二四三圓、その處分は七二四圓、準備金

局長 武者一郎

氏は初代當局長齋藤善右衛門氏以來四代目を襲いで局長として現任し精勵中である。



卒業し、青年團副團長を兼任してゐる。農林學校を

四五三圓、配當金六六圓、繰越金に充當した。理事長は江老名忠太郎氏である。

組合理事長

江老名忠太郎

江老名家は祖父氏の代に創立せられて代々農を以て業としてゐる。先代辰三郎氏は町會議員學區議員に任ぜられて貢献するところが多かつた。

當主忠太郎氏はその男として明治二十年五月に生れ、新發田歩兵聯隊にて兵役に勤務した。その後、町會議員に擧げられて活躍し、今は太田古屋信用販賣購買利用組合理事長に任ぜられて盡瘁貢献してゐる。

氏は政友會の最も熱心なる黨員として一方の重鎮である。資性は剛毅にして磊落、寛容にして謙讓である。人格秀絶して識見高邁、全町民のことごとく悦服雄敬するところである。浄土宗を奉じてその信仰がすこぶる篤い。氏の統制指揮によつて太田古屋産業組合も、逐年發展を上げて優秀なる成績を保持しつゝある。

南濱村

南濱村信用販賣組合

當組合は保證責任にして、昭和十一年に創立せられ今はその第三年度を經過中である。昭和十二年すなはち第二年度現在の報告によると、組合員一〇八人、出資口數一三四口、出資總額二、六八〇圓中央金庫出資金一口、一〇〇圓、聯合會出資金一口、三〇〇圓、購買販賣利用聯合會出資金一口、五〇〇圓であつて、資産は一一、八八〇圓、負債九、九六九圓差引二、九一一圓が純財産である。損益計算は、利益金九二五圓、損失金は七一四圓、差引二〇五圓、この純益金の處分については六〇圓は準備金、一〇〇圓は特別積立金、四五圓餘は役員退職給與金とした。購買事業については合計一〇三五四圓を算してゐる。

役員は組合長理事神田藤三郎氏、理事五十嵐惣三郎氏、此村六之助氏、監事は島田榮三郎氏、神田寅吉氏、此村清隆氏

である。

組合長

神田藤三郎

神田家は祖父氏の代に創立せられたのであるが、代農業、漁業をかねいとんで精勵し、勤儉力行してよく財をなした裕福なる資産家として敬仰せられてゐる。

當主藤三郎氏は先代藤平氏の二男として明治二十四年九月二十一日に生れた。さきには村會議員に在任して功勞があつた。さらに推されて助役の任に就き村治に寄與するところはなほだ多大であつた。また農會長をかねて努力貢献大いに認められた。いまや區長、産業組合長、南濱養蠶實行組合長に任ぜられ學務委員を兼務してゐて、盡瘁しつゝある。その功勞すこぶる顯著なるものがある。氏は意志鞏固にして堅忍不拔、しかも情誼にあつく義侠心に富み、男盛りの働き盛りとて、實地體驗に基き盛んに活躍して村治上に寄與するところ甚大なるのみならず、困窮不遇の人々を慰藉激勵し